明治三十三年十二月廿五日（第三種郵便物認可）
明治四十四年十一月二十三日印刷納本（毎月一回二十三日印刷納本）

十二月一日發行

女學世界

第十一卷
第十六號



博文館

女學校及技藝學校に於ける唯一の指導書!!!

和洋裁縫研究會々長 松江みさ子先生著

新版！新版!!!

子供西洋服の拵へかた

◎クロース綴菊判頗美本

コロタイプ刷繪數葉入

裁方縫方圖五百餘個入　正價金壹圓參拾錢　送料八錢

小兒の衣服として洋服の最も理想的なるは今更喋々するを要せず。從つて近來此種の敎科書數多出版せらるゝも惜むらくは其說明徒に複雜にして到底初學者をして了解せしむること能はざりき。本書は著者が多年敎授の經驗により最も兒童に適當なる形 三十餘種を撰び先づ形紙の拵へ方より切地の裁方、縫方の順序に至るまで說明委く平易懇切、加ふるに縫方の急所々々は一々精密なる圖解を施したれば如何なる初步の女子と雖も一見容易くこれを會得し以て愛らしき恰好よき洋服を製し得るに至るべし。切に一般家庭及び女學校生徒諸姉の愛讀を望む。

女子技藝研究會長
梶山彬先生
畢世の著述

●編物新書
●造花術新書
●裁縫新書
●刺繡術新書
●摘み製作新書
●袋物製作新書

說明圖各百個以上挿入菊判頗美本
正價五十錢　各壹冊
送料各冊八錢

發兌　東京市京橋南槇町十八番地　振替東京四六八四　電話京橋二四六三　廣文堂

歳暮と年始の贈答品

三越はデパートメントストアなれば、老若男女、あらゆる御方様の御贈答品を漏れなく取揃へて居ります特に三越の「商品切手」は御贈答品として御便利此上もなし。お正月も日一日と近づいて参りました。歳暮年始の御贈答品は此際是非三越より御求め下さる様ひとへに奉願上候。

十二月一日より
玩具展覧會
膳椀茶碗食器新製品陳列會

十二月十日より
羽子板大賣出し

東京駿河町

三越呉服店

女學世界 第拾壹卷第拾六號 十二月號目次

拙なる日記はライフを傳ふるに足らず

日記は個人の内生活史にして尊き人類の記錄也

四版發行

水野葉舟著

新樣式文範 日記文

渡邊ヨヘイ氏裝
四六判美本三百卅頁
定價金六十錢
送料金八錢

附錄 大家の模範日記

世評

▲(萬朝報評) 此書の内容を紹介するには序文の一節を借るが一番なり、曰く上篇は日記の趣味價値、書く上の心付、人の陷る缺點を書く、中篇は各種の作例を書く、下篇は名家の日記を集めたりと。上篇を讀みては吾等が思ひ居る事をピッタリ言ひ當られたる感あり、中篇を讀みては「店番をして居る娘の書いた開店第一の日記」など題も文も趣味津々たるを奇とし、下篇を讀みては藤村紅葉子規白鳥花袋等の内生活の中に立入りたるを興多しとせずんばあらず、蓋し此書葉舟獨特の壇場、日記といふもの〻價値今更の如く大なるを思ふ

▲(實業之世界評) 日記の刊行多くして日記の如何に書くべきかを教へたるものなし、日記なきは生活なき也日記の重んずべきはライフの重んずべきが如しと雖も、拙き日記はライフを傳ふるに足らず、千萬の日記よりも日記の書方を知るを急とすべし(中略)此の書は實用を主とする、趣味を主とする、何れも其體の眞を傳へたり、此によらば自身の閱歷内外兩面を錄して謬なきを得べし。

▲(國民新聞評) 物の眞を描くと云ふ風流藝術界及歷史界に尊ばれて日記は千金の重味を加へ來れり本書は文界の新人たる著者が斯る見地より日記の趣味と作法を說き作意樣式の一新新にして獨特なる當に斎文章界に一レコードを劃くと云ふ可し

水野葉舟著

愛の書簡

渡邊與平氏畫
四六判美裝三百三十頁
金六十錢
送料八錢

好評五版!

新樣式文範として本書を出すや好評嘖々として玆に五版を發賣す。其作法の形式に捉はれざる、作例の眞情流露なる、大家摸範書簡の趣味多き、皆是本書の名を馳せたる所以を語るものなり。

水野葉舟著

小品作法

金六十錢
送料八錢

再版發賣

近代の藝術は其の基礎を小品に置く、小品は明治文壇最新藝術にして、近代新興のあらゆる文學は皆玆に發達したるもの、本書によりて文藝の新味に接せよ。(愛の書簡同裝四六版美本)

發兌元
東京市京橋區中橋廣小路六番地 文榮閣書店 (振替東京四一〇九番)
東京市神田區錦町二丁目五番地 春秋社書店 (振替東京二〇七八九)

文(いの一)

貴婦人用懐中時計景品付大廉價發賣

嶄新なる本時計は何れも米國時計會社の特製嶄新なる美術品にして體裁高尙優美且つ機械堅牢なるが故時間正確進遲振止りの憂なし今回新輸入發賣として美麗なる紳細及時計用(メタル)披露の爲メ **景品** 幷に鹿皮の三品を進呈す



(壹號)純銀側美術彫刻裏貳枚蓋龍首巻頭引出し針廻し機械最新式寶石入卅時間持ち拾五ヶ年保險證書付き (特別割引代金) **五圓五拾錢**

(貳號)金梨子地側裏貳枚蓋龍首巻頭引出し針廻し機械最新式寶石入卅時間持ち拾五ヶ年保險證書付き (特別割引代金) **六圓五拾錢**

(參號)純銀側兩蓋美術彫刻中硝子入龍頭巻引出し針廻し機械最新式寶石入卅時間持ち廿ヶ年保險證書付き (特別割引代金) **七圓五拾錢**

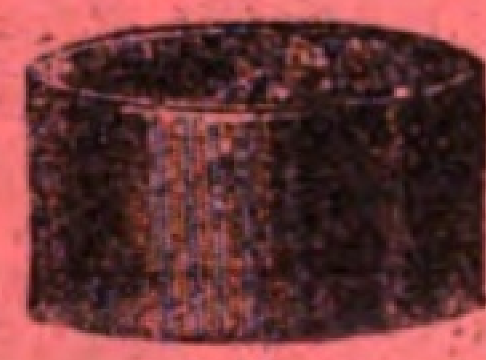
三品共零サイズ(俗に拾參形とふ)右何れも米國時計會社商標刻印付きにして確正なる品に付御買求の後萬一貴意に適せざる時は無割引他品交換又は代金返戻を承諾す望の方は女學世界廣告に依り御注文の旨(ハガキ)に御記入御申込次第代金引替小包郵便にて送ろ送費廿錢爲替生玉局宛

勿驚無代進呈

此廣告切抜御注文者に限り金張寶石入指環一個送呈す

女 但貳個以上御注文は眞正十二金壹個呈す







純金包張指環五匁付 正價 **參圓八拾錢** 彫刻料一字三十錢

18金包張鍍十匁附 正價 **六圓八拾錢**

眞正拾二金寶石入 正價 **參圓六拾錢**

特色 外部純金巻包光澤量目純金同一伸縮自在永久不變色保險附 注文者は御好之形及指廻寸法尙手附金壹圓送れ前金送料十二錢引替送料**廿五錢**

●清鮮臺**四拾錢**(郵券代用一割増)

販賣元 貴金屬時計商 **玉寶堂** 大阪市東區上本町五丁目

化粧水 ライラック

日本政府登錄



安心の出來る化粧水!

として最も歡迎せらるゝ理は美顔術實驗有効と云ふ絶對の保護と其卓越せる萬能の効力即ち

御顔に 朝夕用ゆればライラックの高き香りと共に終日艶々として素顔の美を發揮しニキビソバカス吹出物等を全治す。

御化粧 時に白粉下。白粉ノバシとして斯の有名な無鉛芳香理容白粉と併用せられなば思ふが儘の御つくりが出來。

フケトリ 用として御痒みの時御頭りに塗込みおけばフケはすつかり浮きて翌朝はサツパリとして心地爽かにツヤを直し艶を出す。

等の特色を兼備するから數ある化粧水中特に嗜ある方々の本品を手放せぬ故もこゝにあるのです

(定價大瓶五十錢 小瓶三十錢)

ライラック水一手販賣 新橋竹川町十二番地

理容白粉本舖 美顔術 **理容館**

電話新橋三三〇三番 振替口座一四〇〇〇番

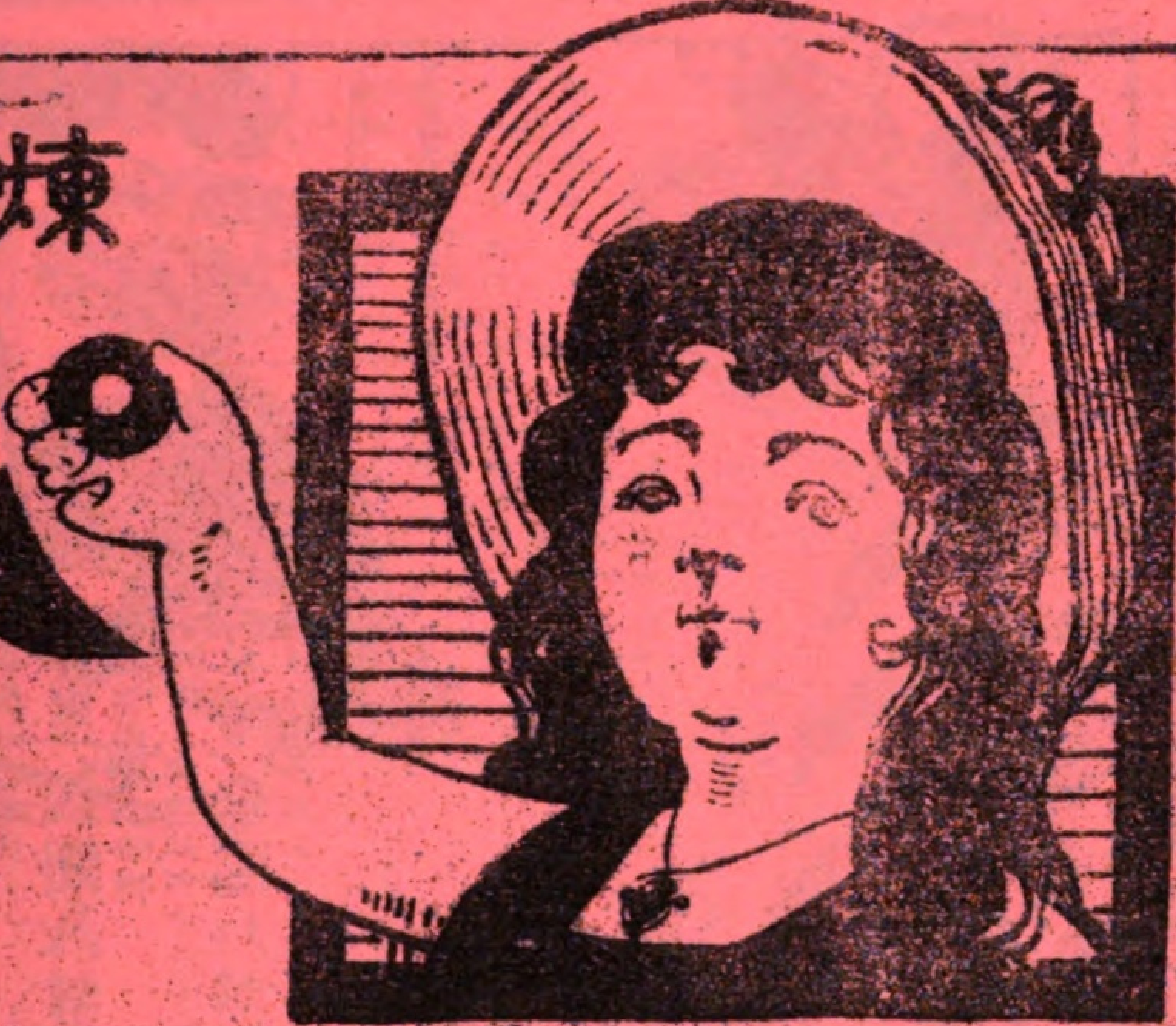
女(いの二)

女(いの四)

好評を博せる 白髪染 赤毛 若松は

無類飛切といふ今迄にない上等の品で何の手数もかゝらず極く簡單に染毛が出來て如恁白髪も一度で眞黒に染め上ります、そして毛髪がやせず、折れず又頭部の地肌を痛めず、染上げた後で布苔か石鹼(ルビー石鹼が良い)で髪洗をしてパール煉香油かスミレ黑香油を少量用ひて置けば見違る程に綺麗な美髪となります、殊に襟だの枕覆が決して汚れぬといふ實に天下一品の白髪染でありますから是非毛髪の赤い方白髪の方は本品を御使ひなさい。

定價小三十五錢、大六十錢、送料八錢



煉香油 パール

東京日本橋區橫山町三丁目五

發賣元 平尾銑也商店

電話浪花百十番
振替東京百十番

休憩



用中製版所三色版

最モ進歩セル子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦みなく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して療治を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不姙娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡易に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺陷なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接に病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて療治の目的を達するなり

獨逸の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は此等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮内膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は是非一度使用し病氣を根治し給ふべし

尚ほ梅毒消渴の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

◎全國至る所の有名なる藥店にて販賣す

定價 八球入五拾錢○拾八球入壹圓○四拾球入貳圓○特製百拾個入五圓○內地遞送無料

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上
中西葆光堂藥局
電話下谷(五九七番)振替貯金口座東京(下五百番)

女(ろの一)

本品は最新式にして洗濯の世話なく蒲團衣裳を汚さず立すわり自由

●ね小便袋

子を持つ親病人ある家には必要



特別ゴム製

大人用壹圓九十錢
小兒用壹圓貳十錢
乳兒用九十錢
男女の別有り
―御注意―

●大勉强送料弊店負擔す●合羽製あり御注意あ

大阪賣元 大阪東區上本町五丁目 振替口座東京八一九八 常盤號部

英語教授 筆記通信

◎答案書方練習科◎隨意質疑獨習科◎特別隨意教授科(各種英語教科書筆記教授)◎規則二錢

東京市牛込區若松町十二番地 英語通信學會

實用新案家屋間取設定兼教育必要

間取板

定價金拾貳錢 郵稅貳錢

三錢三錢郵劵取混十五錢御送附直に拜送仕べく候

本板は東京女子高等師範學校及其附屬高等女學校を始め全國各地の高等女學校女子師範學校等の御用を忝し且つ西園寺侯大隈伯河村伯日高海軍大將等の御賞贊を給りつゝ有之其內容は家屋の各室二三疊より十餘疊に至る拾餘室及押入戶棚床違棚佛壇奉安所緣臺所浴室使所に至る迄個々別々に調製しあれば其位置を轉換する事自由自在なれば最初より紙上に製圖し意に滿たざるが爲めに再調十調するの煩なく而かも理想的の家屋を得る極めて便利重寶なる者なり御試用奉願上候

横濱市西戶部四七四 稻垣尙美堂 敬白

●●販賣乃至多數一時に御入用の向は割引あり逐劵御照會を乞ふ●●

見よ●月經なき女子●病める婦人

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物

▲勿驚……藥力最稱實…効能確保…有効無害…



博士賞贊良藥

改良 女月丸

其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り經不順は一二劑にて必す流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人には二劑又每月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三劑卅錢送料各四錢

(米國新輸入)

●肥滿病新藥

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと／＼肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ふと／＼ふとり血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き輕症一二劑如何程の惡性も四劑を連服せば色は白く艶々となり絜て美顏の窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



肥藥價	一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢	送料
	二劑二圓九十錢	四劑五圓半	十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 小宮愛生堂

女(ろの二)

婦人画報

十二月一日 十二月卷 一冊廿五錢 六冊一圓五十五錢 十二冊二圓八十八錢

◉桃われ……石川寅治氏 二頁大三色版

◉初冬の果物 石版二十度 表紙

◉女子美術生徒の活人畫◉雨傘の製法順序◉十一月十五日七五三の祝ひ……

◉松原氏の邸宅庭園及び茶室…◉正親町公和氏と婚約成し大谷綾子姫……

◉伏見若宮殿下の御出發と妃殿下御見送

◉三輪田高女運動場の五分間◉女學館生徒の舟遊び◉女子大學運動會……

◉樣々な手つき◉お茶の水高女生の芋ほり◉第一第二第三高女運動會……

◉久邇宮三女王殿下最近御眞影

◉天長節夜會々場

◉棚橋、淑德、京華、京都師範精華各女學校運動會◉川島氏と隈氏の家庭

◉待宵會◉臨地會書道大會◉弘道會女子部大會◉琴の湊◉令孃かゞみ……

◉皇太子妃殿下學習院女學部台臨……

見よ本年最終の我婦人界を飾る本誌の冬の裝ひを

◉暮れ行く歲の瀨・井上博士

▼今年の女學界と婦人界…下田次郎

▼新年の御題詠進心得……大口鯛二

◉借家の注意……佐治實然

▼皇后陛下御歌註解……遠山稲子

▼十二月の婦人の仕事……井上秀子

◉年の暮と家庭の經濟……添田博士

▼育兒十二ヶ月加藤博士

▼召使の仕込方加藤常子

◉暮し向の上手下手……嘉悦孝子

▼女子大學運動會の印象▲歲暮贈答品しらべ……

▼十二月の趣味

▼お正月の用意……吉村果子

◉同情心……小河博士

▼婦人の眼：山口博士▲冬のしたくしらべ……

▼兩內親王殿下の御事……▼女歌人……佐々木博士

◉訪問の快不快・齋藤秋子

(附)安價に出來る子供帽子……

▼泣くと云事・久保員英

◉歲暮の感・濱尾・高田諸夫人

◉其日其日……三宅花圃

東京麹町區飯田町四丁目四番地 東京社 電話番町二三三九 振替口座東京一一八一八

女(ろの三)

女（ろの四）

清楚




元祖
最上醬油
上
開業貳百六拾七年
宮內省御用達
日英博覽會に於て
太平洋博覽會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子一二一番　振替口座五〇二一番

女(はの一)

羽生もと子主筆

婦人之友

●迎年準備號 十二月發行

一冊十五錢 郵税一錢・半年九十錢

物質的に、精神的に、心安く年末に處し、幸福なる新年を迎へんとする方々は、必ず『婦人之友』の十二月號をお讀み下さいませ。

まづ明年一年の豫算のたて方、改めて子供や雇人に與ふべき規律などを初めとして、年の内に決めて置くべき家事のいろ／＼、年末贈物の心づもり、新春娯樂の用意、正月着の見立、重詰の拵へ方に至るまで、細かに、親切に、實際的に書き記されてあります。

▲附錄には、迎年準備の日課表が添へて御座います。

●妻の勝利（理想の生活 花子の巻）……羽生もと子

●孔子の女性觀……文學博士 三宅雄二郎

●年末のすゝめ（七則）羽生もと子

●私の時間割……山脇房子

●年末賞與で建てた家……

▲ショールの研究

▲お歳暮とお年玉

▲婦人股引の仕立方

▲新年料理のいろ／＼

發行所 東京市小石川區雜司ケ谷町（振替口座東京 壹壹六〇〇番）婦人之友社

女（はの三）



マーナンテ佳イデショー
アー悲愴ノ極ネー
「高麗ヤー」
浪花節ガ一等ネ
日本ノラ
音樂ニ趣味ヲ有テルモノハ御一報アレ目錄ヲ呈スベシ
株式會社日本蓄音器商會

年の暮



竹久夢二筆

四六倍判

壬子年初春の誕生

三色石版 寫眞版 入畫版

新女學

■一月元旦 第壹號 發行 大本一冊 廿八錢 郵税二錢 税共一圓六十八錢 十二冊税共參圓廿四錢■

明治の聖代茲に四十餘年西洋の文物を入れ一躍して世界一等國の列に上り國光輝き武威揚り我國空前の盛觀を呈するも裡面を見れば風俗浮華に流れ人情輕薄に傾き危險なる思想にかぶれ破倫なる感情に拘へられ民心倦み制裁弛み堅實なる美風漸く銷磨せんとす之を女子教育に見るに校舍は到る處に巍々として聳え女子向の書物雜誌の發行するもの殆んど枚擧する遑あらず外觀は如何にも盛大なるも知識と社會との調和を缺き學藝と家庭と相聯せず女子の本分を忘れよろづ虚榮心的に流れ實務的に事物を研究するを幾び女子將來の基礎となるべき仕事を賤みて實用に適せざるを見てくれのよき事を好み妄りに新を追ひ奇を求めて空想に驅られて家庭や社會と相隔離せむとするの傾向甚しきものあり恐るべし將來の女子の任務を果す能はずして早晩其身も不幸の淵に沈まむとす弊店茲に感ずる所あり微力を揣らず本誌を發行して實用實益を主とし趣味をも兼ね女子に必要なる科學の知識技藝趣味精神修養家事經濟社會の新事實等の記事を掲載し今日の流弊を矯めて聊か女子教育に資する所あらむことを期すダリヤ。コスモスの花美なりとも實なくては何かせむ俗諺に所謂高い山から谷底見れば瓜や茄子の花盛り花もあり實もあり世界の文明に後れずら女子の本分を全うして日本の家庭を完全に發達せしめむことは本誌の深く意を致す所なり冀くは微志の存する所を諒とせられ偏に御愛讀を垂れ給はむことを

本誌の内容

婦人の教訓談 名家の談話、婦人の修養談、歴史上の婦人叢話、倫理學上の話 ○**家政學** ○**手藝** 和洋裁縫、お細工物、編物、組糸、和洋刺繍、袋物、造花 ○**割烹** 和洋支那料理、惣菜料理 ○**家庭理化學** ○**園藝** 栽作、養蚕 ○**家計簿記** ○**衛生** 日常衛生、應急療法、看護法 ○音**樂** ○茶道 禮節 挿花 ○**室内裝飾術** ○**書畫道** ○**染色** ○**洗濯** ○婦人の**心得** ○**髮結**の事 ○**衣服** 裝飾法 ○**交際術** ○外交術 ○女子の**職業案内** ○諸雜誌拔粹録 ○投書雜録 ○社會の狀態 ○文苑 ○家具修繕等

每月一回 ■ 東京日本橋區 **大倉商店** 發行 電話本局 四一四二▲四〇四 振替東京二三八 賣捌 全國各書店 ■ 一日發行

女(にの一)

山階宮殿下御買上の光榮を賜ふ

新案登録第二〇六三〇號

都はり箱

避寒必携



送料　郵税市内四錢　内地十二錢　臺灣樺太清國朝鮮三十錢　代金引替十錢増　郵券代用一割増

都はり箱は優美高尚體裁書籍の如くにして蓋を開くと中を蹋の如くに仕切り其内に起伏伸縮自在なる桁け臺を取付け五色の絲は自働的に回轉し又はさみこてへら二つ折の物差しつま形袖形針、針差し指貫に至る迄の裁縫具が一切入れて有ります、御婦人方の旅行の携帯に頗る便利で尚御孃様方の學校携帯又は家庭敎育用として貴婦人御令孃様方の御買上げの榮を賜りたり尚年末年始の贈答品として最も適品なり又地方御土産には無類なり

定價

◉漆塗金蒔繪特製金貳圓五拾錢◉同上製金貳圓◉クローズ洋本仕立金壹圓◉同上（中シクケ塗木製ツマ形ソテ形尺ナシ）金七拾錢◉神代杉金文字入金壹圓五拾錢◉同上金壹圓

製造販賣店　東京市淺草區西三筋町四三　**安井都堂**　振替口座東京二一五七六番

特約販賣　三越吳服店、白木屋吳服店、大西白牡丹、百助商店、伊東屋玩具店其他各所に有り

月經に脫脂綿は大害あり

〔某醫學博士談〕

「月經」を處置するに古綿や古布を用ゆるの大害ある事は今更云ふ迄もなきが「脫脂綿」ならば衛生上無害と思ふ人は大間違です、「脫脂綿」を詰込ますと第一「經水」の疏通を害し第二纖維が局部に殘留て腐敗しますから遂には爛衝を起し之が度重ると彼「子宮病」や「鬱憂症」等に罹る事が往々あります、然るに予の友藤川藥學士が苦心して發明した「安全帶」は帶と衣との二種より成り「經水」を外より吸收る様に出來て居りますから衛生上無害完全で又如何程經水の多い方も失敗する憂がありませぬ。

定價「安全帶」壹筋甲壹圓廿錢、乙八拾錢、並五拾錢（一筋で滿五年使へ升）「安全衣」壹打四拾錢（毎月半打で充分です）小包料（帶衣共）壹組拾貳錢、餘は壹組を増す毎に貳錢宛「衣」二打以上御註文は無郵税

本舖　東京下谷池端七軒町四二　安全堂

代理店　大阪阿波座上一電車道角　洋々堂

女(にの三)

○天下獨歩、輕妙洒脱、飄逸奇警、山人得意の筆

不折山人 俳畫葉書

六枚一組 金二十五錢

○鼠が握るハンドルに、千里航空快絶壯絶

繪はかき 空界の新年 甲 乙

甲乙各三枚組 金拾錢ヅヽ

文(この圖)

○十二大家とは誰？月耕、玉章、半古、大觀、丹陵、玉田、直彦、江亭、鞆音、廣業、寛畝、金鳳の大書伯

十二大家新年繪葉書

甲種 乙種

○甲種。石版數度刷、淡彩十二枚組。○乙種コロタイプ、墨刷十二枚組……甲乙繪柄二十四種別[illegible]

○古人名書の寫し、筆致云ふ丈が野暮。全部四集

勅題葉書 松上鶴

淡彩古畫集 甲 乙

墨繪古畫集 甲 乙

淡彩三枚六錢 墨繪六枚十錢

○着想の奇、描法の妙、變化と趣味に富める者

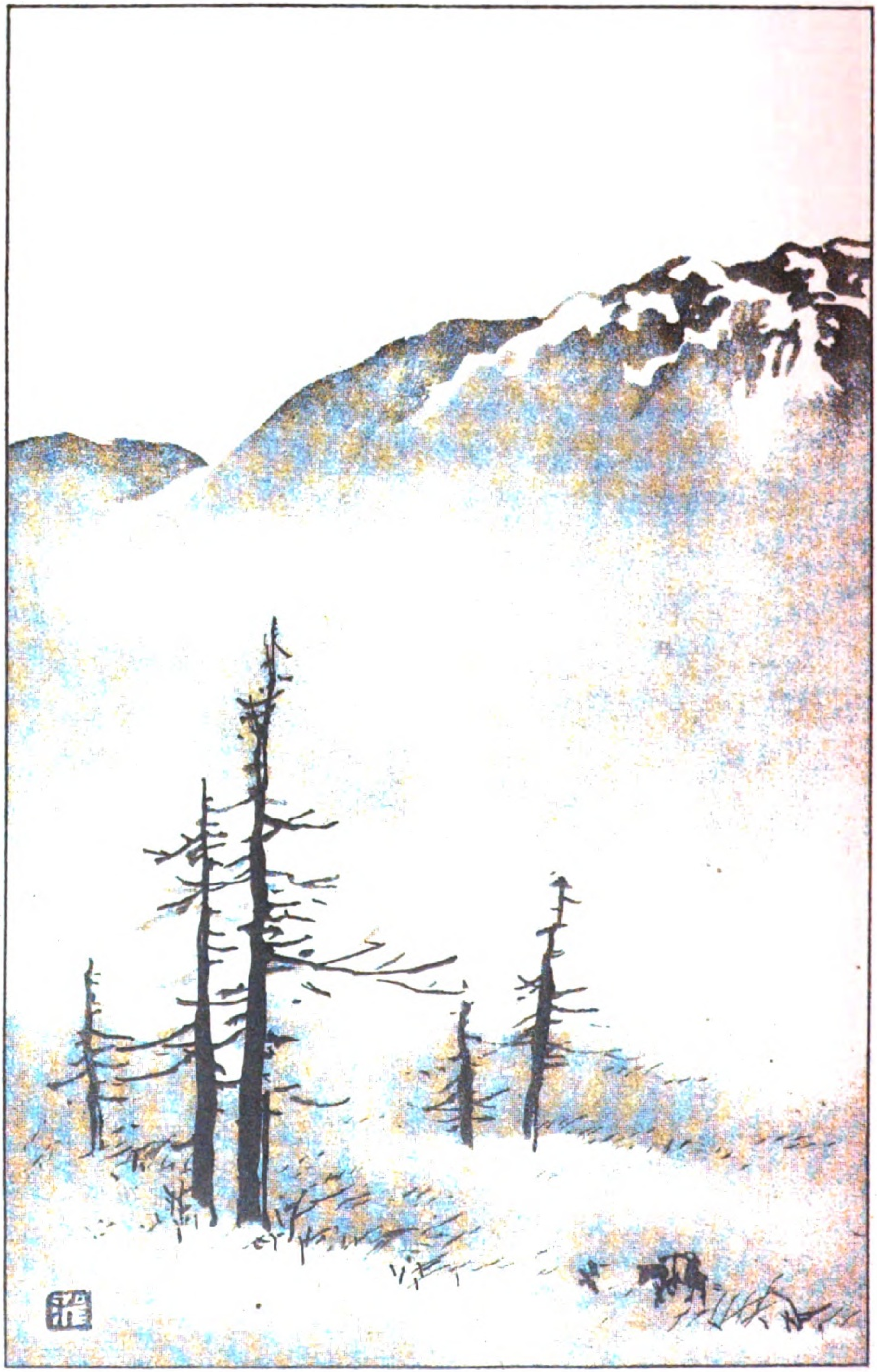
虹交會懸賞 漫畫繪葉書 福神 うかれ大黑

各三枚組 金拾錢ヅヽ

◉全國各繪葉書店并に書店其他繪葉書販賣店にあり

東京神田 東京圖按印刷社出版部浪華屋發行

枯野



本多穆堂筆



平福百穗筆

最見易き琴の譜本

井上湖蝶著
生田流
箏曲新譜

三版 **卷壹** 定價金壹圓參拾錢送料六錢代金引換十六錢增海外引換三十四錢增

目次 四季の花 門松 鶴の聲 黑髮 六段 亂 八段 金剛石 夕顏 新高砂 越后獅子 千鳥 茶音頭 春の曲 小督の曲

卷貳 定價金壹圓十錢送料六錢代金引換十六錢增海外代金引換三十四錢增

目次 春日影 朝外出 六段前歌 難波獅子 末の契 松竹梅 殘月 秋風 八重衣 飛燕の曲

卷三 定價金一圓十錢送料六錢代金引換十六錢增海外代金引換三十四錢

目次 松盡し 萬歳 八千代獅子 雪九段 巖上の松 新雪月花 凱旋喇叭の曲 四季の眺め 夏の曲 秋の曲

山田流
生田流
新譜
箏曲の栞
第一輯

定價金壹圓送料六錢代金引換十六錢增
海外代金引換三十四錢增

目次 ことぶき 門松 春雨 六段 七草 瀧盡し 御製の曲 水は器 千鳥 菊水 那須野 御國の譽 外練習用四曲

本書の特色と購求諸君の便利

一以上四種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手法其他彈琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ言葉記號を附記しあれば音符を知らぬ人も之に依りて彈奏を試みる事を得べく自然の間に完全なる樂理を覺え給ふに至るべし

一本書の購求者は曲中の不詳は勿論假令以上四冊の內一冊丈け求められたる人も他の三冊にある曲譜の不審又は忘れられたる個所は委しく照會あれば敎授すべし但し返信料の外無料とす

苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一度習ひて忘れたりとて致かせ給ふこと勿れ本書は是等の人々に多大の滿足を與へ得べしと信ずればなり

譜本を備へず琴を習ふは無人のお金を預ると一般後日必ず元の師匠にお返しするに至るべし故に文明の音樂には必ず譜本あり諸姉は速に之を求めて後日の失忘に備へられよ

女(ほの一)

發行所 [illegible] 箏曲通信教授所

悲慘なる少女冒險譚

櫻井鷗村先生譚

小島沖舟畫伯畫

少看護婦

▼少女讀め少年讀め可憐なる少看護婦の一奇談

普佛戰爭の際兄妹の孤兒あり、兄は兵學校に入り妹は叔父に養はる、會々兄は敵團中に入りて戰死の厄難に類すと聞き深夜家を脫して義俠なる人々の助力により困難を凌ぎてパリ府に着きしも兄に逢はず偶然赤十字病院に入りて少看護婦となり、敵の少年を看護したるが、戰終つて家に歸れば兄また家に在るの一奇談、可憐なる少女の冒險譚とも稱すべく、又家庭の讀み物として最好の書なり、敢て諸子にすゝむ。

全壹册

洋裝大判美本　紙數二百二十餘頁

正價金二十錢　郵送料八錢

發兌元　東京本町 博文館　東京神田 東京堂

賣捌所　全國各地到る所の書林雜誌店

★(ほの二)

如何ほど忙しき歳の暮にも顔の荒れを厭ひ給はゞ鉛氣のなき匂の高尚な

大學白粉と

肌の美しく滑かになる

大學化粧水とを

お用ゐになることを忘れ給ふな



女（ほの露）

お庭さき



令嬢かゞみ



加藤花子嬢（神田）　前田たみ子嬢（麹町）　東たか子嬢（麹町）

畫漫

ホントウに見違へるほどですワ

母「オヤ花ちやんはいつの間にか大變字が上手におなりですネ」

姉「ホントウに見違へるほどですワ」

花「私は學校で習字がいつも丙ばかりで殘念でございますから專賣特許の速成習字法で練習したのですこの方法で字を習ひますとどんな字の拙い人でも三月位で見違へるほど上手になるそうです私はやつと一月でこれ位書けるやうになりました」

母「お手本を書く方はどなたです」

花「女子部の方は有名な小野鵞堂先生です男子部の方は稻川雲谿先生と玉木愛石先生とです」

姉「ソンなら妾も習ッて見ましようどうすればいゝのですか」

花「東京本郷森川町帝國習字速成學會へハガキを出せば規則書を無代で送つてくれます」電話は下谷三二一〇番と三〇一一番です



は歐米各國にて進化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賤劣品の比に非らずされば普通に醫師の處方する莞青丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病ヤケド、デキモノ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●●取次所ハ前々月ノ廣告ニアリ●●●●

らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一毛臨脫を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする驕奢主義の賣藥に非ず

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無れば決して他へ知れるとなし安心服用あれ

ナノサール　一ヶ月分　貳圓

發方ナノサール　一ヶ月分　參圓

本舗　醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

三河國碧海郡刈谷町

電話　刈谷參拾貳番

振替口座東京貳參壹壹

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

●一劑一圓●中●濃厚二倍●三圓半●送料十錢

美顏 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓二十錢●送費十錢



◀御注意あり乞物せに▶

リウマチス根治劑

驚く可き天下唯一の保證 藥禮狀山の如し

七日分三十五錢
半劑七十錢
一劑一圓三十錢
二劑二圓四十錢
送料八錢

方名パウル氏丸は獨逸醫學大博士パウル先生發明の靈藥にして其効驗の確實なる實に神の如し如何なる難病のリウマチも此藥二劑にて奏効す證明禮狀寫希望の方申込あれ送呈

新宮藥館

(全快禮狀店内に保存す)

(東京本郷三丁目 振替一二五八四)

電話下谷五一四六番

滿天下の少女諸君に謹告

四十五年一月一日創刊

少女畫報

每月一回一日發行　定價十五錢　郵税一錢五厘

◎理想的の少女雜誌生る◎

▽少女さん方のよいお友達として來年の正月から少女畫報と云ふ可愛らしい、無邪氣な、而して怜悧な妹が生れます。歳は十三か四、婦人畫報の唯一人の妹です。

▽女學校や家庭で如何に良い敎育を受けても若し惡いお友達に交つたなら、白き糸の紅きに染まる比喩の通り、皆さんは決してよい心、美くしい心の婦人になれません、皆樣の益友として少女

▽畫報は生れました。無垢な清らかな、花のやうな皆さんの心に些の汚點でも附けては大變です。少女畫報の讀物はいづれも水の如く清く。花の如く美くしく、鳥の如く音色のよいものばかりです。畫

▽報には皆さんの學校も出ます家庭も出ます、遊びも出ます。珍らしい事、樂しい事、而して爲になる事、それはそれは面白い、おかしいものが澤山あります。皆さんは一目見て、あゝ

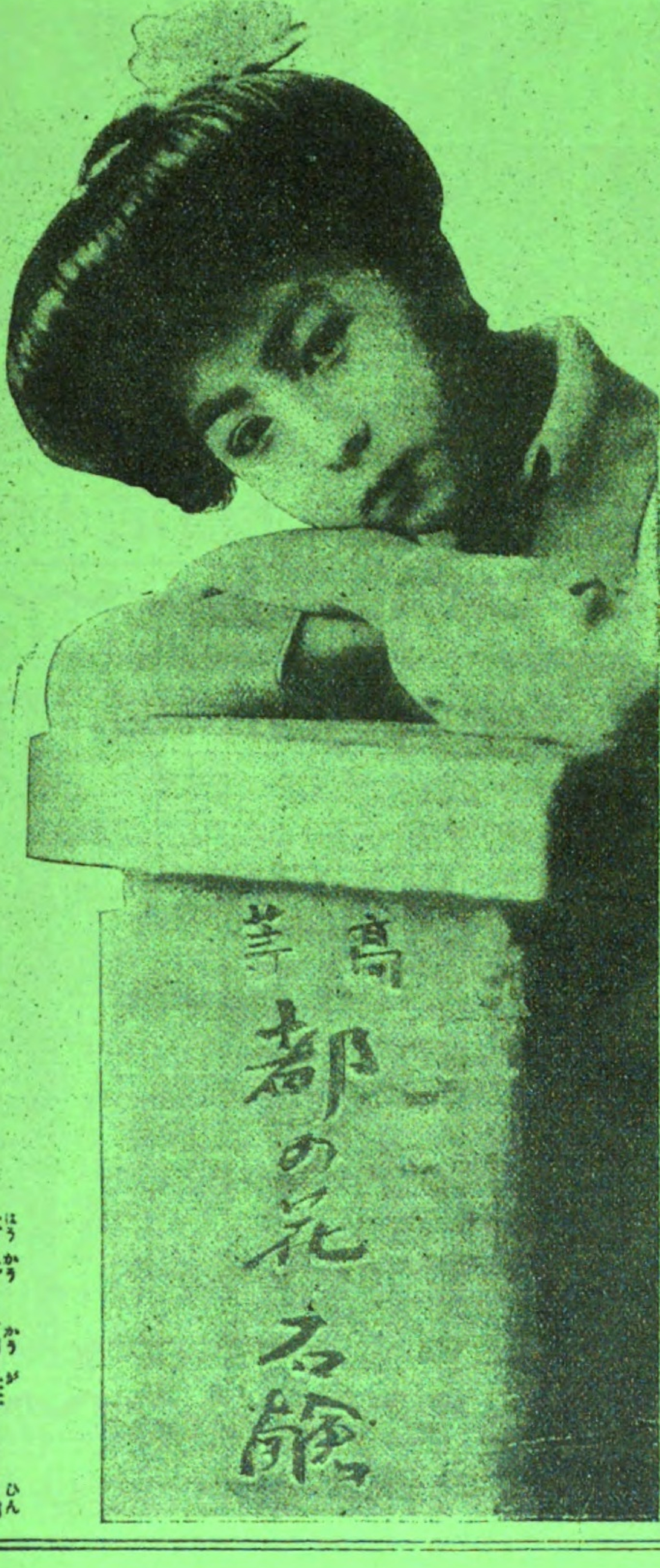
▽うつくしい善いお友達が出來たと、さぞお喜びになりませう。讀物はこれまた面白くてそして有益なものばかり。內證で二つ三つお話すれば花園女史の筆になる感心な梅子さん。羽子板娘のすゞ子さん。文子さんのお手傳、そのほか

▽まだ／＼澤山あります、面白い懸賞だの、愉快な遊びだの、學校然觀だのあとはわざと申しますまい出るのをお待ち下さい。それから附錄としてパラダイス双六を差上げます。

▽るから目の醒めるやうな。家庭の遊びとして好いものです●尚有名な高島平三郎、倉橋惣三兩先生は本誌發刊に非常に同情を寄せられ、編輯の顧問として御意見を述べて下されることになりました

◎美くしくて面白くそして爲めになるお友達◎

東京麹町區飯田町
四丁目四番地
東京社
電話番町二三三九番
振替口座一一八一八番


高等
都の花石鹸

日本女子商業學校紀念會餘興



右は英語會話、中はかぐや姫、左は自然の美

令嬢かゞみ



右　紳商田村利信氏令嬢とし子（四谷）、左　大審院判事鶴見守義氏令嬢友子（牛込）


天の成せる水晶は月の
雫が凝つて不斷の光り
を放ち大和屋製の・・・
水晶おしろいは冬
の夜の霜を湛へて下草
の茂る巖間に湧く清水
の如く而も用ゆる人の
面に春の霞か冬の白雪
の美くしさを優す。

女（との一）



ヒゲタ醤油

宮内省御用達

伊國皇室御用

千葉縣銚子港

田中玄蕃釀造



◉うへつ方の御用蒙るなも化粧料

高等香油 チヱリーオイル
定價 大八十五錢、中四十五錢、小廿五錢
（特効）ふけを去り艶を出しちゞれ、くせ毛を直し毛の發育を補く

高等香油煉 チヱリー、ポマード
定價 中 金三十錢、小 二十錢
（特効）フケ取りつやを出し、チヂレクセ毛を直す

舶來製煉 フヱスおしろい
定價 金三十五錢 金二十五錢
（特効）本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし

發賣本舖 東京日本橋本町 高橋初次郎（特電話本局四一三）

女（との四）



難波一氏
同夫人りく子



岡田訓勝氏
同夫人咲子

下圖大坪正義氏令孃登吉子、辰子（牛込）、上圖年長の方大久保高明氏令孃松枝子（小石川）




歳末年始の贈答品好適
プラチナ
化粧水
世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を嗅ぐだけの効能さへ持つて居ないが此のプラチナ香水は
◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ
◉顔を洗へばニキビソバカス、吹出物を全治し夏は日にやけず冬はあれを防ぐ
◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます
實に其効能は多方面にして貴きこと黄金にも優る價値あり
發賣元
東京日本橋横山町一丁目
近江屋
天野源七
電話花八八六番
振替五九三三番
定價
一瓶三十錢
郵券代用一割增
遞送料無料


歳暮年始
進物適品
御用に
ならば
肌の
あれる

女（ちの二）

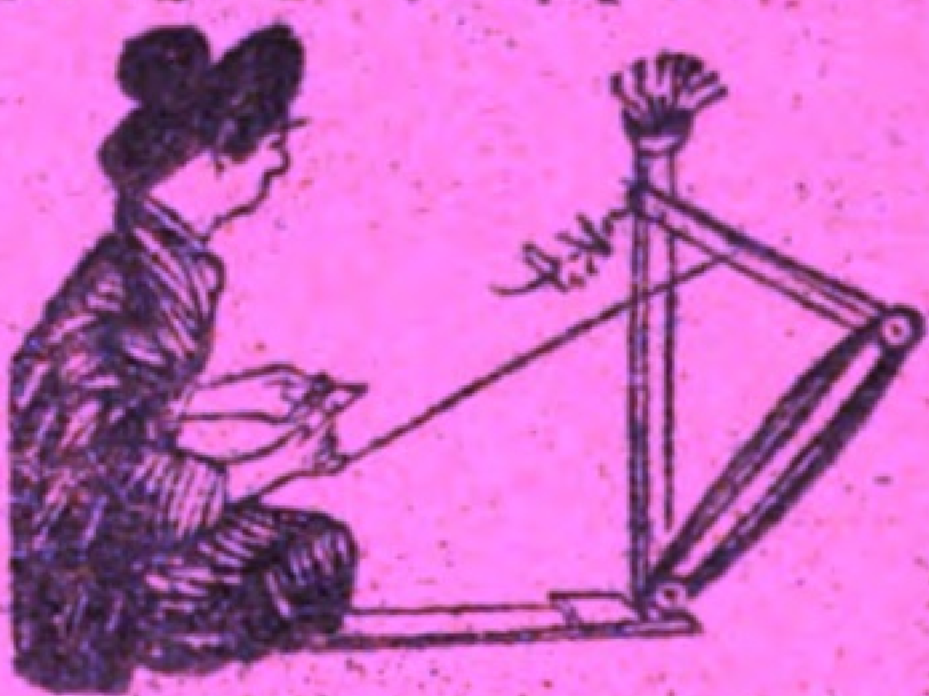
特許竹中式絲掛付絎臺

●御婦人方の新福音！

弊店發賣のくけ臺は御婦人方の毎日針仕事に絲を絲巻にまき取る時に一々人様の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり「ヨゴレ」たりするが如き不便更になく御使用後は「ヲリタヽミ」も輕便で且つ針差しや尺度を自由に「シマイ」得る様に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此の上もありません。

使用法

此絲掛付絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に依りて「ネジ」鋲を以て自由に「シメ」絲口を中央にある輪に通して絲巻にまく時は二個の絲掛車は自由に回轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に絲巻にまくことを得て輕便此の上もありません是非御試用を願ひます。



定價
- 御誂黒塗製 金六拾錢（美麗なる函入なれば進物用に好適也）
- 特製 金參拾錢
- 上製 金廿五錢
- 並製 金貳拾錢

市内は一本にても御一報次第無料配達す 地方は送料金拾錢を要す

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 竹中商店（電話芝二八八四番 振替東京三一二二三）

◉特約販賣 御望の方は御照會あれ

模範遊戯研究會考案

模範遊戯 試驗カード

試驗とは何ぞや？ 是れ學校生活の謎にして又解釋なり

▲本遊戯は此の興味ある問題を捉へて最も巧みに考案したもので、記憶力、推理力、思考力及び迅速にして且つ正確なる計算の練習となる、興味と實益とを兼ねた、眞に模範の名に背かざるもの

▲試驗科目は十種あつて本カード五十枚、附屬カード十枚。

▲カードの内には、カンニングカード、マイナスカード、プラスカード。滿點カード。ゼロカードといふのがあつて、優劣を爭ひ及落を爭ふ間に、種々の變化があり、或は缺席もし半途退學もするといふ様にも此の上もなき面白き遊戯、

▲附録には「試驗成績表」滿一冊を添へて定價二十錢郵税四錢

▲發行所 東京神田區北神保町二 明治出版社（振替東京二九二四）

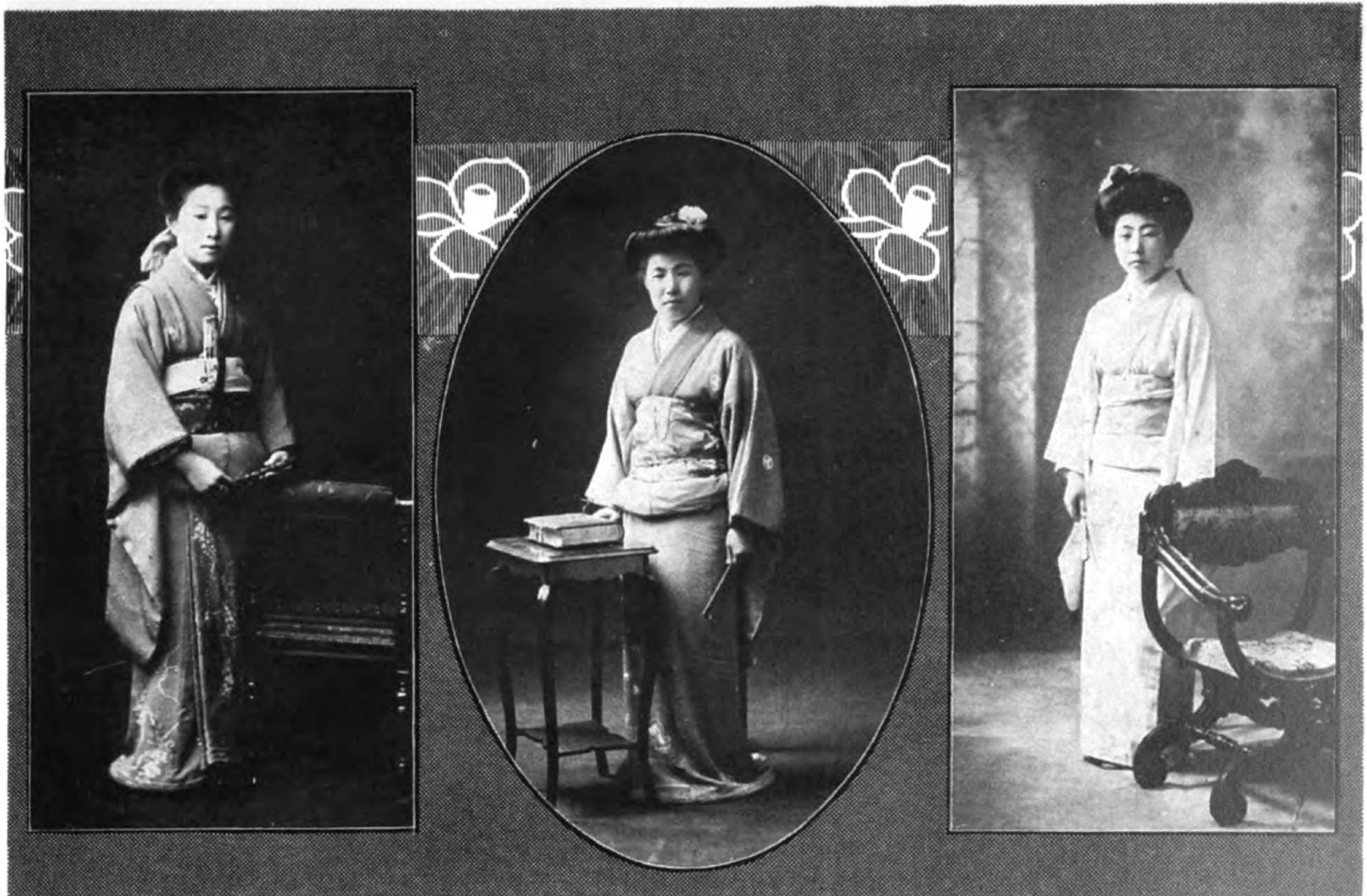
女（5の三）

家庭の栞

十二月　　初冬の候

皆様の御臺所はいよ〳〵賑敷なりました暑もおい〳〵退ぞきはじめ御召上り物は秋風と共に益々おいしくなります、なれど材料を一層おいしく御調理遊ばすには色々と御工夫になる所ですがこの時

令嬢かゞみ



右 尾立末子（四谷）、中 山口春樹氏令嬢富子（麻布）、左 藤岡好古氏令嬢信子（麹町）

令孃かゞみ



右　沼倉五郎氏令孃繼子（日本橋）、中　長鄉有千代氏令孃喜美子（麴町）、左　鶴田靜江子（本所）、

○子宮病自宅療法と姙娠法

子宮病の一般の容態は、手足が冷え惡寒がする、逆上や頭痛がする、肩凝り眩暈もする、そして內股や腰の邊りに索張る樣な疼痛を覺え、勿論子宮も多少の痛を感じ、下腹が重苦しく條張り、小便に度々行き、或は便通が惡くなり、局部の周圍が痛痒く不潔で惡臭がある、斯くて間もなく（或は初めより俄に）稀薄な水樣の物、又は濃い粘りある膿の樣な下物（白帶下）がする、斯うなると月經は多量になつて、經行前には疼痛を覺え、且月經時で無い時も出血し、白帶下は續いて有つたり無かつたり、而して腰部が何時も痛い、これが永く續くと一生涯不姙となり、辛い淋しい月日を送るばかりか、段々身體が衰弱して、取返へしの附かぬ重症を惹起し、遂には命迄失ふ樣になるのです。

▲子寶を得る最も良法 斯樣に子宮病は恐るべき疾病ですから、一旦本病に罹ると、どんなに輕症のものでも、全く根治しない間は何うしても、子供が出來ません、世間には子寶がないと、自分等夫婦には子種かないのだと、斷念めて居る方も尠くない樣ですが、決してそんな道理はない、中には其罪が良人にある事も御座いますが、十中の九迄は婦人方が、本病に犯されて居るのが多いのです、又子宮病の治療は多く手術をいたしますが、手術をすると治りが早い代りに再發し易く、殊に全快した後でも姙娠する事が極て稀で御座います、それに手術を受くるには、身體の餘程强壯な方でないと到底堪へられません、然らば

▲何うするのが一番よろしいかと云に、 それは婦人科專門の大家醫學士北畠佐藤兩先生の御書になりました『婦人病者心得』を讀んで其通りに養生なさるのが、最も安全で最も確實な療法で御座います、此方法によると大概の子宮病血の道は、自宅で容易に根治せられ、御希望通り姙娠が出來ます、皆樣理窟では病氣は治りません、物は試しと云へば、現に身體に異狀ある方は勿論、何んともなくて、是迄一度も姙娠した事のない方、又は流產難產の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて、成程と得心が出來たら、速かに本療法を試みなさい、後悔は先に立たずです。

記者曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町笹岡省三氏宛申込めば無代送附せらる

内藤千代子著　杉浦非水装幀

六版

スヰートホーム

洋装四六版三百十四頁
ハイカラ式頗る美本
定價　金六十五錢
郵税　金八錢

（出版界のレコード破り!!
新時代新婦人の大膽の告白

あゝ何たる盛況ぞや

初版四千部十三日間に盡き、以下各版みな出來と同時に賣れ切れ……今や第六版現はる

本書は東都各女學校學生間にスヰートホーム式なる新語を流行せしめし奇書也。男女青年の現代的傾向を最もよく描寫せる小說以上の小說本書を讀まずして「新人」など、誇稱する勿れ敬白。

目次

△スヰートホーム　△天女降臨　△おてんば娘　△湖畔吟
△松風　△少女の戀　△もゆるおもい
△ハーモニカ　△嫁がぬ人　△夢より醒めた女

發賣元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女（りの二）

文(りの三)



女學世界

第拾壹卷

第拾六號

十二月號



讀で味のある書物

棚橋絢子

△舊くて新しい教

以前は何でも昔を尚んだものですが、今は其れと反對で新しいことでさへあれば宜しいやうに思ふ傾向がございます。いかにも耳目に觸るゝ物質上のことは、實に日進月歩の有樣で、一日を空しうすれば一日遲れる譯ですが、內心上のことは、さう變るものではありません。如何に世が開けたとても、釋迦孔子は靈界の雄たることを失はざると同じやうに、支那、印度の古い書物中にも、新時代の人の大に參考とすべきものがあります。ことに彼の菜根譚の如きは、儒、老、佛、陀の敎を融合したる所に偉大なる敎訓があつて、謂ゆる新思想の人を警戒する所が澤山あります。

△事を練るは事を省くに若かず

名に矜るは、名を逃ぐるの趣あるに若かず。事を練るは、何ぞ事を省くの閒なるに若かん。

と云つてありますが、之を解釋すれば、名譽を求めて之に矜らんとするは、名譽を除けて仕舞ふのに劣るし事務に熟練するは、事務を省略するの閑なのに劣ると云ふことになりますが、此の一節を能く翫味すれば處世上、非常に得る所があらうと思ひます。別に名譽を避けるにも及びませんが、殊更に名譽を欲したとて

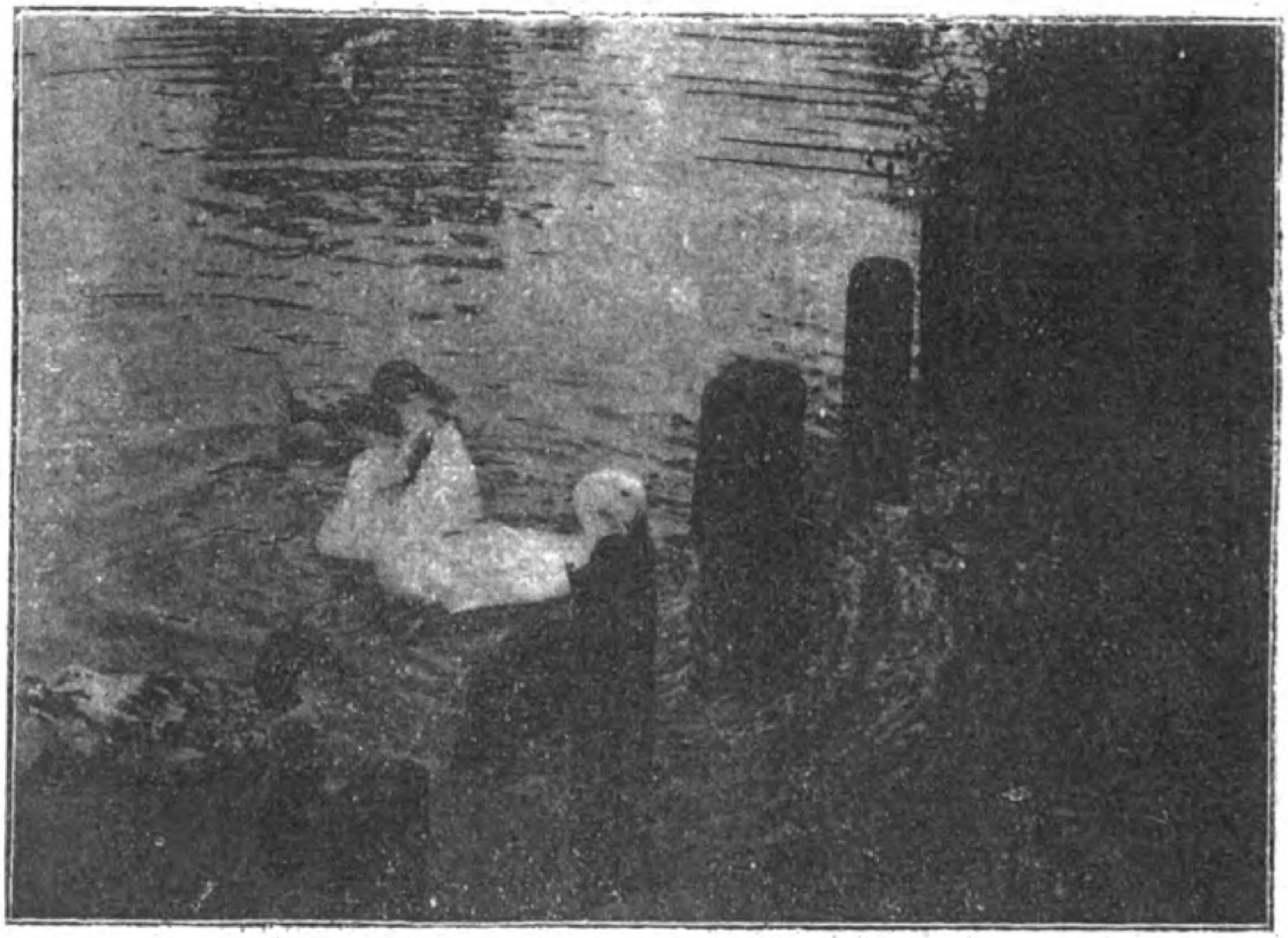
實が擧らねば、却て虚名の爲に身を傷ふのみならず。

さうあせつては、終に名譽を博することもむづかしくなります。又後の句は、事務を熟練するのは宜しいけれども、殊更に煩雜な事柄を治んとするよりは、事務を簡潔にした方が好い、口數を多くして、要領を得ないよりは、口數を減らして急所を抑へた方が宜しい、何でも忙しさうにするよりは餘裕のあるやうにした方が宜しいと云ふ意味であります。

△胸中常に樂し

寂を嗜む者は、白雲幽石を觀て玄に通ず。榮に趨る者は、清歌妙舞を見て倦を忘る。唯自から得るの士は、喧寂無く榮枯なく往として自適の天にあらざることなし。

水鳥や枯木の中の金閣寺



と云つてあります。これは寂しい所を好く者は、白き雲、幽靜な岩石を觀て、玄妙な理に通ずるし、榮耀を欲する者は、清き歌や妙なる舞を見て倦むことを忘れるが、是れは未だ修養の足りない人のことで、自ら道を得た人は、別に喧しいとも寂しいとも思はず、到る所、氣に向かない所はないといふのですが、實に其の通りであります。人は自分の好む所に從つてやうやく快樂を得る樣ではいけませぬ。本當に道を得た人には、殊更に喧しいとか寂しいとか、全く心一つで榮える枯れると云ふことはありません。

寂しい所に居つても賑しいし、榮えても油斷せず、枯れても然程に思ひません。一體人は心懸次第であります。幾等側から子供が騷いでも、自分の心さへ靜かであれば、平氣であるし、幾等寂しくつても精神の修養さへ出來て居れば、胸中は常に樂しいものであります。何處へ適つても障礙になるものがありません。物はすべて心懸次第であります。

△境遇はどうでもよし

孤雲岫を出づ。去留一も係る所無し。朗鏡空に懸る。靜躁兩ながら相干せず。



置迷ひ重なる霜に驚けば我よりふけぬ宿の呉竹　（西園寺入道）

一つの雲が山を離れて出で、去るも留まるも物に係らない。明月は空に懸つて、靜かでも躁しくても干係しない。人は自分のすべき道を勉めて行きさへすればよろしい。何も他を振り向いて彼此思ふ必要はない。なすべきをことをなして、世に超然たるべきであるといふのであります。即ち貧賤に處しては貧賤に行ひ、富貴に處しては富貴に行ひ、而も貧賤だからと云つてさう心配するに及ばず、富貴だからと云つて驕るには及ばない。人の行くべき大道を歩み、爲すべきを爲して心に掛る雲もないやうでありたい。境遇はど

うでも、そんな事に心を動したくないと云ふ意味であります。

△體裁のいゝ事は永續せず

悠長の趣は醲醎に得ず。而も菽を啜り水を飲むを得、惆悵の懐は、枯寂に生せず。而も竹を品し絲を調ぶるに生ず。因て知る、濃處の味は常に短く、淡中の趣は獨り眞なること。とあるがこれも面白いと思ひます。悠長の趣味は酒を飲み、御馳走を食べるやうな時に生じさうなものであるが、さうでなくて、却て豆汁を啜り、水を飲と云ふ淡泊な生涯を送る時に自ら生ずる、又煩悶心配の思ひは、しは枯た裏寂しい所に生じさうであるがさうでなくて、却て笛を吹き、琴三味線を調ぶる呑氣な所から生ずる、されば濃りした事、又は餘り體裁の好い事は、永續はしない、淡りした和いだ趣味のみは獨り何時迄も變らぬ、と云ふのであります。此の趣を心得て居たならば人は誘惑にも掛らず、目前の榮燿にも拘らず自ら身を過つことなどはないのですが、若い婦人などは、殊更外面の美に憧憬れ、虚榮の巷にさまよふ所から、不測の禍を蒙ります。



玉章に涙のかゝるふちらして時雨るゝ空に雁のなくなる（讀人不知）

△腹が空いたら飯をたべよ

禪宗に曰く、饑來らば飯を喫し、倦來つて眠る。詩旨に曰く、眼前の景致、口頭の語、蓋し極高は極

平に寓し、至難は至易に出づ、有意の者は反つて遠く、無心の者は自ら近し。禪宗の語に、お腹が空いたら飯を喰べ、疲れたら眠るのであると云つてある。其の意は眼前の景色を見、目前の言はれた言語を聞いて居れば、他の煩はしい心配は入らぬ。思ふに、最も高尚な事は、最も平凡な中に寓り至つてむづかしいことは、至つて樂をした所から生ずる、餘り物に固執するものは、思ふやうに行かずして心の靜かな人が却て自然と物に成功し易いものであると云ふので、實に處世の金科玉條であります。

△煩はしい工夫は入らぬ

私は、嚮に南禪寺官長の寺に詣つて、種々談話の末禪宗の悟を聞いたら、貫主が云ふには、貴下は背後にある床の間の掛地が見えるかと問ふのです。で私は頓て床に向つて掛地を見て、能く見えることを答へると、貫主は、貴下は已に悟を得てゐると申ました。別に物事は、煩はしい工夫を要しません掛地が見えるかど云へば、前に向いて見たら宜しい　善人來らば善人と感じ、惡人來らば惡人と感ずれば宜しいのです。別に高尚ぶることも、奇拔なことも入りませぬ。つまらぬ取越苦勞をすれば、無益なことに身心を疲らして、事に當つて却て成功しないものであります。好い景色を見れば好いと思

里川の水のみどりの一筋を殘して野へはうら枯にけり（千濱）



へば好い、強ひて他を思ひ出して苦しむに及びませぬ人の言語も、面と向つて言ふこと丈聞けば宜しいのに、前では斯う云ふが、陰口では何を言ふかも知れぬなどと云つて入らぬ邪推を廻すに及ばない。さう入らぬことに心配して居たら、一時一秒も安心して居ることは出來ませぬ。無論平素能く修養し、物事に當つて慌てないやうな準備をして行くことは、大切であるけれども、來ない前から、さう心配する程のことはありません。其のまだ來ない內は準備を十

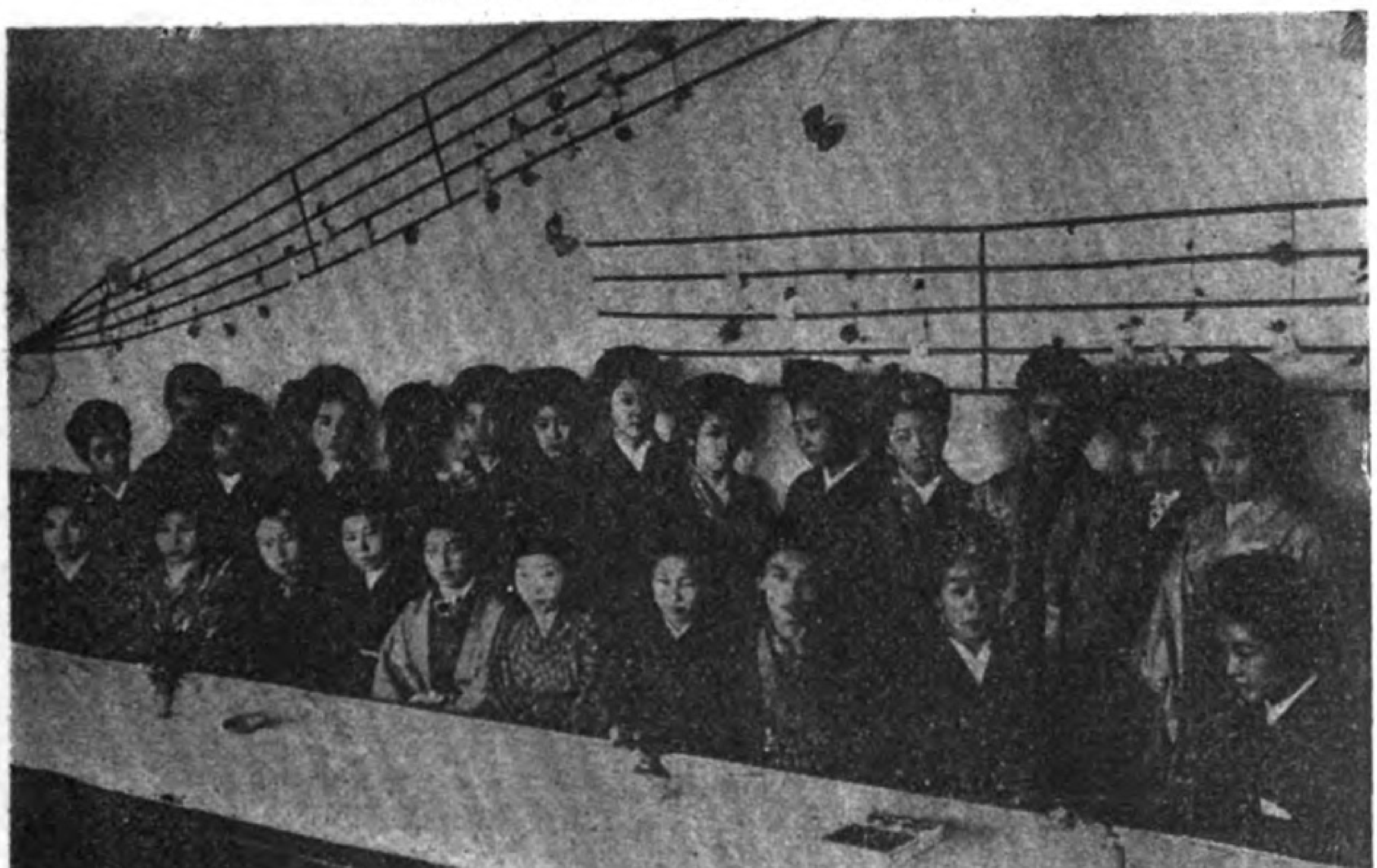
水鳥を水の上とやよそに見ん我も浮たる世を過しつゝ（紫式部）



分にして、心配しない。そして事に當つて、十二分の力を注ぐと云ふことが大切であります。其れが世間の人は、動もすれば之と反對の考を持ち、却て來ない前から、ビリ〳〵し、そして來た時には、慌てゝ仕舞つて、ぼんやりして時機を失するのが多いやうです。慨はしいことではありませんか、貧窮するからと云つて、さう、くよ〳〵するに及びません。其の原因が不正なことや、怠慢から出て居るなら、其れを直して行く必要がありますが、學問の爲とか、正しい事業の爲とか、社會公共の爲とかで、不自由な目をするのは、別に彼此思ふに及びますまい、之に反して富貴なからと云つて、我意我見を張つてはいけぬ。須く心の平靜を保たねばなりません。私共も今日は樂隱居をして居りますけれども、一時は、非常に窮乏の家を處理したことがありましたが、勤儉力

行と云ふことの外、別に心配もなければ苦勞もしませんでした依頼心は露ばかりもありませんでも、親切な人は、私共に特に利潤のある仕事を授けると云ふ鹽梅で、餘りくよくよしたことはございません。死んだら仕方がないが、生きて居る内は、腕限り根限り働くといふ方針で運は天に任して居たのであります。されば貧しいも富めるも、心情に於て、變つたことはございません。人は餘計なことに、心配せず、正當な道を踏んで、物事に精勵したならば期せずして幸福は來やうと存じます。

日本女子商業學校記念



○獸を十種讀みこみたる歌

いつしかとくちさるもうし
みくまのゝおきつうらふね
こりすこかれて。

△猪△鹿△猿△牛△熊
△狐△兎△猫△栗鼠

○蟲を十種讀みこみたる歌

このみよはちよとあふけは
いはしみつくもらぬひかけ
さしてうかへる

△蚕△蜂△蠅△紙魚△蜘蛛
△蚊△蝶△蛙

○十ヶ國を讀みこみたる歌

よはうきといとひこしみの
あきのともあはれみかはせ
やまさのとつき

△伯耆△肥後△美濃△安藝△能登△安房△三河△佐渡△
攝津△紀伊

向島の土手の傘の女



家の掟

△平生の一日

朝先づ東の空ほの〴〵と明け初めて一番雞のこゑの聞ゆる時皆起床。

主人は後園に、姑は佛前に、下男は雞の世話から庭廻りの掃除、下女は厨に私は室内の洒掃と各〻定つた朝毎の勤にかゝります

やがて厨の支度も出來上つて朝日の影向ひの山の端にあらはるゝ頃、打揃ひ佛前に參拜して祖先の恩惠を感謝し、後朝飯を頂きます。

先代の命日に當る日は申迄も有りません、平生でも朝飯は精進と定めて有ります　朝飯一時間後主人の役所行きを送り出した後は　姑の髮をなでつけ、つゞいて私の髮をときなほします、身じまひして庭に面した六疊で縫物致します、下女は下の用事が濟みましたら機を織らせます。

中飯後一時間は各〻自由の時に當てゝ有りますので私らは讀書や細工物して過します。

かくて午後四時過ぎ日影やゝ傾いて庭松の影門の庇を越ゆる時、縫物を片付けて晩餐の支度にかゝります、毎日西洋料理一皿づゝは拵へますが右は舊弊で頂きませんから中々苦心致します。

點燈後は火鉢の傍に打ち寄り姑の肩や足腰をなでさすりしながら主人より其日外にての見聞や佛教のお話を承り九時に成りましたら皆床に入ります、

△交際

遠い親類より近い他人といふ諺の如く、災難死去等非常の場合先、力を借りるのは近所合壁ですから常に珍らしいにつけおいしいにつけ厚う贈惠して置きますから、村中の者は皆我家の者同樣です。

家の親類は遠ち近に澤山有りますが、いづれもお互に疎遠にならぬ樣、近村に有る方へは道のついで事の便りに訪問し、遠方へは四季折々の消息は怠たらぬ樣致し無沙汰の爲大病人の有るも知らずに居るといふ樣な不都合のない樣にとつとめて居ります

不斷出入致すものは以前の下女下男、美はしい風で有りますから盆には素麵に季節の野菜とにしめ位、正月には三種の肴の外、鰤の焼物に茶碗蒸位で、宅

の下男も共に饗します、ソシテ歸りには何なりと土産を持たせて歸します。

△音物贈答

春の草餅五月の柏團子、秋の萩餅、扨は裏畑の西瓜、池の蓮根、後園の柿蜜柑等其時々の作りもの成りものは道は遠からうとも手數はかゝるとも贈答致します

他家より頂いた品は差支なき限り先づ佛前に供へて後一同打よりおいしいとか珍らしいとかいひ合つゝ先方の志を賞味致します、田舍には似合ぬ風で御座りますが折角のお菓子にかびが來て居るとも知らずに他家の名刺付のまゝ又他家へ贈物にして先方で笑はれる樣な不都合は有りません。

又盆正月等は懇意な所は別として親族間では菓子果物等相當の手土産と家々により例年定まれる贈物(盆は、するめ、鰹節、砂糖等正月は鴫生魚、鰹節等)をいたします。

△食物と衣服

食物は何處の田舍ら同じ樣に自家で作つた物が主で米麥野菜果實、玉子等は野に畑に、後園に。下女下男等の丹精に成つたものを用ひます、外より買ひ入れる物とては毎朝の牛乳、夕の肉、時々の海魚、酒位で干物類、素麵醬油、鹽等は年に一度位其年の分を餘る程求めて置きます、其他日常用ゐる味噌や、日毎おヤツに燒くかき餅等はいづれも其年の寒に作つて貯へ置き香の物は其季〳〵の畑のもので漬けて置きます。

姑の若い時分は大抵の場合は自家で紡ぎ自家で織り上げた綿服で御座りましたが、只今はふだん着の他は絹物を用ゐます、それは蠶の時澤山飼ひまして繭は皆糸にひいて置き、之を時々買ひ入れる紡績糸に加へて色々美しい縞や絣を案出して下女の仕事に織らせます。

宅で出來ました布は幾度洗濯致しましても色がさめてしまふの地が下るのといふ心配が有りませんから誠に經濟で且柄に工夫をこらせば却つて買ふた物より面白いものが出來ます。(古川淸子)



樂天家の處世觀

松村介石

▲病んだ時の感じ

人間は何より健康が幸福だと誰でも口では言つて居ますが、健康な人自身は左程ありがた味を感せず當然だ位で、他の心配事をこぼして居る、併し一旦一寸でも病めば何とも思はなかつた健康時代が羨やましくなるもので、私は鎌倉に居た頃、ガラスで手の指を切たのが少しの不注意で化膿して二日三夜非常に痛んだ。丁度よんどころない用事が出來たので、痛を堪へて出京しましたが、いつも汽車の中から悦んで眺めた富士も何も眼に入るどころか、人顔を見るのも辛かつた。この時はつく〴〵痛のなかつた元の身體が羨やましくなつたのです。又嘗て高田先生から肺炎加答兒の宣告を受けた時も無病の身體の折に何故有がたいと思はなかつたらうと、後悔しました。

▲不養生ほど罪悪はなし

私はベレーと云ふ醫者に息を吸ひこんで吐息のつゞくだけ聲を出すことを勸められてから十年間一日もかかさずやりました。毎朝ヲー〳〵と狼の吠えるやうな聲を出すので近處では氣狂だと思つた位でしたが、肺炎に利目があつて二年目に全治しました。それから便秘と感冒も持病でしたが、或醫者が便秘には毎朝床を離れる前に微溫湯を大きいコップ一杯飲みほし、五分間平臥するのがいゝと敎へてくれたので、七八年缺さずこれをやりましたがお蔭で毎朝定つて便通があるやうになり、便秘から起る頭痛や腸のこだわりも全然治



いかなれば冬にしられぬ花乍ら松しも風の烈しかる闌（隆信）

つてしまつた。感冒の方は例の冷水摩擦をずーつと續けた爲に、毎年十一月頃から襟卷して用心する世話もなくなりました。近頃は藤田靈齋先生の息心調和法を怠らずやつて居ますから身體は益〻丈夫になるばかりです。私がかやうに良いと信じたことを根氣よく續けて居るのは、不養生で病にかゝるほど罪惡はないと思ふからであります。自分の身體だから自分の自由にしていゝと云ふわけにはゆきません。矢張人の迷惑になるのです。殊に一家の妻君が不養生で病にかゝれば、自分の不自由はさて置き、外に働く良人が家へ歸つて妻君の蒼い顏を見る上に、金は費ると云ふのでは實に立つ瀨がありますまい。こゝを考へて、誰でも出來る方法なら面倒を辛抱して勉めなければならぬ。二三日やつて見るが、今日は用が立込むからとか、一日位休んだつてとか、何とか理窟をつけてウロ拔をしては何にもなりません。病んだ時感じた健康の有難さを忘れずに勵行しさへすれば間違ひはないのです。

▲足る事を知る人

身體の健康と共に心の健康を得なければ本當の幸福は得られません。それには自分の立場を有がたく思ふのが肝心です。明日の米はどうしやうかと云ふやうではちとこの悟りが難義かも知れぬが、先づ衣食住がどうかかうか出來るなら大抵のところで滿足すべきで、足ることを知て上見ぬ柳かなが幸福の土臺です。私の懇意な或金持が事業の失敗で貧乏になつた。貧乏と云つても衣食が出來ぬほどにもならぬが唯以前の榮華にくらべて愚痴ばかりこぼして居ましたので或時私がかう云ふことをかいて送つたその話は、或日一疋の兎が考へるのに世の中に己ほどつまらぬものはない。嚙みつく牙もなければ引搔く爪もなし、針も持たぬから刺せもせず、他の奴等に輕蔑されるばかりだ。嗚呼つく〴〵この世が厭になつた、いつそ一と思ひに死んで了ふと、山の上から池を目がけて飛び下りた時、この兎に驚いて水に逃げ込んだ蛙を見て、己を怖れて逃る奴もあるのか、それぢやア未だ己は豪い内だなと怡んだと云ふ喩へ話でありました知人は大に悟つて心持を一變したさうで禮手紙をよこしたことがあります。



津の國の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風渡るなり（西行）

▲もがけば鬼になるとの諺

日本の或貴き夫人がロンドンに在留中、交際期には毎夜の宴會に千圓二千圓の着物を取かへ引かへ惜氣も

なく着飾つて出る貴夫人達を見て、衣服の點ではとても交際は出來ぬとあきらめたさうです。何しろ一個人で日本の政府より金持の者もあるのですから、日本の貴夫人が諦らめた筈です。好事家が五拾圓、百圓の骨董を集めて怡んで居ても、ずつと金持の許へ往て、千圓、二千圓の品を見せられると、自分の持物が急に馬鹿らしくなつて來る。差當り衣食にも困らず平和に暮らして居る妻君も、同窓生が貴婦人顔してブー／＼と自働車で乘込んで來ると自分の境遇が俄かに情けなくなつて來る。而して、嗚呼殘念だどうか爲て己もあんな骨董を見せてやりたいとか、あの友達の眞似が爲たいとか悶え始めると、寄附金や慈善金の申込もすつかり斷つてあがくやうになる、かうなるともう心は鬼の住家で、苦しいこと一通りでない。貴賤尊卑その人々の分に安じ感謝するのが何なり幸福の道です。富貴の人は余は天子に生れ金持に生れたことを感謝す。金あるが故に人も助けくれるし、位が貴いために善事を奬勵するに都合が良い』と言はれたフデリック三世の心掛がありたいものです。



秋のおとづれ（五味清吉筆）

▲嬉れしき思ひ出

静かに眼をふさいでズーッと既往を考へると、窃かに恥ぢてゾッとすることあるが、又僅かでも良いことを爲たと思ふのは愉快なものです。つひ先達野口復堂氏と一緒に或處へ演説に往がけに、新橋停車場へ下りると、七十ばかりの田舍婆さんが、持たは／＼兩手にウンと荷物を提げて

脊中に、一としよい、首へも何だかぶら下げ、蝦腰をして驛夫に何か尋ねかけたが、驛夫は忙しいので、ロク〱返事もしない。婆さんは困つてウロ〱して居るから私が、『婆さんお前どこへ往のかい私が敎へてやらう。何しろその荷物を少し持つて上やう』と手を出したが、『ハイ〱私は下谷御徒士町まで參りやすイエ荷物はよろしうございます』と云つて荷物を確かり抱えこんで婆さんなか〱離さない。これは大方荷物を容易に人手に渡すなと敎へられて來たのでせう。それぢやャ車を雇ふてやらうと云つたけれども、イエ電車でまゐります』と云つて應じない惡車夫の用心でありませう。仕方がないから野口氏が婆さんを電車にのせて御徒士町まで送つたのでしたが、こんな些細なことでも人の便利をはかつたと思へばいつ〱までも心嬉しいものです。婦人が持前の愛情をすぐ用ゐて他に深切をつくした愉快の感じは定めし皆さんも御經驗のあることでせう。これも幸福の道であります。



料理のお稽古

▲死の覺悟あるものは幸福也

浮世の望み足りて得意な時でも一度死と云ふことを考へたら暗い雲に褁まれて了ふ。世の中に死ほど怖いものはな

いのだが、これも考へやうで怖ろしくないと思ひます。あの伊藤公がハルビンで死なれた時、私はア、羨ましいと思つた。公の死はあつけないやうですが、露西亞では自分の方の不注意からと氣の毒に思ふて、我に對する態度がガラリと變つたのですから、公はつまり日露を結んで死なれたので實に立派な愉快な死です。イエスの十字架、ソクラテスの毒盃も愉快な死であります。ソクラテスが毒盃の宣告を受けた時、裁判官も弟子もお逃げなさいと勸めたけれども、余七十に及ぶまで道を説き、今日道のために死するは本望であると云つて處刑の日に、一いきに呑み干した。而して涙にくれる弟子達を制して、余は身體の下部から段々に死ぬから心を落ちつけてよく見なさいと云つたが、成程自然に足の方から寂滅する樣子で、少しも苦痛の風がなかつた。愈ゝ胸のところへ來て呼吸が止りかけた時、コートを頭からかぶつて了つた。弟子達は一時にワーッと慟哭すると、ソクラテスは又ヒョイと頭を出して、一人の弟子の名を呼び、余は何某に借りた物があるのを忘れて居たから、後で必らず返へしてくれと云つて又コートを被りそのまゝクーッと死んで了つたのです。なんと立派な



うら風に明石の濱のはま千鳥立居は涙のこゝろなりけり　（季經）

ものではありませんか。どうも覺悟ある人の死は左して苦痛がないやうに思はれます。男でも女でも天から與へられた責任を精一ぱい働らいて、天命に從ふて、快よく死する度胸を持てさへ居ればいつも安心で幸福なものです。

▲力あるものに頼めよ

水の流れと人の行末、一寸先は暗の世の中と考へては心配で堪らぬのでおみくじや占ひを頼むと云ふのは何か人間より力ある物をたよりにしたい自然の人情でありませう。かよわき婦人は尚更この情が深いものですから、迷信ではいけませんが、天とか神とか佛とかに頼つて何か一つ運命の歸するところを悟り、何事も我身に益になるやうに心得、難義にあふたら可愛い子に旅させる親の慈悲と感謝し良い目にあふたら、尚更惠みを肝に銘じて、お天狗になりさへしなければ、心はいつも長閑なものです。



小春日や友許訪はん出來心

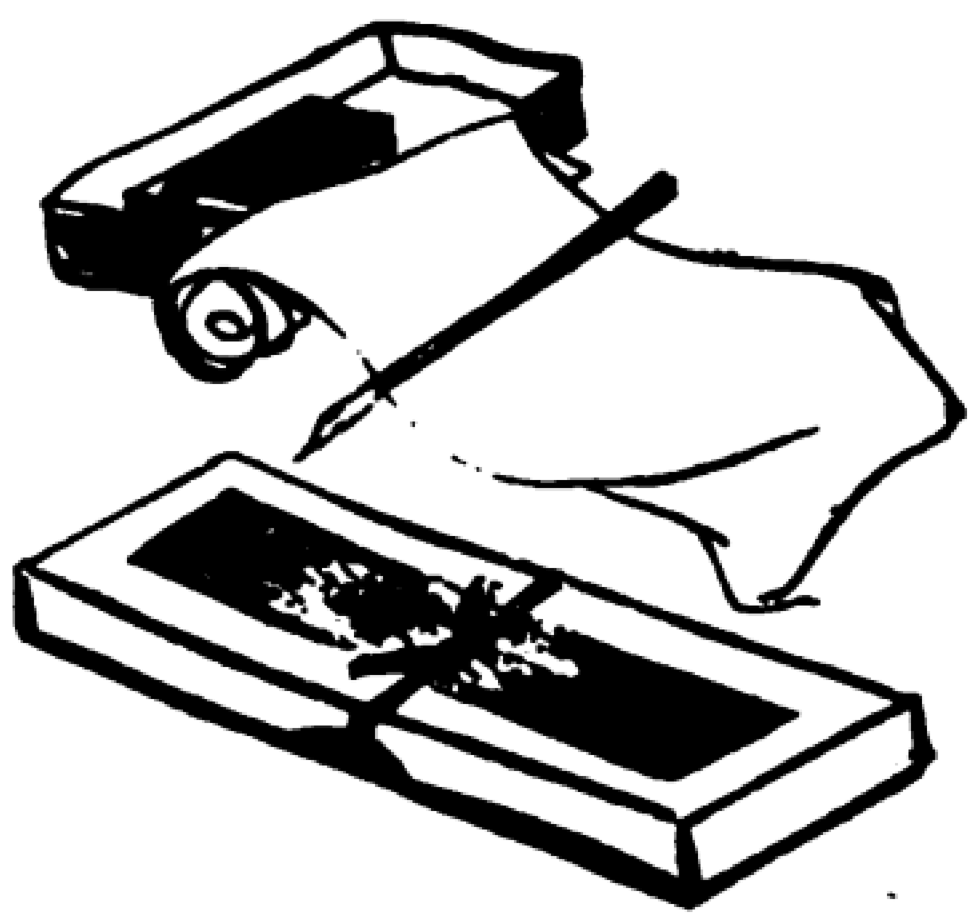
○「思而不レ學則殆」
月暗き木曾の掛け橋たつきなく
夜行く人は危うかりけり

○「見レ義而不レ爲無レ勇也」
劍太刀みちにかなはゞ利こゝろに
錆はつけじといよゝとぐべし

○「人而不レ仁如レ禮何」
色もなく香にも匂はでいたづらに
咲ては花も見るよしのなき

○「人而不レ仁如レ樂何」
舞姫の舞ひかなつともかみゝたま
まことなければ受ぬべきやは

新徒然草



磯千どり

○

秋の晨はいとをかし

暁の夢頻にもよほすをふとの物音に驚きて起きいでたる、眼瞼開きたるにや、閉ぢたるにや、雨戸の方へ手ま探り行くに、歩く足も雲を履む心地すなり。漸くそれと探りあてゝすと引く程に、戸の外は思ひしよりも明るきが常也。夜の内に時雨したるにや、庭の土のつゝましう濕りて草の葉の濡れたるも風情あり。門邊行く配達などの跣足も何とはなしに身に沁む。

流石に秋も更けしと覺しく朝毎に霧こめたる。吹く息の白く見ゆるもうすら寒し。偶早く起き來たる若き兄等の、緣側に立ちて秋の晨は心地よし、心地よしと繰返し東の方見れば「あな日はかの邊より出づる物なるか。いとも不思議」と只管に怪むぞをかしき。なべて男の日頃より早起したる晨は僻事多し『未だ茶は沸かぬにや、腹いたう減りたり。』など女輩を急がしめたり。

春の宵、秋の朝はいづれも一刻千金にも代へ難くぞ覺ゆる。

春の夜、枕邊に笠外したる燈火置きて、天鵞絨の襟かけたる柔き衾、顎のあたりに搔き合せつゝ、日頃嗜める物語讀むに、更くる夜の程をも忘るなり。

秋の朝は、遠き彼方に鳴く雞の聲きゝつゝ、枕に顔を埋めたる心地 雨戸の隙間より蒼白き日のさし込むを見出づるも却々にをかし。作よき昔家は雨戸に隙あきたらず。今様の貸家こそ縱様にも横様にも日影さし込む。

目覺時計といふ物は心忙しき物哉。次の朝こそ早く起き出でむとねじ巻きて寐ぬるに、鳴るべき頃より早く目覺めし折は、鳴るか、鳴るかと安き心地もなし。されど使ひ馴るればチヾと響き出づる迄知らず、音する間は耳ふたげて聞くよ。

○

今樣の貸家には淺ましき姿なるが多しことに上方なるは怪しくも同じ形したるが、軒を並べて建つ。衣は價賤しくとも縞模樣他し人とは異り、我身にのみ應しきを求むる事、さして難事に非ざるべし。されど居は心を改めしむる物なればこれのみは爲し得る限り清げなるを撰ぶべし。庭狹く厠所の壁の濕りたる、桂破れ右方の障子は左方に遣れば閾にはさまりて動かざめる座敷の庭の何の草花もなく黒き土の唯むく／＼として、隣家の庭と隔したる籬よりは、いみじう物干す竿の端などの時時此方へ突き出でたる、いづれも今樣の淺ましき家也。

殊に五戸六戸同じ形したる家並の一つには、夫に叛くとも住むまじく覺ゆ。かの燕、雀の如き小鳥すら己が巣は一つ／＼異る姿に造りなすものを・・・



おろかにぞことの葉ならば成ぬべき　いはでや君に袖なみせまし（崇德院）

○

今樣の小學校は學ぶ學科のみ數多くて、幼兒をすぐ

すくと生ひしめず。ことに手工なりとて男子には鉋持ちて板削る事、あるは粘土と言ふ物捏ねて物の形造しめ給ふ等いとも物珍しうぞ覺ゆる。大工になり左官にならずとも手先巧に動かすは固より貴むべき事なれどかゝる末技は教へずとも會得すべく　亦教へしとてさして上達も爲すまじく思はる。斯る事に心を打散ずるより一つ事深く教ふること肝要ならめ。

萬事今の世の教育に身を置く人は枝葉にのみ拘泥し大本を誤まれり。絹の衣は價嵩めば木綿のものこそ然るべしと宣ふはいとも思遣り深く見ゆれど式日にはかの姿醜き黒の紋附なれと命じ給ふに數ある衣は着するを得ず、詮方なく新らしきを作る折もあり。



雪霜を拂ひ兼てやしをれふすかつみが下に鴛鴦のなくらん（重保）

その他、こはすべからずかれは禁ずとて規則の枷さへ作らば女は育つ物とおぼせるにや、甚しきに至りては新聞雜誌をも讀むべからずと禁じ給ふ。讀むべからずとて誰か讀みたきを讀までやはある。由なき詮議立也。げにや心卑しき女は斯る拘束の中にも生立つべけれ、心美はしく諸人を服する女を此間に求むる事暗の夜に星を求むるよりも難かるべし。亦此地の小學校にては校長の君貯金せよ、貯金せよ

と宣ひて、貯なければ、などてせざると咎めますに、通帳持たぬはなく、三人四人相寄れば必ず貯の高の多きを誇り合ふなり。

諸々の費を愼み材を貯ふる事固より貴ぶべし。されど費を避くる慣を敎ふる、必しも貯金に依らずともよろしからむに、こは奇怪なる御言葉哉。かゝる事は宜しく家族の者にこそ宣ふべし。子の性によりては此慣習は軈て財を吝む癖ともなるべきに等女心に思ふ事もあり。

○

九つより十になりにし時は未だ物心もあらざりき。十九の年の暮るゝ折は流石に悲しくて人の口より我身の廿となるべき事、告げらるゝ每に野路に日の暮るゝ心地しぬ。げに十七八の二年三年は唯娯しさに夢の如く過して、母等の「今の世の娘は何時迄子供の心にてやあるらむ。十七にて子の親となれる女も多かりしに……」など宣ふ事のひたすらに可笑しかりしか。廿になる頃より肩揚縫上を下せしが、其暫しは雙の肩の何とはなしに淋しく、亦人の我年訊ぬるごとに十九歲幾ヶ月など答へしもをかし。今は廿過ぎて二年、もはや其年も暮れなむとすれど、怪しや廿三となるはさして驚もなく、廿過ぎて取る年は物の道理の心地するも由々し。斯くて卅路の聲を聞く折は如何なる感やあらむ。げに額に薄き皺の生ひ出づる頃ともならば一つ二つの年は上に見らるとも下に見らるゝともさして嬉しとも悲しとも思はずやあらむ。

山茶花や部屋いつぱいに朝日さす



昔の女は十五六にして嫁ぎ直に眉落し鐵漿つけ年老

けて見ゆるを苦とも思はざりけらし。今の世にても年とりたる祖母・母親などは娘の心も汲まず　衣等調ふる時は少しにても末永く物の役に立てむと果敢なき木綿着すら、年よりは模樣細きを撰ぶ。淺ましき心也。況して年うら若き女の筒袖したる、黑き袴を穿ちたる、手織と云ふもの着たるいづれも〳〵涙こぼるゝ心地すなり。

男は廿の聲を聞くとも動ずる氣色もなし。されど卅路近くなりぬれば、袷の用意なきに秋風立ち初めしごとく卅路になる、卅路になると喞ち初むるも可笑し。されど男も心々によりて卅路も四十路も人事の如く觀じ、何時迄も心のみは若くてある向もあり。



色鳥や喰こぼすもの皆赤し（珍碩）

取る年に對して女の男に優る事唯一つあり。女には禿と云ふものあからさまに露れざる事是也。よしや眞中にほがらかなるが出で來とも、周圍に毛の殘る限りは、山の上の沼をち茅の掩ふ如くに、これを掩ふ事さして難事にあらず。

男の頭は前より毛脱けて入江の樣になると、先頂の朦朧と、簾漏る月の明り初むるとの二つあり。いづれも〳〵可笑しき事の限なり。

○

同胞は他人の始とは甚じくも言ひたる哉。

げに姉妹は一つ家にある程は苦樂を共にし、一人が憂は我事の如く憂れども、一度離るれば亦昔の情愛もなし。殊に一人の方に侍く夫あるは子等出で來ぬれば、とり分けて然り　如何ばかり親しかりし姉妹も境地異れば、情自から薄く、氣



あらしふく片山林ちり果てからすばかりぞ枝に殘れる（千濱）

質も變じ、互に快よからず思ひ合ふが常なり。されど同胞も男なるはさして疎くもしたらず。家持てる兄が許など行けば「よくも來つる。何か食はせむ」と他意なく持てなす。時としては、「直ぐ歸るべければ必ず待て」等言殘して出で行きた後、更に歸り來らず　次に逢ふ折この事詰れば「さる事もありしか。他處々々の菊見て其歸途、畵の會に行きてけり」など笑ひつゝ言ふに「それとは知らず待ちあぐみしよ」と言ひ怨ずれども、さして腹も立たず。

嫁げる姉は我夫の事のみよし樣に言ひ、此方の事をそれとなく言ひけなすよ」

更に伯父姪、從姉妹同志の間柄に至りては淺ましき僻事も一入と多し。殊に零落れたる伯父伯母は不具の子生むとも持つまじく覺ゆれ。零落れたる伯父伯母は姪等の嫁げる先を我家の如く心得て、些かなる土産等携へて訪ね來るが常也。流石に女なれば姪はさして情なくもし得ず、亦夫なども快よく言ふに來ん日も來ん日も火鉢の前などに打くつろぎて、此

家は居心よき家也など空嘯きてゐたる。

亦身分賤しき身内は時と處とを問はず我と彼との血續なるを人に語り、見る人の前にては態と對等に振舞ふも心憎し。加之心いみじく僻みたれば、暫し疎音に打過せば「さなり我家は零落れたれば……」とさあらぬ事をも惡樣に解すが常なり。

○

一家を營む資ある男の態と妻持たぬ由聞けば世の人之を怪しとはせず、なか〳〵に思慮ある人と敬ふ事さへあり。されど女の夫持たぬは人樣々に惡樣に噂し　却々に惻隱の情を起すも由々し。なべて己の爲し得ぬ事を言ひけなすは愼しむべき事なり。車に乘る資なき男の徒歩主義説きたる、美服持たぬ女の美服着るを罵りたる。『人は心樣が一也。容色は幻なり。何人も皮一重下は淺ましき髑髏なり」と説く人の顏いと醜き　いづれも愼しむべき事也。

げに女の身の獨り立の幸は、姿美はしき女の口よりこそきかまほしけれ

初時雨ふりしはかりの跡みえて楢のみこそ色着にけれ（景樹）



春衣の見たて



こゝろに刻まれた師の印象

夕紅葉

△森下先生

優しくて何處か犯し難い威權のあるお方です。修身を私は敎へて頂きました。餘り大きなお聲で有りませんから、眠い〳〵つて言ふ人が多く、正面を凝然と見て居る方は、眞實に僅かしかありません。しんみりした面白いお話をなさるのですが、ほんとにお氣の毒に思ひます

そしてにこ〳〵遊ばした溫容に接すると、何とも言へぬ懷かしい感情が起きまして、此の先生の爲めなら何でもしようといふ氣になります。



さきとさく花野をみれば世の人の染なす色は限ありけり　（千畝）

それゆゑ全生徒に慕はれ、敬まはれて人望は校長よりもかへつて高く、學校の事は大抵此の先生のお指圖で左右されます。ですから校長の御信用も厚いけれども、それが羨ましいのか、校長との折合ひは餘り見掛け程好くはない相です。噓か本統か其邊の所は、私共蝦蟇の子にはちと解り兼ねますが、今度臺灣の某學校に赴任なさつたのも、譯があるとやら、寄宿舍のK樣がお言ひでした。之を先生に伺つたら、あのカフス釦輝く御手に、私のリボンまさぐりながら『ナニ又ちよい〳〵歸りますよ、私も此の學校にいつ迄も〳〵居たいけれど、お上の仰る事は仕方が無い。從順しくして待つて居て下さい』つて仰つた切りで、取り付く島も有りませんでした。クリ

スチャンですから、よくクリストのお話しを聞かして頂きましたが、噫それも昔の夢！

花の朝、月の夕、雨の日も、風の日も、敎へを仰ぎし師の君は　あゝ今よりは淡水河畔に？。

けふにあふ我の此身もいつまでの
契りかゝけし白菊の花　（蘆庵）



△田内先生

純舊式正ピラミッド型の前髪、突出した頰骨の上に始終發電して居るといふ樣な御眼、助敎授でいらつしやるけれど、それは〳〵恐かない先生です。後から見た所は　スラリとした撫肩の、上品な、何處のお姬樣かと思はれるけれど、一度敎へて頂くと、誰でもチリ〳〵してしまひます。私も其株であのお眼を見るとゾッとします。其上生徒の耳の痛い事を仰有るに妙を得ていらして、お辨當の濟んだ後は、大抵大なり小なりお目玉を頂戴致します。

暑中休暇前でした、例の通りお腹をこしらへて居ると　いつもに無い先生が早く濟みましたので、形勢不穩とみんなが愼しんで差し俯むいて居ますと、『皆さん暑中休みも近くなりましたネ、樂しみでせう一學期の間に、机も大分損げましたネエ、窓の障子もあんなに破れたし』、半ば獨り言の樣に、やがて『皆さんの机や腰掛に破れてる所はありませんか？』と穩やかに言はれましたから、其れ丈けの事だと安心して、彼方からも此方からも一齊に『私の机は蓋が取れて居ます。』とか『腰掛の足が無い。』とか『釘が無い。』とか、『釘が出て居る。』とか、一度に八ヶ間敷く言ひ出しました。けれど先生は少しも

お怒り遊ばさないで

『ソウ、ソウ、ちや直ぐに小使にでも直させませう、最うそれ丈けですネ、机や窓も傾むきかけましたが、貴女方の此頃のお行儀は如何でせうかネエ?。』

寸鐵、此の一言は今迄騒がしかつた皆の心を刺し通しました。何事に依らずすべて斯うなので御座います尤も其時は、私達の級に良くない行ひをした者が有つて、それが校長とかに見つけられて、教員會議に上されたのです、そして其の時田内先生が大變赤面なすつたので、その翌日だから、却々猛烈に胸の底から頭腦の奥まで、えぐり廻されたのです。眞實に、あの時程困つた事は無いと、今でも同級生が集ると一番に持ち出します。隨分印象の深いお目玉でした。



今は身に涙のはるゝひまもなし
月もそのよぞ限なりけり
（頓阿）

今は去る受負師の奥樣におなりなすつて、お二人のお坊ちやまのお母さんで居らしやいます。

さぞお得意の家政學にお腕を振つて居らつしやる事でせう。あんなお母樣を持つたお子さんが可愛い相だとは惡口やのKさんの蔭口ホヽヽヽ、聞かれちや大變、内所々々‥‥。

△川口先生

我こそは助教員なりつていつたスタイルの方です。けれど裁縫科だけ教授なさるのですから、身體に貫目は（十七貫とやら承はる）付いて居ますが、其の割合に尊敬されません。そして口の惡いことは先生中第一等です。一週に四時間ある、お針の度毎に

『此の級にお裁縫の上手なのは、小西さん、竹田さん太田さん‥‥それから東さん達ですね、下手なのは此の近邊の人ですねェ、、、、。』これは私や、Kさんや、Nさんや、Mさんの邊りを指したのです。

此の先生は鈴が鳴ると一分も猶豫なしに少し腰をかゞめた樣にしてお出張なさいます、がその頭がそれは珍らしい格好です。横をつめて上へ上へと高く出した前髮は、天晴れ當世流行の樣ですけれど、髷が如何いふ風にお結ひなさるのか、後が龜の首の樣に突き出て初めて見參仕まつる者は、誰れでもお腹に撚を掛けます。そして式日といふと、此の奇拔なお頭で、靴といふ出立なのです。お年は最う四十近いのです。どうしても平凡な者には眞似られない御方で御座います。


燈下讀書

△土屋先生

語學と漢文の先生ですが、咳拂ひで有名な方です。この先生の咳と來たら、赤ン坊なんかは泣き出すでせう。學校中の評判なのです。私なんか度々飛び上らせられました。耳の側でやられて御覧なさい、誰だつて驚きます

けれど好い先生です　口髭が後からでも見えるといふのが御自慢で、それについて面白い話があります。いつでしたか源氏物語りの拔き讀みをして聞かせて下さつた時、讀み乍らも切に髭を捻つて居らしたものだから、一番長いのが一本拔けました。すると、『あゝ惜しい事をした。』つてそれを大切に紙に包んでポケットに入れてしまはれました。一寸可笑な方でせう。

そんなにお髭は綺麗になさるけれど、また評判のしみつたれです、梅雨期でした。千鶴樣とお掃除の當番で遲く歸りますとワッと横丁から出て居らして、『やァえらい遲いんぢやなあ』、『ハイお掃除でした』、『そりやあ〳〵御苦勞さま。』なんてお話ししながら一緒に歸りましたが、ひよいと先生の足元が變なので、何の氣もなう見て私は、最少しの事で吹き出しかけました古い〳〵磨り減つてしまつた雨下駄の、然も爪皮が取れてしまつてるのを、太い小よりで縛り付けてあるのです。ほんとに笑ふにも笑はれず、別れてから散々笑ひました。

洋服に雨下駄は餘り感心出來ないのに、その下駄がこれなんですから、ほんとにさつぱりしたものですホヽヽ。



白菊の花の盛に成にけりおくらんつゆの千代の數みん　（景樹）



▲女と慾

なべて女は慾深きものなれど、人の所有まで望まざるこそよけれ。さはいへ慾なからんには家治むる事も叶はじ。人に物多くとらせたればとて、あながちに情深しとは云ふ可からず。

小慾して大損すればとて女にしあれば止むを得じ。小慾にても慾なきには勝るらん。慾なき女は夫をも戀しう思はざる情薄きものにこそ。

▲女と墓

卒塔婆のみにてまだ石碑だになき新らしき土饅頭の前に、額づきて何事やらん祈れる滿若き女ほど哀れなるはなし。まだ三十にはなるまじと思はるゝ美はしき女の髮切りたるは、なき人に立つる心の思はれて嬉し。

さは云へ髮こそ切りたれ　衣などいと着飾り白粉までもつけたるなどはかへつて心憎し。

まだ妻とだに呼ばれざりし若き女の、末は夫と定めたりけん男の名、口の中にてつぶやきつゝ、しめやかに打ち泣けるなど、男と生れたらんには、かゝる女にこそ思はれたけれとぞ思はるゝ。

墓の前去りもやらで、過去將來思ふにやあらん。涼しき目に涙の一滴二滴浮べたる、こよなうなつかし。

墓の前に立つ事もなき女などは、世にも幸多き者になん。

▲女と星

大空の花をぞ星と云ふめる。大地の花は何とや云ふらん。人の世の花は女にこそ　星の涙、花の雫を露と呼ぶ。人の花なる女の涙は何とや名けん。眞情とも云ふ可きか。

醜き女の星より明るき大きなるダイヤなどを胸と云はず指と云はず光らしたるは、可愛からず　まして眞情なき女の猛々しう罵り狂へる姿見ては、などて人の花なる可きと思はる。

星のみ、菫のみ花にはあらじ　見る人の見ば棘多きあざみ、などこそ、花にあるらめ。

狩野謙吾先生著

◉噫文明病!!!

神經衰弱自療法

第九版　價六十錢　郵税六錢

此二冊の書物は神經衰弱症治療の専門大家として有名なる狩野先生が各種の神經衰弱症例へば神經の腦衰弱症神經の胃衰弱症神經の生殖器衰弱等の治療法並に豫防を通俗に而も詳細に講述せられたるものです斯病には特に冒され易い教育ある人士が是非共一讀する必要ある書物です

增補訂正 神經衰弱豫防法

第四版　價六十錢　郵税六錢

◉附錄……煩悶歷世豫防法

體力養成叢書

第一篇 ●大澤醫學博士述

冷水浴と冷水摩擦

第四版　價二十錢　郵税四錢

第二篇 ●二木醫學博士述

腹式呼吸

第八版　價廿五錢　郵税四錢

●第三篇 海水浴 ●第四篇 深呼吸

●第五篇 滋養物の攝取 ●第六篇以下近刊

東京日本橋區檜物町八番地　文星堂
振替二一〇三〇番、電、本、二一六三八番

東京銀座大通新橋際　新橋堂
振替二〇〇番、電新一九九一番

◉東京かるた會競技用
▲萬朝報遊技部發兌

小倉百人一首 標準かるた

讀札定價四十錢　取札定價四十錢　郵税各八錢同一組十二錢

此かるたは近頃大流行の活字のひら假名かるたです東京の學生社會では殆んど皆此かるたを使用して居ります取札の文字が總て假名で書いてありますから坊ちやんでも孃さんでも又小僧さんでも女中さんでも假名さへ讀めればどなたでも面白く遊ぶ事が出來るのです、眞にお正月の家庭に無くてはならない品です

◉かるた界最新の發明

練習用 標準かるた

定價六十錢　郵税八錢

かるた競技の練習に此かるたを使用すれば普通のかるたで練習するよりも非常に其効力を節減する事ができます

◉園野精造君著（君は東京かるた會連年の優勝者也）

最新 かるた競技秘訣

價三十五錢　郵税四錢

著者の自序に曰く前略……著者多年の研究を實戰に應用し着々其効を奏したる秘術を披瀝し同好の士に薦む……以て本書の内容如何を知るべし

女（ぬの一）

▶發賣元 新橋堂 東京市京橋區銀座通新橋際　振替口座東京二〇〇番　電話新橋一九九一番◀

廣告御得意各位に謹告

本誌も彌々當號を以て四十四年度の終刊と相成申候從て本年度に於ける本誌外各雜誌廣告に就き御得意方の深厚なる御同情に依り好成績を舉げ申候段弊館一同深く感謝する處に御座候玆に乍略儀紙上を以て微意申陳べ候尚來年度も倍舊の御引立を希願申上度如斯に御座候

追て**四十五年度本誌初刷**廣告は**十二月十日**を以て〆**切期日**と確定仕候へば歲末御多用の事と奉恐察候へども右期日迄に是非共御用命仰付られ候樣乍憚御手配被下度是又併せて奉希上候

東京市日本橋區本町
博文館廣告係

有益至便
御歲暮品

御進物用圖書切手調進仕候

●圖書切手は優美高雅なる函入にて其儘御進物用として最も適當に御座候●右圖書切手は本館發行の圖書中御隨意のものと御引替可申候●切手函中には約三百頁の美麗なる本館發行圖書總目錄相添へ圖書御撰擇の便に供し申候●圖書切手は本館及び全國各地賣捌店に於て持參の御方望みの圖書と引替可申候●地方よりの御注文は送料及雜費として別に金拾錢を申受く

博文館

東宮殿下北海道御巡路

行啓紀念繪葉書

スタンプ付壹組三枚正價廿錢郵稅二錢

發賣元 東京日本橋本町三丁目 振替東京二百四十番 博文館

男ちゞれ 女くせ 毛 赤毛

は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

蹄鐵印 シャターリヨン 白赤葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり

●至る處に取次店あり

本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱賛あらんことを乞ふ

東京市本町三丁目 電本局長一四三五

鈴木洋酒店



產科婦人科專門大醫 大和田宗順先生方劑

帝國大學藥學專攻藥劑士 玉應勝海謹製

快月丸は子宮を痛めずいか程長き月經とまりも容易に流下す二ヶ月滯りは一劑又に諸合なり又

月やく下し

二劑にてすぐ下る半年以上のとまり又は血塊には特製を服用せば快く下る子宮病血之道を治し血液を增加す

定價一劑六拾五錢 二劑壹圓貳拾錢 特製貳圓 別製參圓

東京市小石川大塚辻町十七番地 天信堂藥局

●家庭のお慰み――高等遊戲品――本年は一層大流行に付特別大安賣（早く御注文を乞ふ）

高尚の娛樂

百人一首歌かるた

●壹萬組を限り 大景品 小倉百人一首 カルタ必勝法 壹冊添呈

上下貳百枚壹組箱入

一號一圓廿錢
二號九十錢
三號七十錢
四號五十錢
五號三十錢
送料各八錢 着金次第郵送す

大阪東區南久寶寺町 振替一〇三一一番 尚文館

女（めの三）

佐々木信綱君校註

百人一首講義 全一冊

十九版

洋装中判紙數三百頁
正價貳拾錢 郵稅四錢

幸堂得知翁 海賀變哲君序 中村青江君編 第五版

新案福引 全一冊

附 繪入地口百番 室内遊戯

洋装三六判美本紙數約百六十頁 正價拾八錢郵稅四錢

一本の紙撚、禍が出るか蛇が出るか、灰殼の令孃楊小木包へて顔を眞赤にし髯武者先生白粉下を取りて滋面を作る、福引の興此にあり、本書は奇想天外の珍趣妙案、一粒選りの福引題解五百餘を集め二十一種の類別を立て景品を配當せるもの、附錄には新作地口百番挿畫と相俟て腹の皮を捻らすべく「室内遊戯」亦家庭團欒の絕好侶伴なり

安藤謙吉君著

福引集 全一冊

第十二版

洋装全一冊小判百四十四頁
正價拾貳錢 郵稅貳錢

濱本義顯君著

婦女教育 明治姫鏡 全一冊

第十一版

洋装大判紙數百六十五枚
正價六十錢 郵稅八錢

定家卿撰

錦葉百人一首 全一冊

和装大判錦繪刷美本
正價貳圓 小包料拾五錢

振替貯金口座 東京二四〇番

東京 博文館 發行所

販賣用電話 本局二六二〇番

女(わの五)

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十冊＝毎月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之た日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の賢妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、眞なる家庭教師たる目的を以て、編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一冊金四拾五錢
郵稅一冊全八錢

- 第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道 水原[illegible]女史著
- 第六編 諸流生花指南 [illegible]君 [illegible]君共著 ◎
- 第八編 簡易治療法 藤井靜子女史著
- 第九編 禮式と作法 佐方鎭子女史著
- 第十編 惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史共著
- 第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衞生 牧野清子女史著
- 第十三編 教育お伽噺 木村小舟君著
- 第十五編 家屋と庭園 內山正如君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養 [illegible]君著
- 第十七編 女子作文法 遠藤よみ子女史 松崎ふく子女史共著
- 第十八編 子女の教養 棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
- 第廿編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君 松浦政泰君著
- 第廿二編 歌の手引 大和田建樹君著
- 第廿三編 刺繡術指南 磯村大次郎君著
- 第廿四編 摘み細工指南 山田興松君著
- 第廿五編 新式化粧法 藤波芙蓉君著
- 第廿六編 室內裝飾法 近藤正一君著
- 第廿七編 衣服の調整 石崎[illegible]君著

東京日本橋 **發行所** 販賣用電話 本局二六二〇

女（後付の六）

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 山村貞澄君・朝夷孤舟君共著

第十三編 **女德の養成** 前田長太君著

第十五編 **書道手引** 井田秀生君著

第十六編 **洋樂手引** 前田久八君著

第十九編 **兒童訓話 母の智識** 少年世界記者 木村小舟君著

第廿編 **洋食の調理** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著

第廿一編 **衛生と衣食住** 福田琴月君著

第廿二編 **東西名婦の面影** 高須梅溪君著

本書は若き新時代の女性に向つて健全なる思想と優雅なる感情とを吹き込まんために東西を通じて最も傑出せる貞女賢婦女傑等數十人を捉へて新しく平易に描寫したるものです書中に收められた婦人は何れも波瀾多く變化に富んだ生涯を送つたものゝみですから、事實そのものが活きた小説で之を寫した筆も亦繪のやうに美しくあります一度讀み始めると一氣に讀ませられて而かも忘れ難い深い感化を與へられます挿入した多くの話と金言とは又た有益多趣最も深い印象を與へるであります

第廿三編 **婚姻のかゞみ** 河崎醉雨君著

【上編】婚姻法＝◉結論◉婚姻の沿革◉日本の婚姻の沿革◉婚姻の定義◉婚姻の豫約◉婚姻の種類◉夫の選擇◉妻の選擇◉婚姻の成立◉國際婚姻◉婚姻の無効及取消◉婚姻の效力◉婚姻の消滅◉婚姻の屆出書式

【下編】婚姻禮式＝◉日本の婚姻禮式◉朝鮮の婚姻◉歐米の婚姻禮式……【附錄】日本各地の婚姻風俗

第廿四編 **交際と談話** 福田琴月君著

◉第一編 社交…三項◉第二編 社交の得失…四項◉第三編 談話其の一…二項◉第四編 談話其の二…三項◉第五編 談話其の三…六項◉第六編 談話其の四…四項◉第七編 談話其の五…六項◉第八編 談話其の六…三項◉第九編 社交と談話…五項◉第十編 交接の話しぶり…二項◉附錄 西洋婦人の日常禮式…十二項

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番


美顔水
美顔水
色黒くとも
お顔の生地あらくとも
歎き給ふな
美顔水在り
⊙色を白くし
⊙きめを細に
⊙つやを出し
⊙顔のあれ
⊙にきび
⊙そばかす
⊙吹出物等を未發に防ぐ
⊙又高等化粧用美顔水にて白粉は溶ば白粉は能く「のび」能く「のり」て美しきお化粧容易くでき上る事妙なり
本舗桃谷順天館大阪出張所

女(ぬの八)



日日の心の養ひ

女子高等師範教授　後閑菊野

▲神棚を拝すること

敬虔な家風を作りますには、何か目あてを拵へなければなりません。我國では昔から天照皇大神を祭るお神棚を設けてございますから、毎朝かならずこれを拝し、元日や祝日には家族一同で禮拝することを家の作法として定めて置きたいと存じます。尤も家々のお宗旨もありますが、それはそれとして日本人の家庭では、このお神棚を拝したいものです。一家に祝ひごとがあれば、お神酒、お燈明を上る風習は昔からございますが、今日は天長節、紀元節その他の祝ひ日に、皇室や國家に對する敬意も國旗だけでは物足りませんから、お神酒、みあかしを神棚に供へて禮拝したいと存じます。つゞいて家の祖先に對する作法として毎朝位牌に禮拝いたし、家長の出世その他の悦びごとがあれば先づ祖先に禮を述べると云ふのは美しいことでございませう。私は子供の中から免状を貰つて歸れば、必ず祖先の位牌に供へて拝すると云ふ風に仕こまれましたので、唯今以て禮拝は習慣になつて居ります。私はいつもお神棚や、祖先の位牌の前に頭をさげますと、實に心が清々しくなりまして、修德上の誓ひを立てるやうな刺戟も起るのでございます。

▲靈祭り

盂蘭盆に亡靈を祭るのは兎に角よいことと思ひます。亡靈なぞは無と云ふ人もありますが、理窟はともあれ捨て置いては濟まぬことです。恐れ多いことながら皇室におかせられても、春秋の皇靈祭に、歴代の天皇をお祭りになることを拜模いたさなければなりません。皇靈祭に諸官省や學校のお休みもこの意味でございますから、盂蘭盆の祭りをしない家では、この日を祖先の禮拜日と定め、この日に近い身内の靈祭りをするやうにいたしたいものです。

▲一家の禮儀

萬物の靈でありながら禽獸と區別のつかぬ恥しい爭ひごとをいたすのは、禮讓のない家に育つたものでございます。一家讓あれば一國讓に起るで、家々の男女が禮を大切にすれば日本の品位は自然高まること申すまでもございません。周の文王が齊伯の時、虞芮の民が田を爭ひ、訴へに來る途中、周の民が道を讓り合ふのを見て互に恥ぢて引歸したお話のやうに、一家の主婦が舅姑や良人に禮讓を厚くし、言葉づかひにも心を用ゐて、兒の手本となり、ひいて他を感化するやういたしたいものでございます。

孔子は仁、釋迦は慈悲、基督は愛隣を敎の土臺とされました。親切は人間の一番高い道德でございます。博愛及衆と仰せられた尊い勅語を、私共が片時も忘れてはなりませんが、これを奉ずるのは家庭が基でございます。子供が母の膝にもたれて受ける愛は、父母を愛する念となり。次で同胞、婢僕、隣人、知己にをしひろがるのですから、博愛の起りは母親の愛が土臺でございます。

▲家庭暦をつくること

主婦の用事を一々擧げ立てゝ見れば實に繁雜なものですから、學校の時間割のやうに豫定表を拵へて、二度手間を省きたいものです。一日の時間割をざつと定めますと、先づ朝飯の用意から內外の掃除、後片付、家長を送り出すなぞの用事が遲くも九時頃に了りませ

う。(家々の職業に依り多少の違ひはありませうが)そこで一寸休む時にその日の新聞を一通り目を通し、來客があつても返事にまごつかぬ用意をいたし、それから仕事にかゝります。日本の婦人は裁縫が主ですから十一時まですわり、十一時から晝飯の支度を爲て、晝食後老人のある家では新聞の記事でも種にして一しきり話すも良いでせう。それより又裁縫にかゝり、四時半頃から掃除や夕飯の支度、夕飯後は家族一同と談笑し、夜になつて落ついたらば日記や家計簿をつけること。そのあとは主婦の修養につかふ時間ですから、忘らず讀書して家事にくすぶらぬ用心をいたすべきです。學生時代のことを考へますと、一枚二枚の讀書はまだるくて格別役にも立たぬ心地がしますが、一ケ月かゝれば一冊位は讀めますから、何でも願にかけていたすに限ります。一日の割當が出來ましたら、月曜は押入の掃除、火曜は夜具の風入れ、水曜は受け日、木曜は訪問と云ふ風に、家々の都合によつて一週間の割當を定めて置くのです。唯日曜は書入れにせぬこと、一概には申されませんがこの日は普通主人の休息日ですから、散歩の伴も出來るやうに空日にして置きたいのです。空日を拵へるには他の六日間規律よくウンと働かなければなりません。尚一年間の行事も、衣服書物の蟲干の日、



衣更の日、中元歲暮の贈物する日、梅干、ラッキヨ、澤庵、菜の漬け日なぞまで豫定して置くのがよろしうございます。尙前に申すやうな先祖祭りの仕方、子供の就學、卒業の祝ひ方、家族誕生日の祝ひ方、春秋に催ほす行樂の仕方なぞもチャンと定めて一の表を拵へ、家庭曆を作りたいと思ひます。曆に依つて秩序よく運んでまゐりましたら、手落もなく二度手間も省けて、追々社會的の仕事にも手をのばすことが出來ませう。

▲笑ひの種は和協の基

上巳、端午の節句やお月見なぞの家例は忙しい今の世に、格別必要もないことゝ思ふ方もありませうが、雛祭や五月幟は子供の優美な思想を養ひますし、已にお團子を見て冷かす主人も冷かされる主婦も果は笑ひの種になつて家族賑やかに睦み合ふなかだちともなりませう。今日は誰の誕生日で赤の御飯を焚ましたと云へば、主人は妙な御馳走が出來たねと笑ひながらも單調が一寸破れて疲れを忘れると云ふこともあると思ひます。一家の和協は理窟ばかりでは旨くまゐりませんから、色々の時を利用して笑ひの種を工夫するのも、一の方便でございませう。

▲早起の勵行

良人の收入を考へて支出を制するのは主婦の大切な役目ですが、それには他人のすること、書物にあること何んでも良い趣向を參酌して工夫しなければなりません。特に新敎育を受たものが理化學應用を忘れては寶のもちぐされでございます。そして用事をはかどらせるにはどうしても早起が肝心で、いくら考へが旨くても、朝寢してはこれを實行する秩序が立ちません。春日局はいつも人の起きぬ間に身仕度をとゝのへたと申すことですが、若い奧樣方も大奮發でこの眞似をなさるが宜しうございます。

▲召使の多數と野蠻の風

召使は主婦がどうしてもかうしても手の廻らぬ時の

補助役で、この助役を少くして澤山の用事をはかどらせるのは主婦のお手柄であるはずですが、世間には召使の多いのをほこるお方が隨分あるやうです。これは未だ野蠻風がぬけないのでございませう。日本では未だ婢僕の給料が廉うございますが、追々職工になるものが殖えて參れば召使の相場が騰りますから成るたけ人手を省くことを心がけ、一方生産的の仕事する者をふやすべきでございます。又身分に依り下女を置く必要ある奥樣も頤で使つて退屈せずとも御自分の仕事はいくらもありませう。良人も下女に世話されるより妻君の方が行屆いて心地よいでせうし子供も母親の手にかゝるほど嬉しいものはありますまい。一人の下女に子守させるかお針をさせるかと云ふ場合には、事情のゆるす限り母親が子守する方がいゝと思ひます。

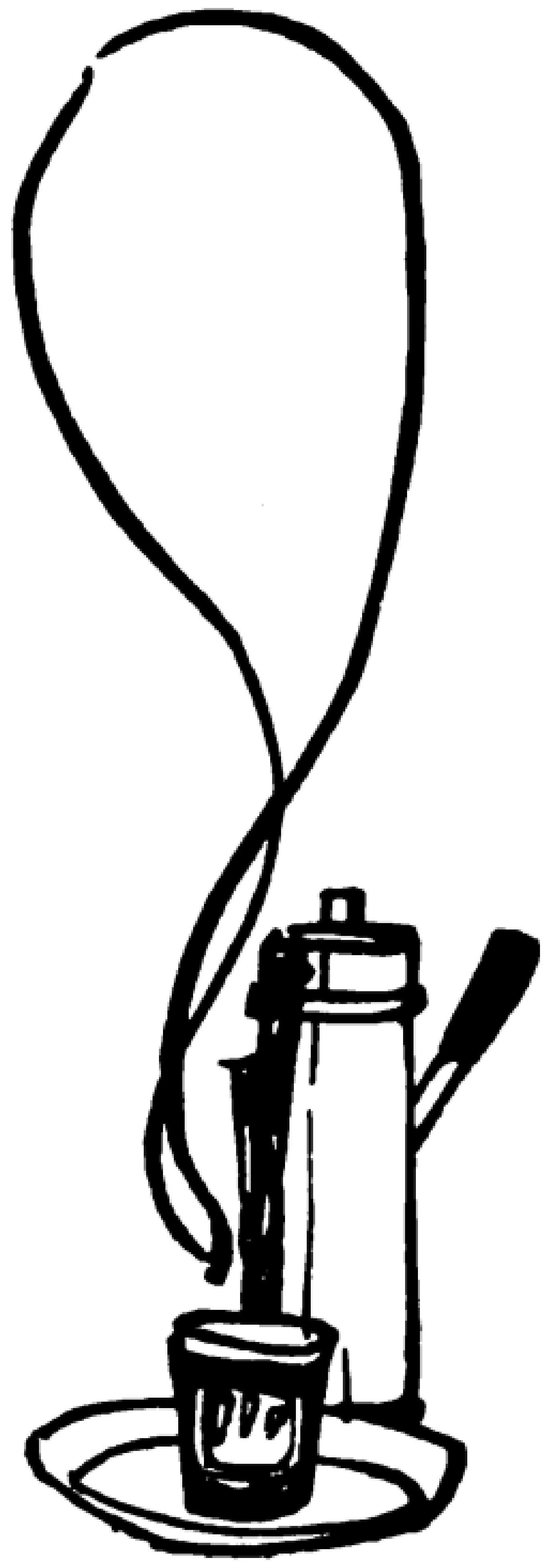


▲勤儉な婦人の力

勤儉な婦人は社會の事業に手を出さないでも、間接に國の生產力を助けて居ります。勤儉の婦人がこまかい切をはいで座蒲團を拵らへ。糸屑をためて織物の材料を作り、僅かな時間を惜んで手內職すると云ふやうな丹念から產み出したお金は銀行に貯へられて事業家の融通に用ゐられるのですから、間接に生產力を助けて居る次第でございます。勤儉な婦人の力は實に偉大なものではございませんか。

洋服の仕舞ひ方

洋服は出入れの都度ブラシで塵埃を拂ひ清め、仕舞ふにも成るべく和服のやうに疊み込まないで、洋服用の衣紋掛にかけて吊して置く方が宜しいのです。又夏着冬着の出入れの時は、一度職人の手にかけると、新しいものゝ樣になつて、始終綺麗な服を着ることが出來ます。襟の垢に汚れたのは揮發油で拭くのが一番ですが、たゞ拭ふだけでは利目がうすいから、天日に能く當てゝ揮發油を塗り、後ブラシで拂ふなり、手で揉むなりします。泥で汚れたのは、乾くまでそつと其のまゝで置き、乾き上つたところでブラシで擦するのですが、それで旨く行かなかつたら、水に浸した手拭で汚れを拭ひ取り、アイロンで其處を蒸し、柔かなブラシで毛並なりに均らせば綺麗になります。膝に小皺がよつたズボンを直すには能く折目を正して、寢る時夜具の下に伸して置くと、人體の溫度と重みで翌朝まで大抵直りますが、尚ほ十分を望むならば、之をなほす簡便な器械が出來て居ります。



異彩ある上古の婦人

物集梧水

薄曇りせる春の日、ほのかに霞につゝまれし櫻花を觀れば、毎時にその床しさに堪へられず。霽れたる秋の夜ごろ、微かに風に送られし音樂を聞けば、毎時にこの懷しさに打たる。斯かる時しも我れは思ほゆ、此世はこれ人間の世にあらずと。

殘闕したる、古史の間より、若しくば辛うじて殘りたる、古歌の間より、悠々千有餘載のいにしへの婦人を垣間見る時に、彼の、霞につゝまれたる櫻花を觀るよりも、彼の、風に送られたる音樂を聞くよりも、更に一入の韵致を感ず。斯かる時しも、我れは思ほゆ、此世は唯だ永き〱無形無聲の時にはあらずやと。

◎狹穗姫

御兄狹穗彦と我が脊の君垂仁天皇との間に板挾みになりて、終に身を火中に投じたまひし狹穗姫こそは、實に遺憾なく纎弱き女性の性質を告白したるものなれ

その未だ幼稚くおはしましゝ頃は、御兄と共に大和國狹穗の里に住みたまひぬれば、人皆な狹穗姫と稱へまつりき。御祖父は開化天皇にましませば、皇族の中にも、なほ已むごとなかりしなり。垂仁天皇御位に即かせたまひける後、間もなく后立ちありて、軈て皇子譽津別命を生み給ひぬれば、僅かに此一二年が間のみぞ、春日花の香に醉ひたまへるが如き幸福の御時なりし。

然るに倏忽にして、凩よりも、尙ほ辛き運命の手は矢庭に姫が御腕を握りぬ。

秋風颯々として吹き萎り、世をも人をも悲しかる秋の末つ方なり。御兄狹穗彦、僅かな従者を具して宮へ參りぬ。折から天皇の在したまはざりければ、一入御悦びまして迎へ奉り、懐しき御物語に日影短きをぞ恨みたまひし。

やゝありて狹穗彦は、乾と姫の面を見すゑ、

「相別れてより何時しか、早や四年になりぬ我が事も大概は思はずなりぬらむ。」

と云へば、姫はその意を得知りたまはで、

「いかで兄人のことをば忘れつべき。」

と答へ給へば、狹穗彦すゝみて、

「さらば汝は、兄人と夫と、孰れをか愛づる。」

と問ひしに、姫は唯だ若き婦人におはましけり、この言葉の中に如何なる事か含まむと、素より其は知りたまふ筈もなくて、

「兄人をこそ。」

と、何氣なく應へたまひぬ。狹穗彦、更に進みて、

「さらば我が言を聽きてね。汝が天皇に愛でらるゝは年齒わかく顔色美きが間なり。何時までか續かむ。愁れたき極ならずや。されど、我れ若し代りて天位に登りなば、永久に汝と共に此世を樂まむ。如何に。」

と云ひつゝ、豫ねて隱し持てる匕首を取出し、

「寢ねませる時を窺ひて、直だに刺しね。」

と言葉短く云ひてけり。姫は、聽くより身うち戰き、如何に答へむ、その術すらも知らざりけれど、狹穗彦が心の諫めがてなるを思ひて、兎にも角にも其匕首を受取りたまひぬ。あはれ「否」と得言はぬ婦人こそ、哀れにも可憐しき哉。

斯くて一年あまり過ぎぬ。惟ふに、狹穗彦よりは屢次催促られ、言ひ知らず御心を苦めたまひしなるべし翌年の初冬、天皇、來目の高宮に行幸ましまして、何心なく姫の御膝に寄りて、そのまゝに假寢したまひけり。

あはれ此機よ、唯だ此機こそ、豫ねて兄君が賴める時なれと、密かに彼の匕首を拔き放たむと思へりしが餘りの情無さに、不覺の涙そゞろに流れ出でけり。そ

の涙、眠りたまへる御顔の上へ濺れば、天皇驚かせて目覺めたまひぬ。

やがて宣はく、

『朕、甚とゝ奇しき夢を見けり。狹穗の邊より大雨俄かに降り來ぬと思へば、錦の小蛇、矢庭に朕が咽喉に巻かむとぞすなる。奇しきかな。』

姫は、その御言葉を聴くより平伏して、涙を流しつ



つ、

『其は妾がことと夢みたまひしならめ。』

と、豫ねて兄君狹穗彦より迫られぬることをば奏して

さて、

『狹穗彦が言に從ひなむには、君の御命をば失はせ奉り、君の御命をば安うし奉りなむには、狹穗彦が事をば奏さではと思ひて、獨り妾が心を苦めしこと、幾何

にか侍る。御夢に、狹穗の邊より雨降りぬと見そなはしゝは、妾が淚にて侍り、錦の小蛇が御咽喉に纏はむと見そなはしゝは、妾が隱し持てる匕首にて侍り。」と、隱す隈なく奏しあぐれば、天皇は莞爾として微笑ませられ、

「其は汝が惡しきにあらで、皆な狹穗彥が罪なり。」

と宣はせけり。

爰に俄かに八綱田と云へる勇將に命せて、兵士を率ゐて、急ぎ狹穗の里へ向はしめたまひぬ。狹穗彥は不意の驚きに、何の用意も無かりけるが、俄かに兵士を蒐りあつめ、稻を積みて稻城とし、其れに籠りて、只管に八綱田の軍を拒ぎにけり。

されば狹穗姬は、限りなき悲歎に掻暮れぬ。あはれ身は皇后たりとも、兄君を失ひ奉りての後は、爭で世に生存へむとて、譽津別命を掻抱きて、狹穗彥が稻城の內へ趨りたまひけり。

天皇は甚とゞ驚かせ給ひて、急ぎ狹穗彥に勅を下し姬と皇子とを出さずば、八綱田に命せて、直だに稻城へ火を放たむと宣ひけり。

姬は、如何にもして兄君を救ひまゐらせなむと、淚を流して天皇に哀訴せしことの抑も幾度なりしぞ。月は渝り、使者は數多度往きては返り、返りては往けども、天皇の御憤怒、些かだに釋くべくもあらず。八綱田に命せて、速かに稻城に火をかけよと宣ひけり。

姬は已むなく皇子を抱きて稻城を出で、八綱田の兵士を麾いて、其れに皇子を渡したまひて、

「妾が逃げしは、妾と皇子とをもて、兄君の罪をば贖ひなむと思ひはべりしにこそ。されど天皇の御憤怒いみじければ、今は詮術なけむ。妾は死ぬとも、必ず天皇の御厚情をば得忘れ候はじ、妾が後には、丹波道主王の女をば御納れ候はむやう申し傳へ給へ。甚と心のほど直ぐよかにて在しはべれば。」

と云ひ終りて、稻城の內へ趨り入りたまひぬ。

折から情に疎き八綱田の兵士ども、四方より稻城に火をかくれば、紅蓮、大紅蓮の焰、快く朔風に煽られて燃えあがりてけり。

◎弟橘媛

相州浦賀の町を距つること僅かに一里許りの所に、弟橘媛の碑あり。その面に識して云ふ

さねさし相模の小野に燃ゆる火の
火中に立ちて問ひし君はも

夕暮れ迫る頃ほひ、この碑の畔に彷徨ひつゝ遙かに古へのことを思へば、ひそかに弟橘媛の御聲を聞くがやうなる心地ぞすなる。



媛が日本武尊を愛で給ひし其の厚き御心のほどは、終に安倍女郎がうたへる『我がせこは物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なけなくに』の歌を、其のまゝ行はせたまひしなり。抑や日本武尊とは如何なる御方ぞ、十六歳の御時に婦人の扮装して猛き川上梟師をば唯だ一突に刺したまひしと云へば、其の雄々しきと共に、甚とゞ美しかりし御方なりしなるべし。御父景行

天皇よりは、深くも頼みとせられ給ひて、東西に蕃夷を征すること十數年、如何に嶮しき路をも避けたまはず、如何に强き敵をも怕れたまはず、唯だ征き〳〵て皇威の發揚にのみ努めたまふかと思へば、忽ち感興のおこるに從ひて、或は火焚の翁などと歌を詠ぜさせたまふ。其の風雅なること、實に模範的男子にておはしましゝなるべし。されば弟橘媛が、尊の御爲めに身を龍神の犧牲に供へしも、唯だ偏へに尊を愛で給ひしが故なるべし。彼の貞婦たらむとして貞操を盡すが如き水臭きものにはあらで、唯だ尊をば愛づるのあまり、終に火にも水にも我れなけなくにぞ、其のまゝに行ひ給ひしなり。

古史の記せる所に依れば、日本武尊の、燒津野にて危く不逞の輩に焚かれむとしたまひしを、辛う彼等を平げて、其れより上總國へ渡らむとしたまひしに、走水の渡にて、暴風俄かに起り、激浪天に逆捲きて、御船進りに動搖ひ、如何にしても得進まざりければ、船夫ども、此は必ず龍神の祟ならむと申しゝに弟橘媛進みて、さらば妾が身を龍神に捧げて、尊の御命に代り奉りなむと、八重敷く波の上に、菅疊、八重皮疊、八重絁疊など敷きて、其上に身を躍らせたまひぬ。何れは海底の藻屑と消えたまはむに、此等の敷物を敷かせられて、その上に座し給へること、甚とゞ悲しく哀れにおぼゆれ、尊の御船は動搖ひながら離れゆき、菅疊、八重皮疊、八重絁疊は徐ろに沈みゆかむとする其の束の間に、姫が美しき唇頭より、美しき御聲にて、尊を慕ひ奉る歌のいとも、緩やかに歌はれ出でけり。

さねさしとは相模の枕詞にて、一片の歌意、彼の相模の野にて燒かれなむとせし其折にすら、妾をいたはり給ひつる尊よと云ふに過ぎざれど、戀々たる熱情は深く最後の一句に籠りぬ。

あはれ其折の尊が御心の中ぞ如何ばかりなりけむ。そゞろに暗涙に咽び給ひしこと、推して知るべきなりされば陸奥を平ぎ終りて、碓氷峠に登りましゝ時に、遙かに走水の方を望ませられ、吾嬬はやと長歎息したまひしのみならず。尊が伊吹山に薨じ給ひし最後の時

までも、必ず〳〵御夢に入りませしなるべし。

◎額田女王

啻に其姿のうるはしきのみかは、その情緒の濃かなる、その詞藻の艶麗なる誠や婦人の美を餘蘊なく發揮し盡して、却つて苦しき生涯を送りたまへる額田女王こそ、言ふばかりなく哀れ深けれ。

額田大王の御父をば鏡王と申す。攝津國覺美の里に



住みたまひし故なるにや。この鏡王に、花の如く美しき兩人の女王おはしましき。姉をば鏡女王と申し、妹は即ちこの額田女王なり。

その生れたまひし年月は、素よりさだかならざれど彼の蘇我入鹿が大極殿にて誅に伏せし其の些か以前なりとぞ思はるゝ。幼少かりしほどのことなど、文にも歌にも識してあらざれば、如何なる状なりしか、更に窺ふに由なけれど鏡王の愛女におはしませば、姉君と共に、蝶よ花よと

慈愛み育てられて、春は野邊に若菜摘みつ、秋は山邊に草花手折りつ、其と無邪氣き御遊びに暮しけむは、大概の想像、必ず違はぬなるべし。

斯く罪なき御遊びに歳月を消ぐしたまひぬる間に、世中の狀態、いと甚う變りぬ。曩には權威高かりし蘇我氏も、忽ち大木の倒るゝ如く亡れて、中大兄皇子、中臣鎌足、倉山田石川麿など、廟堂に立ちて政事を治めぬれば、やがて豐崎の遷都となり、やがて大化の新政となり。唐土の風俗連りに持囃されてけり。されば稍稍都に遠き覺美の里にも、新しき流行の、宛ら水の如く流れ來て、若き人々の心をそゝのかせしこと、想ふに餘りあり。

斯かりし間に、額田女王は漸う婦人にならせ給ひぬれば、幼少かりし頃の御姿にも一入まして、髮をあげ裳を曳き、艶に麗はしうならせたまひぬ。中大兄皇子(後に天智天皇)の御弟大海人皇子(後に天武天皇)が深くも思召されて、妹脊の契を結ばせたまひしも、抑や此頃のこととなりけり。

初戀は人生の花なりとかや。況て尊き皇子の、御姿さへ、御心ばへさへ、最とゞ申す所もなくおはしませば、女王の御胸には、宛ら燃ゆらむやうなる戀ひしさを覺えて、現世に二なき脊の君として仕へまつりき。やがて、程なく美しき女兒を擧げさせたまひぬ。これぞ後に大友皇子(弘文天皇)の后にならせ給ひぬる十市皇女にておはしましき。

斯くて額田女王は、その一生を唯だに大海人皇子にのみ捧げ給ひなば、何の風も起らず、何の波も立たず甚とも目出度くおはしましけむに、あはれ好事魔多し中大兄皇子も、窃かに女王の艶麗かなるに思召されて都へ召出し、何時とはなく鴛鴦の御かたらひ遊ばされぬ。

此をば聞ませる大海人皇子の御心は如何なりしぞ。我が思へる婦の、御兄君に倚りまつりしなれば、縦ひ思慮深くましませばとて、胸を焦しぬる口惜しさ、恨めしさ、それと仄かに色に出で給ひしこともありけむかし。中大兄皇子も、何時しか其れと知りたまひぬ

れば、或時、思ひの外にあまりて、

香山は、畝火雄々しと、耳梨と、相爭ひき、神代より、斯くなるらし、古へも、しかなれこそ、空蝉も、嬬を爭ふらしき。

とぞ歌はせられける。實にや神代の昔すらも、畝火山耳梨山の男神の、香山の女神を爭ひし例ありしものを況てや人間の世に降りて、嬬を爭ふは、詮なきことぞと宣ひし意味なり。

軈て齊明天皇崩御の後に、中大兄皇子の、御位に即かせ給ひぬれば、才色双美の額田女王は、惟ふに、榮華の絶頂に登らせ給ひしなるべし、さりながら女王が天皇を慕ひ奉るは、強ち光榮のみの爲めにはあらで、その御情に絆されて、心底より戀しく思し給へりしなるべし。秋風颯々と吹ける時、ひそかに天皇を思ひたてまつりて、

君待つと我が戀ひをれば我宿の
簾うごかし秋の風吹く

と歌ひたまへるを見ても、如何に美しき戀情の、そゞろに湧き出でしそば知るに足るなり。

嗚呼されど、一度胸に刻みつけられし初戀の夢は、永久に消ゆることなく、身は縱ひ天皇に從ひ奉りぬとは云へど、尙ほ大海人皇子を慕ひませる御情は、寸時も罷む時なかりしなるべし。一歳、蒲生野に御藥草狩ありし時に、大海人皇子も、額田女王も、その行幸に從ひましき。其折なり。女王は遙く天皇の御側を離れて、密かに大海人皇子へ歌ひて曰く、

茜刺す紫野逝き標野逝き
野守は見ずや君が袖ふる

大海人皇子も直ちに返歌させたまひて曰く、

紫草の匂へる妹を憎くあらば
人嬬ゆゑに我が戀ひめやも

あはれ苦しき戀なる哉、我が思へる人は、今や我が兄君の嬬、加之も一度萬乘の大君の妃なり。たまさかの逢ふ瀬に、初めて己が情を歌ひ出でし大海人皇子は誠に同情するに餘りあるなり。然るに、世の古學者、道學者の輩は、茜刺すの歌、紫草のゝ歌を指して色々

しき歌よ、背徳の歌よと譏るなれども、其は婦人の心裡を解せざる、戀愛の美を知らざる者の言葉なり。苦しきは戀の道なる哉、千載の下、我れは深く〳〵其の切なる御情のほどを察し奉るなり。

斯くて額田女王は、天皇崩御の時まで、其の御側に奉仕しけるが、其後は、再び大海人皇子の許へゆきたまひぬとかや。

寶珠の意匠



あはれ婦人は、終に弱きものなり。才色双美なれば愈〻怪しき運命の手に捉はれて、苦しき思ひに其一生を犧牲にすること、啻に額田女王のみならめやは。

附記。彼の壬申亂は、遠く中大兄、大海人御兄弟の御不和より起りしなりとは、史家の唱道なり。然らば額田女王は其種子なりしならむ。

感情と文化

文學士　上野陽一

△精神は何時も張りつめて居る

世が文明に赴くと、人間の精神上に何んな影響があるかといふに、第一は人の智識が進歩して是迄知らなかつた事を知るやうになり、從つて精神が著しく張りつめて來ます。今迄は人は父母祖父母位の事しか知らなかつたのに、文明になると、人は何千年昔の事を知ります。又地質學などの研究によつては、何萬年何億年前の事をも知ります。或は人間の地上に出來ない前は何んなものであつたかといふ事も研究によつて知ります。また過去の事のみならず、氣象學などによつて明日明後日の天氣の事までも豫測します。或は天文學の發達によつて、何十年後の何時何分に日蝕、或は月蝕があるといふ事を知ります。こんな風で昔の人の少しも知らなかつた事まで知るやうになります。或は何時に天の何の方面にどんな星が出るとか、また地球の今我々の居る反對の方面に今朝あつた事をもう知るやうになるといふやうなわけで、我々の精神は常に張りつめて居ります。これは文明の一特色であります。

△人に注意する氣がない

第二は、有意注意の減退といふ事であります。つまり自分の意を働かして物事に努力すべきであるのに、世が文明に進むと、人の注意が有意的に働らく力が薄くなるのです。新聞雜誌などの努力してゐるのは其の證例と見てよろしいでせう。多數の人は進んで讀まうとはしないからそれに對して讀ませよう〳〵と努力して居ります。これはつまり世間の人の新聞等に對する注意が減退してゐる爲め、即ち注意が有意的に働かな

くなつて居る爲めであります。婦人雜誌などにはことに之れが著しく見えるやうで、多くの人は、題目にひかされて止むを得ず讀んで居ります。これが即ち有意注意の減退であります。此の傾向は米國などは殊に著しいやうで、書物の如きは、是非之を讀めといふ風に書いたものでなければ、普通の眞面目に書いたものでは讀み手がありません。其の爲め、彼地では文明は進歩したが、最近二十年間に書籍店は却つて三分の一に減つたといふ事であります。讀むに骨の折れるやうなものは、容易に人は讀まないのです。更に昔と今と教育の事を比べて見ると、昔は何でも子女の頭を苦しめて、成るべく頭を鍊へるといふやり方であつたが、今は教授法などが發達して子供に何うかして面白味を感ぜさせて教へようといふ態度であるから、こゝにも遺憾なく有意注意の減退を示して居ります。

都にて珍らしとみる初雪はよしのゝ山に降りやしぬ覽（景明）



△人に落着きがない

自分で進んで或物に注意しない結果人は外部の刺戟のまゝになります。從つて人は一般に落着がありません。そして心の無意識な運動を盛んにやります。一寸電車に乘つても、一緒に乘つてゐる客を見て、あゝ彼

の人はゴムをかんで居るとか、或は彼の人はまだ切符を買はないなど〻、無用な事に注意をします。また運動椅子なるのもは、獨りでにぐら〳〵と動くやうに出來てゐるもので、腰掛けて居る者は少しも努力が要りません。かう云ふ例はいろ〳〵あるが、皆な有意注意の減退の現象であります。昔の賢人は、非常に無意的注意を嫌つて、我々を教育する時には、成るべく有意的注意を奬勵したもので、靜座なども其の一方法であります。即ちこれは身體精神の無用な運動をしないで或る一つの有用な事に注意する注意の練習であります。ところが現代の人は皆な盛んに無用な運動をして居ります。斷えず刺戟に動かされて落着きがなく、皆なソワソワした生活をしてゐます。これも文明の一特色であります。

△せゝこましい生活

第四は反應時間の減退であります。人は或る刺戟があると其れに反應するが、それが文明が進むと其の反應時間が短くなります。田舍の人はのんきだから、東京人に比べると、一體に反應時間が長いのです。膝栗毛には彌次郎兵衛と喜多八が、東海道を旅行して京都にはいつて、彼方此方ぶら〳〵歩いてゐると、喧嘩があつたので、見て居たがなか〳〵始まらない、そしていろ〳〵問答をしてゐる、「お前は何者だ」、「住居は何處だ」、「ウムあそこならば一つ傳言がある」、といつたやうな交渉をして、それぢや喧嘩をしようといふので、着物をぬいで、漸く始めたといふ事を面白く書いて、上方の者は氣が長いと評してゐるが、これは其の一例です。また歩み方でも違つて居ります。田舍の人が東京人の散歩してゐるのを見ると、急用で驅けて行くやうだが、横濱人が東京人の散歩を見ると、ゆる〳〵として如何にも散歩らしくてよいと言ひます。つまり東京人と横濱人とを比べると、横濱人はまた一層反應時間が短かいのです。これは文明が進むと、同じ時間に少しでも餘計に仕事をしなければならぬといふ必要から起つた事ですが、其の爲めに文明人であればある

ほど、非常に氣短かで、せゝこましくて、生活に餘裕がありません。

△表情の發達は精神の疲勞

第五は神經系統の疲勞であります。先にも述べたやうに、我々の精神は始終張りつめて居るから、神經系統は少なからず疲れます。これは田舍の人と都會の人との表情を比べて見るとよく分ります東京人の表情はせゝこましいが田舍の人はのんびりして居ります。また日本人と亞米利加人とをくらべると、亞米利加人の表情はずつと發達して居て而かも顏に皺がよつて居ります。つまり疲れてゐるのです。英吉利人が亞米利加人を見ると、亞米利加人の顏は瓶詰の電氣のやうで、何時破裂するか分らぬやうだと云ひます。その



橋の今に初めぬ寒さかな　（葛三）

英吉利人の顏は、のんびりとして勢力が滿ちて居ります。此の神經系統の疲勞に就て伯林で作つた統計があるが、それは文明が進むにつれて精神病患者が增えることを示したもので、千八百七十一年から三十年間に、人口の增え方と精神病患者の增え方とを比べて見ると、精神病患者の方が七割九分の增加を示して居ります。これは文明の精神生活に及ぼす影響の最も暗黑なる方面です。

△精神を刺戟する例

かゝる弊害が何うして起るかといふに、第一は我々の精神に刺戟が多くてゆとりが無いからです。刺戟には色々あるが、其の一つは物質的の刺戟で、往來を歩くと電車の往復が頻繁で少しもうつかりして居られないし、市中を歩いてゐると

自働車に驚かされる、或は午砲、馬車、自轉車など皆なその例です。それに逢ふ度に筋肉が緊張して、暫くもぼかんとしては居られず、それが一々精神生活に影響します。其の例を言つて見ると、椅子に腰をかけるときに、全體をぐつたり掛けてゐると、寢てゐると同じことで、筋肉も緊張せず、心も穩やかであるが、中腰にして身體を支へてゐると、筋肉のみならず精神まで張りつめて非常に疲れます。或はかういふ實驗をして見ても分ります。人間は普通一分間に呼吸を十六回するが、もし之を二十回にすると、精神まで興奮してひどく疲勞を感じます。即ち筋肉を緊張せしめるやうな生活は心まで緊張して疲勞せしめるといふことが分ります。精神を刺戟する尙ほ一つのものは精神的の刺戟です。これは通信器械の發達などが最も多く關係があつて、諸方面から通信がはいり、其の發表の仕方が新聞紙で二號活字を使ふといふ風に大袈裟だから、其の爲に非常に精神を刺戟されます。昔は耳にする事は村の權兵衛が田を賣つたとか、お花どんが嫁に行つたとか位のものであつたらうが、今日は伊太利と土耳古が何うしたとか、淸國に內亂が勃發したとかと、昔の人の夢想だもしなかつた遠方の事が、忽ち內に知ることが出來ます。其の爲めにも精神が刺戟せられ、疲勞を感じ、精神病患者が增えるといふやうな現象も出來ます。或は大會社の重役や相場師などが、相場の下落や金融の變化の爲めに精神を刺戟されて、遂に發狂するといふ例も度々ある事であるが、普通人もそれと同じやうな意味でいろ〳〵の刺戟を受けて、精神を疲らせます。

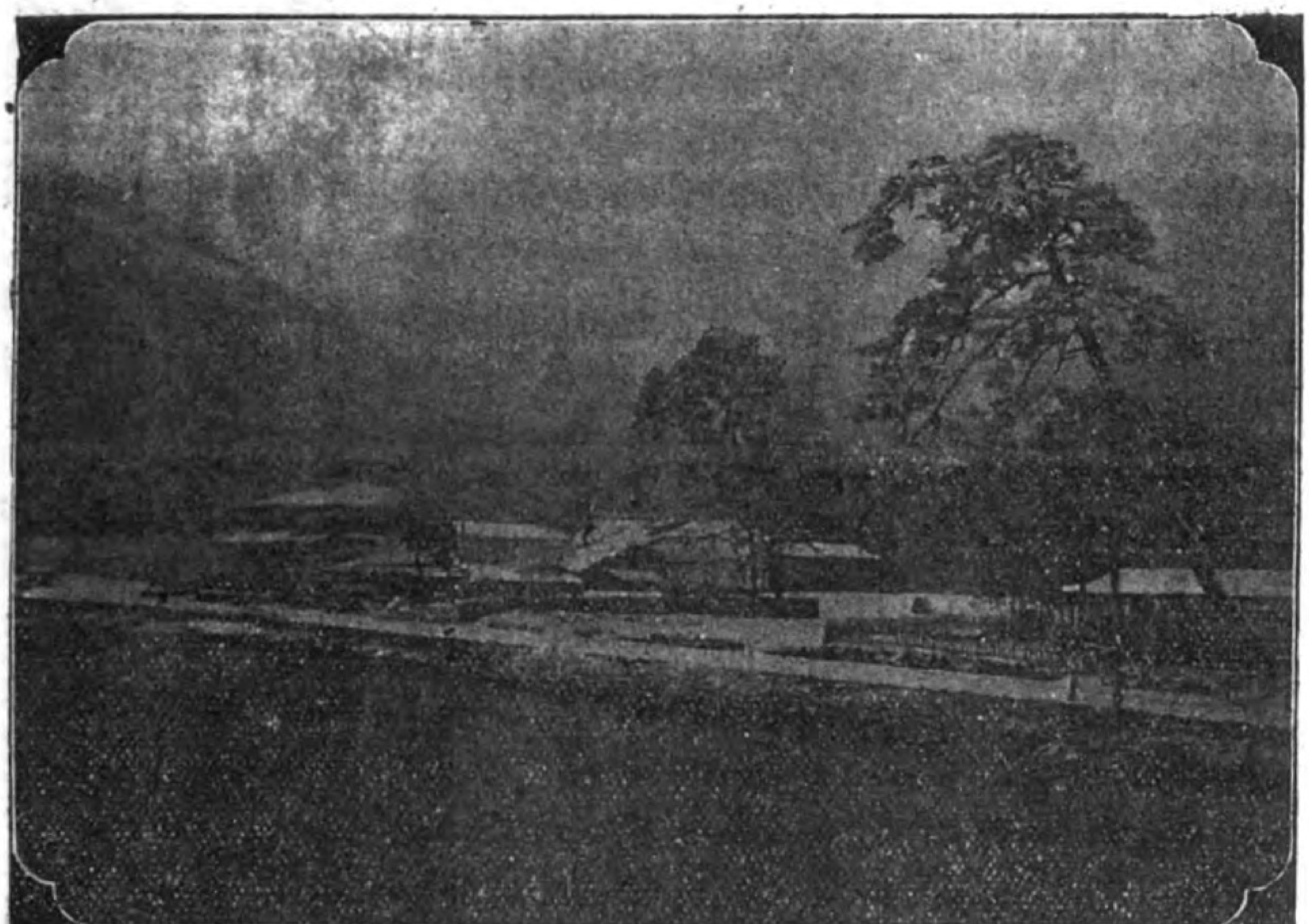
△仕事の單調なる弊害

精神を疲勞せしむる第二の原因は分業の影響です。經濟が發達すると分業が盛んになるが、其の爲めに一人の者のする仕事は極く單調になつて來ました。昔は先生と謂はれるやうな人は、一人で學問全體をしたものですが、今の人は皆な專門です。また勞働者にしても、ピンを作るとしても、之を打ち延ばす者、光澤を

出す者、數をかぞへる者といふやうに、する事が極めて單調です。それから器械の發明も文明生活の特長で、其の爲めに大抵の仕事は器械がして筋肉を使ふことが極く僅かになりました。即ち人は腦髓ばかり使つて、筋肉は殆んど休ませて居ます。其の腦髓の使ひ方も、或る一方面ばかり働かせて居る生活です。此の生活の單調といふ事は、極く不衞生なことで、此等はすべて分業の弊害であります。

△責任が重もすぎる

精神を疲勞せしむる第三の原因は、責任の過重といふ事です。分業が發達すると、人の責任が重くなります。文明人は社會團體の一部分を爲してゐるから、其の生活は自分獨りの生活ではありません。若し或る一人の者に缺陷があると社會といふ身體全體に影響を及ぼします。即ち文明が進むと、人々の責任はますます重くなります。電車の運轉手は極く地位の低い者ですが一寸不注意であると忽ち人を挽き殺すといふやうに、責任は極く重いものです。鐵道等の事務員に衰弱した者の多いのは此の爲めです。ひどく身體を振られるからだといふ人



かきくらし降大空の近ければ
山には雪ぞ先つもりける
（景樹）

もあるが、重もなる原因は責任の重も過ぎるのにあるのです。

△生活難の壓迫

文明の特色の第七は生活難の壓迫です。未開人は、木實は到る處にあつて食ふ事には不足せず、働らく事は極く僅かで、たゞ猛獸を防ぐことさへして居ればいゝが、文明人は食物が足りなくて、非常に生活に苦しみます。四六時中殆んど働きづくめで、僅かに寢る間ぐらゐしか休まれません。かくの如く飯を食ふ爲めに働らく時間ばかり多いから精神生活を 著しく害します。亞米利加のネグロ人は、奴隷の生活をしてゐる中は、

美しく交はる中や冬つばき　（鬼貫）



勞働する丈で生活に心配はなかつたが、奴隷開放といふ事になつてからは、自由が得られたと同時に、生活難がやつて來た。自ら働かねばならぬやうになりました。其の爲めに、土人の間には從來無かつた精神病者が忽ち澤山出來るやうになつたといふ事であります。

以上述べ來つた文明の弊害を。如何にして避くべきかといふ事は、また機を得て述べませう。

（通俗心理講話會講演の大要）

お正月の飾方と儀式

日本女子大學教授　笹木幸子



日本の專有物の樣なお正月、お正月といふた許りで若くなる樣な氣持ちがいたします、都も鄙も業を休んで此日を祝ひますのは、此年を最もよく送り度いといふうるはしい人の心で御座いませうか。

○

宮中では四方拜、拜賀式などいかめしい儀式が御座います、學校では一堂に會して拜賀式を行ひます、親しい人は勿論のこと疎い人も互に年賀の訪問をしたり贈物をしたり、遠い處は年賀狀を出して祝賀の意を表します、年中行事のうちで一番人に新しさを與へるものはお正月で御座います。

○

家々の門には松飾りをいたします、之を門松と申します、起原はしかとわかりませんが平安朝の頃から普く民間に行はれる樣になつたといふことで御座います國々の風習や家風で仕方がちがひますが、唯今行はれて居りますのは入口の兩側に杉の丸太を立て、それに長い笹を五本立てゝしばりつけ下に松をつけ、橫に笹を二本渡し(笹の先が兩方へ出る樣に組み合せ)注連繩をはり中央に橙をつけ、それに海老をしばりつけ其下に福袋を下げます、福袋といふのは奉書二枚を四角に切り其中へかや、かちぐり、みかん、田作り、かづのこなどを入れて四隅を集め水引を通して前の方に雌結(輪のある結方)に結びましたもので御座います橙の上には裏白とゆづり葉をつけ、其前に細い炭を二本と串柿一本、根松穗俵など入れて、紙にてくるくるまきにして之も水引でしばつたものをつけます、之が一番丁寧にしたので、之を略しまして今は入口に松

ばかり立てる樣になりましたが正月の風は薄う御座います。

○

座敷の飾としては床の間に掛物をかけます二幅對でも三幅對でも、お正月に相當したものがよう御座います、床には本式にいたしますと喰積をおきます、之を三寶に半紙四枚を四方に垂して中に一枚しき四隅に裏白(白き方を下にして)をおき、其上にゆづり葉を一枚づゝおき、臺一面に洗米を入るだけ山に入れます、其中央に橙をのせ根松を水引でしばつて橙にさし、橙の前に穂俵を長く下げ、其上に海老を橙にたてかける樣におきます、其反對の側に昆布とのしを長さ二三寸幅五六分の短冊に切り五枚かさねて端を糸にてとめ、扇の樣に開き昆布を右に、のしを左の方の米にさします、其前に太箸をおき米の上に紅白の餅をあられに切つておき處々に勝栗、榧、數の子、柿、田作り、みかん、などを好加減におきます。

其兩側には瓶子をおき又其兩側に銚子をおくので御座います。

○

違棚には下に鏡餅をおき、其側に重詰や屠蘇を盆に上せておきます、上の棚には硯箱、卷物、歌集など隨意の品で飾ります、鏡餅の飾り方は三寶に半紙を四枚に垂れ、四隅に裏白、ゆづり葉をおき、鏡餅を其上にのせ菱餅一かさねを上にのせて、前の方にて昆布を二本まいて紙につゝみ、水引で雌結びに結びおきます、丁寧にすれば喰積と同じ樣に飾るので御座いますが、喰積のあるときは前に申した位に略してもかまひません。

○

近來は床の間に鏡餅を飾る樣で御座いますが、之は喰積を略したもので御座います、此時の飾方は喰積と同樣にした方がよう御座います。

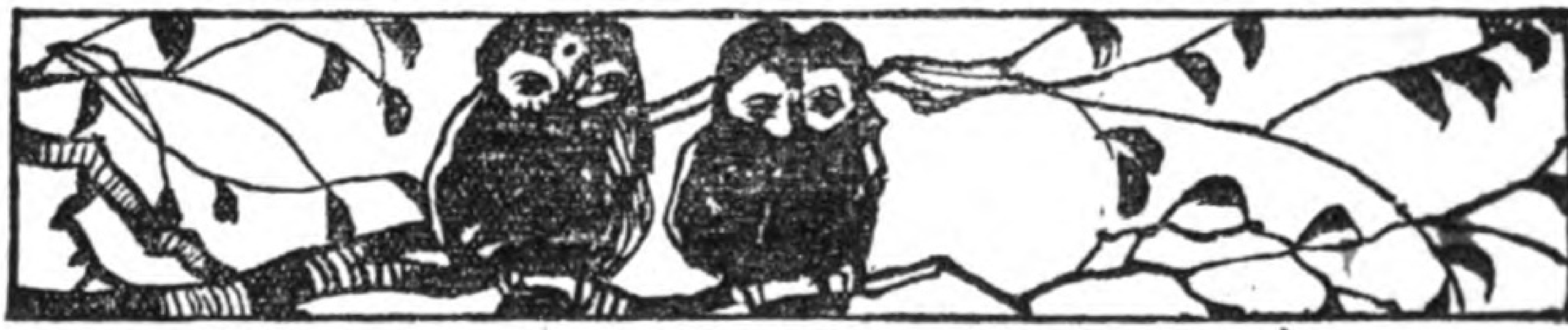
○

元日の朝にははやく起きまして身なりを整へ、長者から順に席につき一同禮をいたしまして、後一同から

主人に向つて祝意を述べます、それから喰積をおろして、各自の前にもつて參ります、そのときに各自其中のあられを取つて食べます、一巡すみましたら床の間に納めて、鏡餅を一同の前に持ち出し、一禮して元の位置にをさめ、次に福茶を出します、之は小梅にお茶をついだもので御座います、お茶は若水で入れます、次に屠蘇を頂きます、之がすみましてから雜煮を祝ふので御座います此式を嚴肅にいたしますと子供などには非常によい敎訓になります、晝を節供と申しまして御馳走を頂きます、本式にすれば二汁五菜などで出します、親しい年始の客には必ず屠蘇を出して其人の健康を祝します、其ときの取肴として暮の內からいろいろ重詰などを作つておくので御座います、それは其家風によつて適當のものを作つて差支は御座いません、重に用ゐられて居るものは、數の子、ごまめ、黑まめ鱈、小松菜、家鴨、鹽鮭、昆布、するめ、かまぼこ、勝栗、午蒡、大根などで御座います。

凍傷の豫防法

凍傷を豫防するには、外出の際はなるべく手袋を用ゐ、手足を濡らした場合は必ず乾いた手拭で能く濕氣を拭ひ去り、雜巾水のやうな不潔な水を使つた後は、淸水で好く洗ひ、濕氣を去つておかなければいけません。そして手がほんのりと溫か味を感じて來る迄、揉むか摩擦し、尙ほワゼリン又はクリームを少しづゝ塗布してゐれば、餘程の荒性の人でも、皸や胼胝、又凍傷等に苦しむ事はありませぬ、それから濡れた儘の手を火に翳す事は、決して爲てはなりません。見てゐる間にピリ／＼皮膚が裂けて來ます。若しかういふ症に罹つた時は、就眠の際微溫湯に硼酸を溶かし、これで好く局部を洗ひ、クリーム又はワゼリン等を塗布すれば、大抵は翌朝になれば治つてゐます。凍傷は特に皮膚を揉むことを怠らぬやうにして、冷水又は氷片で局部を摩擦れば効がありますが、又酒精に樟腦を混じたもの、生姜のおろしたもの、辛子等を塗布すれば、滅多に酷くなるやうな事はありません。



巷の噂

△簾越の對面

かつきりと晴れ渡つた空の、高い梢に百舌は鋭く帛を裂くやうに叫ぶ。小石川原町の小村侯爵邸は、物音もせぬ程の靜かさである。

侯爵の貧乏時代から、有らゆる辛苦艱難と戰ひ、浮世の幾波瀾を凌がれた勝氣の夫人も、近年は大く健康を害はれて、靜かに心身を養つて居られる。

女中は日に三度の膳部を持ち運ぶにもよく心を配り、靜かに奥樣のお居間に置く。奥樣の召上るまで、構はずに置く。奥樣がちよつとお小用に立たれた後に、そつと膳部を下げると云つた風である。時々は訪問の客もあるが、奥樣は總て簾越に對面される。お氣に入りの方なれば寂しいからと云つて、緩々と打寛いでお話もなされるが、大方は時候の挨拶位に過ぎぬ。

殊に奥樣の大のお氣に入りで、侯爵邸に二十五六年も出入してゐるのは魚竹の主人である。この主人は勘定高い小商人に珍しい、一風變つた男で、小村さんが安藤坂下の貧しい住家に薄暗い行燈一つで居られた時代からの知己で、小村一家の露命を繋ぐ辨當を供給して居て、賣掛金の催促もせず、只管貧苦の奥樣に同情の涙を濺いで居た。云はゞ小村さんの恩人でした。で、奥樣も此の魚竹とだけは何事も隔意なくお話し遊ばすさうだ。

△舶來店の評判娘

勸銀總裁から一躍、大藏大臣になられ





た山本達雄さんの夫人は、頗るの賢婦人であるが、今を去ること三十年、まだ肩あげのとれない頃長崎に居られたさうな。親父樣は明治初年の洋學家『英和辭書』で有名な柴田昌吉と云ふ方、其の頃は長崎で松菊屋と云ふ、木戸孝允の雅號のやうな屋號で西洋小間物を開店して居られたその店の評判娘といつては何だか俗に聞こえるが決してさうでない。綠の髮を束髮にしたハイカラ風で、基督教主義の女學校に通つて居られた才媛であつた。

△部理代人の氣轉

福島縣知事西久保弘道さんの夫人は、その昔相愛の西久保さんに學資を補給してゐたほどのしたゝかものだが一たびは此の夫人のために帝大を退學された事もあるが、再び此の夫人のお蔭で帝大に學び、前後十一年程掛かつて、法科の門を出られた。さうして、內務屬になられたが、放縱な生活の傷が容易に癒えないので、借財のために動きがとれなかつた。或日、西久保さんは、何かの事で裁判所に召喚されたが、出廷する事が出來ぬ。夫人が代人となつて裁判官の前に出て、さして臆せる氣色もなく、頗る要領を得た答辯をされた。夫れから、西久保さんの友人間では、夫人を綽號して『部理代人』と呼んで居たさうだ。

明治二十九年の春寒のころ、いよ〳〵愛知縣參事官となつて、名古屋に赴任される事となつた。貧世帶の悲しさには、一著の外套すら持つて居られず、地色の怪しくなつたフロックコートで乘り込まれた。參事官の御赴任と云ふので、縣の役人警部などが擧つて停車場に迎へた。





屬官の誰彼は逸早く參事官に外套を召させやうと、隅々まで搜したが見當らない。どうしても見えない〳〵と云つて大騷ぎであつたのを、夫人はニコ〳〵顏で出迎への人々に向ひ『宅は斯樣に肥つてますので、平常外套は用ゐませんから。』と、澄したもの、良人の風丰は此の一氣轉で一層活躍したさうだ。

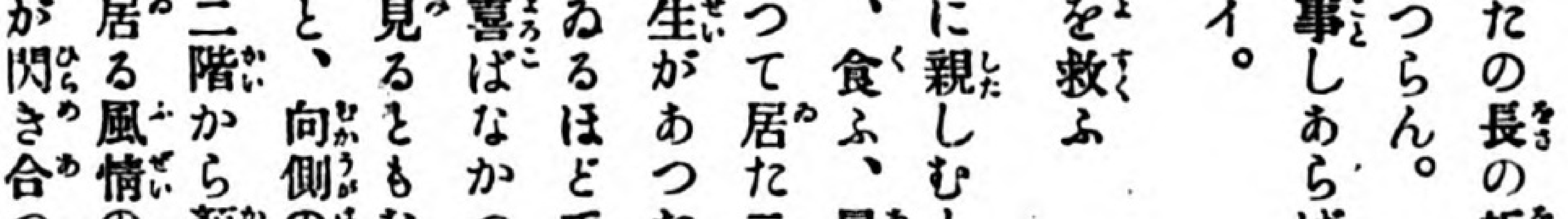
△折詰のお土產

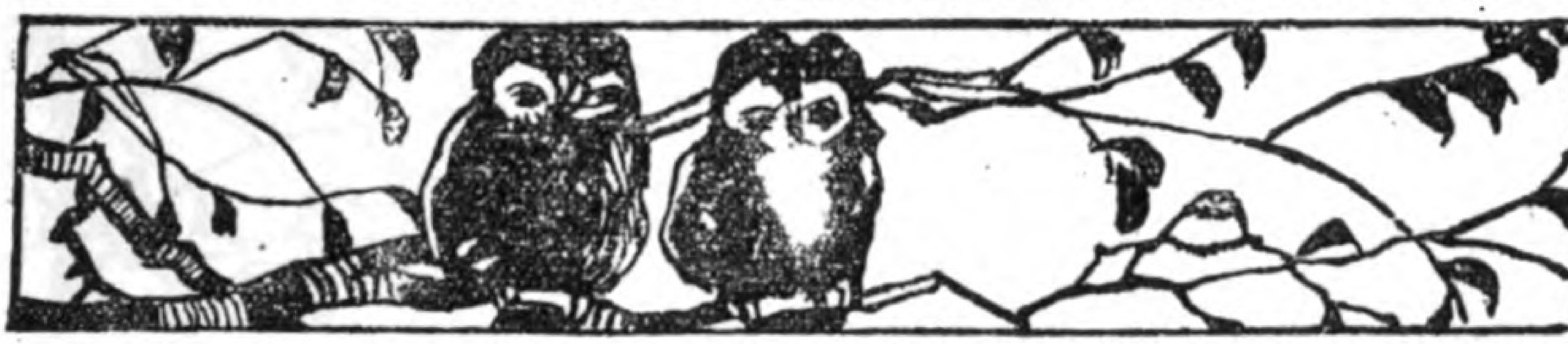
これも縣知事の寺田祐之さんの奧樣の事ですが、この奧樣は良人が外出の折は何かお土產を持つて歸らねば、御機嫌が麗しくない方で、夫れを氣に掛けられてか、寺田さんは巡視の先々、又は宴會の折など、必ず折詰を携へてお歸りになるすると夫人は玄關まで出迎へて、ニッコリ遊ばす。そこで口さがない京童は、こんな落首を書いた。

うたげ果つあがたの長の折詰を猫な引きそねかゝや待つらん。
折詰の蛙の友よ事しあらば皆札となれチンチンポンパイ。

△怪腕少女を救ふ

晴れた海の景色に親しむと云つたわけでもなく、唯飲む、食ふ、暴れると云ふだけで、品川に宿つて居た二十歲前後の血氣な一少尉候補生があつた。この青年女嫌ひと自稱してゐるほどで、女中の給仕に出るのをさへ喜ばなかつたが、或日二階の窓に凭つて見るともなく街道の人通りを眺めて居ると、向側の橋屋と云ふなまめかしい家の二階から顏を出して、空しく涙を垂れて居る風情の美しい女とピタリと眼と眼とが閃き合つた。



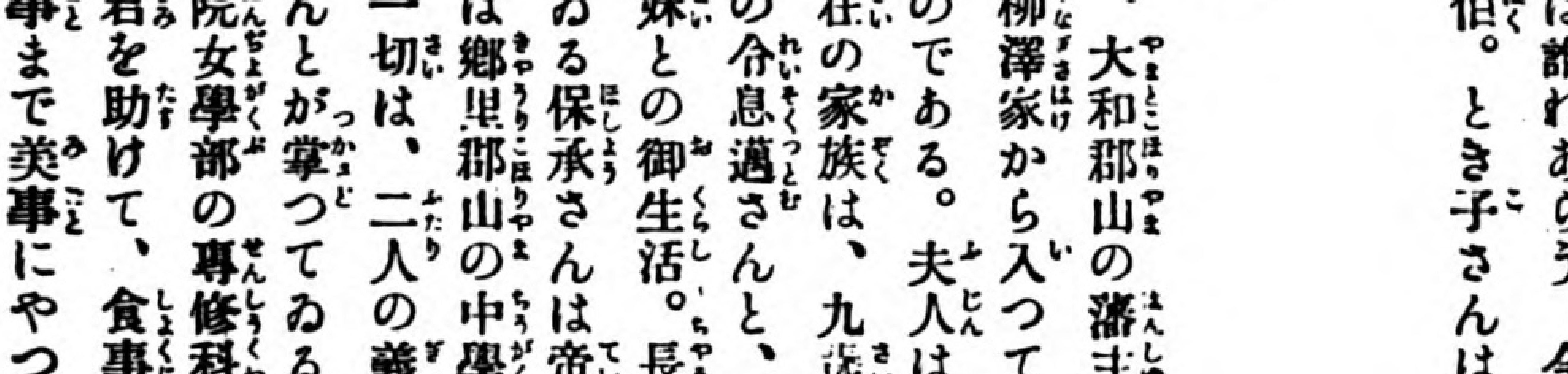


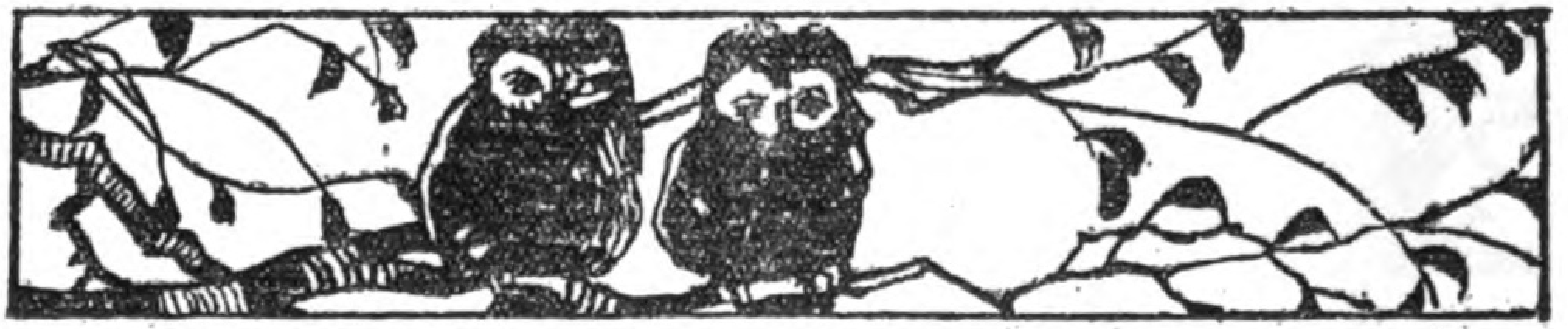
若い候補生は何となしに哀れを感じて早速偵察を試みると、そもこの女は越後國蒲原郡菱形村の前原伊助三女とき子と云つて、二三日前に其の家に賣られて來たのであつたが、『明日』と云ふ日が『今宵』となれば、もはや枝に止まる美しい花ではないと聞いて、彼の青年士官は一片の俠骨抑へ難く、戰略を講じて其の女を救ひ出した。さうして友人の世話で、赤坂の溜池邊に匿まひて置いた。橋屋の方では大いに驚ろき、生意氣な青二才の仕業かなと早速人を以て强硬な談判を持ち込んだ。若い候補生は薩摩隨一の快辯を振つて『人間の身を勝手に賣買する處があるか』と無法な氣焔を吐いてイツカナ承知しない。談判に來た男はその勢に氣を呑まれて、こりや迚も叶はぬとおもつたか綺麗に話の型をつけてしまつた。

其の若い候補生とは誰れあらう、今の海軍大將山本權兵衛伯。とき子さんは、即ち今の伯爵夫人。

△平和な家庭

柳澤保惠伯の家は、大和郡山の藩主で伯は舊越後黒川藩主柳澤家から入つて、其の養子となられたのである。夫人は八年前に逝去れて、現在の家族は、九歳の令孃露子さんと八歳の令息邁さんと、三人の義弟と二人の義妹との御生活。長弟で養嗣子ときまつてゐる保承さんは帝大次は郁文館中學、次は郷里郡山の中學に在學中で、家事向の一切は、二人の義妹の菅子さんと武子さんとが掌つてゐる。武子さんは、學習院女學部の專修科に在學中であるが、姉君を助けて、食事の献立から、家計上の事まで美事にやつて





のけられる。伯は後顧の患がないので、熱心に統計學の研究や、會社の用務に鞅掌される。

△五千圓の燒香

『理想選擧』といふ語が、チラホラ女學生間の流行語となつて來たが、神戸の櫻井一久さんは、即ち其の理想選擧で代議士に當選した。最初の人でした。

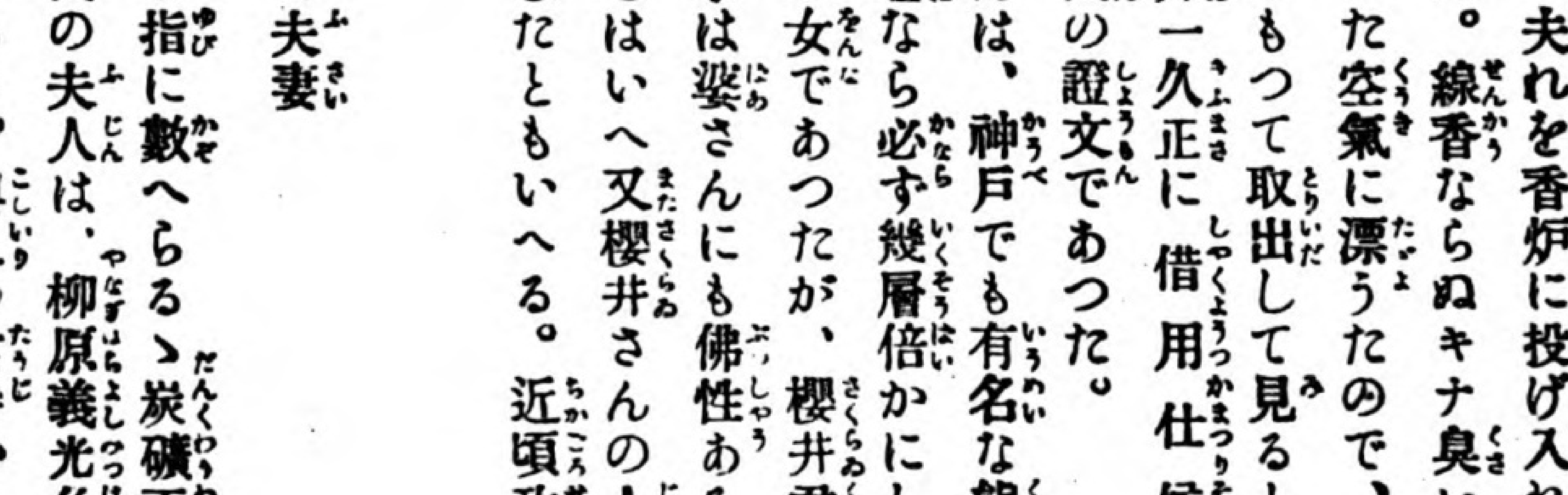
櫻井さんは國士として、同人間にも畏敬された人で、神戸市にも非常な信用があつた。この方が突然死去れたので、神戸の人は知ると知らぬとの別なく、其の死を惜んだので、質素にとした葬儀も自然盛んになつた。

親戚知己友人の燒香の終つた後、『妾にも燒香さして下さい』と出て來たのは六十餘りの皺くちや婆さん、帶の間から何か紙片を出して、夫れを香炉に投げ入れて恭しく合掌した。線香ならぬキナ臭い匂が、四邊の濕つた空氣に漂うたので、傍の人が不審におもつて取出して見るとこれはしたり櫻井一久正に借用仕候也と書いた五千圓の證文であつた。

一體この婆さんは、神戸でも有名な熊鷹婆で、貸した金なら必ず幾層倍かにして取ると云ふ程の女であつたが、櫻井君に對する此の一事は婆さんにも佛性あることを示した。とはいへ又櫻井さんの人格の力が之を化したともいへる。近頃政界の噂の種だ。

△通譯附の夫妻

九州では五本の指に數へらるゝ炭礦王の伊藤傳右衛門氏の夫人は、柳原義光伯の令妹燁子さんである。輿入の當時から





世間の耳目を驚かしたが、こゝに又面白い落語家の種になりさうなお話がある。傳右氏は、元と礦夫上りの荒武者で全く以て目に一丁字なしといふ礦掘男であるが、手紙も自分では滅多に書かない一度は代議士にもなつたが、議案を逆に讀んだり、起立を誤つたりする都度政友に笑はれたので『代議士も甚く骨の折れるものだ』と云つて居た。

この人二萬圓の結納で、光榮身に餘る公卿樣の姫君と結婚されたので、ホクホクして居た。さて同棲して見ると、奥樣の方は『遊ばせ』『いらせられます』『侍る』と云つた風のお言葉、旦那樣は石炭掘りそのまゝの田舍訛りで、デリケートな情緒を交換する事が出來ぬ。一言目には耳を傾け二言目には、小間使の通譯によると云ふ有樣ださうである。

△名物伯母さん

今より四十年前、日本から第一回の留學生として、獨逸へ行つた佐藤博士を先づ第一に世話したのが抑の緣となつて、日本人が大好きとなつて、爾來獨逸へ留學する日本人とあれば、大抵手をつくして獨逸語など敎へるといふ、大した日本好きの伯母さんがあつた、其名はフォン、ラーガーシユトレーム夫人。

我が朝野の名士で此お婆さんの門下生が却々に多い、桂公を始めとして、山縣伊三郎氏、福島東條の兩中將、三浦(謹)三宅(秀)有賀、大澤の諸博士等無慮九十五名に上るといふたいした伯母さんであつたが此頃九十一歲の高齡で突然逝かれたといふ報に接した、あたら伯林の『日本伯母さん』の長逝は悼むべきである。





僞らぬ乙女の心

瑞枝

従弟の昌人さん今年十五で、某中學校の一年生兄弟の少ない私は弟のやうに可愛い、いつも文通する、此内の一書に、

『姉さんの下さる御手紙女名では都合が惡い、意地惡の上級生が、姉さんなんかであるものか、姓が相違ふのだもの、きつと…だよといつて、いぢめるのですもの、僕厭だこんどから、必ず男名で下さいよ――』

私はそゞろ微笑まれたまたなんとなく厭な氣持がした。其後手紙認めて封筒書く時、私の姓名なんと變へて書いたものかと考へた、いろ〳〵と小説で讀んだ名もとつて見た、昌人さんのお友達の名も云つて見た、お父さんの名、叔父さんの名、武夫、文雄、一郎、二郎、…いくつも繰り返した。書かれぬ、さて書かれぬ、私は女だ、どうしても男名は書く氣になれない自己を欺き他人を僞り得ない、こればかりの事をと我れからはげましても、遂に書かれなかつた。筆を棄てゝ文投げた。其後なつかしい昌人さんには一片の文さへ送らぬ。

世には平氣で自己を欺き他人を僞るものがあるとやら、私はこればかりの事さへ出來ぬものを。

○

都に遊學の貞子さん、夏季休業中のお話に。

『私あちらで同鄕の○○子さんや、△△子さんよりは却て、他國の方と親密にしますの、いつしよにお話したり外出する事なんかめつたにありませんわなぜでせうね』

ほんとになぜでせう私には了解ません妙なものね、

○此間私の村に大火事があつた。百戸に足らぬ平和な里開闢以來大した出來事もなかつた事とて、里人は永き夢を破られてどんなに狼狽したでせう、其後は火を怖れて、火の用心を口癖にいつて居るお母さんなど五月蠅ほど注意なさる、ほんとに人は可笑しいものだ、何か事あつた當時は夢中になつて騒ぐ注意もする、けれ共喉下過ぐれば暑さを忘れるとやらいまに、此人達も注意を怠る事でせう。



○人に愛せられんと思はゞ氣どる事を止められよいかな美人も才者も氣どる者は駄目々々、何人に對しても低く出で溢るる愛嬌を持て接せば萬人の親を得るこれ處世の秘訣の一です。私は農夫に逢つた時には喜こんで農業の話をする大工と道連になつた時には面白く建築の話をきく、誰れとでも隔てなく話す、これが爲また一度も卑下

された侮辱せられた事はない、却て種々な教訓を得て居る。

○

君さんとお別れしてもう二年、おなつかしくて一日も忘れた日はない、いつも〱御情あふれた御手紙を下さる、其度毎私は優しい友情に泣かされた。

其君さんが御歸りなさるので嬉しくて嬉しくてもうなんにも手につかず、只々指折り數へてお歸りの日を待つた。

其日は來ました、私は朝早くから村界の土橋まで、……いく度かあだ人に驚かされ待ちあぐんだ末漸く、あれ、あれ、向ふから、私は思はず馳けだした。

『君さん……』

と、ばかり取り縋つて、泪は止どなく頰を流れた。

しかし、しかし、友の態度は冷然たるものであつた泪一滴も流さぬ、露なつかしさうな樣子も見えぬ、厭に氣取つた言葉を遣つて更つた挨拶された。

あゝ、あゝ、眞の君さん、肉體の君さんと、手紙の上の君さんは、全く相違て居た、君さんは情の人ではない。

その艶麗な溫情溢れた筆の跡は、心から露出したものでない、只筆が産み出したのだ。

私は心にもあらぬ事を、上手な筆に任せて書き流す人を憎む。

其後君さんの事はからりと忘れた。

○

私は忘れ得ぬ人々の名を書き止めて置く、

振分け髪の友はもとより、師の君、同窓の友、一寸道連になつた人もある、一度も口きいた事のない人もある、とにかく一度、私の腦裡に深い印象を與へた人人の名を書いておく、

それらの、人々の中に、今は遠き異郷にある人、結婚した人、なき數に入つた者、逆境にある人、幸福に暮らす人、樣々に變つて居る。杳として消息のわからぬ者も多數だ、

あゝ忘れ得ぬ人々、なつかしき君達、秋夜人靜りて

寂とした孤燈の下に此のノート繙とけば、髣髴として浮び出づる其俤やすぎ越方の事、思ひは限りもなく深い。

○

お隣りに行つて居ると藥屋がきた、

「…腦病、胃病、肺病、リヨーマチス、火傷、切傷…藥は一切みんな名藥ばかり、効能は受合……」

懸河の勢に滔々と辯じ立てた。

するとお爺さんが、

「ハア、此頃はみんな無事でござんすがの、」

私はなせだかお可笑さを禁じ得なかつた。

○

……、ふと目が醒めた、汗で身體がびつしより、もう夕暮らしい、脊戸の障子に投げた日あしの影が薄い臺所からコチ〳〵と物刻む音が脳に響く、今日で九日私は病床の人となつてゐる。

兩手を胸に組んで仰向く、色々な思ひは限りなく湧いて、……

秀子さんに返事出さねば濟まぬ、さぞ恨んで入らつしやらう、どうしても頭が重くて筆がとられない、こんな事なら早く出して置けばよかつたものを、

袷を綿入れどちらも縫ひかけにしてある。手箱も無茶にしてあつた、あれも、……これも、……と用事が山ほどある、けれ共病の身、あゝ、あゝ、歯痒い、私は平常健全な時になせあんなに仕事が太儀で怠惰たらう、人は名譽より富より身體の健全なものが一番の幸福なのだ健康な身を持て、働けるだけ働くこれに上こす愉快はあるまい、けれ共誰れも健康な時はさう思はない、少しでも多く遊びたい、

黄金や美服のみをあこがれたゝへて、健康な身體を有する幸を喜び謝すものは少ない、

一度病魔に襲はれ苦き藥餌に親むの身となつて、始めて此事を痛切に感ずるのだ、

病、病身これほど、悲惨なものはありますまい、

三年越中氣で、半身不隨の叔母は、

病床より小言が絶えず、氣むづかしくていけない、

『自分は何にも出來ず一から十まで家人の手を煩して居るのだから、少しは氣に入らぬ事も堪へて下さればよいに。』と、從姉はいつもこぼす、私も今迄は病人のくせに餘り無理がひどいと思つた、

けれ共、今考へると無理はない、人は活動によつて生くべき身をなんの樂みも希望もなく病床に釘づけにせられたら、事事物々みんな口惜しいでせう、ひがみも起ります。愚痴も出ますよ、健全な身、思ひのまゝに活動の出來得る人は、病弱な



者に對して萬腔の同情を捧げて、看護の手を盡すべきものでせう。

こんど從姉にもさう申しませう。早く快くなりたい存分働きたい、頭がひどく痛む。

あたりは薄暗くなつたなんとはなしに哀愁の湧く、

『姉さんお工合は……』

夕食の膳を持つて、妹が、

『はあさん、そこを少し開けて』

寂かな秋の夕、赤い柿の葉がほろ／＼と二三枚こぼれた。(日記の中より)

○

村での資産家○○家、といつても俄分限、若い時は人の門口にも立つた事があるとやら、ないとやら、これは人の惡口でせう、とにかく無財産であつたのが、ふとした事から少しばかり手に入つたお金を高利で廻し、細民の血を啜つて作り上げた今の財産。人は陰で○鬼といつて居る

ある用事でその○○家を訪問した、

奥さんの自慢話し、もう返答に困る程だ、

羊羹色になつた毛繻子の上衿のかゝつた袢纒を着た御主人が、手荒く襖開けて入つしやつた。

すると奥さんは、

『もう、あれは歸つたのですか。』

御主人は長火鉢の向ふに膝くんで、

『漸く追ひ歸したよ、ほんとに五月蠅奴だ、息子の學資にするのだが、五十ばかり借して呉れと云ふのだ、抵當があるかと聞くと、ないのだと云ふから、それでは保證人はと云つたら、これも無いと云ふではないか、それではどうもと斷ると、先生が決して御損失はかけぬ、自分を信じてくれつて、泣くやうにしてきつう頼んだが、眞平だと斷つたよ、校長といふ顔で借うと思つても駄目、乞食にでも確とした抵當か保證人を立てゝ來れば、いくらでも借すが、顔に對しては眞平だ、それもあんな貧相面面白くもない、』

『ほんとに、よくもズウ／＼しい人ね、』

『金もないくせに、息子に學問さすなんて、生意氣な事をするからだ。』

『みいさん、ほんとにお金持つと、心配でいけませんよ、』

私はあきれて振り仰いだ夫妻の顔はさながら惡鬼と見えた。

今御出たのは○○先生であらう、學識廣く德望高く、村人から神の如くに信任せられておいでるあのお方に百や二百よしや一萬の金子でも、證書なしに借したとて、なんの心配があらう、いまに御子息も學成りてお歸るものを、

それを顔や身分に對しては、借されぬといふ小面憎さ、世には業慾な人もゐるものだ。

憎むべき天下の非道な金借の人、よく小說などで高利借の殘酷な行爲見て、切齒したが今實際を目擊して憤慨に堪へぬ。

あゝ、憎むべき殘忍なる金借、殊に我里の○鬼、思ひのまゝに懲らしめてやりたいと、いつも思ふ。

○

十二號（姿見かゝみ）に、松平さんが田舍芝居印象記をお書きなさつたが大分なにかと驚いてお出るらしい、しかし世の中は上にも下にも限りのないもの、あれ位なれば私等には誠に結構、まだ、まだひどいやつを見て喜んでゐますよ。

每年夏になると旅役者の一群が來る、村の若い男女はそれを何よりの樂みとして待つのだ。

派手な浴衣に筒袖、着た男、櫛卷の女、呑む、謳ふ罵る、……木賃宿の吉田屋は、それは〳〵賑かだ。

劇場？、それは野中の共同小屋、平常は刈草や稻を積込んで置くに使用はれて居る三間に四間の建物なのです。その小屋は舞臺及樂屋になるので、觀覽席は野原、周圍を板立て並べてかこみ、竹の柱を立て同じく竹を縱橫にたなげ、其上に笹や靑葉の枝を置いて、天井が出來るのです。

每年おきまりの山の根の友吉さんが、

「大阪下り大芝居○○一座」と書いた、紙の大幟を立て、どん、どん、どんと、太鼓たゝいて大聲に今夜の藝題觸れてあるく〳〵、

山蔭から、白い旗がちら〳〵見え、眠むげな太鼓の音が寂かな村の空氣を振動させて聞えた時、機織る娘も、田草採る嫁も、仕事止め耳欹てゝ聞く、

日は暮れて月の昇りし頃、例の原へと出掛る、

板圍の中から癇高い聲で、

「大人が四錢、小人が二錢、……おい二枚……三枚、」

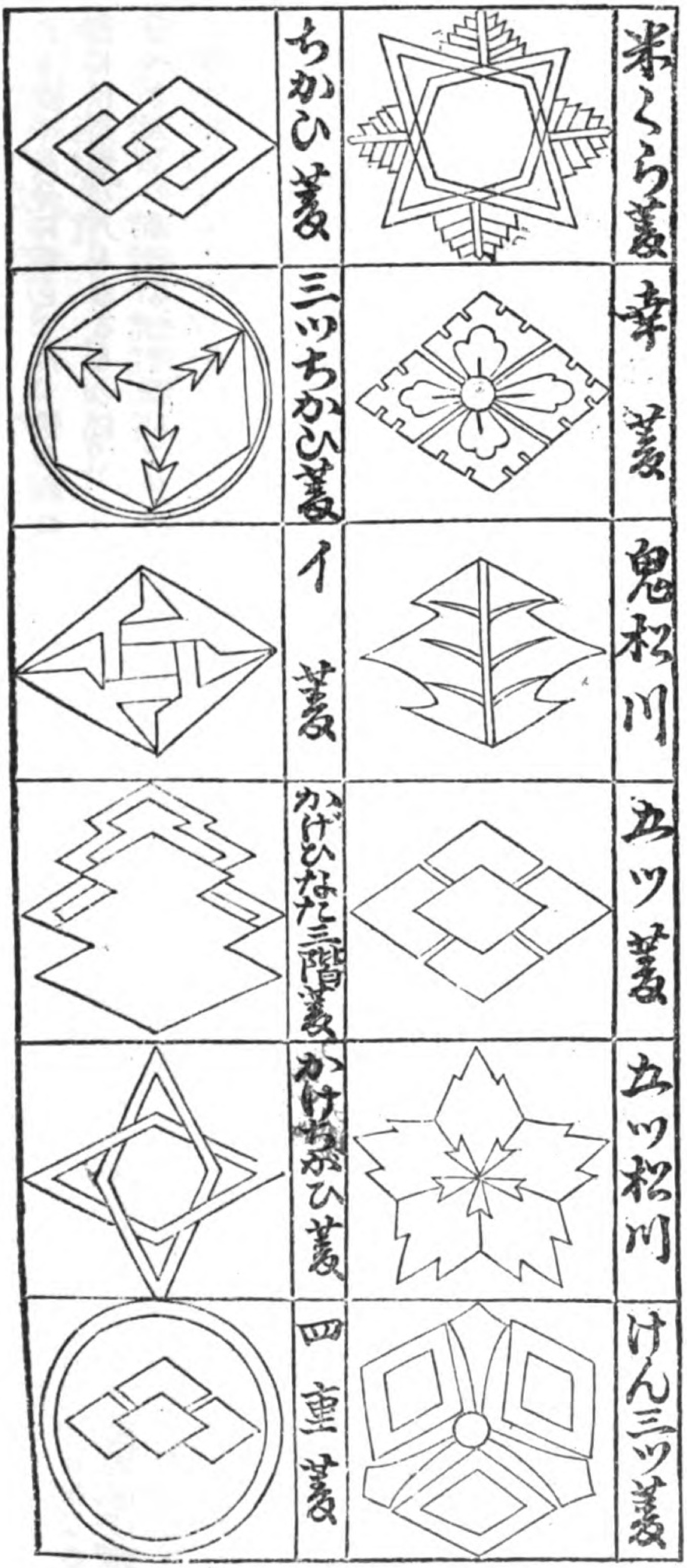
揉まれ揉まれて漸く内に入る、正面にはヒイキ○○丈へとした大きな東熨斗のついた幕が垂れて居る、笹天井から「い一ろ二」などと書いた紙の片がいくつも

下つて居る、青竹で長方形にいくつも仕切つて荒筵が敷いてある、狹い舞臺の千變萬化、俳優の早替り、それはもう松平さんのより以上だ、疲れた目を上ぐれば棧敷の隙間から、白い花や青い草が頭をのぞけて居る仰げば笹天井の葉越に青空が見えて、星の光りがぎらぎらとこんな芝居でも、ほんとに見たくてね、

三里離れた町には、常設の劇場があります。丁度松平さんのご覽なさつた樣なのが、私始め里人は、それを帝國座のやうに思つてゐますのに、

ほんとに世の中は樣々ね。帝國座の宏麗結構、私などには想像もできぬ。

菱の意匠





結婚難

松かぜ

女子過剩、結婚難などゝ申したら、一人娘に婿八人とやら、若くお美しい方には、ほゝどこにそんな風が吹いて居るかとお笑ひ遊ばすでせうが、私は學校卒業して、ことし滿七年、同じ教室で同じ色の袴はいて共に學んだ級友は、それ〴〵人の母となり、妻となつて生涯身をよすべき家の定まつた今日此の頃、なほ良緣なくして、徒らに過ぎゆく年また年、向ふ鏡にうつろひ行く姿をかこつ友を見ますと、さういふ言葉が思はれて、同情に堪へませぬ。まあ其の二三をこゝに御紹介しませう。

たま子樣

系圖正しき田舍の舊家の一人娘、お母樣もやはり一人娘で、御養子のお父樣は早く世を去られ、昔氣質のお祖父樣と、世間に觸れぬお母樣との掌中の珠とはぐくまれて、年頃となられました。御本人の切なるお望みで、東京の女學校に出られましたが、御卒業後、直ちにお待兼のお祖父樣がお自らのお出迎で御歸省。養子々々とさがして居られますれど、諺にも小糠三合もてばとやら申しますもの。田舍で女學校卒業した孃樣に似合はしい婿養子と丈でもなか〳〵むつかしいのにお祖父樣が、家柄、血統、身分の御詮議八かましく、一昨年亡きお父樣方の伯母樣がこれならばとお世話遊ばした文學士も、お祖父樣が、あれの先代は身分なきものだ、學問が出來ても、人柄がよくても、あれの息子にこの家を繼がせる事は出來ぬと、どうしてもお頭左右に振つて御不承諾、でそれが不成立になつた後は

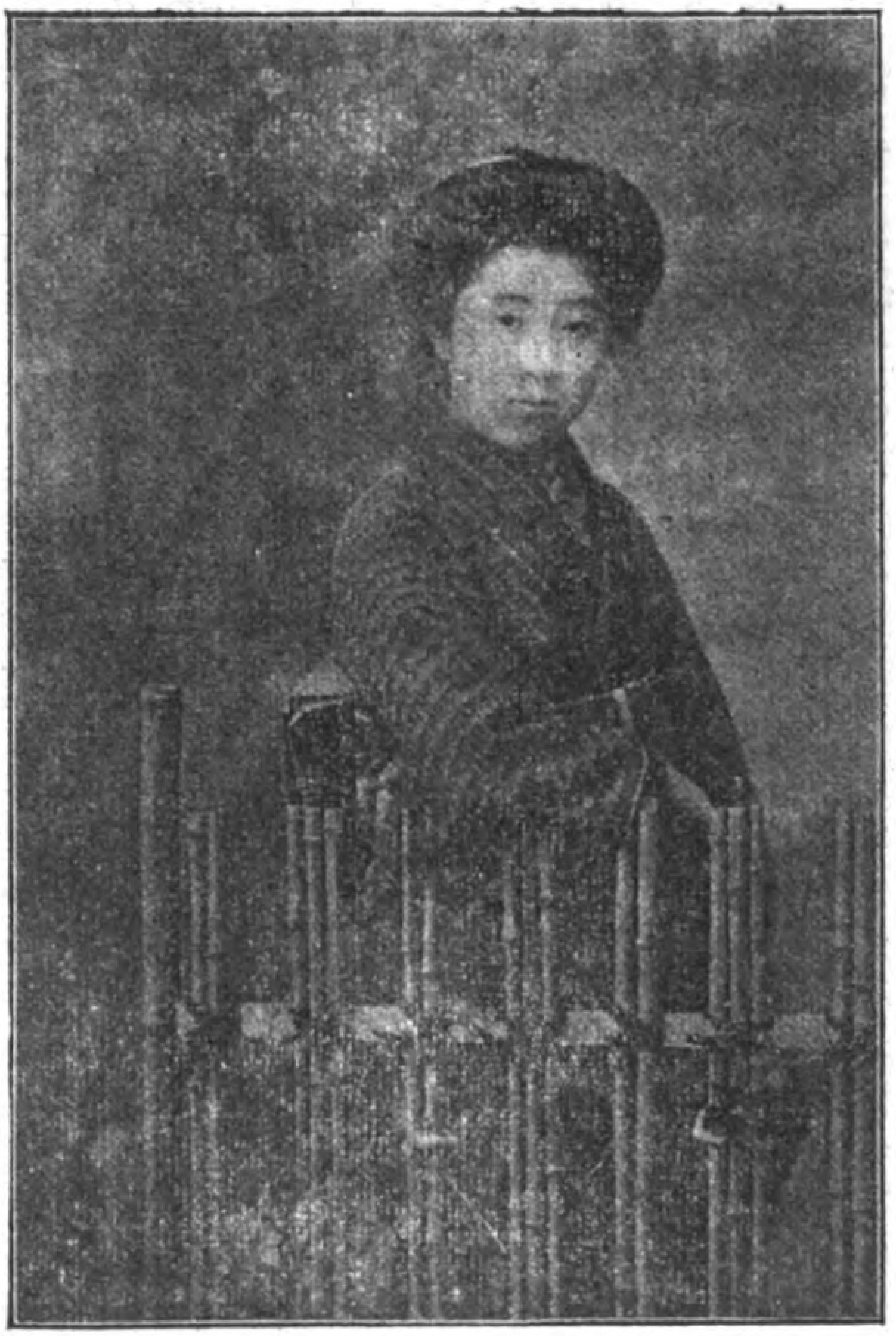
あまりよい候補者もない樣子。それでも以前のやうにお內間ども裕かだと、またよい御緣もありませうが、近年借金がふえて、御家運日に傾き。お手元不如意がち。それがだん／＼外へ聞えますので、門閥家でも娘の器量がよくても、あれではと、進んでお世話する人もないとか。ことし二十七、お年の數がますほどなほなほ御養子もありにくき事と、かげながら案じますの

御歸省當時は、美はしい文字で、氣もちのよい文章で、よくお手紙が參りました。お父樣はなくとも、お祖父樣とお母樣の御慈愛を身一つに集めて、祖先から傳はる立派なお邸のうちに、何不自由なく閑雅幽邃の故鄕の山水を友として、何て幸福な方だらうと、頂くお手紙は、其の佳人のゆかしい境遇を歌ふ詩のやうに思はれて、讀み終るのも惜しく拜見して居ましたが、この頃はさつぱりお便に接しません。御近狀こま／＼伺上げたくなんか申しても、おかへしの繪はがき一枚筆とる事もおきらひにおなり遊ばしたか、それとも誰れやらが、「得意の時は無沙汰してる人にまで手紙もかくが、失意の時はたれにも音信もしたくなくなる」と仰つたやうなお氣持ちか。とにかく、あの才とあの容色とをもつて誰れ訪ふ人もなき谷かげの深山櫻、青春ふけゆくをかこつて居られるかと思ふと、いたましさに堪へませぬ。

糸子さま

至つて正直なおとなしい方、容貌もよく見れば醜い方ではないのですが、あまり悧發ではなく、はき／＼と氣のきいた處がちつともないので見劣りがします。それに十年も十五年も前に流行したピカ／＼の風通や糸織を、さもよい着物らしく着て居られますので、どうも野ばうで…、お母樣はもう六十のお以上。其の昔大奧のお勤め遊ばしたとやらで、品のいゝ方ですけれど、若い方にはやはりまた若いなりの風をさせなければ、末摘花の雪の朝の服裝に興をさます人は、源氏の君ばかりでもありますまい。それに萬事昔風で、緣談にしてもこちらから運動するの良婿を探すのといふ

事なく、丁度よい處から懸望されるまで、上品に手をおいて待つて居られるといふ風ですからね。それでもお姉様は、まだお父様が御存命で官途についてよい位置に入らつしやるうちにお片附きになつたので、よい御縁があつたさうですけれど、今は一人のお兄様も遠い臺灣へ御赴任、東京はただお母子ひつそりと暮して居られますから、御交際も狹く、これならばと氣の進む御縁の申込みもなくて、つひ四、五、六とお年が重なりますので、この頃はお母様も氣をもんで、早く安心がしたいと、口癖のやう仰います。糸子様は、私はもうこんな馬鹿に生れたのが不幸福なんだから、一生母の側で暮しますのつて、淋しいお顔していらつしやいますから、お氣の毒でどこかよい御縁をと及ばずながら心にかけて居ますけれども、なか〲どうもね。


花すゝき今よひほに出て照月のひかりの上にやとるつゆかな　（景樹）

京子様

すぐれた美人ではありませんが、かたく結んだ唇、思慮に富んだ眼、すらりとした中肉の、風姿氣高く品のいい方です、學校にゐらした頃は級中の才媛で各科すべて優等ことにも詩才文才は一頭地を拔いて、天晴未來の閨秀文學者と期待されて居ました。卒業後郷里には歸られず、なほ文學修業の目的で專攻科に殘られ、近來は母校の囑托で敎鞭とつて居られ、怜悧なしつかりしな

方です。あの方丈は獨身で通せると我が友ながら志操のかたい事に感服して居ましたが、ふとした機會に見た日記の一節、やはり年頃すぎての獨身にはかうした煩悶があるものかと、女といふものゝ弱い事を感じました。人に示さるべきものではなかつたでせうが少しばかり。

會長の講話、來賓の演說、幹事の報告、例によつて例の如く、春期の同窓會も午前で終りを告げて、午後は校庭の親睦會にうつゝた。

廣い講堂一ぱい集まつた會員は、心易い同志打つれて、雲かとばかり爛漫と咲き亂れた花下のかしこに一團、こゝに一團、樂しさうな笑聲や話聲をもらして居る、會長は其の間を行きつもどりつ、あちらでも久濶の挨拶を受けて、滿足の微笑と、短かい温言を與へて居られる。

數日來今日の準備に忙殺されて、此の午後始めて小閑を得た私は、ホツと一息、物靜かな木蔭に身をよせて、賑やかに美くしい花下の群を見ながら、一人寂しい想ひに耽つた。

『先生!!』、茫然として物思ふ耳に、不意の嬌音ハツと我れに歸るとそこには、お召の二枚袷裾長う、絲錦の丸帶胸高にしめて、ブローチの光り燦たる若夫人が立つて居る。

『オヤ宮川さん』

『先生久濶、おかはりもありませんで』

『ありがたう、あなたもいつも御機嫌よくて何よりです。先達御結婚でしたつてね、おめでたうございました。

『恐入りました御通知申上げませんで』

『お宅は』

『麴町の下二番町で、吉田と申します、どうぞお序の節およりり遊ばして』

幅廣のリボンかけて、紫の袴短かく、細き靴の踵高き後姿愛らしく、ことにも敎室で質問の矢を放つた時、下ぶくれの肉づきよき頰にさつと紅みなぎらしてわざとならず、首かしげて答へする音聲鈴の如く洒

きを、妹にもして見たく可愛がりし人は、既に後輩でなく、社會の位置我れを超して、新婚の祝詞に顏も赤めず、悠々と會釋をかへす世なれた令夫人になつたと思ふと、私は不快の念がつと湧いて、しばしは言葉もつがなかつた。

『先生あちらへお出になりませんか、花田先生もさつきあちらで探していらつしやいました。』

『さう花田さんは今日見えてましてッ？　參りませう。』

立ち上つて一二歩。

『あ、花田先生がいらつしやいました。私は今日少しいそぎますから失禮致します。いづれまた御伺申上げます。』



日かげさす軒の朝霜打けふり
春めく空に冬は來にけり（治堅）

『しとやかにお辭儀して行く美しい後姿のかなたに去つた其の向うから、親友の花田春子さんが、黒づんだ紫の袴に例の小紋きて丈高い體を見せる。

『まあ京子さん隨分探させたのね、こんな處へひつこんで』と歩みを早めてられる。

『今日はお見えにならないのかと思つて居たの』

『少し學校の用があつてね、遲れたけれども出てきたの。』

『よくいらつしたのね、今日は一人ボッチだと思つて考へこんで居たのホヽ、あちらの餘興を御覽になつて。』

『エ、一寸。大喝采だけれど面白くもないわそれより

裏の方をまはりませうよ。」

「こちらから?」

「エ、」

二人は昔なつかしきテニスコートの側を通つて寄宿舍の後の花壇の横に出た。

「草がよくさいてるでせう。」

「綺麗ね、菫といへばあの紫好きの文子さんね、今日見えてゝよ、御逢になつて」

「否え」

「マダム振り素的よ」

「まあ結婚なすつたの」？

「去年の暮れですつて。私どものクラスの獨身はとうとう二人きりになつてよ」

「さうでせうね、去年あたりの卒業生がもう立派な令夫人ですもの」

「そらミセスで學校通してる人もあるんだから、去年の卒業生がマヽーになつてだつて不思議ぢやないけれど、相愛の人が亡くなつたつて尼樣にでもなりさうな騷ぎして、失戀の歌ばかりよんでた方が、もう結婚するなんて、想像外ぢやないの」？

「お互に好む道に終生を捧げるなんて豪い意氣込みで居たつて、年ばかりたつて、なんにも出來ないんですもの。いゝ加減に切り上げて、奧樣黨になつた方の方が賢こいでせうよ」

「まあそんなものね、先生のお情でやつと卒業した元山さんだつて、子爵夫人で大威張、盛裝してお馬車に召した處はおめでたくも見えず、同窓會にでもたまにいらつしやれば、先生方までペコ〳〵して大騷ぎする世の中ですものマダム黨大勝利ですわ。

「榮達と歡樂とを合せ得るマダム連が勝利者なら、私どもは第一等の敗者ね。」

「ホヽ、そんな弱い音はよして頂だい、これでも卒業の時は級中異彩の二才媛で全校の羨望を集めたぢやありませんか、上田先生なんか、閨秀文壇の月桂冠空しく存す卿努めよ、なんておだてゝくだすつたものだわ

「だつてあはれなる女敎師の、寒げなる老孃のと輕蔑

されながら、七年の修業何一つこれといふ著しい事も出來ず、結局女の微力と自分の不才を自覺した丈ですもの、仕方がないわ。』

『ほゝ京子さんもそろ〳〵奥樣黨のお仲間入りなさる氣』

『今更したいたつて入れてくれる人もないでせうよ、ホヽヽホ、いやに陰氣になつたのね、あちらへ行きませう。』

なほ話しながらもとの花下に歸つた時は、數番の餘興も既に終つて、人々は歸り仕度を急いで居る。ゴム輪の迎車に身をのせて、チリン一鈴おさきにとばかり、いちはやく門外に消えさる令夫人もあれば、久しぶりの會合になほ名殘つきぬ昔語りを電車の停留場までと、打つれて笑ひつ語りつ行く令孃の群もある。其の中を、

春子さんは一人寂しき歸途についた私は校門にたつて、其の後姿のかすかに遠く見えずなるまで、永く〳〵見送つて茫然とたちつくした。

やうやく我れに歸つて歩みをうつせば、流行の粹をつくし裝飾の美をこらして集つた人の姿既に見えず、夕風さつと一ふき、盛りすぎた梢の花を誘ふて、肩にも袖にも花ふゞき散る我が姿かへり見れば七年以前卒業の時作つたまゝの紋付色あせて風になぶられて折目亂るゝ袴の裾も、見すぼらしう萎えた。

あゝ、この春もまたかくてくれてゆく。

▲下女の肥えるわけ

吾々の日常必要な食物を分析すると、タンパク質と澱粉と脂肪と水と鑛物との五つになる。そして此等の要素は、必要の場合には互に代理を爲合ふものである。之を食素の代償作用と云ふ。尤も此の代償作用は何れのものでも之を爲し合ふと云ふのではなく、唯澱粉は脂肪と代償し、脂肪は蛋白質を代償し、蛋白質は其の一部分が含水炭素及び脂肪と代償し、又代償せらるゝのみである。中でも代償作用の大部分は含水炭素と脂肪との間に行はれる。

さて吾々の食物として取るものゝ中にて、澱粉を多く含むものは米麥である。之に次ぐのは野菜である。で此等の物を多量に食する時は、含水炭素は身體の要求よりも餘るから、其の餘つた部分は脂肪の代償をなす。斯く脂肪が澱粉によりて代償せらるる時は、勢ひ脂肪に餘りが出來て、其の餘つた分は貯蓄脂肪として皮と肉とのあきに貯へられ、自然身體が肥えることになる。故に大食する者は大抵澱粉の過食となり、其の結果脂肪を多く貯藏せしめて遂に肥え過ぎとなるのである。斯くして肥えたのは一種の病氣で、肥滿病と名ける。

右の事實の説明によつて、運動が不足して却つて肥えるわけ、脂肪を食せずとも相當の體格を保ち得るわけも分らうと思ふ。



着物を作る心得

日本女子大學教授　井上秀子

△衣服は配色が大切

衣服と云ふものは人間の表情の一でありますして、言葉遣ひや住居の模樣、部屋の飾り付などに人々の品性の高下や趣味嗜好の優劣等が窺はれますのと同樣に着物も其の色の配合、縞柄の撰び方などによつて、その人の教育の程度も趣味の有無も略判斷が出來るのです。それ故に餘り突飛な配合をして居れば、つまり自分が美に對する思想の乏しいと云ふ事を表白する事になるのですから、婦人としては是非一と通り心得て置かねばならぬ事柄であります。殊に一家の主婦となつて、夫や子供の着物の世話などをする人にこの心掛けがなかつたならば、家内中が沒趣味な配合のものを着て居る事になるのでありまして、子供の美的觀念を養成する上から見ましてもさう輕々に看過することは出來ない問題かと思ひます。併し、世間ではあまり着物の事など申しますと、直ぐ何か大變贅澤なやうに誤解して、絹の着物や、縮緬の羽織でも作ると云ふ事のやうに考へられる方が少なくないやうですが、私がこゝに述べますのは決してそんな意味ではありません。たとへ材料は木綿でもメリンスでも色の配合が巧みで、全體の調和が取れて居るならば、その人柄も床しく思はれますし、又反對にいくら金目のもの許り着けて居りましてもその配色に一向無頓着でしたならば却つて俗惡に、金の掛つた丈け夫だけ野卑に見えます、美と

云ふものは決して物質の多寡によつて定まるものではありません、それ故によしメリンスの半襟一かけを撰ぶにも一尺の布を使ひますにもこの心掛けの有る無しでは大變な相違なのであります。

△調色の標準

然らば一體どんな標準を以てすれば美と云ふ條件に叶ひ、美しく上品に見えるのかと申しますと、先づ第一に全體の調和を考へる事が必要です、如何に部分部分の色や柄が美しくありましても、全體が整はなかつたならばそれは何の役にも立ちません、どうも日本人はまだこの考へが足りませんで、部分々々で色や柄を撰ぶ癖があります、リボンはリボンとして撰び、半襟は半襟として着物は着物として別々に整へますが全體の調和と云ふ點からはこれは甚だ禁物です、店頭に立つて見てこのリボンはよい色だと云つては買つて挿し、この半襟は美しいとそれを掛け、この袴が色がよいと云ふといつてそれを穿く、この縞は澁いと云ふて仕立てゝ着ると云ふ調子では少しも統一がつきません、全く寄せ集めの繼ぎはぎのものになつて仕舞ひます、稀にはそれでも美しく見える事もあるでせうが、それは十の中に一つもないのです。

△落付て見える色

處で美の原則から割り出して全體の調和をとると云ふ事には種々ありまして一口には申されませんが最も簡單で誰にでも容易く出來るのは同色の配合でります、で、先づその主となる色が藤とか鼠とかならば各部分ともそれに調和するやうに配合して行くのです、これは非常に落ち付いて見えるものでありまして、例へば小紋にせよ、縞にせよ、着物が鼠色の土臺でありましたならば、それに調和させますには袴ならば着物よりは一層濃い鼠を撰びますし裾廻しでも同樣同色の濃いのを着けます、半襟には又着物よりはずつと薄いのを用ゐます、要するに下の方は漸々濃い色を上の方には漸々薄い色にすると云ふのが原則でありますがこ

の筆法で行けば今流行だとか申す黒い色の半襟などは全くこの條件に反對ですが、半襟位は外の色でも構ません鼠にならば何色でもよく映るものですから却つて對比の色を用ゐた方が美しく見える場合があります つまり餘り上から下まで同色では稍ゝ單調に過ぎると云ふ傾きがありますから小さい部分で一寸その調和を破るのは案外引き立つものです、かう云ふ場合には髪のリボンは、矢張り同色が宜しいやうです。



△帶の地色

袴でなく、帶の場合には少しく違ひまして、鼠臺の着物ならば帶の地色は褪紅茶とか、クリームとか云ふ強い對比の色が宜しく、そしてその模樣が鼠で出て居るなどが最もよく調和します。かう云ふ配合をした上に襟留や、帶留などに金色の

金具などを附けますと、小さい部分でありながらよく全體を引き立たせて一層美しく見えるのです。要するにこれは全體が調和した上に襟或は帯が強い對比の色で配合されて居りますからそこが集點になつてきちんと締めくゝりがつくのでありまして何處迄も落ち付いて、且つ優美に見せる事になるのです。

處で今の若い人達のして居られる配合を見ますと、上に黒い絣などを着ましてその裾廻しにはクリームだとか褪紅色とかを付けて居りますがあれはあまりに飛び離れて極く落付のない見苦しい配り合せであります、矢張り黒ならば紫などのやうな餘りかけ離れないものが似合ふでせう。

△西洋の婦人は綿密なもの

西洋婦人などが色の配合に關しての注意は實に綿密なもので、着物と同色の手袋は勿論の事で、その外帽子から、靴から、手提げ洋傘に至る迄夫れ〳〵苦心するのであります、西洋人はあまり多くの色は一緒に使ひませんが、よく全體が調和して居ります、日本人のは何となく繼ぎはぎしたやうに見えます、まだかう云ふ事に對する研究が幼稚な爲でありませう。

先づ同色の調和に就きましては大體この位でありますが若し諸嬢が春着をお作りになるならば一つこれで試して見られたら宜しからうと思ひます。

雨乞も袖乞もして名を殘し

之は小野の小町の榮枯盛衰の生涯を現はしたものであります。小町は大變な美人であつたとか云ふし、又大變な醜婦であつたが氣立が女らしかつたから美人と云はれたのであるとも云ひますが、孰らが眞實かは私には解りません。が兎に角一時は大變にもてはやされた小町も老いては顧みられる事もなく哀れな最後を遂げたのは事實であつたと思ひます。雨乞小町とか卒塔婆小町とか云ふ名も今日皆の口に上る名でありますから、それと小野の小町とを一つにして云ひ現はしたものであります。



燈火のもと

紅梅

△初がつを

眼に青葉、ほとゝぎすの初音またるゝ夕まぐれを、板臺にかつをのせたる大肌ぬぎの若者、おい鰹、はつがつを、といさましげによびつゝ、大路をよぎつて、とある横丁へと入りゆくを、最前より追ひかけきたりしみなりいやしからぬ女中あれ魚やさん、さつきからおやしきの御門であれほど呼んでゐたに、といへば魚屋ふり返り、こなた衆の家では、却々買ひきれまいと思ふて。

△コスモス

またの名を秋ざくらとよぶとやら、末の妹が丹精のかひありて、うす桃色もうつくしう、たわ／＼と咲ほこりたるコスモスを、ひとりながむるも惜しと、ふた本三もと手をりて、老ひたる人の許におくりけるに、あゝ、是はオスモソーだね。きゝ違へにやとをりかへして問へば、お角力草さ、ほら、こんなに横ひろがりに成つてゐるから。

△枕を結ひつけし女

寢ざまあしきを直さんとて、枕をしかと首すぢに結ひつけていぬる女の、ある夜、たゝならぬ家鳴りに夢をやぶられ、眼をひらけば、人々、地震よ／＼と叫びつゝ、細くあけたる戸の間より、われがちに戸外へと下り立に、われも／＼と續いて出でんとすれど、くゝりつけし枕の戸口にかゝりて、いかになすも出づるこ





と叶はず、おろ〳〵聲になりて、やよ、誰ぞきてたすけたまへ、この戸をあけてよと呼ぶうちに、やう〳〵地震もしづまりぬ。はや十とせあまりの昔なれども、いまに、そのをりのさまの眼にうつりて、地震あるごとに、人々うち語りては笑みくづれけり。

△舶來の石鹸

一夕、例の輕口の伯母と有樂座にあそびしに、ふとわれの袖をひきて、私しや此處へくるたんびに何時もさう思ふがねえ、御覽なね、この中のきら〳〵した建築つたら、まるで舶來のしやぼん箱の中にでもゐるやうだ。

△多分の祝儀

梅幸に似たりといはれて自慢の若旦那本店より、新年會の餘興芝居に是非とたのまれ、親類方の某樣の次郎左衞門に、八つ橋をつきあふ事となり、大得意にて納まりて居りしが、いよ〳〵當日樂屋入りとなるや、かねて出入りの幇間何がし、はしりよつて、是は〳〵△△屋の若旦那でいらつしやいましたか、私はまた、音羽屋の親方が、お手つだひにでもお見えになつたのかと存じました、素顏でさへもこの通り、舞臺の上がさぞかしと、今からもう樂しみで……といふや、若旦那は有頂天になり、多分の祝儀をつゝみて遣はしけり。かげにて、彼のしまりやが珍しいといへば、かたはらの人、ナニ、切れるはづさ、今日の出しものが籠釣瓶だもの。

△他家の子に筍





しるべの老人たづね來り、私もおひおひと取る年なり、相續者がなうては心ぼそう御座りますゆゑ、甥なり姪なりと存じてをりましたが、今度さる人の媒で、氣立てなり何なり、さつぱりと氣に入つたものが御座りましたゆゑ、いよ／＼他家の子をもらふて相續させることにいたしました。といふを、まじ／＼と聞きすまし居たる子の、伯父さまはお齒が無いのに、筍をもらふて如何なさる。

△寺内伯の頭

ボンチ畫といふものなどに依りてにや近火のをりなりき、騷ぎのしづまりてより、人々の寄りきて結飯などくらうに、いそぎしつらひしまゝ、形などもあやしう亂れたるを、幼き男の子の指して、母さん、あの御飯は、寺内さんのお頭によく似てるね。

△肝付中將の小唄

伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城で持つ…とは、昔よりいひ古したる小唄なれど、このごろ、さるかたより聞きえしは、いま世にときめきたまふ肝付中將が、をりふし口ずさまるる一ふしにて、國は武でもつ、武は富で持つ、日本帝國船でもつ。

△隱してあつた蛸

なまぐさ物好きの和尚さま、ある日、ひそかに魚屋より章魚をもとめ、俎板庖丁とり出して料理なさんとするをりから來客のありければ、とり敢へずかたへの空飯櫃にかくし、蓋のうへより風呂敷をうちかけ、何くはぬおもゝちにて客間に





入り、四方山のものがたりをなすうちに、いつしか勝手もとにてたゞならぬもの音きこゆるに、先づ客が心づき・だいぶお勝手が賑やかなれど、もしや猫でも入りはせぬかと云はれ、和尚さまもハッと思ひ出し、あたふた馳せいづれば、風呂敷づゝみのまゝなる飯櫃の、あなたへカタリ、こなたへコトリと踊りまはり居るに客はをどろき、こは珍事よと大聲あげれば、何事の起りしぞと、家内一同小坊主まで、とるものもとりあへず、いであひさわぐに、和尚さまはたまりかね、そこ此處と追ひかけ〳〵とつて押へ、小わきにかゝへて走りつゝ、章魚ではないぞ、章魚では無いぞ。

△黄金佛と木彫佛

神無月のひと日、出雲のみやしろにては、例年のごとく、諸國の神々あつまりて酒宴をもよほしけるに、おほかたの神のそろひしころ、門口にやさしき聲音のして、見るめもまばゆき黄金の觀世音菩薩、後ればせながらと、しとやかに會釋して入りこめば、最前より來あはせし木彫の觀世音菩薩・さては僞者のわが名をかたりて來りしよと、もろ〳〵の神たちと共に、入口に立ちいで、戻さんとすれば、黄金の觀世音菩薩きかぬ氣で、ナニ私に歸れとはふて〳〵しい、此方のやうな木彫とちがふて、私はこれでも黄金さまぢや、こなたしゆに突つかれてもどつたとあつては、他のしゆへも顏むけが出來ぬ、と云はせもはてず、エイ僞者の分際でと、氣の早い不動明王、いきなり襟がみつかんで引き下すに、もうかんにんがと聲ふるはせ、片襟はし折れば下が銅。





△返し文

彌生の末つかた、花に名だかき吉野にあそびしが、ひと日は雨にとぢられて、つれ〲のあまり、そこの宿より、彩色の繪はがきに腰をれいくつか散らしがきして、心あひにし都の友におくりけるに一日おきての返しぶみに、かばかりの御たよりを、など雨の日にはおこしたまひつる、惜しや折角のおんすさびも、さくらとともに、しとゞに亂れて候ふよ、と恨みがましうかいつけありけるに、そゞろ興ふかうおぼえけるが、その友今は世にあらず、花みるごとにおもひ出されて。

△忌中の白紙

挿し花の師がり訪ふ道すがら、とある小路の家の門に、すだれ下して、忌中とかきし白紙の貼りつけありしが、かへるさに見れば、誰やらむそをたはむれに剝ぎ去りしと見え、わかき男のつぶやきつつ、なほ新しきを貼りゐたりき。あくる朝の行きずりに、ふと眼をやれば、こはいかに、又々はぎとられしとおぼしく、きのふの男の、うすき木札に文字をしるして、すだれ半にうちつけつゝ、何奴だかくだらない眞似ばかりしやあがる、サアかうして置いたら、たいがい取れつこは無いだらう。

△洗ひ鯉

手どしらへなれどと、膳部ならべてすすめけるに、一人はなにもわきまへず、かたへの人より、これは洗ひ鯉とおしへられて、これは〱御叮嚀な。





△ハイツルリー

横濱の海岸通りを、年わかき學生二人、つれだちて語りゆけるが、その一人は英人にて、をりふし彼方より來かゝる老人の禿頭を指し、日本通と見えて、あれがハイツルリーと申すのですな、とほゝゑみつゝいへば、他の一人悟りかね、いく度か問ひかへして、ハイツルリー、はあ、貴國ではさう申しますか。

△杓子とオンス

ハイカラ奥様、厨に立ちいで給ひ、アノさんや、そのお杓子には凡そ何オンス位はいるの。下女解せず。分らないの、どの位お醬油が入るかつていふ事だよ。下女やう〳〵うなづき、あゝ左樣で御座いますか、五勺ぐらゐも入りませうと云へば、さうかえ、ともかくもそれでは多すぎるから、二分の一だけ入れてお置きな。

△飽のわた和へ

飽のわた和へ知らぬ先生、さては我を恥しむるよと早合點なし、下宿屋のあるじを呼びつけて大聲あげ、我輩は野良猫ではないぞ。

△苦しき會話

これは或る園遊會であつた話
『奥さん、御覧なさいまし、彼處に居る人は隨分醜男ですね。』
『アラ、あれは私の良人ですよ。』
『オヤ、さうですか、一番醜男は一番美人を妻に持てゐるッて全くですね。』





生活主義と帯の模様

並木英

兩の手を耳にかざして若き血の。流れをきゝぬ、春もゆるよひ。

丁字の花の。高いかほりが、築山の隅から、柔い芝生をうるほして、櫻の蕾、うす赤くふくらんだ頃、ノートの端に、こんな句を書きつけた。まだ一年にはならない。

處女！　といふ紅のほこりを塗つた冠と、世にふれない、聖いあこがれの、翼を握つて居つた、學生時代の、血潮の高鳴！。今は、人妻の名に、平穏な緑の靜を、装ふ身となつた。

空想の世界は、うせた。想像の泉も、涸れた。生きた努力より湧く、地味な、たのしみを味はゝねばならぬ此の頃、私の頭の大部分は、經濟、家庭の整理、三度の食事、といふやうな方面にのみ、絶えず、うごいて居ります。

一體、私は、物事を複雜に考へ過ぎる、癖がある。つまらない事柄でも、横に、縦に、上から、下から、或は、暗く、明く、諸方面より眺めて、なるべく濃い、色彩を見出さうとする。

バッとして。淺い、頭の表面丈けを、賑はすものよりも、くすんだ、かなしい色調をきせて、深くて、長い、餘韻を聞かうとする。ほんとに損な、性だと思ふ。

今日は平日より早く、臺所が片づいた。

三ッの棚を綺麗に拭いて、鍋、擂鉢、御飯蒸などを順序よく並べる。竈はつひ、先日買つたばかりの新品なので、黒塗が氣もちよく光る、板の間を、特別念入に雑巾がけする、私が嫁てから、見違へるほど光澤

が出たので、敷居の白くなつたのと併せて、自慢の一つ。すつかり片づいた臺所を、襷がけのまゝ、見廻す時、今日一日の務め幾分を、はたした滿足が、輕く胸をそゝる。

坊主になりかけた箒で、庭の落葉を、かき蒐める頃、決定つて裏の幼稚園から、賑やかな進曲が、ひゞいてくる。

鳩ポッポ。鳩ポッポ。ポーッポ。ポッポと。とんでこい。御寺の屋根から、おりて來い。豆をやるから

みな、たべよ。……………。

なんと。手拍子、足拍子面白く、眞面目に歌ふのが、可愛くて……。

退屈すると、安樂椅子を緣端にもち出して、垣根越しに子供等の遊戯を偸見する、悪戯小僧のやうだと、御隣の奥さんに、笑はれた。

鏡臺の抽斗を掃除すると、大きな髻止が二つも出てきたので、急に昔の髪(?)がなつかしくなり、ローマに結つて見る。久しく、止めて居つたので、氣に入つた柄形に、あげられない。前髮に空色のリボンを、キユッと、結ぶ。卒業式の頃が思ひ出された。すぐ、解て、純白のを、後にさす。

客でも、來らば……と。それも氣がとがめたので。よして、しまふ。然し、此のローマ丈けは、なにも無いとさびしくつて……。薄色の薔薇を四つ、長く並べて、結ひたのを、左側につけた。

あまり派手過は、しまいかしら?!

でも、まだ、二十にならないんですもの!。もう二三年は、紅の香と、離れたくない!!!……。

日當に夜具を出して干す。メレンス布團は、覆をして。かうしないと、模樣がさめると、家主の奥さんに注意されたので……。私などのする仕事を、經驗ある婦人が、傍で御覽なすつたら、可笑くつて仕方がないでせう!實際、主婦などゝいふ名を、受ける資格は私にない。毎日のページが、落度で黑く、うづまつて居る。

「むづかしい姑のある家に嫁つたら。三日と、あんな

には居られないね」つて、此間、床の間の花瓶を割つた時主人が……。冗談半分だつたのだけど、なんだか私には、痛くひゞいて……。平常は、隨分、へらず口もきけば、理窟も捏るくせに、何か一つ、注意されたり。叱れたりすると、すぐ、萎れてしまふ。

『どうしてから、いつまで世帶馴れないんだらう？」と、自分を攻める次には、

『だから、卒業してすぐ、結婚するなんか、いやだつて、あれほど剛情張つたのに……、寄宿舍にばかり居たんですもの、無理だわ……。』

くだらない愚痴の、混つた、悲しさが、こみあげて、遂ホロリとする。

『ヤーまた、曇して仕まつた。惡い兄さんだねー。オイ、しいさん、これ御覧！ ほら、綺麗な、繪があるよ!!」



人を子供扱ひにして……泣た顔を見たがつて、故と、こんなことを云ふ。怒つても、泣ても、いつも、かういふ調子で、出られるので、ちつとも張合がない。といふて、本氣に叱られたら、それこそ大變!!、此の位が、まだ、有難いのだらう。

午後は、めづらしく、辭書と親んだ、嫁たてには毎日ホーソンの Biographical Storiesを、二三ページづゝ譯しては、夕飯後不審な點を、主人に敎へて貰ふのも日課の一つで

あつた。
「勉強せい〳〵」と、口癖のように言はれるので、三月間は、嫌ひな文典も習つた。不得手な、會話も讀んだ。が、此の頃は、英語の本なぞ、夢にも手にしたことがない。かうして、だん〳〵と智識の世界から、とほざかる。さびしさを、絶えず感じながらも、忙しく追ひかけて、智を求むる餘裕が、私にはなかつた。

なんといふても、責任を以つて、專門に勉强する學生時代が一番だ。

結婚前の修養!! 私は、此の節、こんな問題をしみじみ考へる。教師の鞅勤を雀躍して喜んだ半年前が、あさましい。

○

宵毎に星數增して、路ゆく人の足音にも、冬は立つた。弱々しい日かげ、菊も大方、色あせて、荒んだ庭に枯葉が狂ふ。

家主さんが、小松を四五本植ゑた鉢をもつて來て下すつた。白いレースの、花瓶敷にのせて、明い窓に飾る。私の室は、夏は涼しくて、ほんとにいゝけれど。此の頃は寒くて居堪らない。北國と呼んで居る。

昨日、はじめて、桃割に結つた。御隣の奥さんが、あまり勸めるので。

「一度丸髷に、結つて御覽なさいましよ、奥さん! 若い奥樣が、赤い手柄で大形あげなすつたのは、可愛いものですよ」つて……。また、どうしたつて、丸髷に結ふ氣にはなれない。氣まりが惡くて……。

「今日は、妙な髮してるんですよ。笑はないでね……!」

主人が歸宅つた時、障子を押へておいて、斷つてから開けた。

「バックに出さうな、柄形でせう?」

「いや、どうして〳〵。馬鹿によく似合ふぜ。二三段も品が上がつたようだ。」

冷語のか! 賞讚のか! 當にならない。

「明日は姉さんを、招ふか」

「なぜです?」

『だつて見せたいだらう！ その髪を…。』

すぐに、かうなんですもの。怒ることも出來ない。

家主さんは夫婦とも、正直なそれにいゝ人！。ことに奥さんの、元氣と云つたら…。沈んだ顔色など見たことがない。色の白い、肥つた、若い時代は美人であつたさうな。今でも、眼はうつくしい。大聲で、快活に、よく喋べる。

話題が丸切、赤裸なので。時時聞く人が、顔を赤くする。こんな人が文士だつたら、自然主義とか、なんとか、いふんだらう？ と可笑なる。

私が、書生流の、容子にあまり頓着しないので、

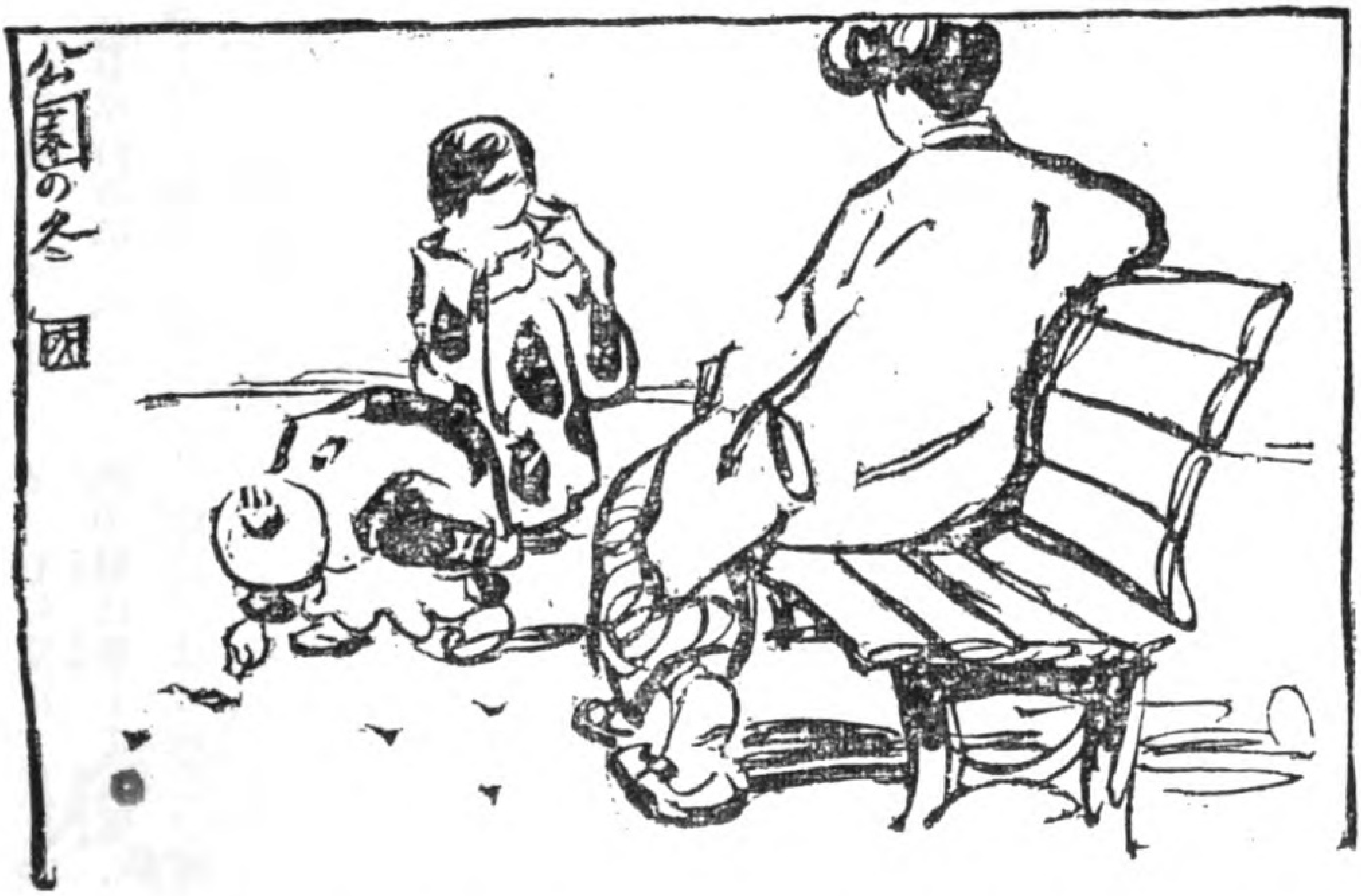
『奥さんや、もう少し、おかまひなさいましよ。綺麗にするのも、若い時ばかりですからね。私のように。

年寄になつちやもう…。私が、あなた位の年にはね、便所にまで、鏡を、もつていつたものでしたよ』

としきりに、氣をもんで下さる。御仕込で、此の頃は、白粉を毎朝、缺さなくなつた。

尤も、此の奥さん、雜誌などを貸して上げても、讀む部分は化粧談と、痩る方法などゝいふ記事ばかり。

『昨晩は私、御飯を一膳きりで止して、おいたのですよ。



處が、寢る時分になつて、御腹が空いて仕まひましてね。また三杯も食べましたよ」

これは、痩るには、あまり御飯を食べては不可能といふ記事を讀んだ翌日の話。罪のない人だ。

「鮭を食べると色が黑くなるさうですね。御芋なんかもあまり、よくないさうですよ。」

なんて、話は、いつも、こんな題に極つて居る。至つて、物事を苦にしない、樂天家な面白い奥さんだ。世間者!! 奥さんと御話する度に、いつもさう思ふ。一面、たしかに悟つた方だ。

「悲觀を超越した。樂觀でなけりや……。私、薄つぺらな樂天家なんか嫌ひ!!。」

つて、云ふたら、「あんたは詩人だ」なんて主人が笑つた。

私には、面白とか、可笑とか、悲しいとか、口惜しいとか、いふものに對して、私全體を注ぎ込む、ことが、出來ない。どこかに、醒めた、冷靜な、自己の片割があつて、笑ふ時でも、泣く時でも、傍で、嚴しく監視して居る。或る程度まできり、喜ぶことも、悲しむこともゆるされない。それ以上深入して、一時の興に、感情に迷ふ時は、監視者が「自己を欺いた」、といふ、名の下に、それは〱不快な汁を、心全體にそゝぎ掛ける。此の純潔で、峻刻な働を、道德心とでもいふのかしら!。ともかく、自分を遠く離して、眺めると、缺點も見えれば、落度も、わかる。

だから、誹れたつて、さほど失望もしないし。賞められたつて、無暗にうれしくない。

○

日光が雲にかくれた。風が寒い。日沒が早いので。三時半頃から、夕飯の仕度をはじめなくつちや間に合はない。晩餐は一番苦心する、といふても、どうせ私の技倆、高がしれて居る。

結婚でも、すると、すぐ知人が、面白い點に注意なさるので、をかしくなる。先日、クラス會があつた時他に用事があつたので、缺席かつたら、山香さんてば信乃さんに、「しづ子さんは、乾度御目出度、御病氣な

んでせう！　あまり御若くて可愛想ね」って仰有つたとか。道理で、室町さんの御手紙に、變な、文句が書いてあると思つたら……。

「もし、さうでしたら、第一番に、クラス會に御通知申上げますから、それまで、御安心遊ばして、御待ち下さいまし。」

と、思ひ切つて云つて、上げた。私も、いつの間に、こんな鐵面皮になつたのだらう！。

内藤樣の御作に、殆ど洩れたことのない、本郷の通も、私には、さして、ゆたかな詩境でない。活氣のある、賑な、普通の町だ。尤も此處は、巣鴨に近い區の片端、從つて、大學や、一高とは緣がとほい。

魚屋の小僧や、八百屋の番頭と親しくなり、電車賃を節約して、豚の半斤も餘計に買つた方がいゝ、といふような、質實な頭に化した自分には、何處に行つたつて、うつくしい詩想の湧う筈がない。

平凡な妻である。

晩年の岡は迫つた。

音もなく、年は逝く！！

新年に飾る、晴衣などは、こしらへる餘地もなければ、造りたいとも思はない！

貸もなし、借もなく、さしたる心遣ひもない。

平凡に年を送り、年を迎ふるのが、幸福と思ふ。

あゝ、もう、豆腐屋の聲が聞える。火でも起こさう！。

▲自然にかなふた料理法

一般に世間で料理法の研究といふことは、日々遊んで暮して居る奥さん方に屬する閑問題のやうに見做されて居るけれども、實は國民の健康上及び經濟上の大問題である。抑々人體の血液を調製する作用として、體内の方法を消化といひ、體外の方法を料理といふ。故に言ひ換れば料理とは體外の消化であり、消化とは體内の料理法である、料理法とは怎ういふ重大な意義あることを先づ承知して貰はなくてはならぬ。往々にして生半可の料理人が滋養を主とする料理物を調製する爲めに、材料の中から、血液の要のない部分を取り去つて使はぬことがある。之が非常な間違ひで、動物でも植物でも普通に食用に供せらるゝ物であれば必ず人體に何等かの效益を供する働きを持つて居る。血になる成分の物でなければ消化を助くる成分を持つて居る、血液にならないからといつて一概に棄つるのは未だ料理法の眞義を解しないやり方である。現に鷄は砂を食う、之は砂が鷄の體内に入つて血となる譯ではないが、消化を助くる作用を起すのである。故に料理に注意する人は先づ此點を善く心得て、煮るにも、燒くにも、又生で食膳に上せるにも、材料の自然性を善く吟味して其天與の成分を無效にしないことが料理法の眼目である。



▲女と噓

鼻のみ目立ちて白きまでに白粉コテ〳〵とつけたる女の、風邪や引きたりけん、噓するは何となう皮肉に思はるゝものなり。

此女ならばなど思ひつめたる男の前にて唯一つ噓すれば、多くは男の方にて愛想つかすものなり。恥かしき思ひしてうるさき男斥けんよりは、噓一つするこそ容易けれ。

さはいへ噓したる顔の殊にいぢらしなど云ひて喜ぶ男なきにしもあらず。噓一つだに無心にはなされざる女ほど、世に哀れなるものはあらじ。

▲女と欠

電車などに乗りたらんとき、若き女の欠伸して白き小さき指、口に常てたるは何となう嬉し。まして蒼白き顔して寢亂れ髮の女の、少しく赤うなりたる目に一滴二滴涙の溜りたる、こよなう個かし。

色黒く口大きなる女などの、磨きたる事もなき汚なき齒現はるゝまで、口大きく張りて欠伸して手もて覆ひ隱さゞるなどきたなくも亦見憎しましてア丶〳〵など大きな聲出すは、人もなげなる振舞にこそ。

馴染みたる男に倦き果てたる女の欠伸は、口張る事も涙出づる事もあらざるべけれど、見まはしうこそ覺ゆれ。

▲女と繪

美はしき女はさながら繪とぞ思はるゝ。男心は生きたる女のみを望むものにあらず。繪の女をぞ求むる人多かる。

醜き女の着飾りて誇りやかに馬車などに乗りたるは、鳥羽繪にも似て嬉しからず。色白きは七難かくすなどいふめれど、醜き女の色白きなどはかへつて憎々し。色黒くて汚なき衣着たらんには、あはれ悲しき繪にもなるらんとぞ思はゆる。

美はしき「女の繪」など眺むる女の醜きほど、哀れを催さしむるはあらじ。

臺灣人の歳暮

在臺北　稱　裕　軒

△神祀り

臺灣での年末歳始の行事はやはり陰曆に則つて清國時代の餘風を傳へて居るが、從つて珍奇な話柄もあるのである、愈々歳暮らしくなつて來るのは陰曆の十二月十六日からで、臺北の艋舺・大稻埕方面の各商賈では歳終の牙祭といふのを行ふのである。臺灣人は之を尾牙ともいふて中々の賑かさである、まづ各商店では一家の神樣を祀るのであるが、此祭は主として古參の番頭の役目になつて居つて年内の商ひ其加を感謝してそして來るべき新歳の神助を祈禱するといふ譯合で此日は番頭以下雇人の大幸福日であつて全く平生に無い御馳走を頂くのである。

△歳の市

臺灣でも内地通り然るべき町の通りに歳の市がたつのである。内地では門松で歳始の戸口を飾るのであるが臺灣人は門聯と曰ふて、六七寸幅に丈五六尺位の赤紙を飾るので此門聯が往來の繁い各所に賣出されるのであるから却々に見事なものである、門聯は勿論赤紙の儘ではなく、皆夫々吉祥瑞兆の文字で固められた對句が墨黑々と書いてある。目に一丁字ないものは大抵いゝ加減に見立てゝ買つて來る。又少し注文でもあるものは商人であると自家の家號を書き込んだものを特に書せる。即ち義勝といふ商店なれば「義理昭彰義成業裕」「勝心貿易勝布成宜」といつた風で對句の頭に商號が割入れてある、又は「家居化日光天下」「人生春風和氣中」などいと春めいた文字で對句を爲したものを喜ぶのである、それから少し氣のきいた門聯になると墨汁の中に砂糖を入れて墨色に光澤を備へしめるとか、更に手を盡したものになると金泥で文字を書くなどもあつて、之を門頭に貼出して古いものと取換るのである、斯くして二三日を經て愈々押迫つた年の瀬となると千門萬戸悉く赤い門聯によつて蔽はれるのである、實に臺灣の年の瀬は赤いものであるといつてもよい。

△竈神の昇天

二十三日の晩には竈の神樣を祀るのである。が此の神は天に昇るといふ一つの迷信が臺灣人の頭に注入して居る、で神馬だとか轎だとか牛車だとかいふ風の乘り物を印刷した赤い紙切れを燒くと、竈の神樣は此煙に乘られて天に



昇られ、一家年中の吉凶となく、禍福善惡の總てを天上の神に告白するので從て來春の家庭に幸福を齎らし歸る樣にと家々の老若男女は集ゐになつて此昇天の首途を盛にするといふ風である。

△天神の下降

これも迷信の一つであつて、二十五日になると天の神樣が下界にある人間社會の實狀を探りに降臨せらるゝといふので、此一晝夜は極めて謹愼を守つて僞り言など言はないと心掛けて居るなど中々に殊勝なるものである。

△地基主のお祭

二十九日の晩には一家に御馳走があつて地基主のお祭といふのをする、地基主とは字義でも略ぼ解せられる通り土地の神樣のことである、尚此祭日は三月三日、五月五日、七月七日、九月九日等の日にも行ふので内地のお節句によう似た點がある。

△大晦日の晩

愈々大晦日の晩になると圍爐といふて、一家團欒の親しい宴會が催される、これは一つの圓い卓を老幼の順序に圍坐して、情を溫めるとの意味で卓の下に火鉢を据ゑて火を置くの習ひで、所謂酒池肉林とも云ふべき御馳走を並べて夜明しで其年の終を送るのであるが、こゝに一つ面白いのは内地の掛乞の提灯といつた樣に、臺灣人はカンテラに出來る丈け油を一ぱいに注ぎ、これに灯を點けて掛取りに出懸る、そして其カンテラの油がある限り取引先の掛金を幾回となく請求し廻はつても差支へないとしてあつて、愈々一杯注いだ油が盡きて火の消えた時は請求を止めて歸らればならぬといふ習慣である。

△家を治むるの秘訣は豐なる日毎に勤勉節儉を爲し心いつも救助を人に乞はざらんと勵むにあり。
△勤勉と節儉の二事は家を治むる根本にして、心怠り行ひ驕るときは終に必ず貧苦の病に罹はるべし。
△節儉を守らんよりも先づ奢心を禁ずべし。
△未だ就らざるの功を圖らんよりも己に成りたる業を保つに如かず。
△己の欲ざることをば人に施すことなかるべし。
△事我に益あれば行ひ、益なければ行ふべからず。





▲女と鷄

小春日和の朝など、小さき藁葺の屋根の下にて、コヽ〳〵と鷄呼ぶ乙女の田舎らしき立姿はまたなうゆかしう思はる。

都の中にて二坪にも足らざるやうなる小さき庭に、大きなる鷄、七羽八羽飼ひたる家の奥様など、鷄呼び給ふとも相應はしからず。まして家の鷄は少しも玉子を産まないのよなど人に語らひ給ふは、あな慾深き奥様やと思はれてゆかしからず。

廣き畑などにてあそべばこそ鷄も可愛けれ。牢に同じき狹き庭などに鷄の群居るは面白からず。情なき行爲せさせ給ふ奥様の、かへつて自

由来めらるゝ此頃こそ恐しけれ。

▲女と皺

皺とし云へば年老いたる人を思ひ出すものなれど、若くてもなどて皺の寄らざる可き。物事何彼とクヨ〳〵する女などは三十路にもなるやならずにて早皺の寄る事多かり。

年五十にも餘りたる女などの、いやが上にも肥りて皺も白髮もなきなどは、かへつて女らしからず。

顔にのみ皺なければとてあながち誇る可きにあらず。外見美はしき女などの、心には、顔に皺多く寄りたらん女などの心よりも、皺多く寄れるものにこそ。

皺隠さんとて白粉塗るとも、皺の所のみわきて白うなるは免れがたき事になん。隠すとも現はるゝものにしあれば、隠さゞるこそよけれ。

▲女と爪

爪細長くして美はしう光れるは女らしきものなり。爪の尖の二分三分も延びたるを切りもやらず、黑き汚なきものゝ入りたるをもとりもせで、打ち捨てたる女などは、臺所片付くる事もやなど疑はれて女らしからず。

美はしくとも爪の長き奥様などは、あの爪もて旦那様をかきむしるにやなど思はれて、けうときものゝ限りにこそ。

新婚旅行

内藤千代子



思へば夢の様な一ヶ月。

せまい／＼岩藤式の額ほどな、小さな家で御座いますけれど、巣立ちの雛のさへづりぶり、お笑ひ遊ばして下さいませ。この頃では良人の留守中にお來客がありましても、しばらくはお相手も出來るやうになりましたし、さう／＼はいつまでも恥かしくもなく、いまさらホネームーンでもありませんけれど、うらゝかな小春日和に誘はれて、こんど土曜から日曜を利用して箱根の紅葉ときめました。

秋空一碧、春のやうな長閑さに身軽になつて板じめ縮緬の帯しめたまゝ縁に背をむけてゐたら先刻おとなりの奥様が「けふは奥様のお妹さんでも來てゐらつしやいますか」つて乳母にきゝたさうな。髪結さんが來て丸髷に結ふ。この前のよりよく出來たやうで、うれしくそつと鬢に手をあてゝみた。燃え立つやうな緋の手柄、金蒔繪の中挿に對のさし櫛、ふつくりした前髪に榮えて根には奴元結をきゆつと結ぶ。

召してゐらつしやるお洋服のちりをはらつたり、持つてゆくものなど揃へてゐると、流石にけふはいつもよりお早くおかへり遊ばした。落ちつかぬお晝餐をすまして、すぐ仕度にかゝる。良人はひとりでさつさとお召替、雪白のカラーをまはつて濃鼠地のハイカラな

ネキタイがかつかうよく結ばれた。
私はやつと帶を締めをはつて、乳母が着せかけてくれた濃紫の無地お召の半コートに袖を揃へてると、ちつとそれをみてゐらつしやるので。
「華奢過ぎまして、可笑しくつて？」と袂のあたりをかへりみると
「いゝや」とむづかしいお顏してかぶりをおふりなさる。
留守は乳母と、夕方から親戚の小山さんと云ふ學生がとまりに來てくれる筈なので、お茶菓子やお布團の事まで乳母によく〳〵云ひふくめ、良人はもうオーバも引かけて、焦れてゐらつしやるにいそいで立ちいでる。

秋晴の市街をゴム輪の銀輪音もなくひらめいて、チリンと新橋に轅棒おろす。
丁度もう發車時間で、おしつもまれつ私は良人のあとに引そふてプラットホームを小走りに步いた。
汽車中では私のとなりに綺麗な奧樣が生後七月ばかりのお子樣を大切さうに抱いておのり遊ばした、白羽二重の帽子かぶせて、緋紋綸子に白裏の袖なし、お胸にお顏をおしつけてゐらつしやるのでわからないけれど、どんなに可愛いお子樣であらう。母ちやまは束髮にあそばしてすらりと脊の高い、米琉のおみ袷に薄紫地の友禪のおみ帶、一寸したおなりだけれど、ほんとに好ましいお姿だつた、大森でお下りになつた。
ホームを馳ける雜然たるひゞき、ドアの開閉、薄ぐらい場內、横濱、横濱、横濱、とどなつて行く。
「雜誌でも買はうか、」
「エ、。」
そとお顏を仰ぐ、いろんなお話もしたいけれど、多くの乘合の手前さうもならず、たゞつゝましうひかへてゐた。
なつかしき相模の海よ。南湖！　大磯！
國府津に下りたのは、沖の釣舟夕陽を浴びてかへりくる頃であつた。
おなじみの小田原電車に一時間あまりをゆられ〳〵

て湯本につく。

水勢はげしき早川ぞひの、福住の一夜は水音に明けて、朝の湯槽にまだ人影もなかつた、ぢつと身をしづめれば、爪の先まで透きとほるやうな色の白さ。

良人が楊子ふくんで、黄縞の丹前に懐手したまゝ寝ぼけ眼ではいつてゐらつしやる。

△

朝まだき、露をわけて出發、舊道へとこゝろざす。

パラソルついて結付草履、片褄取つて白地友禪の長襦袢ひらめかした甲斐々々しいいでたちに、『えらいな』つて良人はお笑ひ遊ばす。



澄み渡つて朗かな好天氣、一歩々々、二里十八町の山路をのぼるのである、ゴロ〳〵と石ころ坂の、歩きにくいことおびたゞしい。絹糸ほどの雲も動かず、風もなく、額はしつとりと汗ばむ。

くだけ落つる瀧つせ、水晶のやうな激流は石をまろばし飛沫を散らす、四山今やよそほひ半ば、翠の杉に相映ず木々の紅、橙色、朝日にきら〳〵と輝くさま、美しとも美し。

あはれ參勤交代の大小名が行列美々しき下り上りや、雲助共が長持唄、榮えし樣はいまいづこよ、だんだんと草にうづもれ、土にうづもれ、錆屑にうづもれ、沿道の杉並木はずん〳〵きり倒されて了ふ。これが昔の東海道、と思ふと何だか涙がこぼれました。

須雲川にそふて畑宿と云ふ村に入る、コスモスの花がゆらめいてゐました、良人は幾度か氣づかふて下さるけれど、かよはいやうでも私は、まだ〳〵息をきりきり氣焔萬丈でした、白筋の帽子かぶつた人が、上衣も脫ぎ捨て太いステッキ杖に、汗をふき〳〵後から上つて來る。

峠の樫の木茶屋と云ふのにやすむ、しぶい樣なお茶すゝつて、名物の力餅を食べました、良人は美味いつてお代りまでなすつた。

こゝへ郵便の集配人が大きな袋をかついではいつて來た、先剋お休みなさつた茶店で奥樣の忘れ物だつて菫色の絹ハンケチを投り出してくれた、さう〳〵、急に袂などさぐつてみて、何度もお禮云ふ。

箱根路を我が越えくれば伊豆の海、ならで、わけこし方を見返れば、はるかに國府津小田原あたりの海岸渚に白く浪のよる見ゆ。

はげまされつゝあへぎ〳〵城見ず坂をのぼりきると、始めて銀のやうに輝いてる湖水が眼の前にひらけた、思はず「あらつ」つて驚喜の聲をあげた。

權現の一の鳥居をくゞつて元箱根村へ下りる。鬱蒼たる幾百百年の杉並木の下右には湖水の水がチラ〳〵光る、離宮の前を過ぎて關所のあと、蔦のからんだ老松がたゞ一本、くづれ果てた石垣は草にかくれて晝ながら細い〳〵蟲の音がする。

洗濯屋の屋根にはまつ白なホワイトシャツが、秋風に片々と飜つてゐる、こゝ箱根宿に名高き名家、旅館舊本陣の玄關に露と泥とによごれた足袋を草履ごとぬぎすてゝ、お上壇の間と云ふに案内された。

薄暗い床の間には花籠に投げ入れた秋草が、かさかさに枯れたまゝ取りも捨てずにある、黑塗金紋つきの衣桁かけ、みだれ箱、大きな友禪縮緬の座布團を二

つならべて請じられ、何だか笑ひたくなつて了つた。

縁のチエーヤに倚る、湖水はすぐ目の前で、サッと冷たい風が鬢をかすめて過る、となりの何とかホテルの丹塗の欄干が水にうつゝて配合の面白いこと、離宮の洋館、小波の中にくつきりさかしまに立つ。

三國一の美姫不二姫は、正面に雪の肌を惜しげなくあらはし乍らも、誰に恥ぢてや湖上に水鏡の影はなかつた。あれ、ボートが出て來た、良人の手からオペラグラスを奪ひとつて眼に當てると、



左岸の山の細道を、脊より高く脊負階子で何かせおつてかへりゆくきこりの姿。

往にし日、西歐の詩人スコット：：、湖上の美人を思ひ出さずにはゐられなかつた。

カトリン湖に
櫂とりし
エレンの君が
おもざしは
露もわが身に
備へれど、
……

お晝食は鯉の洗ひに赤腹の鹽燒、鱒のフライ、牛椎茸のお吸物、なか〱美味しいのでせつせと平げた。

髪かき上げるまもなくて、お舟のお支度はよろしう

御座いますと云つてくる。

　可愛らしい女中が二三人、どろだらけの水草の上に手をついて『御きげんよう』と送つてくれたのは氣の毒だつた。

　良人はふなばたに片肱かけて、お品のいゝ皇太子式のお髭のお口元から、薄紫の煙りをふきつゝ、小聲でローマンスを口ずさんで居らるゝ。

　梱現樣へおまゐりするつもりだつたけれど失敬してすーい／＼と、鏡のやうな水の上でオリーブの山がチラ／＼みだれる。兩岸の秋色、木々の葉は紅に照り、艫聲悠々！

　晴れ／＼とした青空、紅葉に染ゆる秋の日は、わきめもふらず舟をやる船頭の、煉瓦のやうな首筋や、頭の天ぺんのカタパンほどの禿に光る。

　眞白い象牙柄の小ナイフを、つや／＼と紅玉のやうな柿にあてゝ

『貴郎！』

『いらない、』

『あれ、左樣では御座いませんに……』

　相手にせぬ良人うらめしく……そのまゝ物いはねばうつとりとして、ともすれば睡魔のおそふを、無理に大きな眼をみはつてた。

　湖尻からまた十二三町杉の下道や秋草の中をぬけて姥子温泉についた。こゝから山駕の御厄介になる。

　薄ぎたない駕布團の上に小さく坐ると、傍から良人はいろ／＼と、あゝせ、かうせ、と姿勢を直して下すつたので、やつと少しはのり心地がよくなつた。

『では御免遊ばせ、』會釋すると、えいしよと一ゆり、肩から肩へ、橋のやうにかき上げられた、良人は後になり先になり、スチッキふり／＼のぼつてゐらつしやる。

『芳、君の袂が駕籠の脇へこぼれて、こんな千茅の中を行くと、まるで大きな紫の蝶々が狂ふやうにみえる、』なんてお弄かひ遊ばす。

　ふと立ちどまつて、生ひしげる雜木の中から目の覺めるやうな美くしい紅楓の枝をお折りになつた。薄や

我亦紅と一しよに屋根へ結はへつけられて、ゆさ〱ゆさ〱ゆさ〱とゆれる。

熱氣頰を打つ大地獄の光景、御手にたすけられて下りたつたが、木もなく草もなくごろ〱と荒れはて、

足下がポツ〱とあたゝかく、氣味が惡くてとても一ところに立ちどまつては居られない。

熱湯の流れにそつと野菊の花をむしつて投げこんでみた淺黄色の赭土のやうなのがブツ〱と湧き立つてゐる。「鷄卵をもつて來てうでればよかつたねー」なんて呑氣なことを有仰るけれど、私は硫黄の香りにむせび返つて、もう澤山とそこ〱にふたゝび駕籠をいそがせた。



夕陽と落葉をあびて、かけ聲勇しく宮の下奈良屋へ入る。

終日のつかれをあたゝかく清い温泉に洗ひ流してほつと一息、夕づく日は山の彼方に沒し去つて、湯上りのほてつた頰を冷たい風が吹いてゆく。

まばゆい銀燭のもと、良人も打ちくつろいで、一本のビルに一早陶然といつになくお言葉の數も多い。

「君はものよろこびをする質だから、こんなところへつれて來ても、張合はあるけれど、少し氣をつけなければ、他人に輕侮の念をおこされるよ、」

「はい」

『柔順なのもいゝが程度問題で、全然個性を没却するやうなのも困るぢやないか、君は一體氣がよわ過ぎる、優しい奥様がいつまで通せるもんぢやない、憎まれ者になつて今少ししつかりして貰はにやならん。』

『はい、』何だか悲しくなつて俯いて了ふ。

『女は幸福なものだ、驚くうちは樂しみがある、つてまつたくだね。』

『…………』

『これでも華族の姫様より、君の方がよかつたんだからねえ。』

『あら、何を有仰るので御座います。』

羽織もぬいで、なまめかしい伊達卷姿のはづかしく、電氣の光をよけるやうにして小さくなつてるのを、わざとまじ〳〵みつめてゐらつしやる。

『貴郎、お風邪をお召し遊ばすな、夜汽車の風は寒くつて……』時間もせまるにお召替をと立ちよれば、み胸のあたりほのかに匂ふヘリオトロープ、ヅボンを引はつたり、脊のびしてカラーを直したり。ちつと顔見合せて、

『芳、歸京たいかい、そんなに乳母の傍がいゝか。』

『かへりたくわ御座いませんけれど……』

障子によりてうなだれて了ひました、歡樂の後の寂寥たまらなく寂しい心地になつて、何の泪かホロリとしたのでした。

銀河聲なく西に流れし温泉宿の秋の夜のさゝやき、君がおん手は我が優肩に。

『芳、』とたゞ一言、

『敏様!!!』





屋敷街より

松平鏡子

△

私いま庭から上つて來ましたばかり――。

白菊の花に赤い斑點が出來たから見に來て呉れつて、小弟が云ふもんですから……いゝえ、何でもないの！霜に當つたからなんでせうよ。餘りいぢつたので、爪の先に迄匂ひが浸み込んで居ますわ、冬らしい氣持の好い馨！。おてがみほんとうにありがたう。もう二月ばかり頂きませんでしたのね、私もどう遊ばしたかと、御案じ申して居りましたの。

先月から小學校へ出ておいで遊ばすつて？そりやあ宜う御座い升ね、遊んでるより餘程いゝと思ひますわ、だつてまあ、最初つから面白い事ばかりありやうないでせうけれど……。

途中が半里も在るんですつて？これからは寒くなる一方ですのに――隱れ場もない田圃つゞきの畔路は、孱弱の御身にどんなにか辛い風の當りやうでせう？うす汚ない百姓家の、古びた馬小屋を小楯に身をすくめて、小さい吐息も御肩から洩れはすまいかと、私は夫事のみきづかつて居りますの。

せわしいのは何よりようございますわ、少しの隙に讀んだ書物は、腦の一番奥へしまはれてあるやうな氣もされますもの、事にまぎれて厭ふものをも忘れてゐらつしやれゝば、何より幸福だと信じてをります。

――此邊あたりも朝毎にをきあまる霜、建仁寺垣の棕梠繩の結び目に、まるで染めた風に下りて居ますの粉のやうな道路の土は、やはらかく柱を霜に築いて、蹴返せば壞るゝ屋根、玉敷々。足袋の爪先が濡れて、覺えない程冷めたうございます。

わたしは先達て、十日あまりを病床のうちにくらしました。熱を持つた肋膜は、私の舌と唇とを乾かして果は他愛もなく睡眠に導びきます。私は、病氣になつたならば、平常讀めなかつた本も讀まう、人に模倣て感想も書いてみよう、丈夫な時には無駄に費す時間としか思へなかつた拔糸つなぎも、仰向けになつた胸の上に載せて、せつせとして了ひたいと思つて居りましたのに…それ等の事の一事をも爲し得ず、千枚足らずの紙の重みに腕を勞らせて、叢草の一卷をも廣げた儘、意識もなく眠りました。

學校から歸つたいもうとやおとうとは、病人のあるのも忘れた樣に、時としては私の夜着に膝をついてまで、騷ぐ事もあつたものですから、私の枕元は、いつも賑やかで御座いましたの。

私はよく、小さかつた時のことを思ひ出しますよ、繪のやうなローマンスといふけれど眞實ですね、過去に誇をもつのは心苦しうございますけれど、私の幼ない昔、少なくも現在までは、繪のやう、詩のやうであつたに相違ありません、悲しみも、喜こびも…。振りかへる追懷は、あらゆる出來事を美化させて、私の胸に映じて來ます、私は樂しいことばかりでなかつた自分の過去を感謝して居りますわ、いまは只、未來もかくと祈るばかり…。

「習字の清書に朱を入れると、其儘本箱あさりいで昔讀んだ不如歸をその上にのせて、幾年ぶりかで讀みふけりました。此本を見ると、あの時のことが思はれる」

墨痕の美くしい一節をみつめ乍ら、私もあの夜のことをおもひました。不如歸を買ひに四人して行つた神田の街は今からくらべると路幅も狹く、もつと暗い燈火でございましたねえ、桃割れに結つた三人！貴姉と美知子さんと姉とが、紅いマントを被つた私を圍んで：：あの夜の心地に、私はいつも東京堂の前を通ります

テーブルの上に載せた空氣洋燈の花形笠に、前髪の毛もさはりさうな――みんな默つて、讀む貴姉の御聲にきゝとれて居ましたつけ、艶々した林檎の皮を、むかうとする一人もなくつて：：姉なんてそれこそ、袂で顏をかくして突伏して、泣いて居ましたわ。

「山木さん．子といふ奴は可愛もんぢや」あの一言で、片岡中將が全然氣に入つて了つた、私はあの言葉ばかしは、どうしても忘られませんよ。

不如歸の演劇は、見たいと思つて、未だ一度も見ません、美知子さんにもおわかれしてからは尙のこと、あの明るい燭光のかげを、一度もくゞらずに暮して居るんですもの。八月たちますねえ、私はあの緞帳の捲き上るのを見てさへももう堪へられませぬ、かつて、懷かしさにふと繪看板の下に、佇ずんだ事もありましたけれど、拍子木の音、さゞめきの聲――聞いたことのある俳優の科白が、私の耳に傳はつて來るやうな氣がして、私は怖ろしいものにでも觸れたやうに、おづおづと其場を離れましたの：：。美知子さんと見たものは、懷かしいけれど目にふれたくない、また二人して見る迄はと、私は秋の文展へも行かずにすませました。

貴姉も思ひ出して下さるの？、お澄さん！、私は十一月の女學世界の「山路の旅」つていふ口繪ねえ、前を歩くうつむいた人の脊形容が、美知ねえさんに似てゐるやうな氣がして：：おもひ出されますわ、尙更！。あなたとお別れの時、矢張り四人連で行つたのは、たしか歌舞伎座だつたと記憶えて居ます、私はいつぞや電車であの前を通りました、積榭が屋根につかへさうな、もの〳〵しい夕暮で御座いました。

姉は杉浦へ嫁いてから、一人子の母となつてから、

急に年たけてまゐりました。よくみんなして、ちやあちやんだの、ちやあちやまのつて云ひましたわね、久江をちやあちやんだなんて、餘程どうかしてるなんてつまらぬ理窟を云ひ乍らも、私もやつぱり、ちやあ姉さまつて呼んでましたつけ、あの時分のことは、何事でも皆宜う御座いますねえ、最早あんな幼いらしい名をよぶものは一人だつてありやしませんもの。

――どうしてゐらつしやるでせう？美知姉さんは。戀しい姿を求める爲めに、群集を物色する瞳のいろ、私は自分の眼の輝きが怖ろしくなりはすまいかと、獨おもふて戰慄することもあります。美知子様が死ぬ時には、乾度一人で内密死んで了ふでせうから心配なのよ、仲好しだつて何だつて、敎へちや下さらないと思ふとつまらない、乾度ね、かみそりか何かでたゆみなく咽を切つて逝つて了ひますよ、あの方は自分のために、人の生命まで奪はうとはなさらないから：：きつとさうですよ、あのかたねえ、もしも私が一緒に死んしまひませうつて云つたにしても、大きい聲でわざと笑つて、およしなさいよ鏡ちやん、位に云つちまいますよ、私はさう思つてゐるんです、あの方が死ねば殘るのは遺香位なもんでせう、寂しうござんすね、寂しいけれど仕方がない。

來年はあへるだらうと思はれる事もありますわ、何てこともないんですけれど、來春になつたらば：：きつと會へる：：あへませう、櫻も咲きますもの、鳥もうたひますもの、あの可愛い胡蝶が、舞ふてあるく菜の花の頃は――。もうまる一年！、一年なんて、それこそ一月だつて、會はないで居たことはなかつたんですもの。

あなたもまたさうしたらどうしても一度東京へ出ていらつしやいましな、又四人して神田の街をあるきませう、兩側の柳が芽ぐんで、すが糸のやうにみえる四月：：待たれますわ、春が、さうすれば霜も消えて行くでせうし、貴姉の通學路に菫も咲きませう。みんな樂しいことばかりね、たゞ一つある悲しみは私十八になるのが厭でたまらないわ。十七のとしのうちに、必ずも一度手紙をかきますつもり：：

お澄ねえさん、さやうなら

婦女界

拾貳月號

◎嫁と姑……文學博士 法學博士 加藤弘之

◎子供の育て方の研究

△迷信は子供の恐怖心を誘ふ……吳博士
△遊戲は兒童の將來に影響す……高島平三郎
△子女教育は絕對に放任主義……山路愛山
△子女の躾方と我家の日常……コーツ夫人

▲如何に家庭は改良すべきか……村田勤
▲社交場裡の婦人……秋元子爵
▲新しき女としての清少納言……梅澤和軒
▲惡魔を退けた模範的女學生……伊賀校長
▲孝悌の人、正岡律子女史……內藤鳴雪
▲貞淑なる妻、善良なる母……菅原痴豫

◎小說「初秋」……寒川鼠骨
◎小說「みあひ」……陽みち女

◎結婚せんとする方々の爲に……大瀨醫學士
◎便利なる子供の洋服……松浦政泰氏夫人 松浦峯子
◎料理の前後の心得と材料の買入方……琢間つね子
◎小兒の呼吸器病の看病法……豐福醫學士

△活動する玩具のいろ〳〵
△歲末とお正月の準備……
△植物にも親の慈愛あり
△子供のお親類は犬……
△泰西名畫解說……
△英詩冬の月……若月紫士
△文藝其月々……
△十二月の料理いろ〳〵

一冊十五錢郵稅一錢五厘 六冊九十錢 十二冊一圓七十五錢

東京神田 同文館

懸賞新題 一等五圓 外等數 ● 和歌俳句習字繪畫 一等三圓 其他等數

女(その一)

新案

紳士淑女用

明治四十五年

ポケット日記

A、B、C…………三種

●本日記の特長は何れも特製總革を用ゆ其手當りの滑かにして三方金縁を附したる、共に見ざる逸品たり。又製本の堅牢なる、日常携帯に至便なる紳士及淑女用として優美高尚なる日記なり。

●本日記は何れも薄手の舶來用紙を用ゐ、ポケット用として携帯至便なり、尚前記三種を調製し、發賣せり各種亦特色を有せり。

●附録‖金錢收支表、郵便規則、税法、年齢表、補遺記事欄等の如きは日常座右缺くべからざるものなり。



A號……(厚形)
總革製三方金縁舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁函入り
(記入欄一日一頁宛)
正價金五十五錢
郵税金四錢

B號……(薄形)
總革製三方金縁舶來紙薄手
美本紙數二百二十頁函入り
(記入欄一日半頁宛)
正價金四十五錢
郵税金四錢

C號……(薄形)
總革製三方金縁舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁前後季二冊差換函入(特長普通手帖兼用)
(記入欄一日一頁宛)
正價金六十五錢
郵税金四錢

●右三種共…吸取紙附き

東京 博文館 本町

當用日記　明治四十五年

▽賣捌所は全國各地の書籍雜誌店及紙類文具店到る所にあり

全國に二百萬の需要者を有し海外に迄發展し吾が博文館の獨占事業たるの觀ある日記類は編纂印刷製本の精を拔き美を凝らし既に市に出せり江湖諸君希くは倍舊の好評を賜はらんことを

當用日記は卷頭に皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等色刷して掲ぐ……

附錄
●金錢出納録●知己人名簿●雜録●諸統計表●米價換算早見表●諸税則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年曆●徵兵規則……

((當用日記定價))

（紙數各五百四十頁）

- 大形（菊判）上製（舶來洋紙總クロス金文字入）○正價五十五錢　郵税十四錢
- 中形（四六判）
  - 總革製（舶來洋紙總革装　金字入堅牢美本）○正價金八拾錢　郵税十錢
  - 特製（舶來洋紙脊皮　美製金文字入）○正價金五拾錢　郵税十錢
  - 上製（舶來洋紙總クロス金文字入）○正價金卅八錢　郵税十錢
- 小形（菊判半截）上製（舶來洋紙總クロス金文字入）正價金三十錢　郵税八錢

發兌元　東京日本橋

長距用電話　本局二六二〇番

女（への四）

懷中日記

博文館發行

趣向
體裁

（當用日記）日々欄には過去同月日の重要歴史、七曜、干支及び詩歌俳句等を上欄に錄し天氣、寒暖、發信、受信及び摘要の記入欄を其傍に新設す尙各月の初めには其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新設し、毎日記入欄には細罫を付し秩序ある記錄たらしむ

附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、四季名勝直覽、及び內外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり

（懷中日記）毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案內を揭げ日日の上下欄に內外名家の格言を揭げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を付記し卷末には當用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸稅則及最新重要の統計表等百頁を付す

▽**取次希望**の方は御申込次第精々御便利に御相談可仕候

懷中日記卷頭には皇室皇族の御案榮暦代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として揭げ新形は背面に他の二種は腹部に鉛筆挿を設く

((懷中日記定價))

新形（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入細長形携帶至便）
▲正價金貳拾錢　郵稅貳錢

上製（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百〇六頁）
▲正價金拾八錢　郵稅貳錢

並製（舶來洋紙模クロース表紙金文字入美本紙數三百六頁）
▲正價金拾貳錢　郵稅貳錢

（紙數各三百〇六頁）

附錄
◎雜錄◎統計表◎利子早見表◎鉄程規則摘要◎郵便諸規則◎徵兵規則大要◎年齡早見表

振替貯金口座　東京二百四十番

本町三丁目　博文館

女（ろの五）


DIARIES
1912
◆英學新報社編纂◆
明治四十五年
英文日記
當用
總布特製
價五拾錢
郵税八錢
懷中
總革特製
價卅五錢
郵税四錢
愛用諸君の湧くが如き歡迎と厚き御援助に據りて著しき發達を遂げたる英文日記明年用には獨特の編纂法に依り一層の精を盡し＝爾來年毎に改善を加へ來りて＝殆んど理想に近き實用體裁共に兼備したる＝最善の模範的日記!!!倍舊の御愛用あらんことを偏に希ふ。
△實益と體裁に共に冠絶せり眞に是れ日記中の覇王なり
發兌元
東京本町 博文館 振替二四〇
東京神田 東京堂 振替二七〇

日本の簞笥は不經濟

西洋人は日本の婦人の樣に幾枚も高價な着物をこしらへて、しかも一年に一度か二度しか着ない着物や、一筋百圓に近い帶などを簞笥の底に仕舞つて置くなんて事は致しません。御存じの通り西洋の着物は上と下とか別々になつて居ります故、あれとこれとを組合せて着る事も出來ますし首の廻りと袖口へレースを付けたり、ネキタイを取り替へたり、帽子の飾などを種々に致しますとまた、目先が變つてすゐ分面白くなるので御座います。晴着は參內の時の禮服と、訪問服、接客の折に着る位なもの丶外は、自宅で裁縫致しますと、洋服屋で三十圓位かゝるものも十圓內で出來上りますから、主人をはじめ子供達の平常着は皆私が仕立てます。幾十圓もかゝつてこしらへた着物を、幾枚も〳〵簞笥の底にしまつて置くのは丁度現金を銀行にも預けないで金庫の中にしまつて置くのと同じ事で御座います。その上流行は年々に移り變つて行くのですもの、こんな不經濟な事は御座いません。西洋料理を致しても道具だてからしなくては出來ぬ樣な事では、家事經濟上普通の家では困難で御座います。私共では多く西洋料理を戴きますけれども、出來る丈け日本の臺所道具を使つて居ります。それで少しも不自由は感じません。（長井博士夫人）

△事をなすに當つては先づ後悔を想ふべし

△愚妻の常として夫の勤勉勞苦して得たる金錢を浪費して惜むことを知らざる者あり、これ家を破るの根本なれば深く戒むべきなり

△凡て物を製造する時は必ず堅牢を旨とすべし

△幼少者に小兒を托するは世間の慣習なれども幼年者を傅姆となすよりしてその子の生涯を錯る者少なからず

△性拙ければ身に暇多し

△客を請ひて吝かなれば反て怨みを招く

△言我に益あれば説き、益なければ説くべからず

△身を立つるには當に一歩高かるべく、人を處ふには當に一歩下るべし

△自ら謙れば人いよ／＼信じ自ら誇れば人必ず疑ふべし

△言語節を知る時は愆少く、舉動節を知る時多く得意の時に因れり

△小人を欵待するには宜しく寬なるべし、小人を防ぐには宜しく嚴にすべし

△事微細なりとも必ず疎略を防ぎ、事嫌疑あれば當に毀を避くべし

△貧賤なる時他日富を得るとも必ず驕るまじとは云へど富を得たる後貧賤を忘れざるもの少からざるは戒むべきことぞかし

△家を敗る子弟は金を用ふること糞土の如くにし、家を成す子弟は糞を積こと金の如くにす

△女の長舌は最も戒むべし

△分に過ぎて福を求めば禍を招き、分に安んじて禍に遠ざかれば自ら福を得べし

△小人は專ら人に恩を望むも恩過ぐれば更に感ぜざる也

△己に克てば怒を治すべく理に明なれば慾を治すべし

は悔少く飲食節を知る時は疾病少く、愛慕節を知る時はもとめ少く、歡樂節を知る時は禍少し

△勢をして弓を張るが如くならしむべし其力七分なる時は強く、これより過ぐれば折れるなり

△耳を傾けて人の私語を竊聽すること勿れ

△目をそばだてゝ人の房室に入るを窺ふこと勿れ

△借財して家をつくれば、その結果必す家を賣りて錢を還すに至る、譬へば身に纏はれる病の如く、又底のなき坑の如し之を醫さんとすれども癒えず、之をうづめんと欲するもうまらざるに同じ

△心を虚くすれば能く事に應じ、心を平かにすれば能く人を服すべし

△名を成すは毎に窮苦の日に在り、事を敗るは

△一家の計は和にあり、一生の計は勤勉にあり一年の計は春にあり、一日の計は朝にあり

△白日に爲せる事につけて夜來必ず己を省るべし

△勤勉はこれ無價の寶なり

△得ることを貪る者は身富めども心は貧し

△人信實あるにあらざれば諸事決して成るべからず

△才至て拙きも勤めて拙きを補へば後來必ず人と爲るべし

△人の名譽を汚すこと勿れ、人の成功を毀こと勿れ

△健かなる時常に病を想へば身を保つべく、裕なる時常に乏を想へば家を守るべく、少さき時常に老を想へば學を力むべく活ける時常に死を想へば道を勵むべし故に人遠き慮なければ必ず近き憂あり



人生の表裏

（平和に暮す妻の述懐）

野菊女



ぎよつとして目がさめた……魘えたやうに目があいた……。

そつと頭をあげて見ると、ゆらめく灯光は、次の間の机の邊を流れて、ぱたり〳〵と、何か追ひまはしてるらしいのは、良人である。

あゝ、よかつた……。私の生んだ百合ちやんを、魔物のお婆さんが盗みにきた、其足音だと、思つたのは夢だつた……。

「貴郎……、どうなさいました？　何をしてらつしやるんです……？

しつとりと汗ばんだ胸を、枕元に置いといた、手巾で拭く。

「む、これさ！、こいつの聲が耳について、どうしても眠られないんだよ……」

手燭に近く指に撮んで、バサ〳〵もがいてる黒い蟲をお見せなさる。それは蟋蟀ではないか……、どうしてまぎれこんだのかしら……。

良人は、カタコトさせながら、雨戸をあけた。すうと流れこむ冷たい夜氣は、ふわりと蚊張をあほつて、しどけない寢衣の襟元がぞつとする。

「そつちで、おなきッ……」と子供らしい調子で、戯言いひながら、良人は蟲を放したらしい……ガタンとザルが落ちた。

蟲にまかせた十坪の庭、もう露も滋からう。默つて臥床にはいつた良人は、私の方に後を見せたまゝ、身

動きもなさらない。

沈默の空氣を、わづかに動かして、時計が二つ鳴つた。ぢつと目をつぶると、何ともしらず瞼が熱い、呼吸がつまるやうに、胸がふさがつてきた。切々たる哀韻！枕頭をめぐる悲愴の音に、ひとり目さめて、良人は今まで、何を想つてゐらしつたらう‥‥？‥。

ねむれないなんて、つひぞ一度、仰しやつた事などある方ぢやない。いつも枕につくのと、眠るのと、どつちが早いだらうと、羨ましい程、熟睡なさる方である。いつやらの夏だつた、ちやうど夜半すぎから、篠つくやうな大雨に伴ふ大雷鳴‥‥、天柱も、地軸も、燒け壞れやしないかと、思ふほどのなりはためき、雨戸の隙間から、閃めき入る電光の物凄さに、私は體を固くして、掻卷の中に顏を埋めたまゝ、夜一夜、まんぢりともしなかつた、其時などは、もう心細さに堪へかねて、幾度、あなた〱、と搖り起したか知れやしないのに、むう‥‥むうと、返事はなすつても、其聲の下から、もう、ぐう〱大いびきなんですもの‥‥。

曉近く、雨もやみ、雷もをさまつて、初秋らしい朝風に、滴るゝ名殘の露が、日にきらめいて美しい千草の色‥‥。齒刷子くはへて、緣端に立つた良人は、『やあ、昨夜は大分降つたやうだねえ』つて、珍らしさうに仰しやるのには、私も呆れてしまひました。

五六町の間へ、二ヶ所も落雷する程の響きをも、夢中に聞いてなすつたやうな人が、まあ何としたことでせう‥‥。いさゝかな蟲の鳴音に、目さめて物を思ふとは‥‥。あゝ良人！あなたは何を想つてゐらしつたの‥‥。

快活な方が、去年お父樣、お亡くなりなされてからは折々、かう、佗しげに、ぢつと考へてゐらしつて「私はねえ、親父が三十の時の子だねえ‥‥」なんて寂しさうな樣子で、お話しなすつた事もある。親しいお友人の皆樣は、大てい、お子さんの二人や三人ない方はゐない、學校でも妻君のある方は、皆、お父樣だで『子供のある人は、時間中は生徒の事を一心に思つてゐても、授業がすむと、もう今度は自分の子の事ば

かり考へてるんぢやないかしら……。そこへゆくと僕等は、學校にゐても家に居ても、頭腦は全部、生徒―、學校の事で支配されてる……。先天的鼻たらし子僧の、守役に、ふさはしく出來てるんだねえ」なんて、お笑ひなさる時もある。昨夜も茹栗の皮を剝きながら、ふと……。栗はめば、まして偲ばゆ……と口吟んでゐらしつた。人一倍、子供好の良人は、其遣瀬ない思ひを、自分の管理する兒童の上に、うつして、それをせめてもの心やりと、してるやうに見える。



さうした良人の態度や言葉を見きくのが私はつらい悲しい……。うちつけに、子供が欲しい……と仰しやらぬだけ、尚更、私の胸は苦しい……。那翁は、『女の偉なる所以は、多數の子を生むにある』とかいつたさうな。子を生むばかりが女の本能で、それが偉いものなのか、どうかは知らないが、とにかく、かうして人妻の型にはいつた以上は、並に人の母たるべき義務は

當然負はなくてはなるまい、實際また、妻としての眞の生命は、母となつて、始めて光明があるのだ。私のやうな石女は、刺身のつまと同じことで、あつてもなくつてもよろしい妻なのだ。あゝ此燃えるやうな、靑春の血汐を傾注して、我生命を永遠に、繼承させる事が出來たなら、どんなに嬉しいことだらうに……。

子のない人妻の未來は、考へても悲慘なものだ。妻といふ空名に囚はれて、一生この下女の境域から脫する事は出來ないのだ……。といつて、私などは、ノラのやうに、自覺し得る女ではない、獨立獨行の勇氣もない、唯いつまでも……、いつまでも、はかない想に悶えながら、淋しい妻の境に執着してゐるのだ、まぎるゝすべもない、此小天地に跼蹐して、最後の或者をまつばかりだ……。子なきを去る—なんて、無理な理窟を振りまはす禿頭ぞ、親類にもたぬのが、せめてもの幸福かもしれない……。

「まだ、お若いんですもの……」と慰めるつもりでか人はいふ、若いといふのが何の誇りになる……、七年も經つた、古女房の私ぢやないか、燿やいた瞬の光も日々にうすれてゆくではないか……。噫永久に若かれとは、たれも希ふけれど……。

紅染めし夕榮の　色、いたづらに消果て、
蓄くは何の面影ぞ、　流るゝ光、沈む影、
傾く齡、手の中に　嗚呼ひきとめむすべもがな
……　（天地有情）

あゝ、引とめむすべもない……、童貞の昔にかへる道もない……。

いゝわ、子なんかいらない……、人は一代……、末代に殘すべき名もゝたぬ身のくよ〳〵したつてしかたがない……。ねむりませう〳〵。

良人は、やう〳〵深い眠りに落ちたと見えて、かすかな鼾がきこえてきた。

私は、沸き立つ胸に手を置いて、三昧の境に入るべく深く呼吸した。

…………リリーン、リリーン、リン……………

あゝ忘れてゐた……、夕方、茂ちやんが持つてきて

くれた鈴蟲が、なきだしたのだ。もの怖するやうな聲!!、淋しがちなメロディー。ありし野末の草葉の露が戀しいのか……、リーンリーン……、絶えてはつゞき、鳴きさしてはやみ、凄婉な曲を、かなしげにくり返へす……。

私は、ふいと起き上つて、口をあけたままの蟲籠を暗い庭へそつと下した……。

△

めづらしい秋晴の空は、水のやうにすつきり澄んで、筋向の畫師が庭の、百日紅の花が又、新らしい色に燃えてる樒賣りの聲も、きのふの雨のやうにしめつぽくない、胸のすくやうな彼岸日和である。

百日紅の下を、長い行列が寺の方へ過ぎる。武藏……弘法大師……とか、かいてある旗を先頭にして、珠數をかけた老男老女達の、後世願ひの大師詣でと見える、若い娘が、線香をもつて、ネルの袂を軟かく振



りながら行く、綺麗な鷄頭の花を提げてゆく切髮の人意氣な丸髷、セルの羽織きた男……。寺の大門は賑やかだ。都あたりから、わざ〳〵の展墓とも見える、人達も却々多い。

私も、亡母の寫眞を机上に据ゑて、お好きであつた萩の餅供へ、一輪ざしに、咲き殘つてゐた撫子の花をさして香を炷く……。

南無と——、合掌瞑目すると、又しても涙がほろ〳〵落ちる、私は拭ふ勇氣もなく物を想つた。

頼みし木かげの、枯れ果てゝから、もう十一年……母のみ靈は、遠く知々夫の故里に、しづめ參らせたけれど、不孝の子!?、私は、まだ一度の墓參をもなし得ないのだもの……。

ことしこそ、來年こそ……と、計畫もし、豫定をもたてながら、いざといふ瀨戸になると、私の艤裝した

船はいつも根柢から覆へされる。今更ながら浮世の風はつらい、波は荒い……。

生別死別、四離滅裂の〇〇家に、孤影淋しく遺された私は、どうぞして、すべて人の助力なしに、由緒ある家代々の名に、相當したゞけの墓標をも刻ませて、法會をも營みたい……。これも亦、一種の虛榮心かもしれないが、みすぼらしい事をしてあれが〇〇のわすれがたみよ、可哀想な……と、あはれがつて貰ひたくない。

さもしい心よと、さげすむ方はお嘲笑ひ下さい。私は、この小さき意志の爲に、今まで隨分努力した。消極的の節約もした、か弱い腕に、夜更くるまで針を運ばせた事もある。零砕な金をも粗末にしないで……、ゼル一枚にも代へないで……、只、小さい通帳の數字を殖さうとした。……、嬉しい……ことしこそ行ける……、私は此夏の休みに、なつかしい山里にいつて亡母が墳墓の塵を拂ひ、一つには、面も知らで死別した、生父が枯骨をも弔はふと企てたー。がそれもはかない水沫であつたー。不時の出來事ー(私は其事を想ひたくない)其思ひ設けぬ事の爲に、あはれ、私は嚢の底を空にしてしまつたのである。

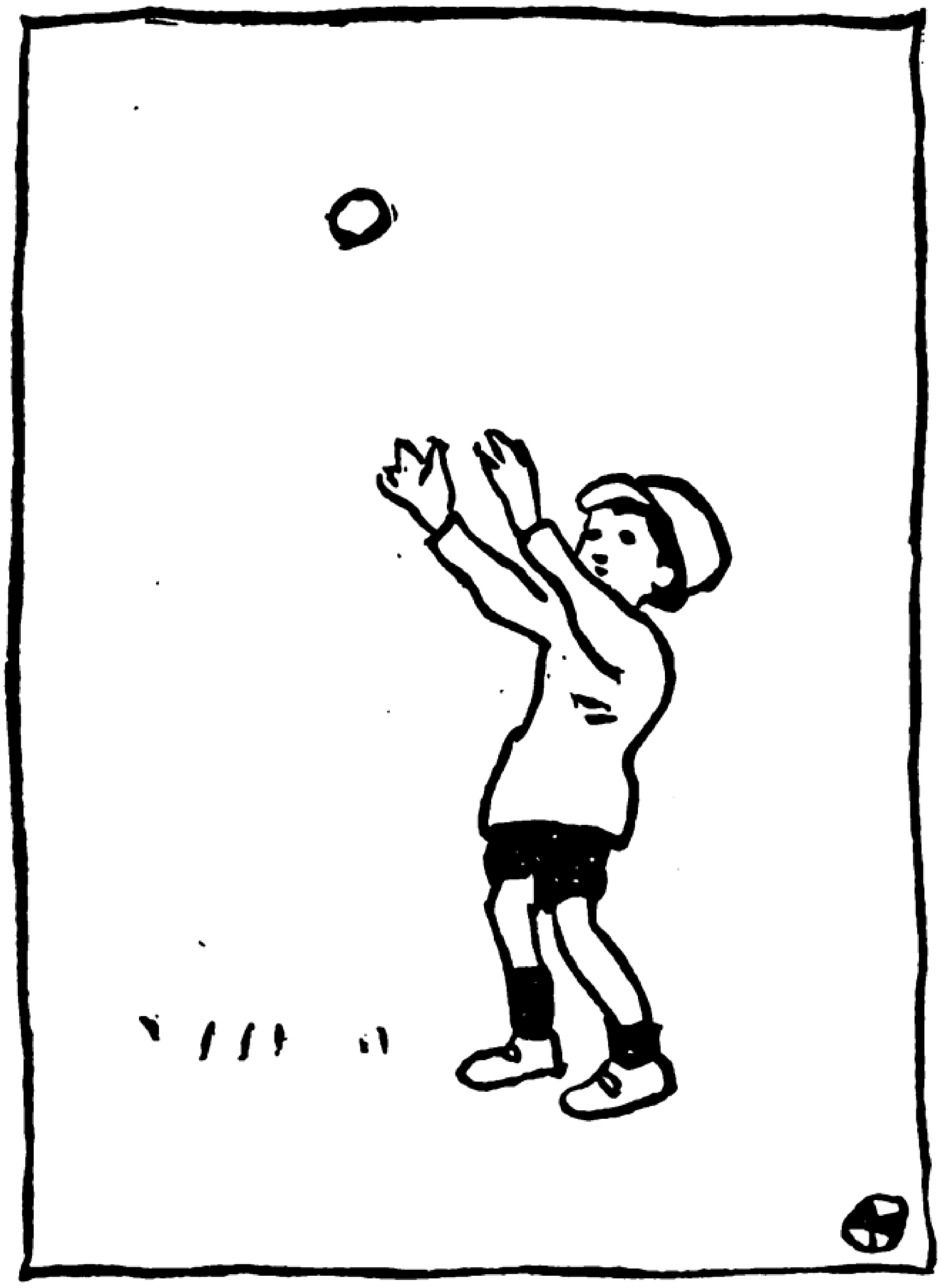
口惜しくもある、なさけなくもなる。しかしこれも何かの因縁だらう、まだ〳〵時節が來ないのだと、潔くあきらめはしたけれど、かうして立派に彼岸詣りなどするしほらしい人の樣を見ると、未練な涙も又更に湧いてくる。

なつかしい故郷の山!、秩父根はさやにも見ゆる::。此所からもよく見える、あゝ、あの山の小鹿野の里!、赤平川の淸冽な水が、岩に碎けて玉と散る、其岸邊の丘の上に、永く眠ります吾亡き母……!!!。

想は馳する……、小鹿坂越……。大宮の生家から、母の實家なる小鹿野へ通ふ二里の山路を、私は愛助といふ下男を供につれて、草臥れば其肩に負はれては往來した。峠の秋は美しくて、樂しいもの〻一つであつた萩尾花、女郎花などは、いまもさらなり、大好きな野菊の花は、天つみ空の星のやうに咲き亂れて、消

い香は、分けゆく袂にふかく染みた……。

峠の頂上は、少し平坦で、そこに、昔からあるといふ、峠の茶屋といふのがあつた、脊戸に近く谷をひかえて、茅葺の軒の下はすぐ、道路になつてゐて、市商人などが、かなり澤山に行き通ふ。道の向側は、緩い傾斜をなしてる山畠で、そこには粟の穂が重たげに、うつむいてゐる、所々に、赤黄色の實を鈴なりにつけてる澁柿の木が、茶屋のながめを豐ならしめてゐた、今登つてきた方を見かへると、木立をすかして、武甲の山の雄々しい姿が、群山を壓して、覇王のやうにそそりたつてゐる、一だん低く二子山、みの山、笠山、高篠山、峰巒繞る其摺鉢の底に、白堊點々、大宮の市街がパノラマのやうに展望できる。



峠の茶屋には、いつも、目の小さい、顔の長いお媼さんがゐた、燒栗を、大きな掌にころがしながらもつてきたり、茶色の砂糖を、唐草模樣の、大きな湯呑へ入れて、甘い湯をこしらへくれたりした。或時などは、愛助から、私の事をきいて、

「へえー、これが〇〇樣の、娘ッ子樣でがんすかい……、さういやあ、ちげえねえ、お姐え樣に、よく似て御座らつしやるむし……」

といつて、お下げにした、私の毛の尖から、結ひつ

け草履の爪先まで、見上げ見下し。「小鹿野へ泊りに、いくでがんすかい…、外祖母樣はお達者でがんすかむし…」

若い者には耳珍らしい、むし〳〵と、いふのが、おかしくて、私はお媼さんの長い顔を、默つて見てゐた。お媼さんは、愛助を捉へて、いろんな談話をしてた。お姐え樣＝私の母の事をいふのだ＝が、お輿入の時は馬に十駄の荷がいつたことの、總模樣のお振袖きて、白鹿毛の馬に騎つた花嫁子の綺麗だつたこと、まるで大宮の祭禮の時、芝居で見た八重垣姫のやうだつたとの…濡衣のやうな、腰元が二人ついていつたのつて、美しく色づき初めた紅葉の奥から、しやん〳〵と、勇ましい鈴の音と、轡の音とが聞えてきて、やがて秋草の中から、花やかな行列が現はれた時は、氣が遠くなるやうに、美事だつたといふ事を、むしだとか、がんすだとか、可笑しい言葉で、くど〳〵と談した、そして、其小さい眼を、ぱち〳〵させて私を見て「お姐え樣も、まさか運がわるうがんしたむし…。此娘ッ子樣だんべえ…腹にもつた時、若後家樣にならしつたゞ、可哀想にむし…。おめえ樣、お父樣の顔も知んなさるめえね…」と、顔を瞻めた。不思議な事をいふ媼よ…。我には父の在すものを…。「愛助もう行かうよ」と、黄八丈の袷の袖を、ひらりとかへして、父樣の東京土產、薄紫の深張洋傘、パチンとあけて、驅けだしたつた…。

稚い私は、まだ何にも、知らなかつたのです。

春風秋雨十六年…、峠の媼やも、もう他界の人だらう…。

豐かに、名望ある家の愛孃として、溫かい園に、美しく生ひたつた私の母は、年ふるまゝに、歩々一歩と暗い冷たい、逆境に〳〵と進んでいつたのです。私も母樣に伴はれて、隨分、辛い運命に泣いた。幼稚な言葉の、知れる限りをつくして、慰めてあげた事もある、私が早く成人くなつて…。今に卒業したら…などいふ辭は、幾度、私等母子の間に繰返されたらう…、あゝ其、私の卒業さへ、とう〳〵間に合はなか

つた……。

薄命な我母よ……、故郷遠い旅の空、佗しいあけくれにも、愚痴一つこぼさないで、觀念の眼を閉ぢたまま、靜かに世を離れた母の最期が、あまりに美しかつたゞけ、一しほあはれは、深く胸に沁みる……。嗚胸が痛い、頭が重い……。私も到底、涙の子なのかしら……。

釣瓶落しとやら、弱い秋の日影は、急に暗くなつてきた。あゝもう、良人もお歸りなさるだらう……。氣をとり直して、夕餉の支度にかゝる。

ひた〳〵と、夕闇せまる庭の面、樫の生垣のあたりから、リーン、リーンと、涼しい音が起つた……伶人健在なり矣……。梨實をきつて、心あたりの垣の下にはさんで置く。

簡易生活

衞生は敎育と同じく個人性を根據とすべきものであれば、滋養分だからといつて特に金をかけて食はなくてはならぬといふ譯はない。本より化學的の一般の原則ともいふものがあるから、それを無視することは出來ないが、先づ銘々の好きな物を食ひ、嫌ひな物を食はぬといふ方針に從つて食物の材料を取れば間違ひはない。社會が進んで此頃のやうに忙がしくなれば、時間の都合では食べ度くない時でも無理に食べて出かけなくてはならぬといふ場合が多い。さういふ時には幾ら滋養物を食べても効力は薄い。食べたくない時に卵や肉類を强ひて食べるよりも、腹の空つた時に澤庵で茶づけを搔き込んだ方が遙かに身體に取つて頁い。

大要、右の大算を心得て食物の材料を選定し、調理し、食事をすることが食事上簡易生活の根本要點であると思ふ。日々の活動が烈しいから十分滋養物を食はなくてはならぬといつて、やれ牛乳だ、肉だ、卵だと、徒らに金のかかる物を滋養物と心得て、つまりは生活難に汲々して居るのは飛んだ心得違ひといはなくてはならぬ。殊に近頃女學校等で授ける料理法が動もすると私が指摘した缺點に陷つて居る。之は單に些々たる家庭上の問題ではない。深く反省す可き國家の重大問題であると思ふ。



家妻日記

芳井若栞

紺碧の空は麗朗と晴れて、實りのよい田の面の稲はさや〳〵と秋の音をたてる。群雀の囀づり、麥畑に巣くふ雲雀のそれとは違ふがいかにも清秋の氣がする。

姉様はクリーム色に友糸刺繡のパラソル翳して華美な高浪お召の袷に青磁色有職模様のおみ帯あまり高からず、お隣のハイカラ奥様直傳とか、よい格好の束髪に白牡丹好みの二枚櫛寶石入りのピンが輝やく。

「ねえ姉様こんな日にお一緒にあるきますと何だか上野の繪畫展覽會へでも參りさうねえ。」

天王寺の塔は秋天に高く聳え鳶が大きく輪を畫がく

「ほんとにねえ秋の展覽會の歸りに瀧の川へ廻つたのはいつだつたらうねえ」と又しても東京が戀しい。

オペラパックの風呂敷つゝみを持つて薄羅紗の半コートの下から大島の荒い飛白が五寸程見える。南部の表の後齒には爪皮がかゝつてゐる、何だか旅行でも仕さうなをかしな風だこと。でも昨日は雨降りだつたから仕方がない。其麼もの脱で下駄も履き替へてお出でと仰有つたがお客に行では無し買物して歸るのだから辛棒して置く。

公園前から電車に乘る。滿員でも無いのに孫の手を引た老人が立てゐる。若い男が荷物を傍へ置て肘をかけたり、職人風の男が肩を張つて少しでも樂に席を取らうとしてゐる。曲り角や發車の時に子供が轉びさうに成つても席を讓る人が無い。東京の電車で有つたらばと思ふ。

自分達も皮につかまつて揺られながら、ふと向ふを見ると裾を端折つて、長襦袢だか腰卷だか澤山出して

廣襟を一ぱいひろげ、襟の山へハンケチを當て、髪は油光りにして一ぱい膨れた信玄袋を大事さうに抱へた四十格合の婦人が二人大阪辯で頻りと饒舌つて居るよくは聞取れないが何かお寺へ寄進の話らしい「ほんまに坊さんは欲のえらいもんだすなあ「そやさかい坊主丸儲けたらいふんや」あはゝゝゝゝ――と四五人先に天王寺あたりの若僧が苦笑してゐるのに氣が付ぬらしい。

「日本橋三丁目」同じくは日本橋で御座いますと云つて貰ひ度かつた。

難波で下りる、此處は銀座通りをひかへた日吉町とでも云はふか、艶めかしい人の往來が多い。橋一つ渡ると大阪目拔の場所心齋橋通り先づ髙島屋へ這入る。

店内はもう冬飾はひ夏の涼しげなのに引かへこつくりと今年の流行は矢張り鼠とお納戸を少し工風した色らしい。洋傘部もネクレットやマフと替つてショールの新形がいろ〳〵見える。

姉樣は洋品部で兩兒の冬帽を自分は友染縮緬の賣場で若子の綿入と被布を見立る。何と云つても友染は關西に限る。品が潤澤で地色も柄も思ふ樣なのが調ふ。「見切物格安品陳列」と書てある。姉樣行て見ませうか」、「左樣ねえ」とお話しながら階段を昇る。まあ人は一ぱい。通りきれない樣夫が大方女許りで女中を連れて兩手に持ち切れない程お召や友染縮緬を抱へさせた奥樣も有れば、母親に帶側をねだる娘もある。四つ位の子供が袂を引張つて泣聲で何か云つてるのを見向きもせず欲しさうにつり切れを熟視入る内儀もある。

廣い室内ところせきまで呉服物を積み上げ、別に店員は付て居ない何れ見張りの人は多く居樣が。

年々萬引が有ると新聞で見るがかういふ處へ來ると敎育の無い虛榮心に滿ちた婦人は思はず手が出るで有う。

銘仙を二三反と、蒲團地の更紗を求める、何れも平生より安價く外に欲しいものも有つたが、昨夜女學世界で讀だ佐治樣の經濟談に鑑みて差當り不用の品は見合せた。

二兎を追ふもの一兎を得ず

庭の紅葉やゝ色付き朝夕は羽織も欲しい様、今朝山里から菊の枝に柿の實を添へ松茸狩の案内が來た、百舌が音聞つゝ松山をあさる一日の清遊はいかに樂しい事で有らう。明後日の日曜とあるからけふは用を片付て置きませう。

まづ京都の姉様へ御返事を上げ若子の袱布を裁つて宮田へ持たしてやりませう、左様〳〵晩餐にお友達を二三人連れて來ると仰つたから献立もして置ねば、だがけふは、せひ秋山さんへ御見舞に行ねば夫は午後からとして、昨夜の羽織もう襟を絎るだけあれも纏め度いものだ、コーツと何から始め様日限りのものからと机を出して二三枚書きはじめる。



「奥様髪結さんが參りましたがお結げに成りますか」

「左様ねえ」鳥渡頭へ手を當て「今日は止めやうかしら、だが午後からお客様だから矢張り結はふ」鏡臺の前へ坐る。

此頃は前髪をおしつぶして髮をだらりと下髮に搔くのが流行だがどうもあの形は下品で厭ひ。と云つて先

の細い前髪に上髮も田舍くさいから中間を取つて自分に似合樣にしてゐる。

跡片付は松にさせ直ぐ机に向ふ。だが姉樣へ差上るお文の方が先でなければいけなかつたと、卷紙をのべる・半で魚屋が來た、鯛と海老とサヨリを取つて置く、おやもう十一時若子のお辨當を學校へもたせてやる、立つた序手に獻立をして買物に遣りませう。

(一)鯛のさしみ、(二)吸物、サヨリと糸三葉(三)海老フライ、ホテツト、(四)松茸　土瓶蒸し、鯒一の切身、新菊菜、栗、(五)新栗キントン、

買物に遣るなら宮田の前を通る筈、時節のものだから被布をもたしてやりませうと裁ちかける表だけ裁つてもう少しだが十二時に成つたので御飯にする。

お箸を置て直ぐかゝるつもりのが、つひ今來た女學世界に根が生へて一時に成つて仕舞つたもう買物に遣らねば時間が無い被布は其儘帖へ仕舞ふ。

どれ仕度して秋山さんへ伺はふと、御見舞の品を包んで衣服を着替へてゐる處へ、佐藤樣の奥樣が御嬢樣を連れてお入來

「まあようこそ、さあ何卒お通り遊ばせ」

「折角お出下さいましたのに、眞實に御愛想も御座いませんで失禮いたしました。ハア難有う存じ升、近日若子を連れてぜひお伺ひいたし升。左樣なら皆樣へ宜しく願ひ升」。おやもう四時過ぎ秋山さんへは梅にお見舞品を持たして上げ自分は明日上る事にしてエプロンかけて夕飯の仕度にかゝる。

五時半良人は皆樣お連れに成つてお歸り、品川卷とおさしみで取敢ずお膳を出し、出來たてを順々に差上る。手料理もお口に叶つたと見え大層御酒もすゝみ跡は賑やかな謡曲のお聲、良夜の團居もやう〳〵更けてお歸りに成つたのは、十時過ぎ。

まあ大變手紙の書きかけ罫紙の取散らし、被布の帖は其儘、羽織の仕上げなんか思ひも寄らず、あゝ古人はよい格言を敎へられた。先づ手紙を書終つて投函する、よわりゆく蟲の音に月はいよ〳〵冴える。



西洋の日常生活（三）

中村春雨

△病氣見舞に切花

西洋では偶に他人を訪問したり、病氣見舞に行つたりする際などには、美しい切花を携へて行く習慣はあるが、日本のやうにザラに菓子箱を取り遣りするやうな事はしない。尤も或る式日などに、パンケーキを持込むやうな事がないでもないが、病人の處へ、先方の衛生狀態も考へないで、儀式的の見舞物など贈るやうな不謹愼な事はあまりやらぬやうだ、その代り、病人と親しい仲で、一週間目毎とか若くは三四日目毎に病狀を見舞ふといふやうな際には、その都度々々、新しい切花を持つて行つて、前のと取替へてやり、倦んじた目を喜ばせるやうに仕向けてゐる、即ち上品な精神的の慰藉を與へるといふ遣り口である。

△愛用さるゝ菓子

それでは一體に菓子の需用は少いかといふに、さうでは無い、却つてナカ／＼多い、食後とか、茶會とかに用ゐられて日常食品の一となつてる位だから、日本の如く半分は一種の贅澤品といふより以上の意味に於て日々の必要品なのである。

隨つて不消化、不衛生といふ事を避けて、滋養になり、日常の食物の補ひになるやうな材料が撰まれてある、日本の生菓子、餅菓子の類の餡氣を用ゐたもの、若くは米粉を煉つたやうなものは無論絶對に無い、チヨコレートの外包にクリームを入れたチヨコレート、クリームなどが一般の子供にも好かれ、婦人にも男子にも愛用されて所謂ポピユラーなものになつてゐるや

うだ、それから又アイスクリームが大に喜ばれる、日本の甘黨の汁粉屋や、粟餅屋に出入する位の程度では菓子屋の階上の食卓ではアイスクリームの注文がナカナカ出る、一體空氣の乾燥し切つた、又夏時の熱度の高い米國邊では、風土の關係の上からでも、アイスクリーム類が大層需用されるのであらうが、比較的寒い獨逸邊でも、矢張、人々に嗜好されてゐる、だからその製造法も餘程進歩してゐて、夏時日本の氷店の供給するやうな間に合せのものでは決してない、香味と甘味と誠に舌障りの好いやうに出來てゐる、固形體にして、紙箱に詰めて賣つてゐるのも大變に捌け口が善いやうである。

△飾花と賣花

一方の花屋も大小、いろ／＼の店が飾窓の装飾を凝らして行人の眼を惹くやうに出來てゐるが、薔薇の花二三輪が十圓二十圓に相當する高價の物もあれば、一圓か二圓かのザラなのも出てゐる、高價なのは、貴顯富豪の一夜の宴會の食卓を飾るとか、淑女、貴婦人の襟や頭髪に匂ふ材料となるので、安物は中流下流の贈答品に用ゐらるゝのである、日本ではこの頃香氣のないダリヤが流行するが、それと反對に、獨逸邊では香氣のある日本の菊の培養が盛んに行はれて、花屋の店頭の秋を飾つてゐるのを見かける、是も一種の面白い對照である。

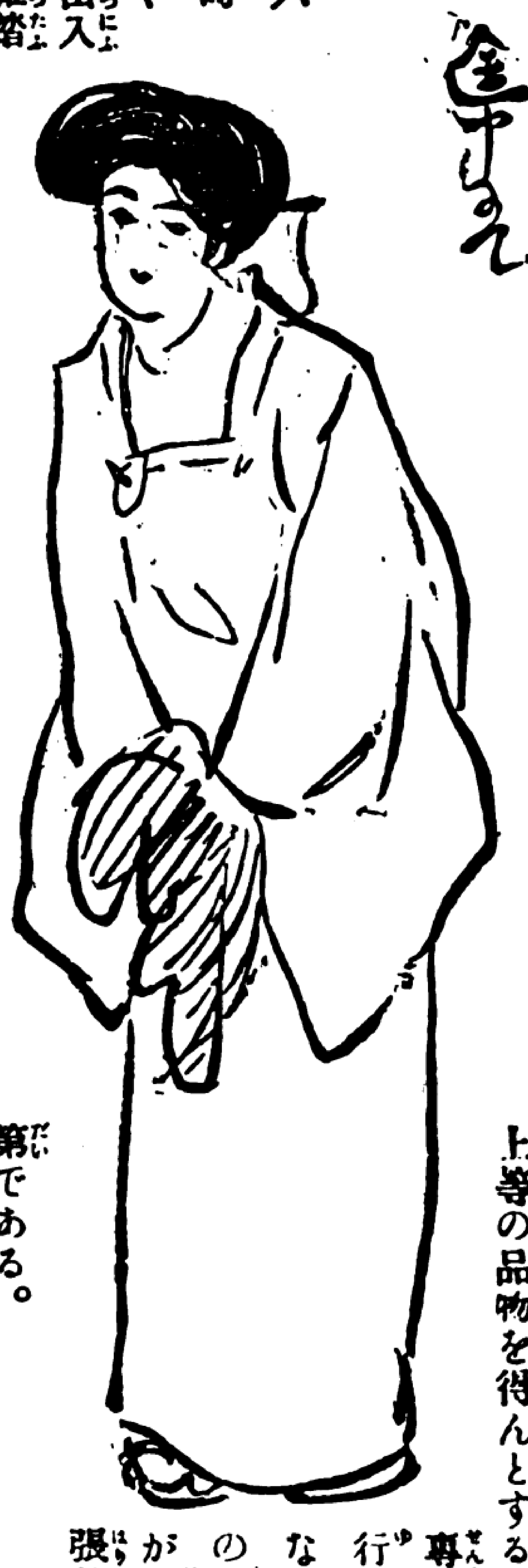
それから又、街の辻々などで、汚い服装をした女子供が、五錢十錢の捨て價で、いろんな花束を押賣するやうにしてゐるもナカ／＼多い、性の惡い女の出入するカフエなどには、菓子と花束とを押賣するのを商賣にしてる者もあるらしい、兎に角それもこの二つが、交際用若くは社交用として一般に需用せらるゝ事を證明する譯である。

△デパートメントストアーの完備

婦人が日用品の用達しに市街へ出て一番多く足の向く所は矢張デパートメントストアーである、米國に

はシカゴ市に世界第一の此種の商店があるし、紐育市にもワナメーカーといふ有名なデパートメント、ストアーを始め至る處に澤山出來てゐる、獨逸の伯林市で一番大規模なのはウエルタイムといふのがある、この商店は建築も新らしく、一見すると御本山の大寺院か若くは大停車場かと云ふやうに思はれる、朝六時から夜六時まで間斷なく群をなして出入する人々の雜踏の樣は到底三越や白木屋あたりの比較ではない。

一體デパートメント、ストアーは日本の田舍などに無くてはならぬ・何んでも屋の進化したものである、都會の地になると、何んでも屋は一々分業になつて、それ／＼專門の商店化する、隨つて上等の品物になるとこの專門の商店の得意とする處である、乍併都會の生活が次第に忙しくなつて、人々が時間と金錢とを節約する必要に迫られて、自然と都會的の何んでも屋即ちデパートメント、ストアーが出來る次第となつたのである、だから今日でも、價段を厭はないで、飛切の上等の品物を得んとする人々は矢張專門の商店に行かなければならぬ、多少の例外はあるが西洋でも矢張然ういふ次第である。



併し西洋のデパートメント、ストアーはナカ／＼設備が行屆いたもので、價の格外に易くて、而も一寸見榮のする流行品を集めてゐる許りでなく隨分上等の品物も貯へてゐる・いろんな室內の裝飾模樣を見せる爲めに、特に新築の室までも造り込んである、それから

小い動植物園までも出來てゐて、蛙とか、蛇とか、蜥蜴とかゞ瑠璃箱内に棲ましてある許りでなく、活きた鰐魚の子を幾十となく水の中を泳がせて、一疋一圓といふやうな札まで建てゝあるといふ風だ、それから又劇場やオペラや音樂會などの札賣場も設けられ、市內何れの劇場の入場切符でも買ひ得るやうな便利が計つてある、預金部といふものもあつて、金を預けて置いて、それで買物をするといふ仕掛にもなつてゐる、一度ウエルタイムなどに入ると、商店で出來た一個の市街へでも來たやうで、あらゆる需用品は殆んど何んでも得られるやうになつてゐる、日本の陶器や骨董品の類許り集めた一部も出來てゐる位である。

△西洋の一錢九厘店

かゝる便利なデパートメント、ストアーが盛んである許りでなく、日本に一時流行した十九文店の如く、廿錢屋、三十錢屋、若くは五十錢屋といふ種類の店が隨分日拔の場所にまで出來てゐて、一寸と外見の善い價の張らぬ品物を供給してゐる、中流以下の女の裝飾品とか、若くは田舍向の土産物とかはかゝる處で求められる、西洋婦人は平氣で斯ういふ種類の商店へも入つて行くのである、そこになると日本の婦人などは、まだ一種の虛榮心が强い所爲もあらう、東京市中に現れかけた十錢屋の類が瞬く中に閉店して了つたのも自分は近頃目擊した。

△到處社交の秩序がある

西洋は誠に歐洲大陸の人々の日常生活に離るべからざるものは例のカフエーである、カフエーといふと日本の婦人の中には、直に東京の料理店とか、若くは待合とかいふやうに解釋してる向もあるらしいが、それは間違つてゐる、勿論、待合式のカフエーもあるにはある、性の惡い女の出入するカフエーもナカ〳〵多いが、それ等は白晝の間は鎖されてゐて、夜の十一時とか、若くはそれ以後に客を出入せしむる事になつてゐるので、普通のカフエーは白晝堂々と開業し、紳士も

淑女も公然に出入してゐる許りでなく、子供や一家族打連れて人々が入つて行くのである。

かゝるカフエーには、珈琲とか、紅茶とか、若くはビールとか、菓子とかを出して、それで一人前三十錢か五十錢位の金を取り、客は又互に談笑して、半時間も一時間も呑氣に時を過すのである云はゞ一種の公衆倶樂部で、手輕な退屈さまし、鬱晴らしの場所なのである、日本人がよく飲食店で醉拂つて、他人の迷惑をも顧みず、放言放歌するといふやうな醜態は決して見る事を得ない、和氣團欒たる社交の禮儀が自づとかゝる處から訓練され、修養され、又一つは經濟的に、無用な金錢を使ないで、相談事でも何んでも運びを付けるやうな便利が得られるのである。



霜枯れ図

△動物愛護の心

それから西洋の婦人が一般に動物を愛する癖があるのは最もよく眼に着く處だが、獨逸の現皇帝の皇后はもう六十歲近い御方だが、御夫婦連れで馬に乗つて逍遙せらるゝやうな事も珍らしくない、イヤ、若い婦人

も好んで騎馬で驅け廻る、これは一つは動物愛護の精神が一般に行き渡つてゐて、馬なども愛撫こそすれ、決して虐待じみた眞似はせぬ事になつてゐるので、隨つて馬が從順なのである、その段になると、日本の馬は兎角仕附が荒いので、その性質も一體に氣荒くなり一種の猛獸だと西洋人に冷評されるやうな事になつたのである、西洋の婦人は、馬を見ると鬣を撫でに近寄らうとするが、日本の婦人なら、恐れて尻込をするといふやうになつてゐる。

米國の市街などでは、婦人が獅子のやうな面貌をした大きな犬を二疋も三疋も連れて散歩してゐるのに屢々出合する、形軀は小いが、一度嚙み付いたら肉の捥れて除れるまで離さないといふ猛犬、ブルドグも多くは婦人の愛する處である、獨逸の婦人は、脚の短い、胴のひよろ長い、一種滑稽的の犬を連れて歩くのが一の流行となつてゐる、日本の婦人は家の內で猫を愛してゐる者は隨分多いが、犬を連て市街を散歩してゐるやうな者は少い樣である、この邊にも東西の婦人の氣質の差異が現はれてゐるのであらう。

西洋人は日本の子供を見ると、實に可愛らしい、世界一だ、日本は小兒の天國だといふやうな事を口にする、併乍我々日本人の眼から見ると、西洋人の子供は實に綺麗で、何とも云へぬ程可愛らしく思はれる、少くとも鼻垂れ餓鬼などいふものは居ないやうである、併乍西洋人が日本を小兒の天國だといふのは、廻り氣かも知れぬが、日本の父母はあまり子供を庇ひ過ぎる、子供を猫可愛がりに可愛がるといふ意味かも知れないと考へられない事もないのである、それは母が子を産むと、二歲三歲までは脊負したり、抱き歩きたり殆んど二六時中小兒の事に係り詰めにしてゐる許りでなく、父たる夫も、常にその子守の手助をして、仕事の時間まで喰ひ込まれるといふやうな例が多いからである。

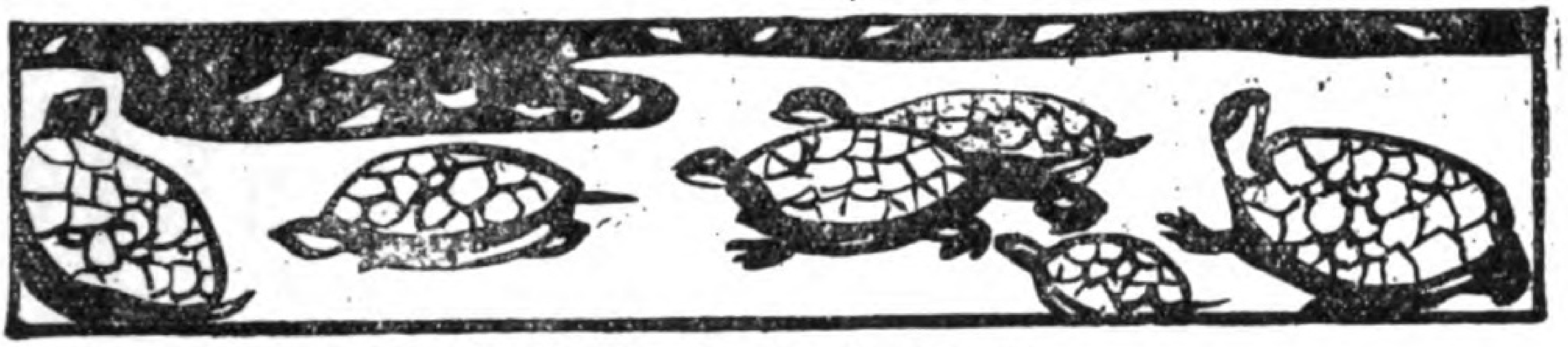
一體あの脊負するといふ習慣は無論西洋にない事だが、日本の婦人はあれをやるから、傍手仕事が出來ない譯もない、併し一旦子供に泣出されでもすると、仕

事は中絶される、それで一方便利な代りに、他面何も彼も中途半端で、結局、子供に係り切りといふ始末になつて了ふのである。

加之、日本の家屋の構造が今の如くでは一家內、子の泣聲も何も筒拔だから、一家生活の衝に當つてゐる主人公も、仕事を妨害される、勉强も讀書も出來はしない、これも勢、一切を放棄して子をあやしにかゝるといふ風になつて來るのである

そこになると西洋人は、例の壁と戸とで堅く區劃した室を有してゐる、又子供の母も抱いてはやつても、脊負などはしない、搖籃といふものがあつて安樂な寢場所を供してゐる、生れた子供が當分母の身體離れないで何處へでも附着して行くといふやうな煩累から脫れる方法が出來てゐる、つまり赤兒にも、本然的に獨立心を養成し、他日自恃の精神を以て奮鬪して行くやうな習慣を吹込む樣な事になつてゐるのである。子供の養成に就ての一長一短はいろ〳〵議論の起る處であらうが、兎に角家族主義と個人主義との差別は。已に繈褓の中から生じかけてゐるのは、注目すべき一の研究問題であらうと思ふ。





美顔術の主人と語る

婦人記者

△新式の妨禮仕度

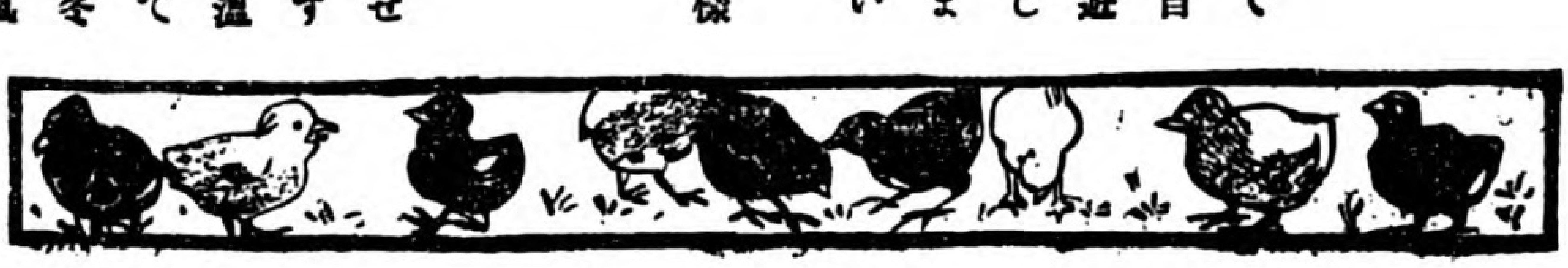
主人は愛想よく記者を迎へて、――

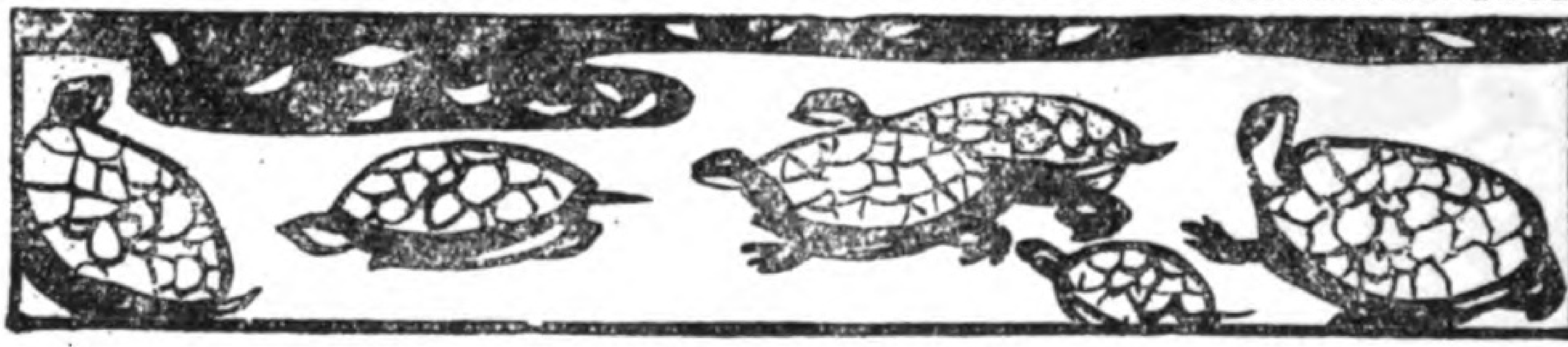
どうもお待たせしまして失禮致しました。さ、どうぞお掛け遊ばし下さいまし。有難う存じます。お陰様でかなり忙がしく存じて居ります。今晩は或るお宅にお婚禮がありますので。化粧やらお召物やらの依頼を受けまして……。いゝえ、どう致しまして。華族様とか一流の紳商紳士のお家ばかりをお得意に願つては居りません。また上流の方々で質素に式を擧行遊ばす向もございますしれ、まお種々でございますのですが、私共では何れ様でも御一報次第に參上致しまして御世話申上げて居ります、當節では親御様の方々はずゐ分おゆるやかにお暮し遊ばしてゞも、君御夫婦は始めから身分收入相當の生活をさせる様にといふ様なお考へから、成る可く質素に高尚なお式を遊ばす向では、たつた一度切りの頭の櫛や簪に、何百圓といふ様な高價の品を用ゐるのは勿體ないと申されて大抵お控へになります。それで私の友人で或る高貴の御殿へ御祐筆で上つて居ました人が、始終此事を申していか程御不自由のないお邸でも、そんな事に莫大の費用をおかけ遊ばすよりも、或る日限を極めて御使用になつて御返し戴くと申す様にしたらと言つて御便利を計る事にしましたので、婚禮の時によく私と一緒に參るので御座いますよ。

はい、御依頼が御座いますとも、ずゐ分立派な御宅様でも……。

△化粧の下ごしらへ

化粧の注意は風呂へはいる時から致さればなりません。お化粧をするとなれば誰でも一番に顔を洗ひますが、よく私共が拜見して居ますのに、一度湯槽へお溫りになつてお上りになるや、否や石鹸を手拭に塗つてごしごしおこすりになる様でございますれ。あれは冬向は殊に注意致さればなりません。皮膚は冷たい空氣





に觸れて縮まつて居ますから、一寸溫まつても、顏の皮などはなか／＼やわらかくのびません。そこへ曹達の多いお粗末な石鹼を堅い切れの手拭につけてごし／＼こすると、非常に皮膚をいたまめすから、お顏は一番後に遊ばすのがよろしいのです。それから湯槽で溫まつてゐる間は、手拭を二つ折にして、額から顏へあて、蒸氣でむすやうにすると、毛孔を充分に開かせて、工合よく化粧が出來ますよく冬向になると、頰ばかりが林檎の樣に赤くて困ると申さるゝ方などは、殊にこれが大切でございます。

洗粉は糠が一番よろしいやうです。私共でポンヒヤンソープと申す石鹼を賣つて居ますが、これはお手前味噌に當りますから、是非これに限るなどとは申させん。まあ昔から用ゐられて居る糠が結構でございますれ。然し當節では米が器械搗になりましたので、どうしても糠に磨き粉樣の砂が混つて居る爲めに、お顏のきぢを損する事がありますから、私共では知己で小田原在で水車を致して居る者と特約して、無砂の糠を取り寄せ、精製して販賣致して居ります。糠袋はよく晒木綿や緋金巾の切などのものをよく見受けますが、白の麻が一番よろしいのです。そして餘りごし／＼とこすらずに、今の石鹼をよく指先まで輕く塗つて顏を摩擦しまして、今度は糠袋から上へと逆に輕く遊ばすのがよろしいやうです。

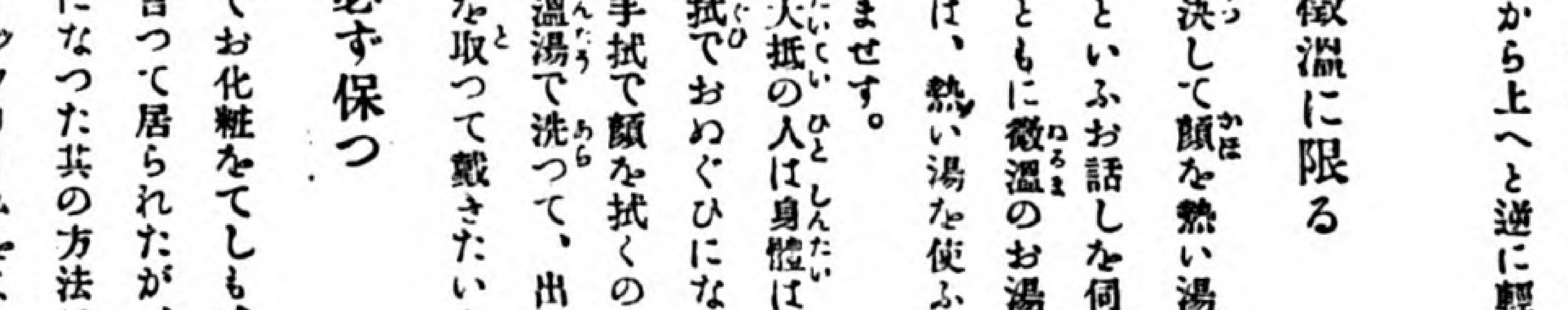
△四季とも微溫に限る

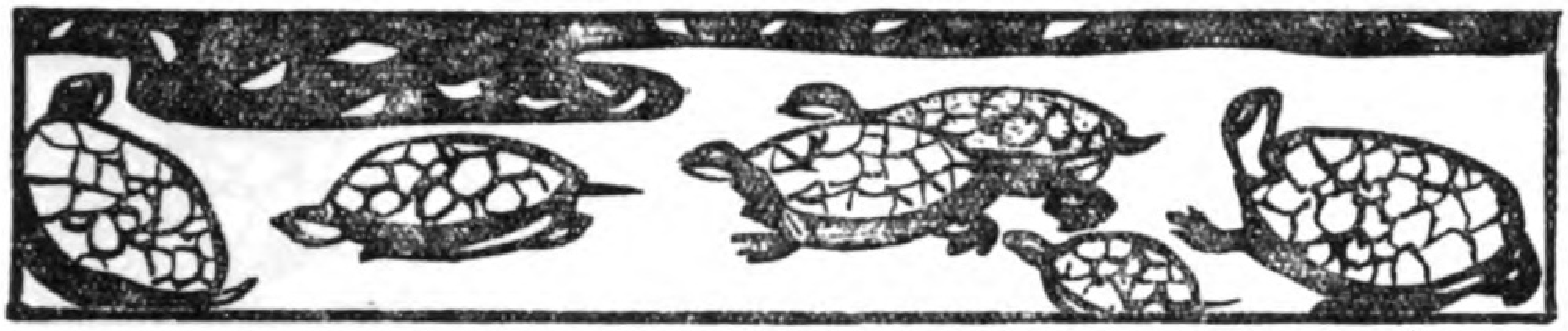
よく「私は若い時から決して顏を熱い湯で洗はなかつた」「よく水を使つた」といふお話しを伺ひますが、一番よろしいのは、四季ともに微溫のお湯に限ります冬向に冷たい水を使ふのは、熱い湯を使ふと同じ樣に皮膚の間に、よくございません。

また湯から上る時に、大抵の人は身體は湯上りのタオルで拭いて顏は濡れ手拭でおぬぐひになる樣ですが誰しも湯上りに一寸濡れ手拭で顏を拭くのは氣持がよいけれども、やつぱり微溫湯で洗つて、出來るならばよく乾いたガーゼで濕氣を取つて戴きたいものです。

△四時間は必ず保つ

或る奧樣が私は脂肪質でお化粧をてしもすぐあぶらが浮き出して困る／＼と言つて居られたが、試して見て大きに重寶だと御喜びになつた其の方法は、まづ白色のハイセニツクマツサージクリームをよく指先きで





塗り付て、ガーゼで拭き取つた後へ、青色のライラツク水をはけよく叩いて、今度は赤色のポンピヤンマツサージクリームを塗り、よく拭き取つた上に、粉白粉を塗つて、其の上を一寸ライラツク水でおさへて置くのです。此樣にして出來たお化粧ならば、四時間は必ずくづれない事を保證致します。もし長くお化粧のくづれない樣にとの御思召ならば、煉白粉白水粉を御用ゐになれば、朝八時の御出かけでも、午後五時頃迄は大丈夫で御座います。

△頰紅の付け方

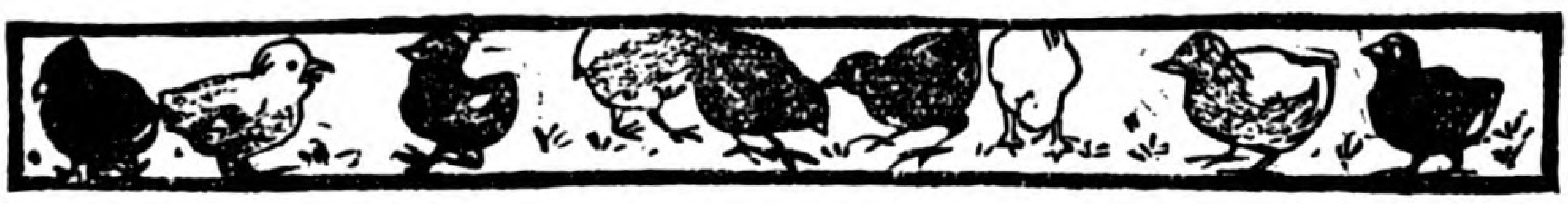
御存じの通り、日本では白粉を塗つた後で頰紅をさします故、自然でなく人工の化粧だとくつきり目立つて見えますが、あれはクリームを拭き取つた後へ、紅を付けて、其の上に白粉を塗る樣に致せば、夏うすもの丶御召の下から紅色の長襦袢が透て見える樣に、ほんのりと櫻色となるのでございます。襟の白粉はなかく顏よりもむづかしいものですが、やつぱり下地をクリームで致して、煉白粉を用ゐればよろしうございます。

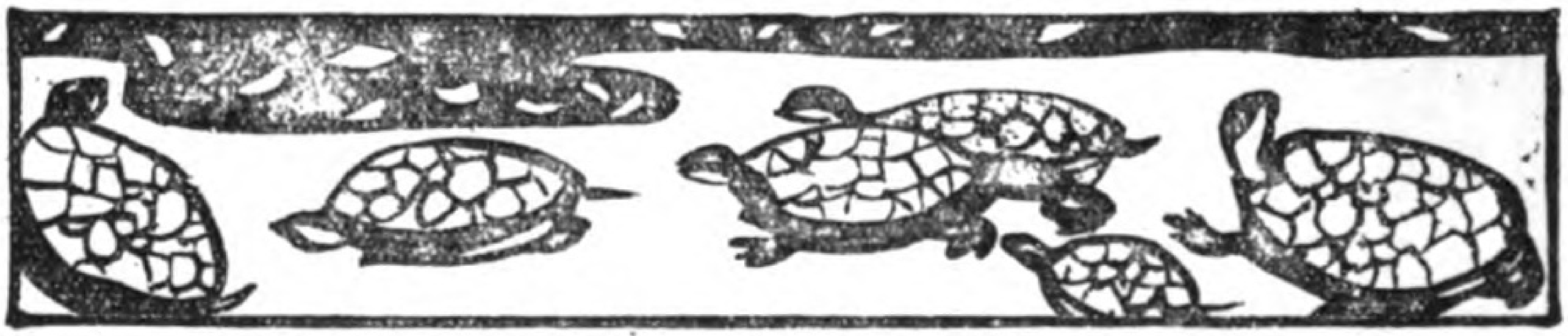
それに私共では使ふ方の顏の色によつて白粉なり紅なり少々配合を致して置きます。

△素人の化粧と俳優の化粧

先日、化粧の話しから、後學の爲めと俳優が化粧をするところを見せて貰ひましたが、まるで漆喰でかためた樣に、べつたり厚化粧にて、其の上へ眉を引くのでございました。あれが立派な衣裳を着て舞臺に立てばこそ遠見美しうも御座いますが、自然の美では御座いませんね。奥樣方や孃樣方が俳優の化粧を遊ばしたらそれこそ大變で御座いますよ。

ハイ、名優といはれる人も、一芝居打上げると必ず二三回は美顏術を致して、すつかり顏の掃除を致しますやつぱりひげを剃るのと同樣で、一度美顏術をしたからと申して黑いのが白くなる樣には參りません。週に一度とか月に二回とかなさる内に其の効果が現はれて來るので御座います。よく今少しきれいだと行くんだが……なんて御謙遜遊ばす方もありますが、私共はそばかすがあつたり顏に脂肪が溜つたりした方にお出でを願つて、その手當をさせて戴くのが本領で御座います。





△完全なる美髪法

皆様は年を取ると毛が少なくなるし、第一房々と長かつた黒髪はくせだらけの胡麻鹽頭となり、おまけに切れて短かくなるといふのが普通の様です。よく氣を付けて見ると廿四五にも成つた方の髪毛は其の尖の處が立つ或は四つに割れて居ります。之を顯微鏡で見ると丁度鯰の様で御座います。で折角のびた髪毛もこゝからふつ〳〵切れてしまつて、悪い黴菌なんぞが其の切れた口からはいて毛根部を犯し、遂に頭髪が段々と抜けて來るので御座います。

それで私共では其の手入れとして、其の毛の尖を燒き切つて、毛尻を丸くする方法を行ひます。かうすればそれがまた延び出して三ケ月も致すと一寸位は展びるのでございます。

△快腦術

冬は髪洗ひがおつくうで後の注意が不行屆の爲めに風を引く事が多いので、自然夏は幾度も髪を洗ふ方が冬は餘りお洗ひにならぬ様で御座いますが、これは頭の地をよく乾すといふ事が出來ぬからでございませう

それで私共ではお客様は椅子によつて拜見でもして御出での内に、洗つてすつかり乾かせて二十五分位で出來上つてしまふやうにして居ります。在來の様に腰をかゞめたり頭を下げたり致さないで、快腦術と申て頭をマツサーヂーながら愉快に洗ふ事が出來るので御座います。

ちゞれつ毛ですが、あれは毛の根底に其くせがあるのですから、施術によつて其くせをすつかり矯められるとは申兼ますが、快腦術を施せば血行がよくなり、ふけや其他の汚れが取れますから、すら〳〵として誠に氣持がよくなります。

△枕はげと毛生藥

中年以上の方で日本髪にばかりして御出の方々には皆な二錢銅貨大の枕はげがある様で御座いますが、之をなをす薬は私共で取次いで居ます。それは私の知人が長く慈惠院の看護婦を致して高貴の方様の御共で西洋に迄行つた者を訪問致した時に、病後の私の額がひどく毛抜けが致してうすくなつて居るのを見て、試みに藥を呉れましたのを兎も角も試みようと存じて、右の方にばかり就眠前に塗つて見ましたところ、左より



もたしかによくなつて居たのに氣がつきまして、いつその事廣く販賣したらと申すのでほんの實費の代價で御取次を致して居るのです。

此頃は毛生藥はずゐ分西洋から〻參つて居る樣で御座いますが、私は實驗上此の毛生奇妙水を信用致して居ります枕はげで年を經て艶々致して居る處へ毛が直ぐに生へるかといふ御尋ねも時々ありますが、それは何とも申兼ますと御答へを致しますが、常々注意して美髪法と共にお用ゐになれば西洋人の頭には絶えてない枕はげを豫防する事が出來るかと存じます。記者が辭して歸らうとしたら、四十餘りの品のよい内儀風の婦人が、



「こちらで婚禮の化粧をなし〻下さるさうですが……」

と言つてはいつて來た。



婦人病の手當

醫學士　望月寛一

△急性内膜炎の原因

婦人病の中、子宮内膜炎について述べて見ませう。これには急性と慢性との二種あります。前のは黴菌がはいつて起るもの、後のは黴菌に關係無くして起るものであります。その急性の中にもまた左のやうな種類があります。

（一）、化膿性内膜炎　これは分娩、流産等の場合に、適當の消毒を怠るとか、或は取扱ふた産婆や醫師の手指、器械等の消毒が十分でなかつた時とかに多く起すか、其他普通の時でも不熟練な醫師の手術を受けたり、自分の不攝生などからして起すことがあります。

（二）、腐敗性内膜炎これは流産や普通の分娩の際に、胎盤の殘片などが子宮の中に殘つて腐る時に多く起るが、其他子宮病の中にできた腫物がくづれて出來ることもあるし、またいたづらに物を入れて見たりして起すことがあります。

（三）、痳毒性内膜炎　之れは痳病の黴菌の爲めに起すもので、良人が痳病のときに同衾したりすると、すぐ此れに罹ります。然かし毒力の弱い場合には、黴菌は深く入りこまないから、これに罹つても輕いのが普通です。斯やうにこれは多く良人からうつる病氣ですから、品行の正しき、平和の家庭に於てはあまり見受けません。たゞ入浴の時に使用する海綿、手拭、風呂桶などから感染するのが偶にある位のものです。

此の痳毒性内膜炎は非常になほりにくいもので、前の化膿性内膜炎や腐敗性内膜炎は適當の醫治さへ加へれば、必ずなほすことができるけれども、これは其の急

性の症狀がなほるとしても、根治することがむづかしくて、十年も二十年もひそんで居て何かの機會に再び萌を出すことがあります。良人の方の病氣にしてもなか〳〵容易になほりません。良人は嘗て痳病に罹つたが、數年間少しも故障を起さずにすんだから、もうよろいしと思つて新婦を迎へ、扨て新婚旅行と出掛けた處が、忽ち其の婦人の方が急性の痳毒に感染して、難儀するといふやうな事がよくあります。

(四)、結核性內膜炎　良人が肺結核に罹つて居るとか、或は自分が結核に侵されて居ると、それが段々廻り廻りて生殖器の方を犯してこれに罹る事があるが、其他月經時などに不潔な紙片や、綿紗などを用ゐる爲めに起すこともあります。

(五)、眞正實扶垤里性內膜炎　これは化膿性內膜炎と同じく、流產後又は普通產褥時に起るものですが、此の種のものは極めて稀で、獨逸の大家が一二の例を報告した位のもので、日本では未だ聞いた事がありません。

其の外に、虎列剌病、窒扶斯、肺炎、再歸熱、赤痢、流行性感冒などの後に急性の內膜炎の起ることがあります。

△急性の症狀と療法

以上の急性に屬するものゝ症狀は、凡て局部の疼痛を起して分泌物が段々增して發熱するのが普通であります。そして毒の力の弱いものは二三日で輕くなるが、病菌が著しく毒力を有するときには、其の症狀も劇烈で、先づ初めに惡感戰慄を起して身體ががた〳〵慄ひ上り、體溫は三十九度から四十度に昇り、子宮の邊から下腹部全體にかけて激しき痛みを起し、腹部は膨滿れて嘔吐を起します。

之をなほすには、臥床に橫はつて決して動かないやうにし、痛むところに氷囊を置き、食物は牛乳、重湯、鷄卵、肉汁等の流動性のものを撰み、少し餘計に葡萄酒或は之れに類するアルコール性の飲料を採ることが必要です。尤も細かい手當は病狀に依つてソレ〳〵進

ふから、專門醫の診察を乞ふに越したことはありません。

△慢性の内膜炎

次に慢性内膜炎は細菌に關係なくして起るものであることは前に述べた通りですが、また急性の内膜炎が段々治癒して慢性の内膜炎となるものもあります。

序だから一寸斷つて置きますが、醫師が、あなたの病氣は慢性だと云ふと、非常に落膽して最早なほらない病氣となつたものと思ふ人が澤山ある樣ですが、專門家の云ふ慢性と云ふ言葉は決して不治の病氣であると云ふ意味ではなく、危險であつた急性の時期が去つて治癒に近き時代に向つて來たものと云ふ位の意味であります。病氣が急性の時期から慢性の時期に移ると、醫者の方では先づ／＼難關を通り脱けて一と安心といふやうな次第ですから、決して心配するには及びません。たゞ急性で患者の苦しむ時期は比較的に短いが、いよ／＼慢性となつて其が全く癒つてしまふ迄には、却々日數がかゝると思はねばなりません。そして苦痛は急性の時期にくらべると殆んど無いと云つても宜い程だから、自然手當を怠つて病氣をます／＼重らせる恐れがあるから、十分に注意がいります。

△知らぬ内に慢性になる

扨て醫者の方から見ると、尠くとも婦人の七八分は此の慢性内膜炎に罹つてゐるものと思はれます。急性から段々と慢性になつたものは、自分でも内膜炎にかかつて居ることがわかりますが、其の他の原因、たとへば月經時の寒冒、いたずら、姙娠或は産褥中に適當な攝生を怠る等の爲めに知らず／＼のうちに之れに罹つてゐるのが非常に多いのであります。そして折々下腹が痛んだり、骨盤の深くに嫌な壓すやうな感じがしたりして、出入の醫者に診てもらうと、胃腸が惡いのだといつて一時的の療法で茶をにごして置きます。自分でも何か不攝生の結果胃腸を害したものと思つて別段氣に止めませぬ。輕症のものであると、食物を注意

して靜かにして居れば、一時苦痛を緩めることが出來るから、やはり胃腸が惡るかつたのだと思ふて居ますが、その內段々病氣が重くなつて、初め白帶下といつて、水の樣な透明な分泌物が出ます。それが一層重くなると、黃色い糊の樣なものを漏らす樣になります。さうなると、下腹が張り、腰が冷え、腰から下腿にかけて痛みを覺え、夏期は足がほてり、冬期は反對に手足が冷えて逆上が強くなります。また月經も不順となり、頭痛、眩暈がして、食慾は減り、動悸は高まり、精神は鬱ぎ勝となります。

△腰が冷え足がつれる人

實に內膜炎ほど婦人にとつていやな病氣はありません。けれども醫者の方からいふと、內膜炎くらゐ治療に手のかゝらぬ治し易き病氣はないのです。たゞ餘り長く治療を怠つて居るから、之をなほすのも容易でないのであります。私共が日々手にかけてゐる患者は、大抵四年五年、短かくても一二年は經過して居ります。それで居て一週間位もかゝつたら癒るやうな積りで醫者の方へくるのですから驚きます。醫術は進歩して居るけれども、それ程までは進歩して居りませぬ。誰れでも寒さに當つて風邪を引くとか、暑さに障つて頭痛がするとかすると、直ぐ醫者へかけつけますが、下腹が變だ、腰が冷える、少々足がつれる、時々白帶下があると云ふやうな事になると、婦人は兎角秘して居てなかなか醫者にはかゝりません。其の內に病氣は遠慮なく進みます。そして全く不治のものにしてしまひます。

△豫防法と手當

終りに豫防法を一寸述べませう。これは先に述べた原因となるべきものに注意するより外に途がありません。ことに月經時には感冒に罹らぬ樣にし、攝生を重んじ、消毒の不完全な膣內タンポンを用ゐずして嘗て述べた月經帶或は月經球を用ゆるやうにするのが肝腎です。其他分娩時及び產褥時の攝生を守るべきは勿論

別けて流產後には一層の注意がいります。普通の產褥時には割合注意をする樣ですが、流產の後には左程に注意をいたしません。之れは非常な間違であります。普通の滿月に達した分娩は、譬へば果實が熟して自然に樹から落ちる樣なものですが、流產は未熟のものが無理無體に親木から振り落される樣なものであるから、自然と親木の方には傷が附きます。從つて其の傷面は普通よりは餘程癒り難いので、注意をしないと其處へ外部から色々な黴菌が入込んで、時を得顏に繁殖します。故に產褥時の攝生は特に注意を拂ひ、少しでも故障があるやうでしたら、專門醫の診察を乞はねばなりません。それから平生の注意としては、常に家庭用として「イルリカートル」を備へて置いて、月經の終つた後とか、其他不潔のものに接した場合には、一布仙即ち百倍の食鹽水或は硼散にて洗ひ、外部も每日一回石鹼を以て淸潔にするのが肝腎です。又病に侵されても便通の惡いものはカスカラサツクラダ錠或は硫酸マグネシヤの如き緩和な下劑を用ゐて之を整へ、飮食物は凡て刺戟物を避けて消化し易きものを撰ばねばなりません。轉地療養は特に炭酸泉の溫泉に浴することも効がありさす。

西洋婦人のお產

西洋にては分娩に重きを置き、產婆は一度試驗を經たるのみにては晏如たる能はず、及第開業後一二年にして又々試驗あり、其際落第すれば例へ一度開業したる者なりとも、或期間營業を停止さるゝ事往々あり、西洋にて斯分娩の重ぜらるゝは、要するに我國婦人に比べ分娩の輕症ならざる故にして、此は即ち身の嗜みの相違に因る者と云ふ可し、我國婦人は古來分娩を婦人の義務なりとして、激烈なる苦痛も人を耐忍し、取亂したる態を見するを恥辱と觀じ居れるに反して、西洋婦人は喜怒哀樂の情を即座に現はし分娩の際には激痛の潮來に從うて苦痛を訴へ、聲を揚げて號泣するを常とし、產婦のみならず、付添る母或は姉妹も亦泣く間は苦痛を忘ると稱して同じく聲を合せて泣くと云ふ奇觀を呈するなり、現今彼地の上流社會にては、分娩の苦痛に當り、痲醉劑を用ふる事流行せるが、余は滯欧中、日本にて產婦には痲醉劑を施さゞるも苦痛を訴へずと言ひしに、彼地婦人等は更に之を信せざるものゝ如くなりき、次には狹窄骨盤、雜婚の二亦た弊害なるが、西洋婦人は、幼少の時、家屋の建築、空氣の流通、其他生活狀態により骨の疾病を惹起す事少なからず、爲めに我が國婦人より狹窄骨盤多し、ヘーゲル氏は日本の例を擧げて小兒に母乳を飲ますれば狹窄骨盤の少なきを得可しと主張したり、更に雜種民族結婚の弊害も大なり、以上は分娩の我國婦人より重症なる原因を爲せるものなり云々（醫學博士磐瀨雄一氏）

狂句に讀込まれたる女の心

濱　荻

和歌や俳句には昔から女を讀んだものが多いやうですが、川柳などでも女を讀み込んだもので仲々捨てがたいものがあります。思ひ出づる儘二つ三つ選んで見ましやう。

二三年縫ひ込んで置く母の慾

縫ひ上げや何かで一枚の着物を二三年後までも着せやうといふ母の慾を讀んだのではありません。娘持つ母親や我娘の容姿自慢からもう肩上げを下してもいゝ年になつて、もまだ二三年肩上げをしたまゝ良縁を待つと云ふ心を讀んだものであります。娘持つ親心は昔も今も變りはありません。

花嫁へ馳走痘痕の侍女郎

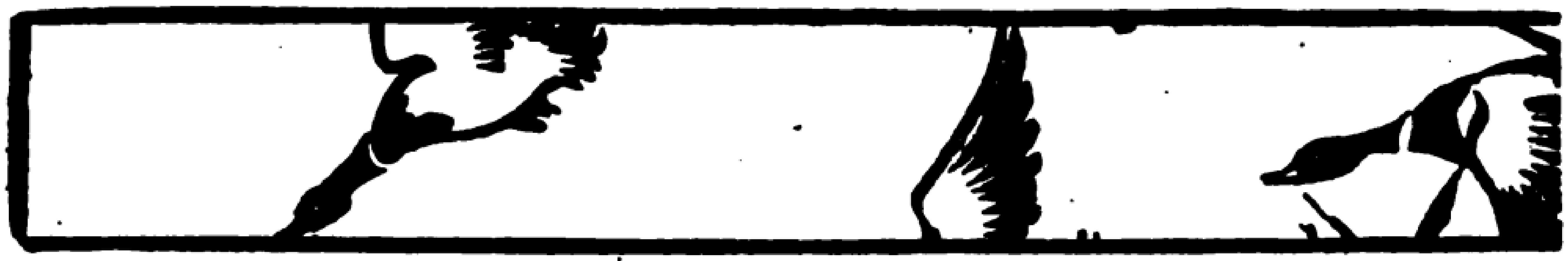
解釋をいたすまでもありますまい。婚禮の時には何時でも醜い侍女郎を選んで花嫁の容姿を引立たせる習慣になつて居りますが、醜い侍女郎でもかうして句になると何となくゆかしく思はれるものです。

大象を繋ぐ普賢の洗ひ髪

之は少々解し悪いかと思はれますから説明いたしませう。徒然草に「女の髪もて綯へる綱には大象をも繋ぎ止むと云ふ事があります。又普賢菩薩が美人の姿をかりて大象に跨つてゐる繪があります。此二つの事を一つにして讀んだ句でありまして、美はしい女には如何ばかり心を迷はす男の多きかをほのめかしたもので。單に洗ひ髪を結んだ丈で云ひ知れぬ美しさと力とが籠つてゐるではありませんか。

加賀で名の高い句上手舞上手

之も一寸難かしい句であります。御承知の通りに徳川時代で女流の俳人として最も優れて居つたのは加賀の千代女であります。又芝居で一番名人と云はれた人は加賀の國の生れであつた中村歌右衛門であります。歌右衛門は家號を加賀屋と云ひました。此二人は小さい加賀國の出でありまして共に當代の一流の人と云はれたのです。



それを置めて讀んだのが趣向であります。

白い歯は互ひに見せぬ公家夫婦

意味は讀んだ丈でも解りませう。が少しばかり昔の風俗を申さないと解りにくいかも知れません。昔は公卿殿上人など云ふ高位高官の方は男でも女でも皆歯を黒く染めて居つたのです。笑ふと云ふ事は旣に氣を許す事でありますが、笑ふ時には屹度白い歯を見せるものです。ですから俗にも笑を含んで氣を許す事を白い歯を見すると申します。けれども公卿殿上人は縦令笑つて歯を見せたにしましても黒く染めてあるから白い歯は見せぬと云ふ意味から、上流の人の愼み深い事を讀んだ句であります。實際は上流の人でも笑ふ事も巫山戯る事もありませうが、そこは文の文でかう申したものであります。

二三間出てから夫婦連れになり

之は申さなくともよく意味は解りませう。

誘ふ水茶にしてたてる茶筌髪

若い婦人が夫に先き立たれて寡婦となると男の方が兎角に云ひ祈るものですが、いくら云ひ寄られても其言葉を承けないで操を正しく守つて行く婦人を讀んだものであります。俗に人の言葉をいゝ加減に聞き流す事を茶にすると申しますが、其茶にすると云ふ言葉と茶筌とを結びつけて點茶の味を現はしながら、婦人の操を稱つた所は何とも云はれぬ味があるではありませんか。稀なる名句だとおもひます。

八文になるまで世話な禿菊

此句は少し卑しい句でありますが序ですから解釋しませう。禿菊を苗の時から育て上げて緣日などに持つて出て八文に賣るには植木屋の苦勞は一通りではないと云ふ事を讀んだのであります。かう表面から解しますと少しも卑しい事はありませんが、之を裏面から解しますと卑しい句であります。遊廓では七八歳の娘を禿と申しまして花魁の小間使にしてありますが、其幼い禿がだん〴〵大きくなりまして一人前の花魁になつて八文字を踏で道中するやうになるまでは容易な事ではないと云ふ意をほのめかした句です。八文字とは、花魁が道中をする時の歩み方であります。又八文に菊を賣ると云ふのは、今日から見れば大變安いやうですが、これは昔の事でありまして、昔の八文は、今日の十錢二十錢の値があつたのです。



精神病院の慰安會

婦人記者

十月二十九日の午後一時から巣鴨の東京精神病院で、慈善救治會（會長は大隈伯爵夫人）の催ほしにかゝる第九回の園遊會がございました。平常は哀れ深い赤煉瓦の塀もこの日は活々と秋晴に照映えて、國旗ゆらめく鐵門をくゞる紳士淑女は引きもきらず、招待劵と引かへる造菊の枝につるした菓子籠を受取つて、紅白の段だら幕を廻らした後園に添ひ式場へ練りこむ。記者が餘興場の大天幕内へはいつたのは、丁度藤澤一座が女大下を演じ了つて患者連のヤンヤが未だ止まぬ時でした。

▲患者のニコ〳〵顔

演壇兼舞臺の前に莫蓙を引つめ、大丸太を境にして男女の精神病患者がヒシ〳〵とすわつて居る、男患者は菅傘の花笠を被つたのもあれば、手に持てるのもおる。赤手拭を唐茄子かぶりにしたもの、後鉢巻したもの、菓子を頬張るもの、林檎をかおるもの、何れもこみあげた嬉しさが顔に溢れて居ました。女患者は白地に紺竪じまのお揃ろひ、櫛巻や引つめの銀杏返しが常よりもつや〳〵しく、歌舞伎の平土間へすわつた氣取りで附添看護婦と興じ合て居る、どつちを見てもニコ〳〵顔、救治會の惠みは隈なくゆきわたつて居ました。

▲大隈伯に聲がかゝる

やがて演壇に立出られた大隈伯は、精神病者の治療法は、眞實の慰安にあり、同情深き婦人の團體が、かくのごとき事に盡力するは誠に喜ぶべしと云ふ一くさりの演説を試みられる。陸軍大佐の古服に金紙の大勳章、厚紙の文官禮帽をいたゞいた、當院の名物男、蘆原將軍は「大隈卿――」を叫び、傍から又萬世不朽と聲をかけた。隨喜の涙をこぼした女患者もあつたやうでした。

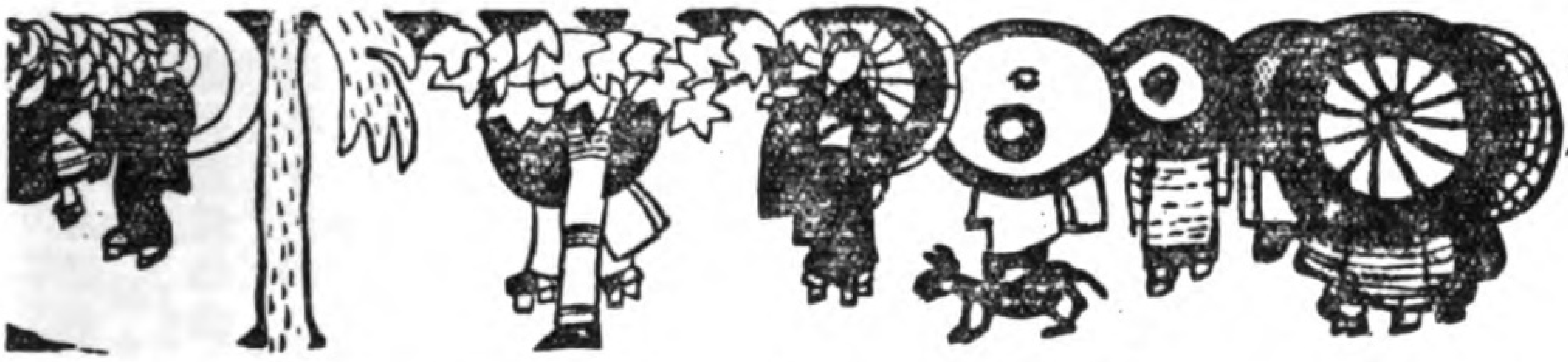
▲遊藝だけは確なもの

婦人患者の餘興はこの日の呼物と思ひました。先づ三遊亭今助の口上につれて、淸元の山姥が始まる、四十五六の小ぶとりの女が、良い咽喉で梅が笑へば柳が招くの節まはしには來會者をうつとりさせ、男患者の中から、男殺――と聲がかゝつた。次で拔衣紋のきやしやな年增が京の四季を輕妙に踊つて、英語のチーチヤアと患者の女王を以て任ずる松平女史が地を彈き、尙同女史の詩吟もありましたが、何れもあくぬけのした藝當で、暴人の今助を感嘆させた位でした。精神病者も遊藝ばかりは確かなものと見えます。

▲園遊會は患者の妙藥

二千餘の來會者は思ひ〳〵に喫茶店に休み、寄贈のお鮨やお菓子は忽ち賣切れとなり、患者手細工の卷煙草入れ、靴下、花簪、紙布織を並べた店は、看護婦の賣子が目を廻はすほど繁昌して居ました。會長大隈伯夫人を始め、幹事の貴婦人方が群集の中に斡旋されるのを見受け、相撲場では、蘆原將軍を行司に出ると負、旅順口なぞと云ふ珍妙な關取がシコを踏んで居る、ブードン〳〵と紙の打入太鼓を響かせて、巣鴨浪士、堀部安兵衞なぞと襟印した義士の面々が、雁木の陣羽織に、槍、鳶口、カケヤをかついで行列をやつて居る陳列した古流生花も患者のたしなみ、兒島高德、いざり勝五郎、大松茸。おかめと、ひよつとこの驅落の飾物も患者達の御手製を伺つて實に一驚を吃しました。かしこもこゝも歡喜の聲、精神病者には此上もない妙藥でございませう。園遊會を催ほされたあとは半月ばかり醫者も看護婦もらく〳〵が出來るさうでございます。

北米での贅澤の本場は紐育では貴婦人連がこの頃は贅澤飽いて簡易生活に傾いて來つゝあるが却て市俄古の方では貴婦人連の一般の風潮華美を極めて居る市俄古通の説に上流の婦人が長人の身の廻り費用として順當に要求する金額は先づザッと高等香水料千二百圓、高等白粉料九百餘爪掃除師に支拂金額四百圓理髮師へ七百圓、其の他色々のチックやら何やかやに五百圓位の處が普通であつてその上ズッと贅澤なものになると年に五萬六萬なたゞほんの身仕舞料に使つてしまふのも珍しくないとはオツソロしいものだ、そこになると日本の奥さん達は慘めなものだ、市俄古の婦人の掃除した爪の糟でも煎じて嚥んでアヤかつて見ては何うです。



道聽途說

△手拭を姐さん被り

明治學院總理井深梶之助氏の令夫人花子樣は、神戸の學院を卒業してから米國へ渡られて、マウントホーリヨク大學を卒業された方ですから、どんなハイカラな方かと思はれますが、人から西洋の話を聞かれても、私の洋行はもうかびが生へて居ますと、愛嬌の溢れさうなお眼を細めてホヽとお笑ひになるやうな極くしとやかなお方です。

そして天氣のよい日などは、襷かけに手拭を姐さん被りにして洗ひ張り物などにいそしまれます。時折は草むしりも庭掃除も、せつせとやつて居られます。夫人の洋裝などは見た事がないと人のいふのも道理で、日本婦人のしとやかな美點は決してお捨てにならないのです。

御良人は學德共に圓満な紳士、夫人は常識と學問とのよく調和されたお方ですから、先夫人のかたみの五方のお子樣も、それぐ御成人遊ばして各ゝ幸福な家庭を作つて居られます。

女中達の言葉といひ禮儀といひ愛嬌があつて正しいところを見ても、御家風を窺ひしろ事が出來ます。

以前夫人の敎へ子であつた人々も、今にマヽ樣と慕つて來るさうであります。

△平民的な御簾中樣

德川家達公の御簾中樣は、攝生關白家近衞公の御姬樣で、先の篤麿公の御妹子樣に御當りになります。

かゝる名門のお生れゆゑ、庭のお敎への程もきびしくて、下々の者には容易にお言葉もかけさせられぬと思ひの外、『誠に奥方樣はおやさしくお出で遊ばすのみか、よくさばけた御方樣で。』

とは同家に仕へる奥女中の話し。

派出ぐしい事はお嫌ひで、召使ひの御家來達も、他の大名華族に比べるとずつと少なく、至つて質素な生活を遊ばして居られます。

御前樣の身邊の御用は、人手をからず、奥方御自身にて遊ばす上に、公達や姬君の御敎育も親しく任に當られ、自分の事も自からして、決して人まかせにはなされませぬ。

時には御臺子にお出ましになり、玉の御手にかひぐしく茶を煮て、

『あなた、御茶一つ召上り遊ばせ。』



と公爵におすゝめになることがあるので、老女共が、それでは誠に恐縮で御座いますと申上げると、
『殿様の御用は私しが致すのが當然です。』
と御取上げにならぬとか。
交際場裡にはあまりお出ましにならぬけれども、一度關係遊ばした會などには、眞面目に御盡力になります。

△淺黄の坑夫服の貴婦人

或人は關西の女傑だといひ、おてんばのモデルだといふ廣岡夫人淺子刀自は、御生家は三井家で、長者の令孃と生れた果報の身の、緣あつて大阪加島屋の嫁御寮となられた方です。
維新の際には加島屋も家運よろしからず、御主人の信左衛門氏は坊ちやん育ちとて、經世の道に暗く、なか〳〵御苦勞があつたやうです。
それで淺子夫人は斷然起つて、晝間は何喰はぬ顏して家事にいそしみ、夜は自製の紙算盤で二一天作の五を自習する程の苦心をして家勢の再興に當られました。生家から十萬圓の借金をして之を資本に九州の炭坑を經營された時などは、淺黄色の坑夫服を着て、平氣で坑孔内に立入り、親しく事業を監督されたといふことです。
機を見るに敏い夫人は其後此の事業を政府に賣り渡して、今度は加島銀行を經營して今日に及ばれたのです。されば大阪邊では『加島銀行でおまへん嗚島銀行だす』と申します。
夫人はなか〳〵多趣味で、琴、三味線、圍碁、挿花、茶の湯から、詩作もでき、和歌も大好き、糸を紡いで機織の道にも御堪能です。
それでなか〳〵お口が惡くて、男でも女でも遠慮なく頭からこなし付けられるので、手も八丁口も八丁、眞に女流の傑物だといふ評判があります。
女子教育には特別に御熱心で、女子大學の有力な後援者です。

△堅實な男爵夫人

後藤男爵夫人が父君安場氏の眼鏡にかなつた婿君、今の男爵と世帶を持たれたはじめの頃は、御家政向も不如意勝ちで、男爵は新劑迄もなされたもので、『今に其時の儲が殘つて居るよ。』
とは男爵が得意の御話柄だと申します。
男爵が臺灣に民政長官としてお出での頃、夫人も彼地に御住居でしたが、折ふし呼吸器に患ひあつて暫く臺灣病院



に通はれた。

病院では、官吏の奥さん連中は、自分が遲く來ながらも主人のお名前ですん〳〵先へ診察室へ通つて行きました。其時奥様も御一緒に出で遊ばせと或夫人が後藤夫人に勸めると『いゝえ私は今日は遲く參つたからまだ順番が來ませんので……』と辭退された美しい謙遜の德には、誰しも感心せぬ者は無かつたさうです。

公式のやむを得ぬ場合の外は、餘り交際場裡に御立入りなく、二人の令息一人の愛孃の敎育に力を盡し、あの氣分の激しい男爵の御機嫌を取つて御行きになる御手際は立派なものです。男爵が大臣で居られる時などでも、『もう私共は何となく多忙で、餘り外出も致さず、官邸の内にばつかり引込んで南京ねずみの樣にちよこ〳〵致して居ります。』と近しい人に話されたとか。よく味ふべき御言葉でせう。

△孝行な加賀樣の姫君

『邸の奥が〳〵』と口癖の樣に子爵の殿の仰せらるゝ岡部夫人抵子樣は、大名中の大名加賀樣の姫樣であります。御若い時に結婚の御前御他界に就て、岡部家に御嫁し遊ばしたので、釣合はぬは不緣の基と諫言申上げた家臣もあつたと聞き及びます。

御輿入御荷物などは實に善を盡したもので、岡部家ではお荷物庫が新築になつた位。ことに梅鉢の定紋散らした蒔繪一揃のお雛樣なんぞは當代得難い品だと申します。

然し子爵の人格を慕ひ給ふ夫人は露誇り氣の程もなく他所の見る眼も浦山しき迄に御前〳〵と御仕へ遊ばし、子爵の母堂に對しては至つて孝行な嫁樣であります。

郊外の御散歩に、御供も連れぬ御二人連れを常に見かけるので、辻待の車夫達は鴛鴦の御夫婦と呼き合ふ位であります。

先年。子爵が腫物切開の手術を受けられた時に、夫人は自から看護婦の着物を着て、日夜枕頭を去らず御介抱遊ばしたのを御里附の老女が見て『加賀樣の御姫樣でも當節は……』と泣きましたとか。御料理にも御堪能、遊藝は素より、特に謡曲と小鼓は貴婦人中の白眉で御出になります。書の巧みなのは誰もしろことで、日露戰爭中に『御國のため』と自書した風呂敷を持つて高田村の出征軍人の宅を慰問されたのは今に美談として傳へられて居ります。

夫人は又なか〳〵世間通であります。衣服の御好みなども、お邸風の高尚な中に、垢拔けのした粹なところがあり



ます。

上流婦人中珍らしい子福者で、愛國婦人の會長を御辭退後は、高田村の邸内に子女の敎養に御餘念もなく居られます。

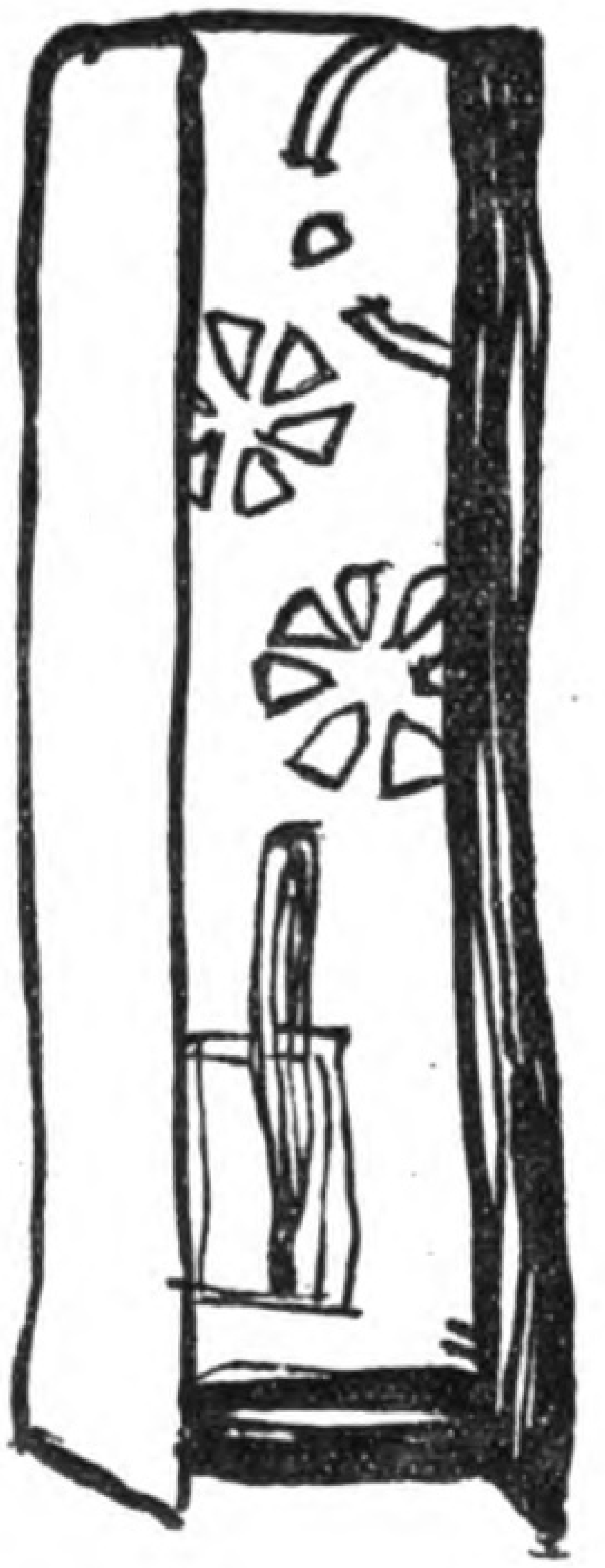
△貴婦人社會の異彩

貴婦人社會で一寸異彩のある方は目賀田男爵夫人でせう。一寸一町先きへ出掛けるにも馬車か護謨輪、稀にお徒歩ならばお女中附と云ふのが上流婦人の常ですが、夫人は令孃や令息をお脊負してお供もなしに何處へでも用達に出られますし、家に居られても、女中を顧で使つて居られるやうな事はなく、いつも自分から襷がけで働かれるといふ風であります。お料理は殊にお得意で、折々は「一體料理屋なんて實に不埒ですよ、もう一と息火が通れば甘しく頂けるものを、體裁ばかり氣にして生燒けや、生煮えを喰べさせるんですからね、ちと料理屋攻擊でもしてやらなくつちや駄目ですよ』などゝ氣焰を吐かれます。流石は故海舟伯のお令孃程あつて何處か異つた所があります。

御令孃方は夫人に似ないで花の樣な方ばかりなので、或時親しい或る奧樣が、『夫人さん、お孃さん方は貴女にちつとも似て入らつしやらないんですね．皆さんほんとにお美しいこと……』と仰ると、夫人は大不平で、『目を御覽なさい、私の目を、どれでも皆な目は私そつくりですよ』と言はれたとか。夫人の飾り氣のない、淡泊な、極めて氣象の面白い處を遺憾なく發揮してゐるではありませんか。

△ハイカラは良人のお目鏡

岡田八千代女史近來めつきりハイカラ風になられましたが、これは萬事が御良人岡田畫伯の審美的のお指圖によるのださうであります。女史が何處か外出しやうと思はれる時には、書齋からチリンと鈴を押して女中を呼ばれます。さうして『松や私今日他處へ行くんだがね、どの着物を着て行つたら宜しいか一寸お前旦那樣に伺つてお呉れな』と云ひつけられます。それで女中が畏る〳〵繪の具いぢりに餘念もない畫伯の許にこの旨を通じると、畫伯はどんな場合にでも、『よし來た』と直ぐに繪筆を投げて畫室から飛び出して來られ、女史の簞笥から着物を皆引つ張り出してあれかこれかと見立て、今日はこの着物にこの帶、この襦袢にこの帶上げと、一つ〳〵撰んで取りそろへて上げられるのださうです。それから女史の外出中に雨でも降り出さうものなら、畫伯は落ち付いては居られず、早速傘を持つて電車停留場まで行つて女史の御歸りを待たれることは、界隈で名高い話です。



京都西陣 賃機織りの内情

初しぐれ

露を破つてさす幾條の金色線。露落ちた向ひの濡れ瓦はちら〳〵としてゐる。紫、白の色糸は、朝日に輝いで美しい。うら冷たい晩秋の風は肌をさす。私は日の登らぬ時から機に上つて、チンコロリン〳〵と三挺の杼を越すが務めで、池の中に泳ぐ鑑の樣に朝から晩まで手と足を働らかしてゐるのです。思へば人の身は樣々、「上見れば、あれほしこれほしほしだらけ、下見て通れ、ほしはないぞよ」と云ふ歌を思つては、諦めはしますけれ共、口に入れずとも飾りたい娘盛り、時時は絹の上に熱い涙を落す事もあります、機織りと云つても、機械織りの帯地なんぞは、一本織れば四圓五圓は戴けるけれど、それは、立派な男のする仕事、弱い女には重たくつて、せい〴〵大島お召か厚板が山なんですもの、それを織るにも十二三の頃から奉公して初めは緯巻から習ひ出し、「あせ」やりを習ひやつと機に上ると杼越しの稽古、それから機械の損じを直す事を覺えて、初めて一人前の織手となるのです。其の間は三年や五年の苦勞ちやありません。一つ習ふにも、かみつくやうに叱られて、幾度涙を流すか知れません其の間には、流し元から拭掃除。十二や三の小娘が、雨の日も、雪の日も、かゝさず朝早くからするですから、冬になれば、小さな手は、見るも慘な、ヒヾ、アカギレで、ぞつとする位ゐです、時には、上の織手から意地惡う睨まれたり、獨りぼつちにのけられたりして、たま〳〵の休みの一日十五日も、淋しい辛ひ思ひに過さねばならぬこともあります。かうして十八九になれば、一かど織手となつて生活して行くのですが、一體に織手ー西陣の人の生活狀態の野卑な事は情け

ない位です。自からいやしむ其の織手の仲間に入らねばならぬ身は、いか程悲しい思ひに泣きましたか。けれども時と場合致し方なく、中途ながらに覺えた二枚機、三丈一反の縞お召の一圖に少したらぬを三日かゝつて織りました。慣れば、一日か一日半で樂ときゝますが、なれぬ事とて腰はだるく、夜な〳〵はてる足の重たさ。肩はつまるやら、人知れず蒲團の襟ぬらし、枕冷たう覺えしも幾夜。

　私は、水深う沈んで、居るのでございます、男女の差別はなく、この寒空でも大ていは單衣のうす衣に、だらしなう帶して、汚れた前掛けにたすき掛けの風姿それでも樂しいか、おもしろいか、聲はり上げ歌ふ者もあれば、笑ひつ語りつ、織る人もあります。織つて取れば取るだけ着物に費し、口に入れて、預金のたしなみなんぞは露ないのですもの。此頃のやうに不景氣不景氣の聲高うては、周章方一方ならず、織先きの緯を取つてうるやら、質にやるやら、あらゆる手術をするのです。實に情けない裏面です。

　其の代り、一日十五日の休み日となればさしも、音高き西陣も、機音はきつちりやんで、靜かに淋しい程です。晴れの日も着かざる人々、衣倒れの眞髄はいたる所に現はれて、いづこの奥様令嬢かと思はれる人ばかりです。

　この惡習慣を脫しようと務める人もなければ、年々歳々衰へ行く西陣を再び復起させやうとする人もありません。福井に敗けやうが、一向存せぬ顏の人達ばかり、時たまに有志者の話しがあつても、演劇ならとにかく、まあ遊びにいつた方がおもしろからうと、たちよる人もないのですもの。もとより道德の修養のと、云ふ人はてんでありません。私もこの人達と同一視されるやうになつたのですが、自分ばかりは染りたくない獨りぼつちになりたいと望んで居ります。

　織手の方もかういふ始末ですから、機出す方もなかなか嚴しくござります。尺短かでもあらうものなら、それは〳〵、小言の辛さ。私達はそれが心配でなりません。噫今日はたてつぎ一尺ばかり短かいやうだと

思ふと、もう氣が氣でなく、またしても〳〵機の上から下の方をすかしみます。或時も丁度十時頃に織り詰めると、五寸の尺短かー。ちりちりしながら持つて行かねばならぬかと、心配は一通でなかつた。お民さんに縦つぎをたのみ其の間に髮を結つて貰ふ、奉公の身なればとても〳〵好みの髮も結へず、白丈長ときまつてはゐるが、母の許に行つて織手ながら內娘らしい品のいい高髷に結つて頂く。



つぎ終つて上布二尺ばかし織つた時には、午後の四時。日の短かい此頃、もう暮れ近い落日の影いと淡う急いで私は通帳と絹をもつて機先きへ行きました。月末近い二十八日、どこもどこも機音は常よりはげしう聞えます。あゝいざとならねば仕事の出來ぬ人達ー。これが人情かと思ふと悲觀せずに居られません。

「ごめん下さいませ」格子戸明けて這入ると、三人ば

かし男の人が見える。後で番を待てゐると、店の若い者は虎の皮着る何とやらで、意張り反つて聞いてもいやな毒々しい言葉。二圓三圓の金に男の頭恥かしくもなく下げて出て行く後姿の哀れ――。さそれでも身には田舎銘仙に博多のギユ〳〵云ふのをしめて、流行の中折れ帽。一つまたいだ閾の内外――。京都人の通性が見透される。

「五尺短かうて、どうします、表着になりますかいなあ。」

大きな聲に驚いて見ると、庄どんと云ふ若い者頭の、如何にも憎まれ口たゝきさうなのが、どなりつけてゐる。

「へイ別に短かうても、私とこに一寸も盗たと云ふのぢやありませんし――、どうも仕方が……。」

「仕方ないと云ふたら物は総ひどすなあ――まあ、よう思ふておみやす、私とこかて一反に五尺も短かかつたら、何圓の損か――うつかりすると、仲買が損しても取つて呉れまへんがなあ。」

「そら何です、私の方もなるべく短かにしともないので、織れるだけ織らしたのですけれど、たりませんので、何とおつしやつても仕様もなし、そんなら私の方で、買はして戴だけばよろしいが、わづか賃機織る身分で、とても、そんな事は出來まへんし、一寸も盗た覺えもありませんし、なあ……。」

「そら――ね、盗らうと思ふたら、後でも前でも盗れます、ようありますがな、尺短かを織つて、そして休みの日にひよつと道で會ふと、それと同じ柄の前掛をしてはりますやらう、其の時に云ふとおみやす、赤い顔せんなりまへんがなあ、それで、默まつてますけれど盗つたか盗らんか、そら、私も側についてゐる譯やなし、知りまへんわ――、なあ――、まあ、あんたさんとこやで、そんな事はありまへんけれど――。」

何と云ふ、無禮な言葉でせう。それでも男の人は

「なんとおいやしても知らん事を、知つてますと云ふ譯にもいきまへんし、さうおうたがひやすなら、機上げて貰ひませうか――。」

下げた頭を上げて、怒りの現はれた目で見てゐる。「あゝ、さうどすか、いつでも上げます、何にもかも勘定しておくれやすや、十圓と云ふ貸しも形つけて、——ね、なにも私とこでも、機を上げたり、出したりするのが能やないのどすさかい——。」哀れ最期の言葉は、最も酷でした。どこへまはつても、頭を下げなければならん破目に陥し入れるのです。男の人も十圓の借りにしほ〳〵と賃金引かれて、泣かんばかりに歸り去りました。私の絹もつ手はぶる〳〵



ふるへてゐました。もしや〳〵私も五寸の尺短で——と思ふと、もう放り出して歸らうかと思ふ位ゐ苦しかつた。

「あのお氣の毒ですが、明後日一本持て參りますが、五圓程貸してもらへまへんか——。」「此頃は不景氣どつさかい斷つてゐるのどつせ。」「この次の絹のお金は入りまへんさかい、願はれまへんか。」かう云ふ談判がもち込まれる。この男だつて、さう

見下げるやうな、衣裝ぢやありません。庄どんよりはずつといゝ衣着けて、籐表の一圓上出たらうと思ふ下駄を穿いてますもの――。

やう／＼私の番になつた。さし出す手も震へてゐたらうと思ひます。

「若藤さん、越ぬけかありまつせ。」劈頭一言ひやりとする。

「五寸短かどすなあ。」

「ハイ、ぎり／＼織りましたが。」

「氣、つけとくれやすや――よせると此上縮みますさかい。」

「氣をつけます。」

ちらつと、白い目で一瞥される憎さ――。機織して貰つてゐると云ふ弱味につけこんで云ひたい放題――

お金の有ると無いの差は、あらゆる事物に現はれます。教育があつても、金が無ければ弱者です。三日働いて得た九十五錢、このお金には云ひえぬ殘念さや、口惜しい涙が流されてゐます。どうして易々と水を流すやうに費はれますものか。

芝居や、音樂會に、一等とか特別とかいつて、一圓も二圓もの札買つて、身には錦綾をまとひ、胸に輝く青春、若き血潮のその如く、波ゆるぐゴールドチエンひらめかし、金紋目引く護謨輪の鈴音高く、人波切りぬき給ふ姫達の御身の程、私達の目に何とうつりませう。それはもう羨望も起りますけれど、悲觀の念が一しほ強う、寂れた凋落の悲しい身の底の、まだ消えぬ燃火を煽動して、虚榮の幻影を追ふのです。

しかし私はとうてい及びつかぬ人達と夢見るより、洗ひ晒しに身をかため、飾り氣ない頭髪でも、にごりきつた機業社會に心のみは、――心のみは超越した生活を送りたい。朝に、夕べに、變るあやにしき飾り給ふ令孃も、其のお絹一つ織るには、それほど涙を流し心を痛めるかと、同情れたなら、袖通す其の中も、感じ深うおはさうと存じます。



寂しき女の噂

――帝國劇場の二階から――

枯荻

見渡せば、見わたせば、はてしもあらぬ海原よ――これがのぶ子さんの常套誹、寄宿舎の窓からうちつゞく瓦屋根をジツトと眺めながら、かうつぶやいて、とう〳〵思郷病の捕虜とおなりなすつた緑髪の君のぶ子さんのことを、今宵どうした譯か、ふと胸の奥底ふかく思ひうかべて、走馬燈の如く目の先きを女といふ女のいぢらしい姿が走るのよ。これが現實よ。これが時代の女の辛さよ、と云つては一々人の前にひつぱり出してお日に懸けることが出來ないのが常例れ、ところが其の實例が今夜といふ今夜は萬目のかゞやく中で演ぜられました。

だがそれは現實ではなくて芝居です。舞臺の上の小さい世界のごたくさに過ぎないけど、それでもその後ろには大きい大きい意味があるのね、われ〳〵女子の、……舊時代の日本の女には夢にも知らなかつた問題がすぐ目の下で演じられました。それを今あなたに話しませう、そしてのぶ子さんに好く似た、芝居の女に同情の涙をそゝいで上げて下さいな。下さるわれ。なんだか話がとんちんかんになつたの。だがこれだけは無駄の前提ではなくつて妾の實感よ、あゝ妾はなぜこんなに感情的な人間なんでせう。

帝國劇場……。とまでいふとすぐあの自由劇場れとあなたは微笑むでせう、だけど未だ多くの女子の内には自由劇場がなんだか一向ご存じない方があるわれ、そりやきつとあつてよ。とりわけ田舍の女學校などでは芝居は大の禁物、なんでもかんでも箱詰主義をとつてそんなデカメン振りは聞くもけがらはしいといふ權幕、これは始めから例外として苟も新時代のハートをそなへた御婦人なら、この新しい芝居がどんなに面白く、染々と身につまされるか知ません。

その芝居といふのはハアプトマンの「寂しき人々」といふのです。日本で一番綺麗な劇場、金モールのやうな金ぴかの天井や、薄紅ゐの羅物を身にまとふた天女の身もかろやかに舞ふ



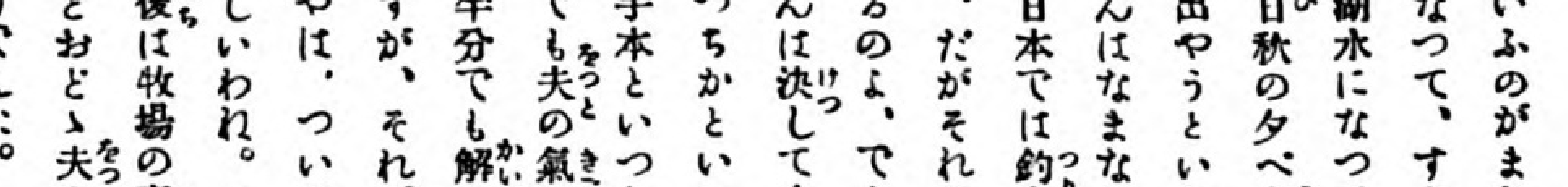


ところどころかいた天井畫や、正面の孔雀の青金の彫物や白鳩の五羽七羽たのしい團欒をしてゐるかざりものゝ中やで「寂しき人々」もないわ、だがれ芝居がはじまると見物席の電氣がみんな消えてしまつて舞臺だけの世界になるのよ。

この芝居のあらすぢといふのは、なんでも獨逸のある片田舍に田地を人に貸して名譽職を奉じてゐる老夫婦があつて、その息子さんといふのがヨハンネストといつて大學者。十三の時もう高等學校の二年級だつたといふ偉物なの、早慧にして神童とよばろつていふんでせう。ところがそのコハンネスといふ人は、平家の若武者といつた蒲柳の質、才子多病はどこの國も同じことだとみえてながらく肺炎に襲はれてゐるのですが、それでも一遍兵役に服して豫備士官なのですつて、なんだ　いよ〳〵平家の若武者ね。間もなくケエテといふ女を迎へて、花よめ花むこはフリイドリヒスハアゲンの借別莊に住ひ、夫のヨハンネスはこゝで靜かに著述をやらうといふ。もう甘いことづくめのはなし。誰だかさんにいはせたらそれこそスヰートホームの眞髓よ。

しかもその別莊といふのがまた素敵なの、裏がズツと見晴らしになつて、すぐ目の前が漫々と青い水をたゝへた湖水になつてゐるといふ結構な場所です。春の日秋の夕べ小舟の綱をといたら音もなくうかび出やうといふ寸方です。

ところがケエテさんはなまなか學者の妻ではありませんでした。日本では釣合はぬ縁を提灯に鐘といひますわ、だがそれとは一概に出來ない複雜の意味があるのよ、でもさうぢやありませんか、ケエテさんは決して身に缺點のある方ではなくつて、どつちかといへば女らしい女いはゞ良妻賢母のお手本といつたほうの人ですからどうかして少しでも夫の氣心になりすまさう、六ケ敷い言葉の半分でも解しやうゝと小さい胸を痛めるのですが、それが駄目。學者の夫の言葉や胸の裡やは、ついに腑におちない永久の謎でした、悲しいわれ。ケエテさん、ケエテさん、それから後は牧場の夜を踏みまよつた小羊のやうに、おどおどゝ夫の目色ばつかり見て暮らす人となりでした。





夫のヨハンネスからいつても無論幸福な月日ではありませんわ。天才肌の短氣な性分でしたから、カッと上熱せて随分つらくあたりました、だがそれは妻が憎い譯ではなく、心と心がシックリ合はない不滿からついイラ／＼しての癇癪です。その證據にはよく後で、『おれが悪かつた、おれが悪かつた』とたあひもなく詫まることがあるんです。

だが要するにどつちむき幸福ではなかつたのね。

それからケエテさんはとう／＼赤ん坊を生みました。夫婦の鎹……ケエテさんも普通の女のやうにかう考へて、なんだか體に數倍の力がついたやうに思つたのよ、だけど夫の望むのは何よりかも自分を解して呉れる人、自分の著書の値踏みの出來る人なのです。やつぱりケエテさんの喜びは糠よろこびだつたのです。

するとある日學者ヨハンネスの頭に美しい星が一つ落ちました。それは、彼のたつた一人の友達畫家ブラウンといふ男と知り合ひで露西亞の女子大學生でありますアンナ、マアルといふ女とこゝろやすくなつたことなのです。

はき／＼したマアルさんは、よくヨハンネスの心を解しました。うてば響く新時代の女なんですもの。ヨハンネスは妻のケエテとも計つてマアルさんをしばらくこゝの別莊に引きとめることにいたしました。

そして良人と新來のマアルとはケエテの分らないやうな六ヶ敷いことを面白さうに話し合ひました。さういへば夫のこの頃の晴やかな顔。秋の朝二人はたのしく葡萄を摘みました、或は湖水に浮び出でゝ舟中で著述の原稿を讀んで聞かせました、その睦ましさ。

さてその陰にゐてケエテさんは、紡績株を賣拂ふほどの家計の不如意に苦しみ、一つには流石に女氣の二人の間をひとりしめ／＼考へて、とう／＼半病人になつてしまひますのよ。

軈て二人の間は姑の目にも立つて、愈々マアルは立ち退きますの。ヨハンネスはまるで燭を失つた人のやうにうち沈んで、半狂亂の姿です。マアルも泣いて離別ます。だが二人の間は決して可笑しい關係があるのぢやなくつてよ、





こゝは覺めた人と覺めた人の微妙の投合といふもんでせう。心に巣喰ふた天才の寂しさと、新時代の女子の寂しい心とは思はず強い針をうち込まれたやうに感じて、こゝでも泣かされました。

　マアルが去つた後のケエテさんは幸福だつたんでせうか。いえ〳〵、やつぱりちぐはぐの寂しい心は變りません、盲目的な結婚がこんなにまで悲慘な結果を生むのかと思ふと、おもはず身震ひがついてよ。神童天才の末路と、二樣の女をかうならべて見るとしみ〳〵と考へさせられる處があるわね。

　今の日本では未だケエテのやうな女の方が多いんでせう。現にのぶ子さんもその一人なのね。

　この芝居は、これから先きまだ〳〵悲しい事件が追つかけにわき上がるんです。パツと電氣が息をふつかへした一寸の間、鉛筆の走りがきで左樣なら。

△目白臺の一日

照りもせず曇りも果てぬコスモス日和、小石川目白臺なる女子大學の秋季運動會は、その校庭にて催されぬ。晴れやかに着飾つた姫御前や奥樣達が、嬢ちやま、坊ちやまの手ひき袖曳き引きも切らず。自働車を驅つては、大隈伯同夫人、同令嗣夫人、土方伯、西園寺侯、松浦伯、花房子、目賀田男、其他令息令孃等見渡す限り紅き衣、赤きリボン、五色七彩百花こゝに返り咲きせるが如し。

　軈て午砲を合圖に奏樂晴れやかに、數千の姫御前は美しき拍手に『月の姿』を迎へて劈頭の競技は開かれぬ。番組は益々佳境に進みて『花神の使』に入る、菊花の薫り袖にも匂ふ行進遊戲いとゞ優美に、文學部の『龍田姫』は『高く澄むみ空、清き月の光、こゝにもかしこにも、蟲の聲風の音……』とピヤノの曲も麗しき表情遊戲、同校の誇りの一つと聞き及びぬ、競技總て三十回、とり〴〵の花紅葉、旺なりし目白の秋の一日は暮れた。



女中まかせにした私の失敗談

某博士夫人



△商人と下婢の惡だくみ

私は昨年の春大病にかゝり入院いたしましたが、退院後あちこちへ出養生しましたり、家に居る時もお醫者の言ひつけであまりこま〲しいことに心をつかはぬやうにして居ましたので、つひ取締りがお留守になり、永年使つて居た下婢と出入の商人とがグルになつてサンザ惡い事をしましたのを少しも知らずに居りました。これと申すもつまりは自分の不取締からでお咄しいたすのもお恥しうございますが、若し奥樣方の御參考にもなりますなら罪滅ぼしに申上げませう。

△牛肉の硬いのから氣がつく

私共では以前から夕飯だけ洋食でございますが、當春頃から牛肉が硬くて味が惡く、而して一と皿の分量が大層多くなつたやうですから、料理番の下婢に注意を申付けますと、その當分はいゝやうでも直に又かうなります。これでは困るから一度肉屋をお呼びと申しましたところ、實はこれまでの肉屋は時々品切れがあつて困りましたから、近頃何屋に取易へましたと申し

ます。可笑しいとは思ひましたが、取易へた肉屋は市内折指の店ですから、それもさうかと其儘に過して居ります内、追々私の身體も本復しましたから久しぶりで帳面調べを爲て見ますと、牛肉なぞはびつくりするほど澤山の買方が爲てありました。尤も可なりお客の多い家で臨時に取る肉も多いのですから判然とは分りませんが何しろ私の病氣前に比べますと五層倍も肉を取つて居ります。それから米屋、酒屋そのほか一切の帳面をしらべますと皆非常に買方が殖えまして、八百屋物など實に格外に上つて居ました。而して商人は皆以前の出入りのと代つて居つたのでございます。

△一割五分のコンミツシヨン

それから私は商人に、こんな惡い品を澤山をしつけるならもう斷ると嚴しく談判いたしましたところ、實はお女中とかやう〳〵の御約束を結びましたので申譯がございませんと、すつかり商人が白狀いたしました。それは取締の女へ一割五分のコンミツションを差出す代りに品物を澤山取つてもらうと云ふ約束ださうで、段々聞きますと、宅の取締りの下婢が、これまでの出入でない店へ出かけて往き、私達へ一割五分の手數料を出せば出入りにすると談判するのださうです。そんなことは當店の法度ですが、折角ですから内内で一割だけ差上ますと答へますと　それぢやア賴みませんとツイと歸つて了ひ、兩三日經て又候談判に出かけるのださうです。競爭の烈しい世の中に良いお得意を逃すも殘念と腰を折つて下婢の云ふ通り一割五分を出すことに定める、その埋合せに少し下つた品を澤山納めるのですが拂高がゝさめば下婢の歩合は益々上るのでございます。何の商人も皆この手段で新らしく出入りになつたのださうですが、店の名前を恐れるものは御用きゝの男からコンミッションを出す體にして策を畫くのもあつたさうです。唯肴屋だけは一番古い出入の上に却々きかぬ男ですから下婢の手にのりませんでした。

△文字知らぬ女の智慧は怖しい

この惡だくみをいたした女は、永年實體に勤めて居る年中增で、一切の取締りと料理番を兼て居ましたので、可なりの給料もつかはし出來るだけ心づけてやつたのですが、私の病氣につけこんで他の下婢達を抱きこみコンミツシヨンを分配して口を塞ぎ多過る日用品はそれ〴〵家に送りなどして居たのです。

私の衣服や髮飾も大分紛失しましたがそれよりも永い間この餘分買で損害を受けた方が却々えらいのでございます。文字を知らぬ女が慾にはまると、敎育のある女より怖しい智惠が出るものでございますネ。



△世間並で珍らしくない

或奥様が、「あなた、そんなこと位にお驚ろきなさるつて、未だお人よしでいらつしやいますのネ、今はもうそれが世間並で珍しくもありません。つまり商人がしつかりしないからですよ。紺屋がお邸へはいりこむには先づ女中へつかひ物を一反するのが定りだと云ふではございませんか」と仰いましたが、成程私もよつぽどお目出度かつたのだと思ひました、今度すつかり下婢を新しくいたし總てを現金拂に定め、嚴重に取締るつもりです。本當にこの災難のおかげでい

い學問をいたしました。併し、商人と下婢のわるだくみが世間に追々はびこるのは情ないことゝ存じまして、その原因を考へて見ますと、いろ〳〵思ひ當る節もございます。

△二種の通ひ帳

私の懇意の方が或る別莊の留守居番を賴まれましたが、向へ參りますとその別莊へ出入の商人が通ひ帳を二つ拵へて參りましたので、二つは要らぬと申しましたら、その商人が「イエ一冊はお奥ので、一冊はあなた樣のでございますと答へました。何故だと尋ねますと、商人は薄笑ひして、別莊のお留守居でも遊ばすお方がごぞんじない筈はございません。手前共は古くからのお出入ですから、決して御心配はございませんへエ」と述べ立たのには、あいた口が塞がらなかつたとお話しなさいました。避暑地のホテルなぞにもボーイと商人の間に大分この風があることを聞いて居りますが、こんな場所から擴まつて來たのではございますまいか、外國人は人に事を賴む時に、禮金をいくらとチヤンと定めるさうでございますが、この風の惡い方に勸進へし出したのかとも存じます。原因は何にいたせ主婦が拔目なく氣を配つて下婢と商人を取締らなければなりません。さうなりましたら追々正直なよい商人が出來るやうになりませう。

犬の放尿するわけ

○犬は文明人よりも野蠻人の方が鋭く、人間よりも動物の方が鋭敏である。動物中でも犬は殊に鋭敏で、群衆の中でも餘ほ能く己れの飼主を匂を嗅いで見出し、主人が遠方に行つた時も、匂を辿つてよく其所に達するのである。されば西洋では警察犬と稱するものがあつて、犯罪者をこれに嗅ぎ出さしむる程である。犬が何處へでも放尿して歩くのも、何も、したさにするのではなくて、如何なる所に行くも、其の匂を嗅いで、己れの元來た道筋を知る爲である。故に彼等は決して人間のやうに迷ひ子となることがなく、又人間のやうに自分の歸りの道筋を人に尋ねないけれども、ちやんと元の處へ歸つてゆくのである。



ストーブと火鉢の注意

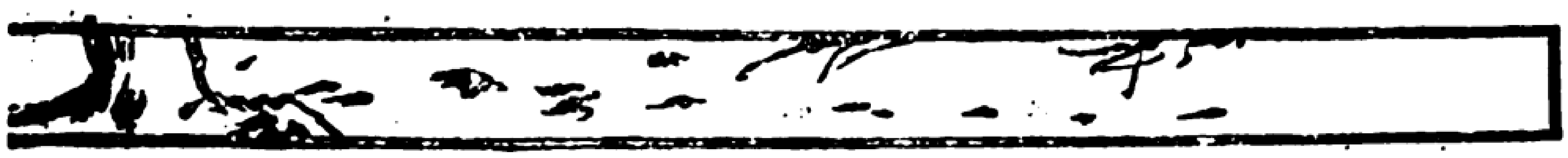
醫學博士　横手千代之助

▲寒さを感ずるわけ

人間は他の動物とちがつて不自由なものです。冷血動物なぞは、まはりの氣候につれて自身のあたゝかさを都合よくかへることが出來ますが、人間のやうな溫血動物は三十七度の體溫につり合ふ位の氣候でなければ暮らしにくいのです。私共の食物は御承知のとほり胃腸に吸ひとられて血の中にはいり、次で組織の中に入り肺から入つてくる酸素と化合して體溫が出來るのですが寒い時分はいろ〳〵なことでこの體溫をへらされます。其一つは呼吸です。誰でも冷い空氣を吸つて吐き出したときはこの空氣があたゝまつて居る、これは肺の表面から熱を取つて外へ持出すのであります。夏の盛りには、よく犬が舌を出してゐますが、あれは息を早くすると肺の熱が澤山外へ出て身體がすゞしくなるからです。も一つは傳溫と云つて身體にさはつた物に熱をつたへて溫みをとられてしまふ。たとへば衣服につたへ、それを又まはりの空氣につたへるのです。あのつめたい石をにぎつて石があたゝまるのもこの傳溫です。また皮膚の毛穴から湯氣が立つときは體內の熱が多分に空氣へすひとられます。又皮膚の表面から熱が冷たきものに向て放散して出ます。その他大小便汗等の排出のためにも熱を取られますが、これはほんの僅かで、呼吸と皮膚から主にとられるのであります。

▲暖室法の要るわけ

時候がいつも攝氏二十五度くらゐ(夏)ならば體內の熱と外へ出る熱と平均しますから、裸體でゐられるのですが、これより下るとこの平均を失ふので、補ひをつけなければならぬ。僅かの補ひなら運動か、多食するかで間にあひますが、ズッと氣溫が下ると外へ出る熱が多くなり、なか〳〵こんなとでは追ひ着ませんから、着物を重ねて皮膚より逃る熱の量をさへぎるのです。併しますます寒くなれば、まだ追ひつかない。ドシ〳〵歩いても





ゐればいゝが靜かにすわつてゐるか寢るときには特別の仕掛で特別の氣候をこしらへなければ堪へられません。人間が家に住ふのはこのためです。しかし建放しの家では外の溫度とほゞ同じですから、何か工夫が必要になる溫室法とか暖室法とか云ふのはこのことです。

▲空氣と品物の暖まり方

北の冷い風をよけた南向の住居は太陽の熱が壁や襖にまでゆきわたつて室内の空氣があたゝまり、夜までも其の暖さが持こします。空氣と品物と同じやうに熱をうけた場合には、空氣の方は早く暖まり早く冷えるが、品物は一度暖まつたらなか／＼冷えません。この理窟で壁や襖もだん／＼に貯へた熱をそろ／＼と吐き出すから、夜まで持こして暖かいのです。それゆゑ南向の家は天然の經濟な暖室法であります。

▲誰にも心地よい室内の溫度

併し嚴寒になると南向の家でもなか／＼難儀になるからいろ／＼の方法を執りますが、脂の多い人と少い人、貧血と多血、薄着、厚着又は働きの仕方なぞに依つて加減が違ひますから、凡ての人に心地よい暖室法を執ることは難しい。併し一般の經驗によりますと攝氏十七八度乃至二十度位が適當でせう。

▲局部暖室法と中央暖室法

火鉢煖爐を用ゆるのは局部暖室法で、中央で熱を拵へ管で各室へ送るのが中央暖室法です。歐洲あたりでは一般に中央暖室法が行はれ近來は熱湯や蒸氣の管で送る溫暖法がやすく出來、大層流行してゐますが、日本の普通の家ではこんな仕掛もできてませんから、まづ火鉢や煖爐が主ですが、これについて少し注意を申上げませう。

▲酸化炭素が一番こわい

火を燃せば必らず炭酸と水が出來ます。時としては酸化炭素が出來ます。一番目に見えるのは水で、熱い火の上に冷き鐵瓶をかけると、水氣が底につくのが水のかたまりです。誰もよく炭酸瓦斯に中毒すると云ひますが、實際は炭酸瓦斯より酸化炭素の方がこわいのです。炭酸は炭素一、酸素二の化合で、酸化炭素は炭素一、酸素一から成たち、まだ炭酸になりきらぬものです。炭が赤く起る前によく青火がチロ／＼燃えるあの時に酸化炭素が





できてゐるのです。炭酸は百の空氣の中に二或はそれ以上あると呼吸が少し苦しくなり、五乃至六になれば窒息します。(下等動物はもつと多くても窒息しません)が百の空氣中に一あるくらゐなら差支ないものですから、毒性は弱い方です。ところが酸化炭素は一萬分の五以上になると中毒症狀をおこす强い毒物です。火鉢や煖爐のために窒息するのもこの毒物のためであります。

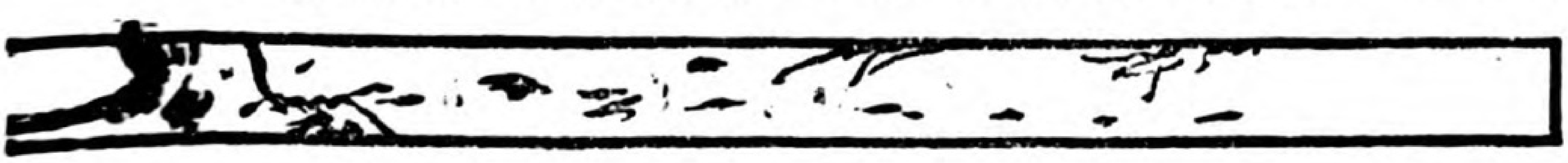
▲酸化炭素の多い燃料

炭、石炭、薪なぞは酸化炭素をあまり含んでゐませんから燃える時出來なければさして害のあるものではありませんが、瓦斯は元來酸化炭素が多く、百の中に十位含んで居ますから、中毒の例が往々あるのです。瓦斯のもれるのは臭氣でよくわかり、酸化炭素の害になる程出ない内に大抵ふせぐことができますが、以前或所で、新參の小使が當直の夜、瓦斯口をしめるのを忘れて寢こんだので、夜中に苦しみはじめ、這出してやつと助かつたことがありました。

▲火鉢の用ゐ方

炭その物は瓦斯より安全ではありますが、燃すときには瓦斯や石油より例の酸化炭素が多く出ます。尤も酸化炭素は前申す通り青火が燃ゆる時分に出來るのですから火は室内で起こさずに赤くなつたのを持つて來るのがよろしい。さうすれば炭酸が出るだけで害は少いのです。何れにしても火鉢は多少の有害物を外へ出す仕掛の煙出しが具はらぬのですから安全な道具とは申されませんが日本の家は幸ひに煉瓦建に比べると七八倍位乃至十倍位も空氣の通りが宜く、洋室で空氣が一時間に一回代る間に、日本間は八回、十回位代りますから、大した障りもないのです。併し日本では西洋間にも火鉢を使ふ場合がありますからよほど氣をつけぬと危險なことがあります。二三年前、或礦山の病院で、當直の小使が外科手術室へ火鉢を持ちこみ寢て了つたところ、酸化炭素の中毒で翌朝死んで居ました。西洋間で火鉢を使ふには第一に、空氣の通りを工夫しなければなりません。それから火鉢へ嚙りついてあたつて居ると濃い瓦斯を吸ふて輕い中毒をおこします倘アンカ炬燵は寢具を暖めるだけはいゝが、入れて寢ると炭酸が蒲團の中へ充ちて、身體から分泌する炭酸の排出をさまたげ、往々害をうけることがあります。

▲煖爐の用ゐ方





煖爐は入物の鐵が熱くなつて温を空氣にちらし他へおしひろげる仕掛で、火鉢より都合がいゝが、煙突がわるくて出來たものが充分屋外へ散らないと中毒をおこします。煖爐の大きさにくらべて煙突が小ひさ過ぎたり、また煙突口の附けかたが惡かつたりするといけません。また煙突が低いと風にをされて煙りが逆もどりしてきますから、屋根よりずつと高くこしらへる方が宜しい。そして火の強いのは近所ばかり熱くなつて室が平等に暖まりませんから、熱が空氣にすはれて室内を廻ぐるやうに煖爐を大きくして表面の火氣はよわくする方がいゝのです。併し小さい煖爐を大きいのにとりかへるのはをつくうですから、一寸か五分廻り大きな鐵かブリキの上覆をかぶせるか、又は上だけあいた鐵かブリキの箱へいれることにすればよろしい集會のをりなぞは衝立か何か熱の放散を妨げる物を煖爐の側へたてると、室中が萬遍なくあたゝかくなります。それから室内をたゞ温めるばかりでは、空氣中の濕氣減じて咽喉がかわきますから、煖爐の上へ水をいれた器をのせ濕氣を出すことが肝心であります。

▲安全煖爐は安全でない

近來煙突のない煖爐を安全煖爐ととなへて賣出したので大分用ゐてゐる家もみますが、これはあまり安全でありません。前申す通り毒氣を吐きだす煙突のないのは西洋間には尙更危いのです。近頃また煖爐の上へ金網をこしらへ、石灰をのせる裝置のができました。これは石灰に炭酸をすひこませる趣向で、一寸うまい考へのやうですが、ほんの一時の效能で、炭酸が石灰と結び付て炭酸石灰が表面に出來ると、あとから出てくる炭酸と結付かなくなりますから、たび〳〵網の石灰をとりかへなければ何にもなりません。併しさう〳〵掛りきつて石灰をとりかへるわけにもゆかず、之があると空氣の通ひがわるくなり、かへつて酸化炭素が多くできる恐れがあります。これからおひ〳〵火鉢や煖爐の時候になりますので、主婦方は取扱方、據み方を衞生上からよく考へていたゞきたいのであります(明治母の會講話)

近江八景を讀み込める歌

のせたからさきはあはづかたゞのかご
石山比良やはせらせてみる

瀨田、唐崎、粟津、堅田、石山、比良、矢橋、三井



良人を去らんとせし妻の手紙（其二）

村雨

生みの子より受ける日々の教訓

重荷を擔ふて行く人が、右の肩から左の肩に擔ひかへた刹那は、樂になつた新しい悦でせう。けれどもその刹那から既に苦痛に進んでることを忘れてはなりませぬ。

女の考がたとへ手を飜へすが如くに變つたからとて、強ちに咎めるのは無理でせう。絶えず向上して居る人間には、新しい慰藉、悟達と思つたものも、やがては力を失ふて、倦怠や苦痛と變ることが御座いますから。

私は抽象的な言葉をやめませう。そして三保子さんのお手紙の中から事實を抽き出しませう。

「……………匡はやんちやになつて困つて居ります。三歳とは思へぬほど體も大きいが、惡戯もなかなかですわ。妙な兒でねえ、叱られると滅多に惡戯を歇めません。さうかと云ふて酷く叱ると泣き出して何時までゝも泣きやめないのですからねえ。昨日も『母ちやんは泣く兒はいやだよ、あつち向いてお泣き』って叱つたら、くるりと向側むいて一時間あまり無理やりに泣いてるのですよ。どうして恁んなに強情なんでせう。機嫌とつたつて賺したつて駄目なのよ、何かで不意に考を外らさせるのが最後の兵法ですわ。可笑しいことには、自分でも餘り泣いて居てきまりが惡くなると『母ちやん烏チユー〳〵』なんて媾和に來るのですよ。嬉しい時なんか無闇に嬉しがる所などは、私の性質をそつくり繼承いだ樣で、いゝ教訓を得ることが御座います。どうしても靜かな柔い心が女の玉飾

たすわねえ。

むづかる時なんか途方に暮れるほど世話やかしますが、私は楽しい希望を持つて教育てゝ居ります停滞した平凡な家庭で、こんな可愛いゝものゝ波瀾が、弛みかけた二人の愛を引き緊めてくれることも度々御座います。

良哉が會社から歸ると、トッ卜と先に迎へに出る。淋しかつた食卓は賑かにされて、途絶え勝ちだつた二人の會話は果しもなく手繰り出されます。昨夜



も、『ねえ貴方、この子の強情つぱりには困りますよ』と申しますと、

『お前に肖たのだから餘り不平も云はれまい』つて笑はれました。

『でも恁んなに一徹なんですから、何か、のるかそるかの事をやり遂げますよ、泣くのだつて滅多に泣かない代り、泣くとなると何時までゝも歇めないんですものねえ』

『泣く兒は健全だよ、ねえ匡！』なんて嬉しさうにあ

やして居ます。こんな會話は幾度となく二人の間にくり返へされるのですよ。

政子さん私の生命は全くこの兒に懸つて居るのです。良哉だつて日曜日なんかこの兒をつれて散歩するのが、ちとお得意な樣ですわ、先の日曜日なんか、日比谷で西洋の婦人が匡を抱き上げてキッスしたとかで、得意になつて話すのですものねえ。それに、誰も人見知りしないのが、つまり果報に生れた子なんでせう、ほゝゝゝまあ子自慢ばかり——親心つて恁んなに馬鹿なんでせうよ。

でもねえ、餘り物覺が早いので心配してるのです、それは驚く位ですよ。餘り物覺のいゝ子は病身になるとか、何だか不安ですわ。先日も良哉のお友達が見えて、或方の噂をして在したがねえ、不意に後から匡が「奴さんなか〳〵狡猾いよ」つて眞似したので『この子にや一目おいた』つて笑はれました。

けれども私は今新しい希望に滿ちて居ります。敎育といふ大きな樂しい重荷を負ふて居るのですから。夜なんかお裁縫して居ても、心はいつも匡の行末——それからそれへと忙がしいほと樂しい空想ばかり。親の心つて慾なものですねえ………」

恁んなお手紙が來たのは去年の春でした。それはお可愛らしい——母樣に肖ても父樣に肖ても色の白い方ですが——丸々と肥えた柔い肉附、眼元から濃い眉のあたりは母樣そつくり。私が一昨年女學校を卒業して歸郷る頃にはブラウンの小ちやいラシャ靴はいて、廣い土間でお料理に忙がしい母樣の後をよち〳〵ついて廻る可愛さ、「まあ此の兒はうるさいねえ」つて叱る母樣の眼は、嬉しい輝を隱すことが出來ませんでした。

良哉樣は某會社に奉職して收入も可成ある上に、日一日と增してくる親子の愛と愛とが、可愛い天使に依て繋がれて、豫想した夫の性格に破れ、家庭の停滯した歡樂に厭きた三保子さんも、この幼兒に新しい生命を見出しました。恰も暴風雨の後に來る靜穩の如く、家庭は穩に和氣に充ちて居りました。

しかし禍病多い人世の航路に、こんな靜穩が何時ま

で續くものでせうか？深碧の蒼穹一片の雲影も留めなかつた夏の海の夕暮に、遥に地平線上の一角に黒雲の端が現はれたなら、船人はどんなに豫想するでせう？

　三保子さんの家は次第に闇黒な雲に蔽はれました。

『……………政子さん、度々お見舞下すつて有り難う。匡はよく肥えて居て、見た所では少つとも病氣の樣には見えません。今では醫師の云ふ通りに氣まゝに遊ばして居ります。

　あの小い兒がどうして神經衰弱なんて病氣を惹起したのでせう。見てる間に處々が腫れたり、ものに激した時などはセンスを失くして仕舞ひます。此の二三日は蟹を見るとけたゝましく泣き出します、多分抓られたのでせう。そして困つた事には、そんな時には言葉が言へません、苦しさうに息を詰まらしてゐなく〳〵私の腕に縋つてるばかり……………』



　政子さん私はまた絶望の淵に近づきました。

平和な家庭、愛の家庭になつたと思つて居たのは、實はこの幼兒のために強ひられて見えない糸で繋がれて居たのでした。匡に依つてつながれた二人の愛が、今

また匡に依つて切り離されやうとは今の今まで氣がつきませんでした。

けれども政子さん私は今、自分を呪ふて居ります。不知不識自分で播いた禍の種を、唯今自分で刈り取つて居るのです。私はそれも懺悔せねばなりません。

まだ匡がお腹にあつた時の事です。あゝその時に既に生みの母親から匡は呪はれて居りました。意氣地ない夫、停滯した家庭の悲哀に、殊更に激し易いあの時には人知れずお腹の子まで呪ふて居りました。そして……怖ろしい考までも起しました。

母體敎育の大事なことも知らぬでは無かつたが、悶え苦しんでる心には子よりも我身の方が大事でしたもの。私は若々しい華やかな人世に別れるのが、耐へられぬほど苦痛で御座いました。子が可愛いといふのは撫育てあげるからですよ。嫌な家庭に私を捕へて、凋落さして、深い暗い淵に引張つてゆくお腹の子なんか少つとも可愛いことは御座いませんでした。

匡は既に母體で傷けられて居たのです。恁んな子がどうして立派なものに成りませう。それだのに樂しい行末を待ち焦れて居た私は、まあどうした得手勝手な女でせう！

出産てみれば流石に可愛いとは思ひました。日一日と可愛さは増して來ましたが、それでも時々はこの兒が出來なかつたらと復らぬ事をくり返へして居りました。それに就て少し昔の話を致しませう。

恰度秋の下旬でした。種々な家の都合で、故鄕から良哉の母樣が來らつしやることになりました。二十幾年の獨身に、我儘をしつくして來た母樣ですから、どうせ氣むつかしいとは覺悟して居りましたが、東西知らぬ中に兩親に別れた私は「母さま」と心から呼びたいばかりに、不安な豫想に惱みつゝも心待ちして居りました。

さて母樣が來つしやると、何だか水さゝれた樣な家庭になつて、張りつめた精神が弛むと、辛い苦しいと思ふ時がございました。けれども女學校出のハイカラでは、あのお姑はようかけまい」と陰口きかれるのが

口惜しさに、泣く代りに笑つたらと自分を勵まして居りました。

良哉はあの通りの親孝行ですから母様が無理だと思ふ時でも辯解一つ云つて呉れません。さうかといつて私を叱るでない陰に廻つて私を慰てくれるばかり。良哉の身になつてみれば隨分可憐想な事だと思はれました。



それで今日も貯金の通帳をお見せと云ひますから、否とは云へず見せました。すると、大分貯つたのう、時にお好がこれは良哉の妹少し內證で要ることがあつて困つてるからと云ふて來るから、少し貸してやつて呉れないか、どうだね、否なら仕方がないがね」と此方でまだ何も言はないうちから、厭味な口ぶり、どうも親に貸さないとは云へませんから「さア〳〵送つておあげ」つて云ひました。そして、私に向つては少しの事だから厭な顔は見せないでくれよ」

と申しました。まあどうでせう妻にまで氣兼して居る良哉も不幸に生れた一人ではありませんか。母樣の御無心は三度や五度ぢやございません。親が子の貯金を費ふのは當然でせうけれど……薄給の中から節儉に節儉して貯めたお金を、妹さんの内證金にしてしまふと思へば腹も立ちます。

それから間もなく兄樣が破產して良哉の財產まで失してしまひました。

母樣は急いで歸られる、私の家では降りかゝつた不幸の爲に陰氣になつて、十五歲になる子守までが淋しさうに悄然として居ました。



私は口惜しい思焦慮つたい思、取り集めた悲しさにつひ良哉と口爭した晩が御座いました。良哉はガッカりした風に、夕餉もろく／＼食べないで鬱いで居ますいろ／＼と云ひ募つた揚句に

「貴方が意氣地がないからですよ」

「だつて俺が失くしたんぢやないのだもの、」

「けれど、貴方だつてもう少し氣がさになつてさつさ

と御自分で早くから分けてお置きにならないからです」

「だからあの時云つたぢやないか、今の中に分けて置かうかつて！　まあ悠つくりでいゝでせうつて、お前が云つたからさ」

「私が何と云つたからつて、それ位の事御自分で仕末したらいゝぢやありませんか、男は男らしく一人で決斷すべきものですよ、會社の事だつていつも私にばかり御相談なすつて……同僚のお交際から小使への心づけまで私一人で切廻してるんぢやありませんか！

　と壓えつけられて居た不平が一時に喚起されて、我と我が言葉に激せられてつひ云ひ募りました。けれども離縁れて歸る家のない孤兒の自分を省みた刹那！もう一言も言へませぬ。口惜しさ遣る瀬なさに戰く唇かみしめて「一寸そこまで行て來ます」とふいと家を出ました。

　いゝ月夜でした、まだ更けても居ないのに、場末の事とて寂寥して居る。青白い月は荒地にしてある片町の小石やうら枯草を照して、熱した顔に冷たい光を投げかけて居る。平生なら怖ろしい所ですが、わく〳〵する胸には怖いと思ふ暇もない。忙がしい聯想が走馬燈の樣に駈けめぐる。

　希望に滿ちて華やかだつた女學校時代が、夢の樣に浮かんでくる、幸福なお友達を次から次へと思ひ出す、煽りたてられる聯想、脱れることの出來ない今の境遇、激した後の焦燥つたい悔悟に勞れた涙が溢れ出る。

　行くともなく何時しか町は盡きて、おつ開いた武藏野が月光と霧に包まれて、林も家も灰色にぼかされて居る。秋の聲は北の涯から、汐の遠鳴の樣な冷たい響をたゞよはして、四邊には蟲の音一つも聞えませぬ。すぐ前が汽車の踏切になつて、二條のレールが遠く遠く月光を反射しつゝ走つて居る。

　私は黒い柵に凭れて茫やりレールの光を辿つて居ました。母樣への氣苦勞と、家計のやりくりに張りつめて居た心が一時に弛んで、激した後に來る闇い憂鬱が犇々と迫つて來る。私は別れの校歌を口ずさむ中に、

體も精神も勞れ果てゝ、此の世の凡ての光明が奪ひ去られて、行手には勞れた慘な私の姿が見えるばかり。吹き來る嵐に雨の頰に傳ふ淚の冷たさを覺えました。

「奥さーん、奥さーん」と二聲三聲、下女の聲でした。足音は近づいて、柵に凭れて居る私の姿を見て立留つた。

「繁ちやないか」

「まあ奥樣！　どうなさいましたの、早く歸つて下さいまし旦那樣が……坊ちやまを抱いて泣いて在つしやいます」

繁の聲はおろ／＼戰へて居る。鈍くなつて居た私の感情は一時に振ひ起されました。



「頭痛がするから……今すぐに歸りますつてさう云つておくれ」

「そんな事仰しやらないで、奥樣どうぞお歸りなすつて下さいまし。旦那樣がお可憐想に……それに坊ちやまが怫がつて……」

二人は暫く無言で居ると、また下駄の音が聞えました。良哉が匡を抱いて尋ねて來たのでした。

「三保子ちやないか、どうしたんだ」

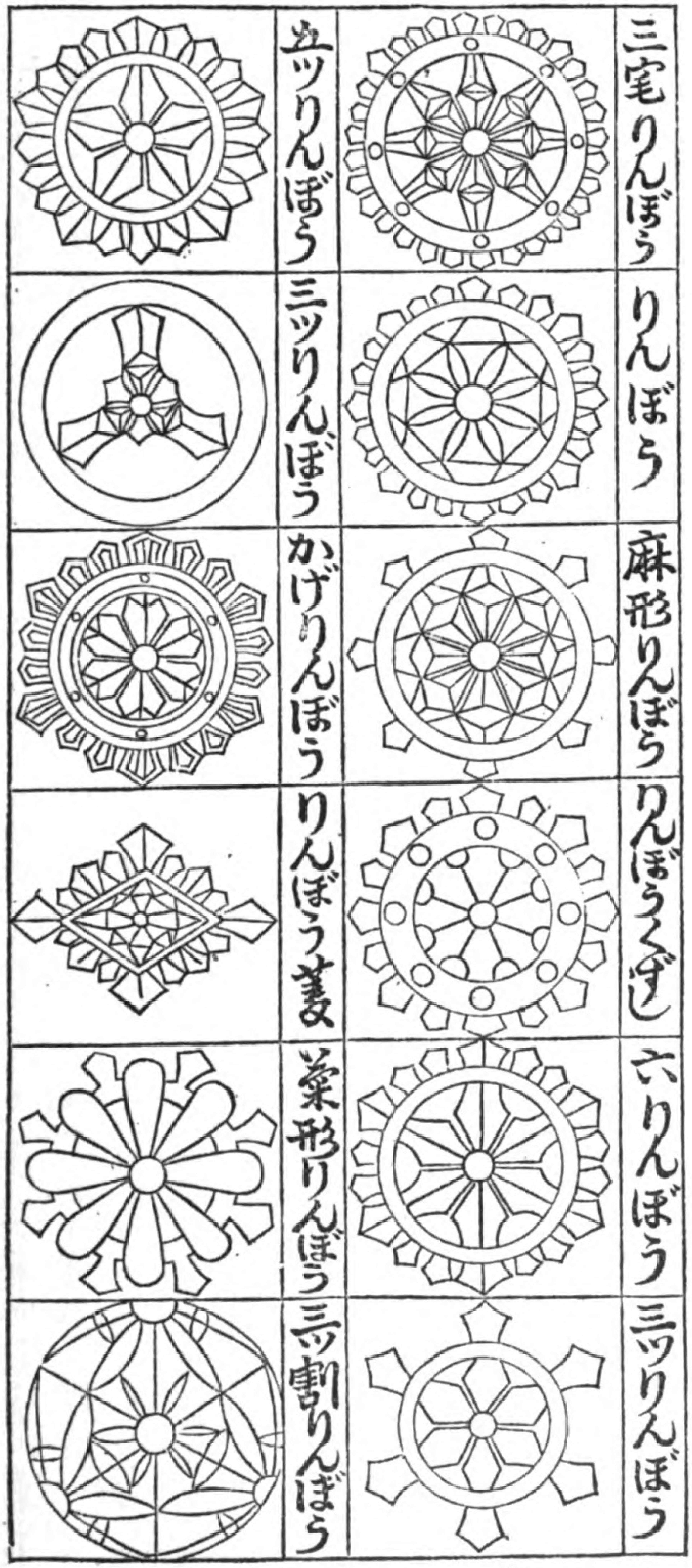
と云ふ聲はもう濕んで居る、

「匡が泣いて困るのに……何をしてゐるんだ」

薄着のまゝの赤ん坊を私につき出しました。丸々と

肥えた柔い我子を抱きしめると、新しい涙がせぐり來る。「まあこんなに薄着で……」
「何だつてお前の眼にこの子が分るかね」
「まあ、そんな事を……」
「お前は、子供を抛つて置いてよくこんな所へ來てるな」
と言はれてさつと耻づかしさが胸にこみあげた。
「……………」
「……………」良哉も無言のまゝ首低れた、
強い力が不意に私の腕から匡を捥ぎ取つて、踏切の柵をめぐりました。私が周章てゝ取りすがつた時には匡はレールの上に轉つて居りました。泣き入る幼兒を狂氣の如くに抱きあげて
「私が惡う御座いました。どうぞ勘忍して下さい、勘忍して下さい、考へ違ひでございました」
良哉は悵然として月に溜息を吐きました。
政子さん、これは三年前の出來事ですが、あの時もしや匡に何か見えない傷を與へたのでは無からうか？生理的にも精神的にも、無意識な傷のつき易い嬰兒に、きつと何か深い傷を與へたのでせう。
政子さん私は嘗てこの兒を呪ふて居たことを忘れて居りました。けれども、家庭の犧牲――いえ私の犧牲になつた匡は、今また私からその報酬を捥ぎとらずには置きません。私が播いた種は私が刈らねばなりません。
政子さん私は「運命」を信ぜずには居られません。たとへ何なに悶掻いても、運命の網から脱することは出來ません、蜘蛛の糸にからまつた胡蝶は、悶掻くだけ倘からまるのです。私は親と呼ばるゝ身です、運命は固定して居ります。今は諦らめるより外に仕方が御座いません。
政子さんはソログープの「賢き處女」をお讀みなすつたでせう。絶望の淵が見えない間は怖や悶に心も狂ふばかりであつても、いざ絶望の淵が眼の前に現はれると、せめて短い生命をも樂しく送りたい願――生に執着した心は、自分を欺いてまでも樂しいと思ひたい―

輪鋒の意匠



――これが若い女の心ですよ。

ナプシャルラブが青ざめて、冷たくなつた家庭には、冷たい心と冷い平和とが殘ります。匡の爲に引き出された親子の愛――その愛を手綱に手繰りよせられた二人の愛が、今またぷつゝり切り離されました。

けれども政子さん私の運命は固定して居ります。希望と愛の偶像だつた匡が、不具の兒となつても、平凡な冷たい家庭となつても、私は良哉から離れることは出來ません

本年婦人界の回想

草紅葉

一月

△丸龜の千里眼婦人として、前年より學界の問題となつてゐた長尾幾子の能力は、新年に入ると共に透視より一歩進んで、文字の念射となり途に味覺感應に迄至つた。すると十三日、長尾家に一事件が起きた。それは福來博士の實驗物盜難である。途に警察問題にまでなるに及んだ。其の時幾子夫人は曰ふ「之は私に於ても、捨置かれぬ問題ですから、昨夜から透視を熱心にやつてゐます。昨日透視しました時は、八人まで犯人が出ました。」併し結局うやむやであつた。

△兼て歐米漫遊中であつた、村井吉兵衛氏夫人うた子と令孃久子は、國より國へ二十二ヶ國を經廻り、七ケ月の日子を閲して、十三日歸朝された。紫色の服着たる夫人と、紺地の服着たる令孃とが、橫濱埠頭先づ人に語つた事は斯うだつた「橫濱で新流行の服を新調して行きましたが、米國へ上陸して見ますと、流行後れで着て歩けませんでした……巴里では厚化粧が流行してゐました」



△十八日管野スガ子は遂々他の一味と共に死刑の宣告を受けた。彼女は敢然自白して「妾は、宮下太吉、新村忠雄、古河力作等と大逆罪を敢行しようと謀議しました。併し太吉等は單に大逆罪をする事のみを主眼として居ましたが、妾は其他の諸官衙、富豪の住宅なぞを燒拂つて、其上には監獄を破壞して囚人を開放し、理想の革命を實行するつもりでした」と云つた。そして二十四日の朝、刑場で死後の望みを訊れられた時、彼女は靜かに頭をふつて「死後の望みなぞは何にもありません。墓地は監獄の埋葬地で澤山です」と。斯う云つて彼女は絞首臺上の露となつた。

△十八日、宮中に新年の歌御會始があつた。其時御前披講の榮を得た女が二人ある。一人は京都の醫者大屋氏の夫人久子。他の一人は宮中女官に其の人ありと知られてゐる典侍從三位柳原愛子である。久子の歌は斯うである。

ふゆこもるひとのこゝろをうごかして
　しもよのつきににほふうめかな

愛子の歌は斯うである。

おうそらはしもくもりしてさくうめの
　はなのみしろしありあけのつき

歌人與謝野晶子之を評して斯う云つた「今年

の歌は前年に比するといくらか佳いようです。柳原典侍のは上品です。久子夫人のも佳い歌です。だが此歌は（人の心を動かして）の二三句が浮いてゐるやうです」△飛電あり。熊本の千里眼婦人御舟千鶴子の自殺を報じた。十八日の午後に彼女は義兄の家を立出て、薬店から重コロムを買つて歸り、五時頃それを服して悶ち苦悶を始め、翌朝五時遂に絶へ入つて了つたのだ。原因は家事上の煩悶とも云ひ、何やかやと噂されたが遂に不明であつた。福來博士之を惜んで「千鶴子は學界の千里眼元祖として、日本の學界に跡を止めた功が多い人です。未だ〳〵研究の足りん中に生を捨てたのは實に惜い事です」△故從一位九條道孝公の第二女にましまし。現公爵道實氏、故山階宮妃範子殿下、東宮妃殿下と御同胞におはします、本派本願寺法主裏方大谷籌子の方は、二十六日曉の二時光瑞伯を始めとして數多御傍の人々の悲嘆の涙の中に靜かに逝去されて了つた。此の君未だ御年齢三十歳、繪畫を故田中有書に學び、和歌を大口鯛二に受け、佛語を伊藤第三高等教授に習ひ給ひ、其他にも、能に、茶に、謠曲に、クリツケツトに、テニスに、洋琴に、美しき才能を持たせ給ふたと承はる。「一月四日午前御流產の氣がありまして、それから以來產褥熱に犯されるやうになりましたが、それが御亢じになつて遂に斯んな事……」と御傍の人が涙ながらの物語りも悼しや。

二月

△英國皇帝戴冠式へ參列さるゝ、陛下御名代東伏見宮及び同妃殿下の隨員決定發表された、其中に宮岡慶子と云ふ女があつた、外交官宮岡恒次郎氏の夫人で、夫と共に米獨を經て四十二年歸朝御用掛を拜命した人。英語、佛語、獨語を自由自在に話される。△十六日午前十時頃、信州は長野の善光寺へ、鐵道便で大行李が一個着いた。それと共に東京淺草局發の電報が着く「ケサコウリシトツテツドウビンデオクルウケトリメノム」といふのである。併し受取人がないので少し變に思つて十八日夜の七時頃、中を開けて見ると、先づ鉋屑がある。油紙がある。そして最後に出たのは何？婦人の死體である、年は六十前後。指には「京都方廣寺大佛」と彫つた文鎮指輪。頭はくり〳〵に剃られ、鼻と口にはコールタールを塗り、沿した京帷子には神社佛閣納經の印章が夥しくおしてある。そして埋葬料が十圓添へてあつた。東京の新聞は早速「善光寺へ貴婦人の他殺死體が着いた」などゝ號外を出したが向佛坊師は圓い頭を撫でながら曰く「昔し常山へ淨山の蛇み術にして送つたものがあるから、もしやと開いて見たら此の始末ぢや——別に苦しんだ樣子もない。なお美しい老尼で、如來樣のお傍へ葬つて貰ひたいのぢやらう」處が警察ではそんな呑氣な話ぢやない。血眼になつて犯人を探す。却々解らない。△故文學博士蟹江義丸氏未亡人操子は、三十七年の暮夫の死んでより以來、三人の遺兒を抱へつゝ、種々な苦勞の中に勉強してゐたが、遂に此度中等教員試驗に及第した。此事を女史に聞へば「之まで死に角やつて參りましたも、亡夫の遺德、母の情、津田梅子先生の御恩、そして世間の方々の御同情のお蔭です。何よりも先づ



妾は、母にお禮を申さねばなりません」とつゝましやかである。

△丸龜の千里眼長尾郁子夫人。二日急性肺炎となつたので、夫人は非常な元氣で、兼て信仰する觀世音と不動尊へ熱心に快服を念じてゐたが其甲斐もなく二十六日午前九時遂に瞑目して了つた。「母さん何故死んだ」と幼き令息の泣くも哀れ。夫なる判事も、「來春は、司法省の許可を得て、井上博士の實驗を受けよう——とそれを樂んでゐましたに——それぱつかりが心殘りでせう」と悄然と語つた。福來博士は「二十六日電報に接して驚いた。熊本の方の死と云ひ、之と云ひ、もう我々の研究萬事休すと云ふより外はありません」と學界の為めに惜しまれた。

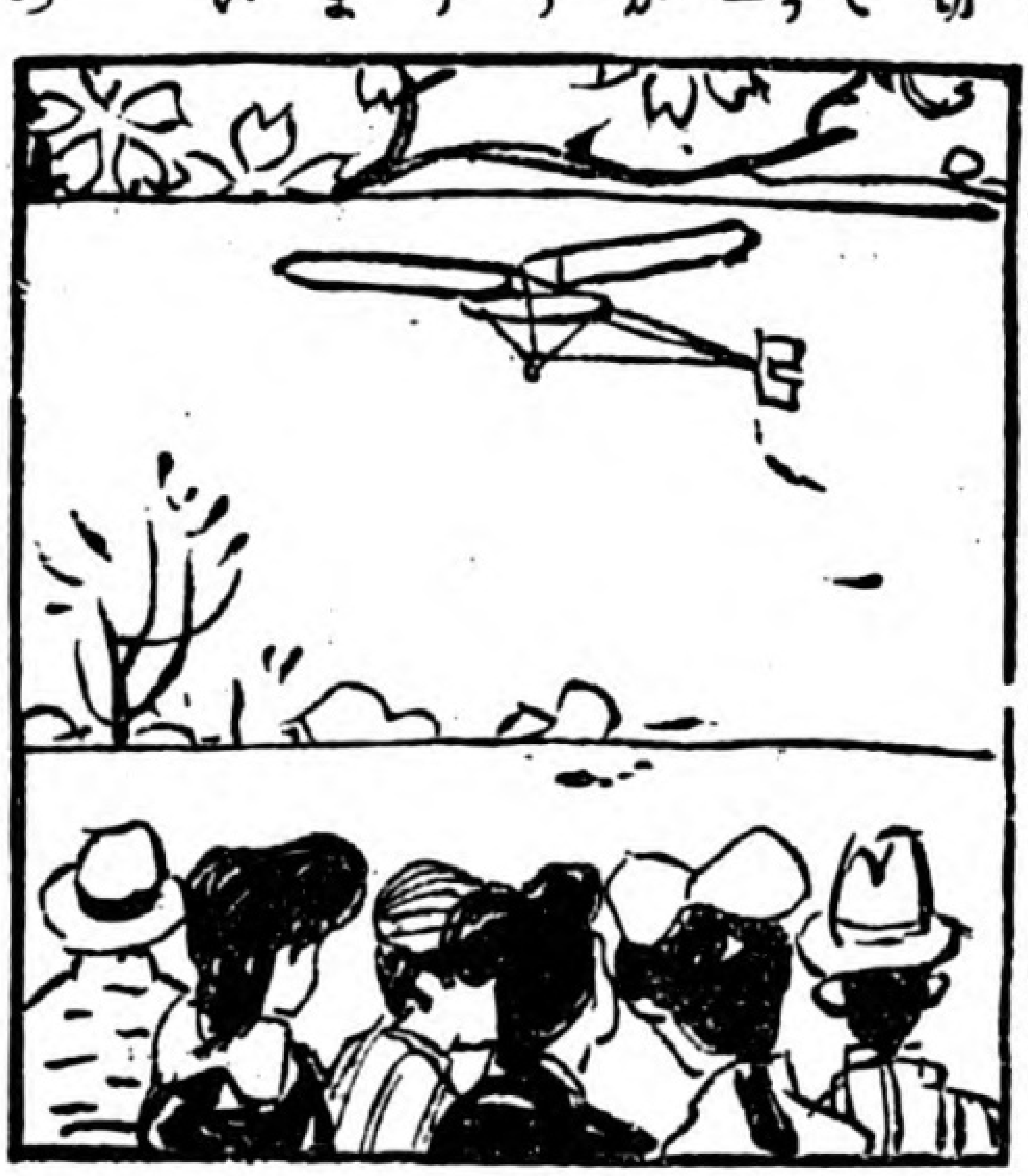
三月

△二日、新築の帝國劇場が初興行の蓋をあけた。それと共に、新に養成された女優達は、劇しい社會の好奇心の的となつて、初舞臺を踏んだのである。一番目狂言「頼朝」二番目「伊賀越」太切「羽衣」と云ふ順序で、梅幸や雁次郎に立交つて初瀬浪子、森律子、村田かく子を始め新女優一統の初舞臺は、兎に角無事に終つた。そしてかく子は斯う云つた「舞臺へ上つて見ると只もうワク／＼して、盲目蛇の形で……」律子は斯う云つた「浦代姫と云ふ身に餘つた大役がつきましたので、何が何やら夢中で……」と初々しい處がある。

△善行寺の行李詰婦人は、絞殺されたのであつて、犯人は淺草門跡の玄關番堀文左衛門。六日大阪で捕縛された。

△埼玉縣の磯部節子と云ふ、今年十五歳の小娘は、二十一日に縣廳で行はれた内務省産婆試驗の時、受驗者七十名の中の優等者としてまんまと及第して了つた。島田知事は之に對して厚く賞詞を與へたが、某知名の教育者は、苦笑を浮べながら「何うも、斯んなのも少し困りますね。問題ですな」と云ふ。

△兼て來朝中の米國の飛行家マーアスは、雲雀號」「赤鬼號」などの飛行器に乘じて、盛んに日



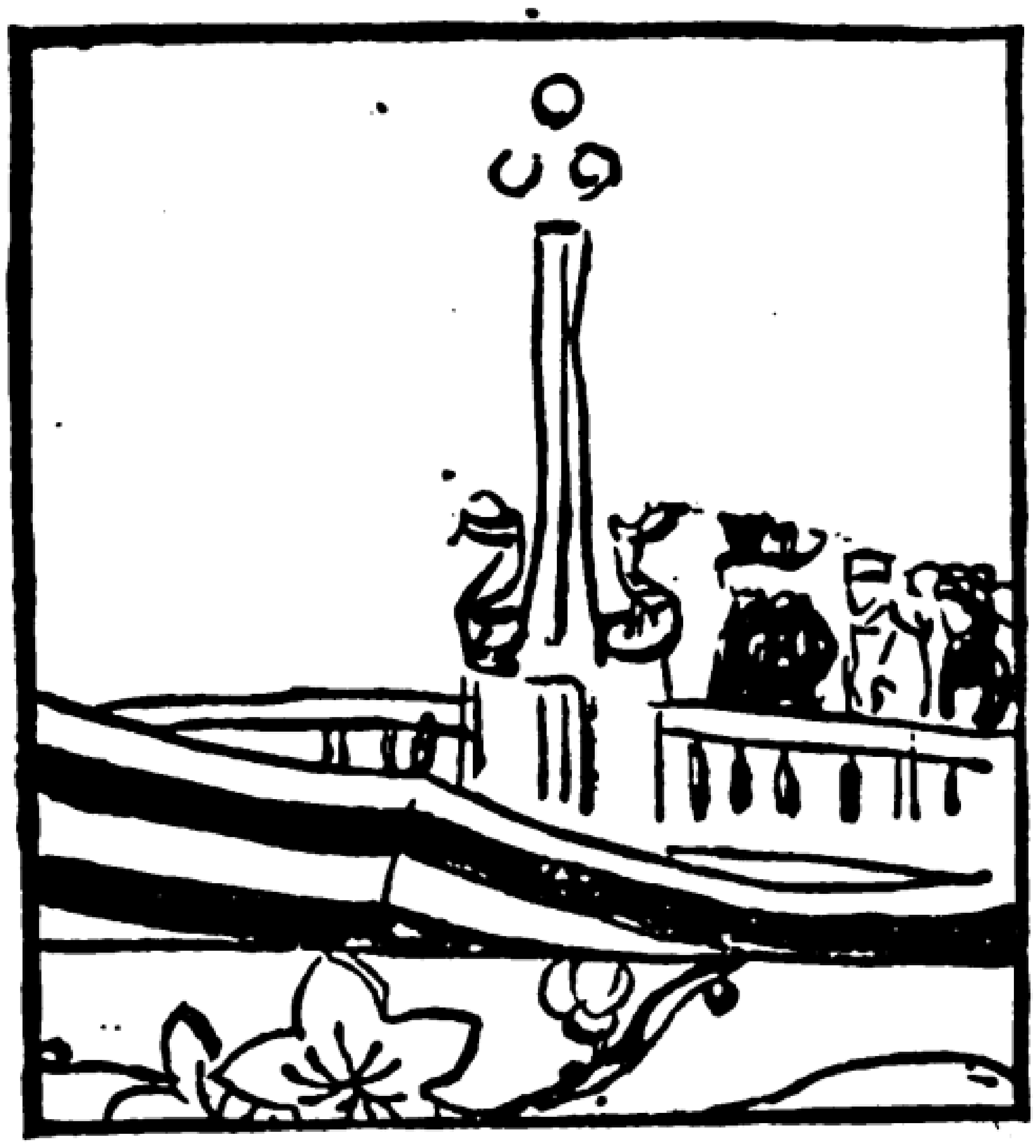
本の大空に飛ぶ。此マアス或時斯う云つた。「アメリカにゐますと、婦人が頻りに同乗させてく

れと云つて來ますが中には五ドル出すから乘せてくれの十ドル出すから同乘を許してくれなどと云つてくる人もある位です。處でそれさへも斷つて了ふとですれ——飛行器がいよ〳〵地を離れようとする一刹那に、ひよいと飛乘つて、とう〳〵もういやと云はせずに同乘するんです——處が日本では決してそんな事はありません、日本の婦人はそんな元氣がないのでせうか……」

△兼て葉山御用邸に御避寒中であつた東宮妃殿下は、二十三四日から急に惡寒を覺えさせ給ひ、二十七日には御體温三十九度に上つた。そして、御胸部と、御腹部には御異状はあらせられないが、烈しい御頭痛と共に、玉體の處々に疼痛を感ぜらるゝ有樣で、時には御熱四十度前後に及び、容易に解熱の御模樣がない。侍醫拜診の結果、腸窒斯扶垤と申し上げた。

四月

△二日開催の村雲婦人會總會へ、京都より御臨場になる村雲尼公は、午前九時四十分新橋へ御着になつた。御出迎としては、菊亭、德川兩侯爵の未亡人を始として貴婦人連居並び、又脇田日宗大學長を始めとして各僧正連、それに各宮家の御使や紅紫金襴の法衣や、黑紋付なぞが、處せまきまでに溢れてゐる中へ、尼公は黑木衣に紫紺色の御袴、菊花御紋章ある紫の五條を召されて三人の尼を從へられてしづ〳〵と玉歩を運ばせらる。そして御聲凉しく「皆樣、寒い所を御苦勞です」



△六日。改築落成のお江戸日本橋の開橋式があつた。渡初に選まれた老人達の中に、一しほ若ひたるは百七歳の小島お彦である。お彦此日の打扮は、紺縮緬の裾衿に白羽二重の下着。その上に重ぬるに上着は五紋の黑縮緬。それに白紋羽二重の袴をつけ、緋鹿子の大黑頭巾を被り、紺羽二重の足袋に、赤鼻緒の護謨雪駄を穿く。斯う云ふ打扮のお彦が赤地モスリンに「百七歳の老媼」とある旗を前にして、俥で行けば、沿道の群集はヤンヤ〳〵の大喝采。お彦はうれし涙にくれながら「ありがたい事で——長生をしまして斯んな事を見まして、いやもう有難い事で、有難い事で——」と嬉し涙が盡きなかつた。

△七日夜九時過の事。小石川は法學博士仁井田益太郎氏の宅へ、強盜が一人這入つたが覆面せる賊は二尺三寸の大太刀を眞向に振冠りつゝ、「俺は強盜だ。騒ぐと殺すぞ」とばかり博士を脅したが、剛氣の博士は「何を」と忽ち賊に組付いて、さあそれからは、組んづほどけつ大格鬪！其中にあわや博士の身に危害あらんとするを、先刻から傍ではら〳〵しながら見てゐた博士夫人愛子は、突如賊の太刀を奪ふと見る間に

「えゝッ」とばかり賊に斬りつけたので、「あつ」とばかりに賊は忽ち敗亡遁竄したと云ふ。夫人はお茶の水出である。

△九日午前十一時すぎ、強風黄塵を捲く都の、北に當つて一團の黒煙が渦巻き上つた。之なん即ち吉原大火の始である。火は吉原全部を燒拂つて、下谷淺草千住と燃え擴がり、辛と鎭火したのが夜の八時だつた。燒けた戸數は六千五百と云ふ。之より都下の經世家や教育者間に、吉原の公娼全廢問題が火の手を揚げてくる。矢島楫子女史は「此の天災は、公娼全廢の最好時機です」と語つた。

△英國皇帝戴冠式へ參列さるゝ、御名代東伏見宮依仁親王同妃周子兩殿下には、いよ／＼十二日正午横濱を出發あらせらるゝ。御乘船ソシナルホール號の甲板上、オリーブ色綾模様の御洋裝に、白毛の飾りあるボンネツトを戴かるゝ妃殿下が、右手に花束を捧げられ、左手に巾帕を振らせ給ふ時、埠頭には梨本宮妃殿下が巾帕を振つていらせらるゝのを拜した。港内に碇泊してゐた墺國軍艦フランスヂヨセフ號から轟く二十一發の禮砲に送られつゝ、御乘船はマストに高く皇族旗を飜して、靜かな海面を辷つて行く——麗かな波路である。

△十三日。陛下に御對顏御暇乞を遊ばせられ宮中賢所の御參拜を濟された北白川武子女王殿下には、十七日、いよ／＼保科子爵家へ御降嫁遊ばさるゝ事になつた。御紋章付蠟色の馬車は、紅の幟を日に輝して、子爵家に向ふ——女王此日の御打扮は、紅梅色唐織に雲立涌の地紋と白丸菊を織出したる御袿に、萌黄色綾織御二重濃色御袴を召され、お髮はすべらかにして、御手には檜扇を持たせられてゐた。

△東宮妃殿下の御病狀は、十二日頃に至つてやゝ御輕快に向はせられた。錦小路東宮主事語りて曰く「今朝の御容態書に御脈百度以上とありますのは、只一二度あらせられたのみです。御病氣の系統に就いて色々傳へられますが、何うも不明です。妃殿下は釣をなされた事もありませんし、摘草をされた事もありませんし……」御附の看護婦は「御悪い時よりは、よほど御快復なされました」と語る。

五月

△東宮妃殿下の御病氣御快癒を祈るため、一日基督教徒は神田の青年會館で祈禱會を行つた。

「求めよ、さらば與へられん」

と云ふ馬太傳第一章以下の朗讀が濟んでから恭々しき讃美歌があつた。

△九日、日比谷公園で愛國婦人會の第十回總會が催された。式場は九間と十二間のバラツク。周椽は綠葉に飾られ、櫻花鮮かに日に映えてゐる。柱は紅白の布に卷かれ、中央の金屛風がキラ／＼と日に輝く。香川皇后宮太夫を御先導として御臨場になつた、皇后陛下の御服裝は、クリーム色の洋裝にクリーム色のボンネツト。總裁閑院宮妃智惠子殿下は、薄紫地に紫の飾縁ある洋裝。伏見若宮妃經子殿下は、鼠芳色の洋裝——仰ぎ見もあえぬ二萬の會員の頭上、皇后陛下は御聲朗かに令旨を下し賜ふ「本日愛國婦人會に臨み益る會員の増加するを見るを喜ぶ」

△婦人婦風會は、九日津田女塾に集會して、吉

原遊廓問題善後策について會議した。會長矢島揖子を始めとし津田梅子、林歌子、來賓として は安井哲子、羽仁もと子などの諸女史は盛んに公娼廢止論を主張する――「妾等は妾等の同朋の此の悲慘なる生活を見るに忍びません……」などの議論が却々に旺であつた。

△皇后陛下には伊勢神宮御參拜のため、十八日高倉典侍以下の女官を從へさせられて新橋を御發車になつた。この日陛下の御打扮はと拜し奉れば、薄鼠色の洋裝の裳をゆるやかに曳かせられ、白毛を飾るボンネットの神々しさ。御用車は蠑塗菊花御紋章つきの、内部に白緞子を張つめたる宮廷列車である。

△二十日、橫濱解纜の獨逸汽船ビユーロー號の一等船客中に、二人の日本婦人があつた。一人は丸顏の和しさうな人。一人は細面のきりゝとした人。此の細面の人は、伯爵龜井慈常氏の夫人久子であつて、佛國留學中の夫君を迎へて、各國に漫遊して來るのだと云ふ。丸顏の人は、子爵大河内輝耕氏の夫人國子である。英京ロンドン滯在中の夫君の許へ行かるゝのであつた。船が波靜かなる瀨戸内海を行く時、國子夫人は斯う歌はれた。



くらげ浮く瀨戸内海の夕ぐれや
島のひま縫ひて我船の行く。

△文學博士坪内逍遙氏に指導さるゝ、文藝協會は、二十日帝國劇場でシエークスピヤの「ハムレット」を上場した。文藝協會に依つて新しく養成された若い俳優人は、初舞臺を踏んだのである。其中に二人の有望な女優があつた。一人は上山浦路子。一人は松井須磨子と云ふ。浦路子は王妃ガーツルードに扮し、須磨子は處女オフェリヤに扮した。そして共に社會から熱心な喝采を受けた。閨秀作家長谷川時雨子は評して斯う云つてゐる「オフイリヤとガーツルードを見て滿足と安心と嬉しさに堪へられません。至難な處を二人ともよくやつてゐます。素人出の新女優が、兎に角あれほどの出來榮を示さうとは思ひもつかぬ事です」

△上野公園で太平洋畫會が開かれた。滿谷畫伯の「習作」。寺松畫伯の「化粧部屋」。高村畫伯の「禿の頭」。齋藤畫伯の「林檎畠の女」などが婦人畫としての評判者であつた。

△この月の十五日、英國ではヴヰクトリア女皇陛下紀念像除幕式があつた。この紀念像はバッキンガム宮殿前に新設された英國の誇りの一つである。我國の隆盛もこの誇りの上に一歩を進めたいといふのが婦人界の希望であつた。

六　月

△二日の東京地方裁判所法廷へ婦人の重罪犯人

が二人まで立つた。一人は佐藤某と云つて江戸川上流へ赤子を投込んで殺した女。一人は宮崎某と云つて放火犯。佐藤某は「夫が情知らずで、子が出來ると毒藥を呑まして墮胎を勧めるやうな夫ですから、此度の事もさうです。何うか私一人を悪黨にした夫に會はして下さい。一言云ひたい」と泣崩れる。宮崎某も「私は先夫の子が二人もありまして、今の夫の子が又一人ありますが、夫が薄情で先夫の子は學校へもやつてくれぬやうな始末です。ですから、もし家に事故があつたら、親類が着物の一枚位惠んでくれるだらうと思ひまして、遂放火をしました」と泣崩れる。傍聽席にゐた一人の女流教育家は溜息をして斯う云つた。「男の罪惡の裏には必ずしも女が附隨してるわけではありませんが女の罪惡の起りは何時も男から出てゐます」

△五日、日比谷に第十九回赤十字社總會があつた。閑院宮妃殿下、高倉典侍等の供來と共に御臺臨になつた陛下此日の御打扮は、淡き藤色地に、雪白の雛菊を綾なせる洋裝、白のボンネツトには紫陽色の草花が飾られてあつた。令旨は斯うであつた。

「本日赤十字社第十九回總會に臨み、各員を見るを喜ぶ。會務將來益々本社事の盛大ならんことを望む」

△御名代東伏見宮依仁親王同妃周子殿下には、七日ロンドンへ御着になつた。そしてすぐ南海岸の避暑地イーストボンにお出でになり、十八日になつて各國皇族と共に、公式の御入京を遊ばせられ。二十二日無事に戴冠式御參列を濟まされたと云ふ。



△柴田環女史は帝國劇場へ這入つて、歌劇方面の發展に力を盡す事になつた。女史が帝國劇場へ這入るに就ては、西野專務との間に色々な特約が結ばれたさうで、其一二を拔けば斯んな風な特約である。

一、向ふ十五箇年間同劇場付聲樂教師たる事

一、三年間毎に一度宛海外視察にやつて貰ふ事。

一、帝劇の廣告文面には、劇場の方から女史へ出演を懇請したと特記する事。と云ふのである。

△病漸く御輕癒に向はせれた妃殿下御見舞のため東宮殿下は二十二日葉山御用邸へ御成りになつた。妃殿下と東宮殿下とは四ヶ月目の御對顔であつたので、妃殿下の御居間十疊の日本室で、一時間餘も種々懐しき御物語を交はれ給ふたと洩れ承る。其節東宮殿下の御土産は、御菓子、クリーム等であつた。

七月

△この月の一日、いよ〱東宮妃殿下には御床

拂になる。午前七時に御起床、遊ばせられて御髪上の後、八時御入浴、直に御召更仰出され、眞紅燃ゆるが如き緋の御袴を召され、御袿を掛けられる。斯くて妃殿下の御病氣は御快癒になつたのである。二日には三皇孫殿下御成。御土産は御菓子。母殿下には「折角勉強遊ばせ」と宣ふ。三日には雨後を東宮殿下御成。四日には雨中を竹田宮昌子内親王殿下御成。淡黄色の洋装に白のボンネットと云ふ御姿。内親王と妃殿下は御會食後窓外の雨景を望まれつゝ「恒德王の御成長は如何」などゝ妃殿下の宣ふ。五日は小學校生徒千五百名旗行列をなす。空晴れて旗輝やく此日、妃殿下は玄關に立出で給ふて小學生徒の敬禮を見そなはせられた。

△子爵烏丸公大氏の令妹花子は、畏きあたりの御思召によりて、東宮妃殿下奉仕の役を仰せつけられ、十五日から青山御所伺候の光榮に接した。

△二十七日の曉、夜の仄々と明渡る中を、北鎌のとある海岸へ、二十歳前後の二婦人の死體が朝波に打上げられた。二人とも、大柄整絲セス地の單衣に、博多の帯をしめ、金の指輪をはめてゐる。そして、互に腰の所を桃色縮緬の扱帯で固く括つてゐた。一人は工學博士曾根氏の令孃、一人は專賣局主事岡村氏の令孃。二人共第二高等女學校を卒業した人だが、死んだ原因はつまり同性の戀であつて、現世のみかは未來三世を契つての始末であつた。惠部遼吾博士曰く「斯うした婦人同志の心中は、社會學上ではなか〱面倒な代物として取扱はれてゐます」



△朝鮮總督寺内伯爵の令息壽一氏夫人百合子は二十九日夜就床しようとして常用の藥と思誤り服用したのが劇藥昇汞錠であつたので忽ち苦悶を始めて三十日朝四時遂々永眠して了つた。誤つて毒藥を服した事について立合の醫者は斯う語つた。「百合子夫人の常用藥は水藥ですから、如何に誤ればとて、固形體の昇汞錠を呑むわけはありません。殊に服藥の際は其昇汞錠をオブラートに包んで服したのですから、之から思ふと、覺悟の自殺ではありますまいか」併し寺内家では何事をも語らなかつた。

八月

△御渡英中であらせられた御名代東伏見宮御二方には、二十三日御歸朝新橋に御着になつた妃殿下は灘紫の瀟洒たる御羅衣に、藤の花を刺繍したる御袴を召させられ、御胸のあたりには、燃ゆるが如き眞紅の薔薇花を挿て居らせられた。「戴冠式が濟んでから二十九日迄は、各種の夜會へ御出席になるため、兩殿下とも御就眠は、夜中の一時半、二時頃でした」と供奉員の物語である。

△銀座のカフエーライオンへ可愛らしい花賣娘が現れるやうになつた。花を買ふのは日本人より、西洋人の方が多い。



九月

△築地の立教高等女學校教師梅澤兼子女史は四ケ年の米國遊學を終つて、八日歸朝した。紐育から少し離れた處に、年々夏季學校修養會と云ふのが開かれまして、全米國の大學生が六百名程選抜されて參會します。妾も參つた事がありますが、其時は日本婦人が十六人、支那婦人が十一人ゐました。——紐育にミス、ヘン、ゲールトと云ふ老婦人がありますが、非常な金満家で、一年に二三度東洋女學生會を開きまして、東洋女學生を慰勞してくれます。殊に日本の女學生に就ては始終盡力して下さいました」と訪客に語つて居た。

△府下に住む三人の女が、阿部東京府知事に表彰された。一人は今井お稲と云ふて八圓、次は今井お金は六圓、石井お繁は六圓と云ふ下賜金があつた。お稲お金は姉妹で孝女。リウマチで十年間床にある母のお瀧は「きやうだい共眞によくしてくれます。はい——此度は有難い事で御座います。役場の方から四圓戴きましたが、村長様に十五圓お預けしときまして、三圓だけ頂いて戻りました。はい」お繁は夫が日露戰爭で戰死して以來、出て行けがしに取扱はれるのを堪へて、十二を頭に三人の遺兒を育てゝ來たのだ。「子供が學校へ行くにも、あんまりの身なりですから、頂いたお金で着物でも買つてやらうと思つて居ります。」と感ずべき事である。

△文藝協會でイプセンの「人形の家」を私演した。「ハムレツト」の時、オフイリヤをした松井須磨子がノラに扮したが、觀客、幾多の婦人は涙を流してノラを見てゐた。其の涙は、今迄の舊劇に流した涙とは違つた新しい涙であつた。それを見た某批評家は「日本婦人の覺醒しつゝある事を、今夜始めて知つた」と云ひ、島村抱月は「ノラは却々勉強してやつてる」との事だ。



△帝國劇場の女優達は、新に這入つて來た柴田環女史の指導を快としないで、大反抗を致てし

た。世間の有識者は、彼等女優の沒常識と生意氣とに呆れて、今迄の彼等に對する同情の聲は嘲罵の聲と變つた。

△一時世間の問題となつた小林孝子は、遂々田中光顯伯と手を切つた。「孝子さんは、協議の上圓滿に離別されて、今は田中家には關係はありません」と田中家は語る。それを小林家では否定して曰く「孝子は家へ歸つてゐません。築地の或人の家に居ますが、離別などゝ云ふ事はありません」と。世間は虚榮に欺かれた女の末路を笑つた。

△文豪國木田獨歩の未亡人國木田治子女史は遺兒を抱へて、生活難と戰つてゐたが、遂に三越呉服店へ這入つて、高等休憩所女取締となつた。治子女史は「皆さんが親切な人ばかりですから、別に大した辛い事もありません。一生懸命やつてみるつもりです」と晴やかに語る。

十月

△露西亞の前遞相キルコフ公の未亡人は、日本の秋色を見ようと云ふので來朝した。未亡人は客に愛嬌よく語つて「京都は全く活きた繪のやうな處ですね、妾は京都へ永住して見たうムいます。京都で茶の湯を呑ませられましたが、まあ、茶室の閑雅な事、茶を運ぶ婦人の淑かな事、ほんとに迚も西洋婦人なぞの眞似も出來ぬ事です。日本婦人は高尙優美な點で世界一と云つてもようムいませう。



△豫備歩兵中佐の井坂蕃と云ふ人と、同少佐三浦金次郎と云ふ人とが主唱になつて、在郷軍人の贊同を後援に、神田三崎町へ人事協會と云ふ職業紹介所を作つた。そして十五日から開業した。二氏は斯んな事を語る「近頃壯丁が多く花柳病に冒れまするのは、醜業婦の跋扈するに原因するのだらうと思ひます。勿論之は是非防遏しなくつちやならん事で、それに就て考へて見ますに、此の醜業婦と云ふのは、多くは田舍出の女が惡桂庵に懸つて、遂に斯う墮落するのですから、自外等は豫備軍人として身體も暇ですから、報國の一助として、之等の女の墮落を未然に防ぎ、又正業に復さしたいと思ふのです」

△帝國劇場附屬第二期生の卒業式が、此月同劇場の大食堂で擧行された。卒業者は十四名。女優の養成は之で打止にするのだと云ふ。十四名の中、宇治龍子は三味線が出來て、聲がよく萬事器用。小原小春は踊が巧くて三味線が出來る。稲原花子、水野早苗、東日出子等は踊が上手。泉龜代子はダンス專門。小林延子は第一期生にも劣らぬ藝振との事。其他の連中は未知數である。此中で一番教育のあるのは音羽かね子と云つて、お茶の水を四年迄修めたと云ふ。一體第二期生は舊劇よりも新劇、新劇よりも喜劇が巧

いと云ふ。要するに、第一期のやうに全くの素人がないから何か藝の下地があつて夫々巧いが落着きと氣品がない。

△米國大使として米國在任中に、外務大臣にされた内田康哉氏夫妻は、十四日阿波丸で歸朝した。正子夫人は　白羅紗の洋裝に白靴をはき、黑駝鳥の毛を飾つた參差帽を冠つて、青いヴエールをかけ、にこやかな笑顏と共に斯う語つた。「夫が大臣の大命を拜しましたには、妾共が西部地方へ避暑に參つて居りました時でムいました。米國では十一月から交際期に入る事ですから、悅びに參つて下すつた方もあまりありませんでした——米國の婦人問題ですか、さうですね、シヤトルでは選擧權を與へるやうになりましたが、要するに英國のやうに喧しくはありません」

△二十二日、白木屋吳服店で女萬引が三人捉まつた。一人は會社員の娘、一人は會社員の妻、一人は富豪の母親、一日以來今で都合十五人の女萬引が捉まつたわけである。而もそれが皆富豪のお隱居とか、校長の妻だとか、會社の重役の令嬢だとか云ふ人のみであつた。其中の一人で矢張三越吳服店で捉まつた女子大學卒業生吉田〇〇子は法廷に立つた時　淚ながらに「品物を見てゐますと、急に欲しくなつて、夢のやうに茫として、ふと手が出ます」と申立てた。

△十四日から、上野で、文部省第五回美術展覽會が開催されたが、其中に三人の閨秀畫家が名を列れてゐた。池田蕉園、河崎蘭香、渡邊ふみの三人である。蕉園の繪は「髮」と云ふ。蘭香の繪は「歌のぬし」と云ふ。ふみの繪は「讀書」と云ふ。此の「讀書」のみは油畫だつた。「髮」丈は褒狀を受けた。

十一月

△府下に住む中田お秋と云ふ、鐘淵紡績會社の女工は、東京府知事に表彰されて金十圓を下賜された。お秋は十三の年から女工となり、今日迄一里の道を毎日通勤する事二十三ヶ年に及び老父の看護に勉むる傍ら弟妹の愛育に意を碎いてゐると云ふ。

△陸軍秋期大演習御統監のため、久留米行幸中の大元帥陛下は、行幸の途路山口縣下の高齡者十四名に拜謁の光榮を賜はつたと云ふ。其中男



は一人しかない。十三人は皆女。野村ナツの百七歲を最高齡として、田中チヨの百歲が最低年である。

十二月

一笑一筆の反古稀で年暮れにけり　紅霞

花籠

〆切拾二月十日

靑春は花の世界なり、姿さまぐ\いろとりぐ\清香薫じ奇葩ひるがへるも今なり、實に一刻千金、君が頭上の榮冠を飾らずや錦心繡腸の君、摘んで一輪送りたまへ、來つて一枝を投じたまへ

賞金

一等　金五拾圓　（一名）
二等　金參拾圓　（一名）
三等　金貳拾圓　（一名）
四等　金拾圓　（五名）
五等　金五圓　（十名）

△紙數は十枚以上十五枚までの事
△賞金は發表の當日現金にて送る
△原稿には「花籠」と朱書ありたし
△名宛は「女學世界編輯部」の事
△原稿の文字は亂筆ならぬ樣に願ひます



和歌

一等

○ 愛媛 倉田さい

思ふ君に悶ゆる胸の種々を只寂してふ一言に言ふ

評、言はむと欲して多く言ひ得ざる所、所謂淑女の情を得たるもの歟されば一言却て萬言千語より力あり

二等

○ 須磨 長谷川久

ちら〳〵と月に紅葉の散る見えてかすかに響く須磨寺の鐘

評、美はし

二等

○ 高輪 泊 子

人傳に聞きてしるべきあはれかは鹿なく里の秋の夕ぐれ

評、聲調申分なし

三等

○ 長岡 明石米子

まつ身にはよそのわだちの響さへ君かとばかり胸とゞろきつ

評、實情を歌ひしものなるべし

三等

○ 横濱 小豆澤しげ子

秋風は色やゝあせし居酒屋の紺の暖簾をはた〳〵と吹く

評、市中の秋

三等

○ 越後 東樹喜世子

人知れずたぐる想ひの彩糸にひかれつゝ來る君かとぞ思ふ

評、用詞奇峭

秀逸

○ 下關 瓦本美津子

ともすれば涙ぐまるゝ秋なるよ泣くべき戀も持たぬ身ながら

評、夕暮はことに思ひ深し

○ 本郷 松井時子

靑丹よし寧樂はしぐれて牡鹿鳴く夜をしみじみと君とわれ居る

評、情思深き歌なり

○　美作　芳子

鳥なゝ背門の稲田の夕ぐれは鳴子ひく手に紅葉散るなり

評、好箇趣

○　秋田　葛の葉

見るものに聞くものにつけ思ふかな君が姿をきみが心を

評、人を思ふものゝならひなるべし

○　五日市　小松信乃

さらぬだに秋は悲しきものなるに時雨降る夜をさを鹿のなく

評、調べなだらかなり

○　大阪　中村皺榮

弱者てふ淡きさゝやき聞ける時故知らぬ涙頬につたひぬ

評、好詩

○　越後　葉我富美

草かげの蟲の聲にもゆらぐかと思ふばかりの女郎花かな

評、蟲の聲にゆらぐとは、見立てゝ得て面白し

○　東平　渡邊梅子

夢に見し峰さながらの紅葉狩もしやとあらぬ人もまたれて

評、下句殊に妙

○　美作　芙蓉

わかき日のかたみの文をとりいでゝほゝゑみかはす紅葉のあと

評、面白し

○　牛込　西村しのぶ

ふとうかぶ淡き疲れのなつかしや君のみひざに凭りてある時

評、淡き疲れの語妙

佳作

○　深川　なでしこ

道成寺いまし絲へたる幕間を歌女などの品評する

○　香川　爵子

世を呪ひ人を呪ひの暗はゞりて我頬の血もかれ初めにけり

○　島根　周藤眞子

昨日こそうしほあみしか大磯のいそふく風に千鳥なくなり

○　紀伊　千原玉子

故里もさすが淋しき秋の夜を君はいづちに月を見るらむ

○　横濱　中田園子

木こりつゝ鍵がきづかふ山霊のゆきかひしげく霰ふり来ぬ

○ 下總 小野辰子

燈匂ふ秋の夜更けの灯のゆらぎひそかにひとり泣き死なんものを

○ 札幌 四方直子

消えて行く空の花火と若き子のさめゆく戀は共にかなしき

○ 小石川 石本茅花子

松原に風のなぎたる秋の朝君をおもひて靜心なし

○ 淺草 黒田妙子

むらさきのあざみに白く霜ふるを眺めてわりぬ山の湯ぶれに

○ 富津 豐田本子

草も木も枯ゝろしくれに矢竹のぬれて色添ふ姿をゝしも

○ 備中 しらみれ子

おもしろくかなたこなたに萩さきて道はかどらぬ秋の野邊かな

○ 本郷 小林もとえ

うす化粧して夕暮の門に立ち背子をまつみの哀れならずや

○ 新潟 片山とし子

野に立ちて見れはや目立つ我が肩の細きを撫でゝ沖の風吹く

○ 臺北 日種秀子

時にふれ折にふれつゝ歌おもふはいとまなき身のいとまなりけり

○ 横濱 愛石

あなさびし落葉はげしき郊外の森の小家のゆく秋の宵

○ 下總 小瀬八重子

君も憂き日かや白帆に灰匂ふ雲あか〳〵と濁りたゞれて

○ 熊本 菊子

落葉たく煙りの末のほそ〴〵と松にかゝりて秋ぞ逝くらむ

○ 川越 のぎく

泣くなやめよみな運命ぞと叱れどもきゝわけもなきなみだなる哉

○ 下關 小野倭文子

蟲の音は悲しかりけりもの思ふ身にはあられどたゞ何となく

○ 茨城 今泉淺子

秋の蝶戀の終りの果敢さを心ゆくまで共に泣かまし

○ 静岡 柿添ちとせ

鐘なりぬうちふるへつゝ鐘なりぬ柱によりて物思ふ時

○ 京都 華子

白駒に銀鞍置きて君を待つ内裡の門や散る紅葉かな

○ 伊賀 島村靜子

父しらず母のなさけにうるほはず二十五の秋旅に暮れ逝く

○ 小石川 せい子

桃色の夢うるはしうかほろなる長き振袖なつかしき宵

○ 大阪 西村みち子

言はで只背き合ひたる灯火やかたみ〳〵に物を思ひて

○ 金澤 井田美子

天の星童となりて幾千人物囁くと夢に見し様

○ 兵庫 衣子

生ふるとは知らずでありしおかのくに夕日のてればすゝきみだるゝ

○ 河内 糸若柳野子

冬の夜の月の光はひとりゆく君をてらしぬ松並木道

○ 奈良 中富よしみ

悔多き悩みも多き思ひ出の涙を秘むる新妻の身よ

○ 大阪 狐よし子

[illegible]のらえ鐘のひゞきのそれよりも秋のあはれぞ身にぞしみける
○　下関　吉野君子

梭うらに雪ふらしき人の聲しばしゝだえて風ぞ吹く
○　紀伊　中島昌子

賤が家の垣の姫葛もみぢして時雨にさむきこのあした哉
○　名古屋　高橋かき

人よりもまつおのがみぞおこなひて人を敎ふる人ぞうれしき
○　澁谷　藤葉女

おどけたる翁のありてよく話る團欒うれしきふる里の家
○　土佐　北村美佐夫

紅葉照る夕日の溪を背景に君と別れし白き家見ゆ
○　神戸　松本きみ

緣切れて歸りし姉の咳音を病室に聞く寒き夜半かな
○　京都　福島直

おもひすてつるはれ寂しき面影のつき添ふ如き哀れさたなく
○　札幌　松尾磯美

古日記におとゝしの秋去年の秋秋を繰りゆく長き夜の興
○　埼玉　大塚伊勢子

山茶花の花散る緣にこしかけて逝く秋の空うちまもるかな
○　靜岡　高須江

淋しさに訪ひてもみましなやみもつ詩の子住める秋風の家
○　旭川　吉田釉子

むかひたる鏡にうつる新まげのあらはづかしと二九の人妻
○　福山　松下二葉

北時雨嵐と降り來てまた晴るゝそらに似たるは昔の人心
○　伊豫　吉岡芳子

朝まだき露ふみ分て小山田にいそぐ道みち野菊みだるゝ
○　陸中　横川元

今ははやかすかにのこるともしびの如き恋に生くるわれかな
○　近江　薫子

君嫁くやきみもゆきます三十路なほ娘たる身のわれのみにして
○　横濱　高橋蔣美子

ひとれむり醒て步路の結ばれずはるかに忍ぶふるさとの秋
○　廣島　よし子

富といひ貧しと云ふも一本の貯への木のあるなしにして
○　大阪　野村徳子

カラ〳〵と馬につけたる鈴音の遠ざかりゆく夕暮の窓
○　小倉　西原千代子

素足してふめばくづるゝ砂山に嫁菜の花の淋しう咲きぬ
○　札幌　俣野恭子

わかれ日のうきなく話りてさびしうもほゝゑむ母の頬のやつれよ
○　下總　澤田ふさ子

落葉敷く秋の淋しき暮れがたに稚兒いだきゐぬうら若き母
○　山形　野口菊子

破れ障子風にはためく賤が家も君しいまさば何かいとはむ
○　京都　千代子

木の葉ちる時雨の庭にそとおりてかの日を思ひ君なつかしむ
○　岩代　潸嘉子

なかし抄く七十年の身の上や影は語りぬ冬の夜の月



俳句

天

夜業話しも嫁逝きてよりぞ寒き宿　　神戸　西島　靜子

評　短檠風にゆらぎて愁情深きを覺ゆ

地

一構え水望む景や草紅葉　　京城　鹿野　若子

評　一幅の圖畫、色彩いとも〳〵美し

人

小春日和舟行に富士白う見し　　横濱　天野　律子

評　天晴湘南の海洋々たるを見る如し

秀逸

三竿の絲より寒き落葉かな　　土佐　北村美佐夫
霜晴れの窓下花や湖廣し　　埼玉　野谷若葉
落葉して日のさす蜂の古巣かな　　能登　向井きみ枝
孤兒收容に渡る鳥水鳥も寒む　　神戸　壽見もと
懸衣重たき冬となりにけり　　新潟　坂井操子

枯菊や日和冷たき能衣裳　　埼玉　林　畝子
蛸壺やカンテラ灯す漁の宿　　丹後　片山とし子
名ある草の花冷し秋の經わびし　　神戸　高尾　さよ
鑛山町も夜靜となりて時雨哉　　本郷　原　琴子
白鳩や旭に燃え映ゆる宮紅葉　　東京　秋山いのこ
主國去る亡國の奴や凩す　　横濱　かほる
鷄頭や野人の戀も流行唄　　四谷　杉本　靜江
水仙に墨ほとばしる畫絹かな　　石見　千代能富子
江岩の奇に舟泛ぶ千鳥哉　　廣島　龜山　照子
水鳥や月落ちて樹影湖凪げる　　四谷　笹原　清子
艷妻をもつ君富みて黄菊哉　　横濱　夕野　萩子
孤影枯木に似たり突冬の月高し　　越後　五十嵐須賀子
山風の下す御寺や梅擬　　久留米　鹿兒島正子
たわゝ踏む舟板橋や小夜千鳥　　香川　猪熊　榮子
富士高く見る晴れや野菊ちら咲きて　　神奈川　矢後　靜枝
午砲響く庵の障子や柿日和　　麹町　龍居かへで
手に觸れし袈裟ひや〳〵と秋たちぬ　　東京　中川ちか子
刀自は機に山茶花日和小鳥來る　　神奈川　柚木　しづ
顔洗ふ眉の雫や萩の花　　信濃　松下たれ子
祇王祇女の由緒記も秋夜つれ〴〵に　　下總　小野たつ子
時雨るゝや山案内すじ語る爐裡　　麻布　武田　つる
橋たよ〳〵に馬曳行くや夕紅葉　　群馬　田口富美子
朝鮮のオンドルに冬籠りけり　　岡山　岡田　清子
山茶花の門訪ふや茶釜賣　　福島　野木　靜枝
髪切て祀る祠や暮の秋　　大阪　本山須磨子

枯枝に鳥ふくろゝ寒さかな　但馬　古藤部富子
病狐などふさはし畫意や枯尾花　大阪　西村みち子
辻待のよく寄る柳夜寒かな　神戸　松本きみ
木枯や破窓にからむすがれ蔓　備後　白梅花
瀬田は日の照りて時雨の關所哉　芝　篠崎きみ子
大根の菜葉掛出しや冬の川　芝　篠崎みち子
五兩十兩病むうた人や雁來紅　本所　本庄美能
山深く神輿送りて紅葉哉　小石川　渥美準馨
かまど築を乾したく庭や雁來紅　山梨　田中はる子
土の香や落葉きよめし庭の限　福島　木村つれ子
張板の更紗かわくや秋の蝶　兵庫　中村秋子
秋の蝶日の照りたる葉陰かな　越後　東樹未子
茶巾乾す舟板塀や蔦紅葉　廣島　小松さ末
寺町に住む戯作者や月の秋　豐橋　安田晶子
蝸廬の障子破れもわびし冬の月　東京　大府愛子
洲渡り來し巫女に聖山時雨哉　山口　宇賀秋子
　に默る猶の幹細し小春凪　横濱　石塚千代の
菊抑すや唐畫の軸をかけつられ　紀伊　近藤薫子
石燒いて腹に抱く夜や鑑氷る　小石川　中川暮の子
白らが染の看板さびぬ秋の風　東京　木村公子
小春日や初産くばる小豆飯　麹町　田部てふ子
溢ちるや水枯れ川原白々し　下關　木本白蝶
肌寒や剃刀返す砥のひゞき　大和　中　美屋子
月に光る四澤の水や鴨の聲　山城　辻　壽子
枯尾花吹く火埃りも藁屋かな　神戸　村田久子

落雷の神木裂し冬の月　習志野　みどり子
狩りくれて冷たき山の紅葉哉　麻布　野口照子
物云はぬ狂女笑ふや秋の暮　本所　岡井久江
石磊々柳繭々月粘かな　新潟　山口よし
寄らで行く甲州馬子や夕紅葉　大和　山本富代子
待つ文のまてば秋の日雨にくれて　下關　小野淡文子
雁見ろや冷や〳〵渡る湖の風　神田　松本市女
秋の日のせんなき雨を恨みけり　横濱　村上濱子
霧晴れや水をはなるゝ沼の鳥　讃岐　香西君惠
食物の事に日暮れぬ冬籠り　京都　小西ふみ子
雁なくや思出多き町端橋　麻布　田中のり子
伐られたる樺の風に冬日かな　埼玉　林　畝子
市に出る鞍つけ馬やそばの花　麻布　田中知子
野分過ぎて障子の破れ目月もるゝ　大阪　河野よし子
小春日や束れ上げたる洗ひ髮　小石川　渥美準馨
時雨るや國守忌觸れもこの夕　香川　猪熊さい子
逗留して延具修理も小春哉　府下　大野正子
大鐘を鑄る空焦げて凩す　香川　大井久子
まばら枝に山茶花咲きぬ内裏跡　岩手　大和田みつゑ
さむしろに夜蟲なくや寺の秋　芝　百合子
湯婆更へて母の寢顔を見る夜哉　京都　松田いと
千菜垂る掛出し裏やみそさゞゐ　本郷　塚越はるの
冬川や鴨かあらぬか鳥の浮く　下谷　千鳥女
湯豆腐や南天の窓に月冴えて　麻布　山田千代
山茶花やひとりは淋し茶の稽古　芝　黒川久子

誌友倶樂部

▲北海道と云ふ言葉は、内地の方々にどんな感じがいたすのでせう、私は北海道でなど申すと、早速お寒いでせうね、熊が出ませんかなど質問されて困りますわ、十勝北見方面の奥には居りますが、當地では見る事が出來ません、尤も天長節前後には初雪が降りますが、寒さは東京の二月の空風より樂です、十二月に入りますと、五陵郭では盛んに氷を切出して地方へ輸出します、次號では冬期の衣裝の事を申上げませう。（巴港にて百合子）

▲「過ぎ去つた人生の春」！、かくして世の老孃は老い行くのでせうか？、あゝ私も此辛慘を嘗めつくし現在同じ想に泣きつゝある者の一人ですが、彼の女教師の天職、人の噂、煩悶後の結論、將來の運命、再びめぐり來ぬ人生の春、と讀み行くうちにも、もう一句〲此胸をさゝれる樣で、誰かゞ自分の心中に入つて、モデルにしたのではないかとまで、疑ふ程でした、哀れさみどりの君よ、君はほんとにかゝる御境遇におはしますのでせうか、實に私の日頃思ひ惱んで幾度か書かんとしては書き得なかつた所を遺憾なくお書き下すつたのです、私は心底から貴女に感謝いたします、廣い世の中には、まだ貴女より、より以上の者が數多あります、何卒御心ひろくおはしませ。（京都にて小芹女）

▲「女先生の性格」をおかき遊ばしたあの花樣つて何處の御方でいらつしやいますの？先生の御名や御擔任の學科は少しは違つて居ますけれど中の事がらはそつくり私の學校の先生ですわ、家事科の先生なくさすのは皆さんですけれど、文學史の先生をおほめ遊ばすのは御自分が大もてだつたものだから。（與謝の浦にて友千鳥）

▲私は家事の都合にて五月頃から本誌を取りませんでしたが、久しぶりにて十一號を拜見しましたら、隨分記事が好く成りましたので、嬉しく思はれました、昨春本誌上にて友となりました方とは、今だに親しく交際して居ります、之れも女學世界の爲と御禮申ます、麴町の岡世樣私は近くにホームの人と成つたばかりですが、貴女と同じ年で、種々似た身の上です、誰れも居りませんから是非お訪れ下さい。（四谷區鹽町二の二四西川）

▲お懐しい野菊女樣、お久しぶりですれ、露の宿より・甘露の宿より！、まだ見ぬ妹御樣へのおかへしごと、繰りかへし〲どんなにか樂しく拜したことでせう、いつもながら、ましてこの度の御作、はなやかなうちにも、ゆとりのあるあの文才！！もう〲私妬ましいほど氣に入りました、どうぞ毎號お出し下さいましな私ぺーゞくりましても御許樣の名が見えないとほんとにものたりないんですもの、かう思ふのも私ばかりぢやありませんわ、きつと皆樣もお望みでせうから。それから秋香樣、いよ〲御發展の末、聞くさへはな〲しいスウヰートホームてふ名のもとに、第四版までもお著しあそばして、千代子樣のお得意さこそと存じます、記者樣！！いゝかげんにお寫眞かゝげて下さいな、もう決して早くはございますまいれ皆樣。（播州睦の女）

▲田鶴子さん！私もやつぱり饑ちやんの作にはすつかり参つちやつたの、馬鹿に氣に入りましたわ、千代子さんと引けをとらない程私の心を騒がせる方なの、ます〲おふろひ遊ばせな、樂しんで居ますのよ。（名古屋こすもす）

▲私はまだ卵から出たての雛の樣な身でございますが、現代の女流の歌では與謝野晶子樣、俳句では國民派の岳樓樣のワイフでゐらつしやるはぎ女樣がオーソリチーと信じて居ます、國民派の好きな僻目と申されるか知れませんが、女學世界の句の中に、碧梧桐樣の日本派のが見えますので、私は悲しくつてたまりません、やつぱり俳句は優しい調に作られたいと思ひますわれ、皆樣ご免遊ばせよ、十一月號で私の好きなのは上から……「膝に眠ろ」、「神苑に」、「石門に」、「朝寒や」、「鬼灯や」、「遷宮の」、「綿弓の」、「蟲の音や」、「大空に」、「コスモスに」、「折しもの」との十一句よ、皆樣は少し私の味方になつて下さらなくつて。（牛込の菊子）

▲前號村樣の、「良人を去らんとせし妻の手紙」を拜見して、私は同情の涙禁ずる事が出來ませんでした、三保子さん、よしや御良人に不滿はあるとも、それは浮世の慾で限りないあこがれです、忍べぬところをお忍びになつたあなたのお子さんですもの、匡樣はきつと人並勝れた方におなりですよ、末を樂んでお暮しなさい。（ゆかり女）

▲まあ！十一號は、なぜあんなに悲哀なのばつかしでしたの？時候の加減でもございますまいに……妾し、大方のは半分泣いて讀んでゐましたのよ、何だか氣が變になつて、馬鹿に悲しく淋しくなつちまつて、世の中を悲觀しちまひまし

た、私の心の奥にもやつぱり一概えがひそんでゐるので、それに思ひ出つてつひ泣かずにはゐられませんでしたの。(名古屋花子)

▲千代子様、「さまよふたむも、元のすみかにかへらうとして居ます、とめて下さいますな、母からうけた身體は母のためにさゝげつくさうと決心しました……」、ふいても〳〵涙がとまりませんでした、消えさつた希望のかげを追ふては泣き、人を恨みては母のこゝろを痛ましめて、今もなほ悶々して居る子は、どんなに貴いをしへを受けましたか、灯に照らされた頰のやつれ、烏羽玉の髪にまじる白きいくすぢ目に立つて衰へた母を、折も折泣きはらした目に見ては、たゞ心の中でお詫び申上げた、年も逝きます、來年は貴女も私も廿でございますね、十代と永久に別るのでございますね、まさきくおはしませよ。(末摘花)

▲私は十九の田舍娘です、いつまでも〳〵此の變化のない活動のない谷間で無趣味な田舍人とともに朽ちはてればならんのかと思へば、誠涙のかわくひまもございません、此の淋しい心を慰めて呉れるのは、唯本誌ばかりでございます皆様が御投書遊ばす御作、是が私の唯一の慰者でございます、待ちにまたるゝ毎號の本誌を手にして披きます時には此處淋しい山奥にも都の風の吹くやうに思はれまして、一層諸姉様お懐かしう慕はしう感ぜられます、どうぞ末長く御交り下さい、いつも和歌之部へ御投書遊ばす河内錦若柳野子様にお伺ひ致します、貴女様はもしや南河内壇庄の里の君では御座いませんか、蟲なく夕、かなしき思ひに泣く時、貴女様も同じ思になき給ふらん等思出でられて、そゞろなつかしく存じます どうか以後は御交り下さいませ、今井廣花様、本願寺信子様、今後は何卒繪はがき交換をお願ひ致します、仙臺北影の子様つてどなた、森崎とき子様、金剛山東麓にて靜子様 どうか御住所お知らせ下さいましな、誌友の諸姉様繪はがき交換下さいませ(奈良縣生駒郡南生駒村大字小平尾櫻本露花)

▲仙臺の春子様、十一月の誌友倶樂部拜見致しまして御答へいたします、あの歌は、私が此夏本郷の病院へ入院の當時感じましたまゝ拙いのを恥しげもなく出しましたのですが、私の參りました學校はカトリック教の學校で御座いましたが、私は信者で御座いません、只今に良人の役の都合で門司に住んでをります、仙臺は良人が二高出身ではあり、私も夏休み毎仙臺ですごしましたし、從姉妹など大勢をりますので、誠に思出多きなつかしき所で御座いますのよ、それ故貴女様のお投書拜見いたしまして、あまり御なつかしさに、失禮をもかへりみず倶樂部紙上をけがしました、安覇は安藤の間違ひで御座います。(門司安藤君子)

▲十一月號の本誌が新装―いつもながらうれしうございました、萩香様はなぜこのごろはあんな悲しい味氣ないやうな事ばつかりおつしやるんでございませう? 終ひ釣り込まれて私までがやるせない思ひに泣くやうになりました、冷風身に沁み、月はかたむき、更る夜半に思ひは遠き君が御あたりに……、(羽前秋ざくら)

▲十一月號誌友倶樂部に御尋ねなされた片田舍の山ゆり様、私もあんな事を皆様から聞いてをりましたので、手を出し兼ねてをりましたが、思ひ切つて先々月投書しましたら、十一月號にのせて下さいましたわ、貴女もどうかどし〳〵投書遊ばせ、記者様はそんな不公平な方ぢあ、ありませんわ、御答の通り有益な趣味のある事なら喜こんでのせて下さるでせう。(柴水女)

▲誌友の皆様、今年もいよ〳〵今月限りで御別れでございますね、又來年は一つおばあさんになつて御目にかゝりますわ、私はほんにつらうございますわ、此の花は十七にわかれるのが千代子さんぢやないがほんとに我世の春に別れたくございません、いつまでも〳〵夢よりさめたくはございませんわ、十一月號の內藤様の「生活難」、「帝都の秋」、ほんとによろしうございますのね、あれを讀むにつけても都戀しさの念去りがたくなんて生意氣ですわねえ、けれどほんとにこんな眠つた都に居たくありまんわ、又來年御目にかゝりませう、さらば、(京都露野)

▲千鶴子さんの評について、「人生の春評判記」と題してあまなみさんが筆をきはめてほめられたのは紅彼さまの春の曲、今年の増刊は貴女のお芝居でせうよといはれた豫想通り、四季の増刊を何時も艷麗なお筆で彩つて被居る樣は、又「日記帳」や「狐火のもと」をお書きになる輕妙な才を有して居られます。私は貴女のお作が好みです、一寸鏡花の俤もある、どうぞ御本名ををしへて下さいましね(ゆき子)

▲相變らず內藤千代子様の御文才はモウ感ずるより外はありませんが、殊に十一月號の「生活難」や「帝都の秋」はまるで、チャームされてしまひました、その他皆本月のは一層興味多く拜

しましたが、詩「過ぎ去つたゝ生の春」を御寄きになつた、さみどり様の、よく私に似て居ますこと、同情いたします、御さしつかへなくば何卒御住所御知らせ下さい。(福岡縣築上郡廣津後藤文子)

▲妾、北米に居りまして、去る九月號にて本紙誌友クラブ愛讀者の皆々様の心をわずらはし、色々と玉章エハガキを皆様よりお送り下され、誠によろこび居ります、又夫れ〳〵御返事差上げましたつもりで居りますが、萬一にもお送り下されて御返事を差上げない方がありましたら何卒御ゆるし下され、住所は下の通りです。(熊谷常子) T. Kumagai. R. R. I. P. O. Box. 63. bowles Fresno. Cal. U. S. A.

▲松平様の「日曜日」、面白く讀みました、私あのやうなお作大すきでございます、萩香様のはいつも姉が好んでをります、お二方様どうぞ末長くおふるひあそばせ。(西京の梅玉女)

▲私が本年一號より十四號までの本誌を見て特に感じましたのは、鏡子さんと紅梅嬢の發展ですの。前者のお筆はいつも無邪氣なお姫さまを連想させる、又紅梅孃のは「春の曲」に初まつて「女天下の家庭」、「千どり」などとり〳〵に趣がかはつて、一分も透のないお筆つき、殊に十四號の「燈火のもと」や「日記帳」……、私はつくづく江戸趣味といふのはこんな洒落な短文の中に含まれてゐるものかと思はれましてよ。どうぞ次々とお振ひあそばして……。(もみぢ)

▲村雨様、眞情の叫、血涙の文字!いく度となくくりかへしました、私はまだあなたのお作には二度しかお目にかゝりませんが、二度とも深い溜息と胸をゑぐらるゝ思とをもつてよみました、その一字一句熱い涙に慰められてをります、どうぞ御自愛あそばして、此後とも御寄稿お願ひ申します、併せて記者様に感謝いたしますどうぞこれからもこんな風のものをお頼み申します、失禮ですがお差支なくば誌上で村雨様の御住所お知らせ下さい。(根津の里子)

▲十一月號の千代子様のを讀んで云はれぬ深い印象な、胸にきざまれました、御母上を慕はれる御妹様を思はれる、御優しいみ心が、美しううつされてありましたわ、さうして私あの「冷めたい私は人にそむいてひとり泣きますわ」なんてあたりよんだらば、涙がこぼれましたの、あゝ御したはしきを、お慰めすることは出來ないでせうか千代子様、どうぞ御自愛遊ばして益々御ふるひ下さいませ、遠き此地に私は毎日君の御榮えを祈つて居ります。(小百合)

▲十一月號に「工場通ひの辛き經驗」をおだし遊ばした文子様誠にお察し致します、何だか御懐しくて……、失禮ですが御住所お知らせ下さいませ。(丸龜澄香)

▲記者様御尋ね致します、原稿紙は何十字詰で何行のものですか、又〆切後出したのは次號に出して下さいますか。(長崎月子)

原稿紙は一枚の紙に二十字詰二十行に書いたものが便利です、また締切後到着の分は次號に廻はします。

▲十一號にて御同情くださいました伊豫の御方御許様も知火海のほとりに御暮しなされました由、知火海つて申しましても廣う御座いますがどのあたりにゐらつしやいましたの、私は温泉で名のある日奈久の先きの方に居ります、日奈久から六里離れて居りますが、海の景色がほんとうに美う御座いますので、御住所と御名前御明しくだされますなら、繪葉書御送りいたします、末永く清いお交りを願ひます、(知火のほとり野の露)

▲萩香様、私は遠い〳〵南國の空より限りなく貴女を慕ふ可憐の乙女です、日毎月毎に進み行く貴女の御文才、見る度毎に熱い〳〵涙を雜誌の上に落して居ます。(南の國にて葉末の露)

▲末英柳様、誌上にて有難いお言葉嬉しく〳〵拜見致しました、私はなぜか蟲の知らせか「日光の山に別るゝ日」を一番先に讀みましたの、何卒益々お振ひ遊ばしまし、紅葉散り蟲の聲も絶えた冬の山里に、お作をのみ待ちわびて居るものゝあることをお忘れなく。(大谷川の邊のコスモス)

▲十一號、大へんようございました、殊に嬉しかつたのは、御なつかしい千代子様のが二つも出て居たことでした、御優しいしほらしい君のみ心、よみ行く程に、御なつかしさ、御いたはしさにたへられませんでした、何と云ふても君は天才でいらつしやいますれ、實に一頭地をぬいていらつしやいますわ、君のことをとやかく云ふ人は、全く田鶴子様の仰せの如く、淡路の餘りの弱きさけびでせう、私の小校でも、又他より轉校なすつた方より伺ひましても、いづれも千代子様の稀世の御文才に敬服し崇拜してる方ばつかりでございます、毎日〳〵千代子様の御噂さばつかりしてなつかしがつて居ります

の、どうぞ益々御ふるひ遊ばして下さいませ、スヰートホーム四版ですつてれ、うれしうございます、それから御慕はしい花散里様、いかゞ遊ばしたでせう、少しも御名が見えませんので戀しうございます。（ゆかり）

▲南洲の院に病む君よ、何も運命ですもの、御心安う御養生遊ばせ、私もきのふ今日過ぎ行く我が十八の秋淋しう、人しれず涙に袖ぬらす夜のみ多う御座います、あゝ運命に泣くものは弱い、義理に泣くものは清い、慈悲に泣く者は尊いとか、あゝされど又思ひ出す、かの夜此の事、思ひは千々に亂れて。（櫟川の里にて、布美子）

▲遠き彼方の眞帆片帆打霞み、波音靜けき瀬戸内海の磯邊に、語るに一人の友もなく、たゞ〳〵本誌を唯一の友として、打ちよす濱の調、峰を渡る松風になぐさめられ、たゞ一人うら淋しく此の思ひ出多き秋色を味ひながら暮してをる濱の隱れたる愛讀者で御座います、何卒皆様これから永久に御交りを御願ひいたします。（岡山濱にて、クリームローズ）

▲友千鳥様てどなた、やはり日和ケ岳にお通ひ遊ばす補習科の方ではございませんの、私おわかりになりまして、いつも顔合して居りますものよ、富田様、道野様、なぜ投書遊ばさないの言つておやり遊ばせな。（菊まがき）

▲諸姉様、永々無沙汰致しまして、どうぞお許し下いませ、私事此春頃より病氣にて、つひ先日より起床致しました、又以後繪葉書交換下されませ、又文通も致しませう。（京都市押小路鉄屋町西入安居内船木夢子）

▲私は學校に通ふかたはら、此の春から女學世界を無二の友として愛讀して居ります、不束な者で御座いますが、どうぞ妹とお思し遊ばして、玉章の交換や地歴の參考となる繪葉書の交換を御願ひ致します。（千葉縣木更津町寺町光明寺内椿逎葉子）

▲記者様、私は五年程前からこの誌上に依て多くの教訓を受けてをるものでございますが、先號「姿見かゞみ」に出て居りました「化粧のしをり」、誠に結構、御陰で人並のおつくりが出來まして有難う存じます、就ては甚だあつかましうございますが、冬の化粧につきて亦をしへて戴きたうございます。（大阪野菊）

▲下關の木本蘭子様、よく御名を拜見して、御なつかしく存じます、私も同じ下關でございますのよ、何卒御交際を御願ひ致します。（下關倭文子）

▲名所、古跡、絶景の繪葉書の御交換をお願ひ申します、また北海道、臺灣のお姉様方のは、何とぞ、御當地の風俗の繪葉書をお送り下さる様お願ひ申します、お禮は佐賀縣の名所古跡其他お好みの繪葉書でいたします。（佐賀市松原町六九石井菊子）

▲記者様にお伺ひ致します、投書用紙は是非とも原稿紙でなけりやいけないのですか。（北國ゆり子）

　原稿用紙がなければ、普通の半紙でもかまひません。

▲先月の女學世界に、宇都宮高等女學校卒業の一人の方の御書きになつたことに就て、御心中を推察いたします、私は、去にし四月女學校を卒業いたし、今は片田舍なる郷里の小學校に奉職いたしてをります、やはり御許様と同じ境遇であります、どうぞおさしつかへなくば、御住所御姓名を來月の女學世界にて御知らせ下されまし。（松野）

▲慕はしき大阪なる本山須磨子様、十月號女學世界和歌欄にて御芳名見出し、懷舊の情に堪へません、思出多い彼の大和川畔の小學で別れの袂を絞てから七星霜、昔を思へば、夢の樣で御座いよす、今日西へ西へ流るゝ白い雲を眺め、去にし懷かしい其頃を思浮べて北風寒い金剛の片田舍を心行迄偲びました、今日東西に別れて四千餘哩なる私を哀と思召して、次號に御住所お知らせ下さいませ、波靜なるルパート海岸の暮れ行く光景をながめて。（北アメリカの狩友より十月十九日）

▲本誌八月號御不用の方はございませんか、もしありますならば何卒お惠み下さいませ、お願ひ申します。（三重縣志摩郡國府村下村はつ子）

▲千葉の加瀬きく子様、こゝ二月ばかりお歌を拜見致しませんが、どう遊して、ます〳〵お振ひ遊ばせ。（都にて隆子）

▲「女教師の性格」を御出しになつた蘿花様、讀みゆく内に思はず吹き出しました、あゝすつぱぬかれてはたまりませんわれーホヽー。（朝鮮鎭南浦米海町十二石川直代子）

▲皆様の中に、昨年の女學世界十卷ノ二號、及び十卷ノ八號と、本年十一卷ノ六號、及び十一卷ノ七號、御不用の方はお惠み下さいませ、お禮は當地名勝繪葉書お送りいたします。（福岡縣小倉市市立病院内濱島のぶ子）

新刊紹介

△民種改善 模範夫婦　津田順次郎著

近頃英國に於て新らしい學說として唱へらるゝまで民種改善論といふのがある、これは專ら遺傳の理を應用して人間の改良を圖るもので、其手段は模範の夫人を作る事によつて遂せらるゝといふ、本書は卽ちこの模範婦人の資格について醫學上や社會學上から詳しく說明したもので近頃多くの興味を以て讀まれた珍書である。模範夫婦といへば、外貌の上からいへば美男美女でなくてはならぬ、體質からいへば建男健女でなくてはならぬ、そこで男女の身長、體質、皮膚の色、骨骼、腦髓、美容の說明が必要となつて來る、次に惡しき方面の病氣の說明が必要である長壽法の說明も大關係がある、それから又人々の惡い遺傳が殘した樣々の國民病の說明も、必要である。又人々の不良行爲が蒔き散らした惡德の結果卽ち不良少年や浮浪兒の事も等閑に附してはならぬ、就中生殖衞生は最も注意すべき事である、本書は是等模範夫婦を作るに必要の材料を現存せる社會の實例から借りて來て、それを醫學や社會學やの學問の光に照して最も興味ある說明をしたものである、科學が進めば人人の常識が發達して無暗みな結婚は段々せなくなるには相違ないが、斯樣な學說が唱へらると更に一層注意をする樣になるであらう。讀で面白く且有益な著述である。定價金貳圓　本鄕一丁目　春成社發行

△かなしき思出　淸藤秋子述

淸藤女史の姉君が、數年前ふと精神に異狀を來してより、留來幾度か癒え又發して居たりしがつひに果敢なくなりしまでの經過、思出などを記したるものにして、女史が姉君を思ふの情さへそと思ひやらるゝものあり、終りには世の人の參考とすべきことも記しあり。

△少女對話選　巖谷小波著

新入生、ホームシツク、そら病、お留守番、仲よし、考へ物、風幽霊等の數種をなさむ、何れも少女の對話を脚本風にものしたるものにて自分でやつても面白く、他人にやらせておもしろく、また其の間に會話の練練ともなり、社交の豫習ともなるの益なうくべし。定價金八十錢　神田區南乘物町　誠文館發行

△父の罪　尾島菊子著

悲劇と悲劇が重り合ふて一家を襲ふての數奇な運命の家に殘された一人の娘。父は刑餘の人家の資產に浸淫反覆常なき親類に橫領されてお定まりの荒波に飜弄さるゝといふにて末は一念發起して孤兒院を起し自から社會事業に獻身し數多の孤兒よりお母樣と慕ひ呼ばれ、身は墨染なまとはれど心は淸淨無垢の尼となりて一生を精神界に獻げし奇特なる物語新聞小說として成功したものなり。價九十五錢　神田仲町　辰文館發行

△小說 家　島崎藤村著

橋本と稱する地方中等資產家の一家の運命の推移を經として、表面は嚴格なれど、裏面に細心の工夫を缺ぎし主人公の不檢束なる行動よりの一家の非運を釀し、夫婦親子の離散の歎きを見つゝある主婦の悲しき衷情を緯として編み成さたる新家庭小說なり、家の暮し向は至つて健全にして、子孫の繁榮期して待つべき筈の一家が豫期せざる非運に傾き行くの經路はやゝ唐突なるが如くに感ぜらるゝも旁午に出現する人物事件の推移には自から自然の脈絡ありて言ふに言はれぬ妙味を感ずべし、又上卷には人生の努力克己の方面を染み〴〵と味はふ如くに見え下卷には忽ち紅燈綠酒の幕に變じ行く有樣も自然に出でゝ無理のなきところなり「破戒」「春」と同じく綠陰叢書第三篇として發行上下合て全二冊定價各七十五錢　發賣元神田神保町　上田屋

△情死の研究　大道和一著

情死を理論的に研究したるものにして、心中の槪念、歷史觀、心中文學の解說、社會的現象としての解釋等數項に分ち、心理狀態より社會政策にまで立入　て論じたるものにて單に學者敎育家の參考たるのみならず、又一般家庭の智識に供すべし附錄として揭げたる四十一年より四十四年に至る四箇年間情死者の統計は性名、原籍、年齡、身分並に情死の動機方法場所等悉く記入して一目瞭然偶々三面記事にて覺えし事柄も集めて見ればさても夢に無分別者の多きものなるかを知り一驚を喫すべきものなり。價一圓八十錢　表神保町　同館文發行



本誌
新年號豫告

四十五年一月一日發行

△表情かがみ　磯千鳥
△源氏繪物語　鶯鶯女
△女顧問官（事實談）　小宰相
△諸國名婦傳　横山健堂
△快樂の脫化　越智村雨
△句に現はれたる女性　福原雨六
△樣々の性格解剖　横溢女史
△新鶉衣 社會觀察　曙内侍
△草花繪物語連理草　太田三郎
△新案夫婦合せ（懸賞課題）
△繪にも描かれて　野路の雨
△思出深き春の夜の　若むらさき
△家庭科學日用帳　須田勝三郎
△其折り〳〵　柴田環
△在原業平朝臣　物集梧水





△名流夫人と其家庭　婦人記者

△家政鎖談　井上秀子

△小倉百人一首下馬評　司馬僧正

△夢の様な手紙の中　清水玉露

△昔むかしの正月　平俊蔭

△新古著聞集（奥様評判記）　鐵拳禪

△料理食品文盲手引　小泉迂外

△東京印象記　兒玉花外

△哲婦クレオパトラ　阿久根俊子

△女節用家庭心得草　笹木幸子

△小説瑠璃姫の夜逃げ　内藤千代子

△上臈の四季生活　考古博士

△花の春　松平鏡子

卷頭の裝飾　春の光（原色版）　新裝（石版）　樂境（石版）
羽子遊び（毛筆畫）　千代の春（毛筆畫）　其他寫眞版多數

新年附錄　**四季風俗雙六**　山本昇雲畫伯筆
石版極彩色艶・麗無比



募集（十二月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二冊　増刊四回……一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●規則書御入用の方は二錢劵相添申込あれ

不許複製

明治四十四年十一月廿三日印刷納本　第拾壹卷第拾六號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博通社 博 特賣品

●安心の出來る買物は博通社に限る!!!

●小倉百人一首



紙質が優等で字體が鮮明で印刷が頗る美麗で其の上價格の安いのが當社の特色である。

◉一號最優等木箱入 特價壹圓參拾五錢
◉二號優等木箱入 特價壹圓
◉三號上等木箱入 特價八拾錢
◉四號上等桐箱入 特價四拾五錢

▼送料市内四錢内地八錢、臺、樺、清、朝卅錢

▶女學生御袴◀



直接産地より多數取寄せ當社工場に於て豐富なる材料に依り製作せる優等品にして決して仕入品に非らず『ヒダ』等充分に切地を用いたる御誂品で裁縫の丁寧なるは勿論價格頗る低廉なり是非一度御試を乞ふ

寸法	メレンス製	カシミヤ製
尺六	一圓四拾錢	三圓八拾錢
尺八	一圓五拾錢	四圓貳拾錢
二尺	一圓八拾錢	四圓五拾錢
二尺二	二圓	五圓四拾錢
二尺三	二圓二拾錢	五圓六拾錢
二尺四	二圓五拾錢	六圓

▲送料市内四錢内地八錢、臺、樺、清、朝卅錢

●雲井形空氣草履



體裁頗る優美にして高尚、在來の草履と異りて指先には優雅なるビロード張履を有し指先非常に温く且つ足袋を汚損する憂なし

◉一號十六、七歳用 特價四拾八錢
◉二號十二、三歳用 特價參拾八錢
◉三號七、八歳用 特價參拾五錢

▲送料市内四錢内地八錢、臺、樺、清、朝卅錢

▶蒸氣ごて◀



本器は在來品の如く一々霧を吹きかくるが如き手數を有せず火力と蒸汽と相俟つて如何なる襞でも折目でも綺麗に跡形なく具合頗る良好にして眞に家庭に於ける理想的『火のし』であります

◉函入壹個 特價壹圓八拾錢

▲送料内地十二錢 臺、樺、清、朝卅五錢

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目

博通社

電話本局六百四十番
振替口座東京五十番

櫻痴全集

全三冊

洋装三六判
函入上製美本
各冊壹千壹百頁
正價各金壹圓廿錢
小包料各八錢

櫻痴居士の文は瀟洒にして簡明、殊に淡粧の中に絢爛の趣を具へたるは、江戸子質なる居士の特色を最もよく發揮したるものと稱して可也。居士生前作るところ、小説あり、脚本あり、史論あり、戯文あり、短文あり、長短宜しきに從ひ、繁簡趣を成し、才思の横溢せる、學識の卓越せる、當代實にその匹儔を見ざるの概ありき。唯其作品の多量、雄編大作にして、猶且散逸するもの多きを憂うべしとするのみ。今その粋を拔き、妙を集め、以てこの上中下三巻をなす、庶幾くは居士の彩筆に渇するもの、望を滿すことを得ん乎。

上編

あはれ浮世——東鑑拜賀の巻——小楠公脚本——關原擧凱歌——女俠駒形おせん——喜劇二人袴——芳谷義士譽——扇の恨——平重次郎——求女塚身替新田——新作夜の鶴

中編

人生X光線——斬奸——滑稽小説花懺悔——廻る因果——女浪人

下編

僞稱紳士——色慾二筋道——滑稽小説陰陽大和錦——車善七——仙居の夢——出放題——鳥居甲斐——高島秋帆

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

太田三郎先生著

見よ空前の珍本美裝して今市に出づ

▼情思火の如き赤裸々の戀愛に接せんとする者はこの書を見よ。

▼妖艷花の如き女性の匿さゞる姿に觸れんとする者はこの書を見よ。

俗謡画集 朝霧

美濃紙四截彩色木版手刷
文字肉筆版、純江戸式裝幀
俗謡 隆達、弄齋、投節、
繼節籬節巻等七十余

定價金六拾錢
郵稅金四錢

▼滅びたる江戸に憧憬の情を寄する者はこの書を見よ。

▼古き德川文藝が新人の頭腦に如何に映じたるか錦繪の手法が洋畫家に依つて如何に取扱はれたるかを知らんとする者はこの書を見よ。

見よ古くして然も新らしき錦繪帖を

東京 博文館 本町

女（後付の三）

御歌所長男爵 高崎正風閣下校閲
從五位 鳥山啓大人校閲
岡崎櫻洲君著並曲譜

最新琵琶歌聚英

洋裝菊判　各冊紙數六十頁餘

東京本町 博文館

(1) 宮内大臣 伯爵 渡邊千秋閣下題字

紅梅の巻　近刊

(2) 元帥 伯爵 伊東祐亨閣下題字

小櫻の巻　近刊

精神教育士氣興振の歌曲として都鄙に賞揚せらるゝ琵琶彈奏は流行盛なるに比し新作歌曲出でず在來の歌曲を繰返すに過ぎざりしが今回斯界の名家と稱せられ歌詞文章の段落曲節の序破彈法の緩急餘韻の整調等を完成し櫻渢流なる新旗幟を飜し東都貴顯紳士間に名聲を博せる岡崎櫻洲氏之を慨し自作の歌曲並に朝野名士の手に成る作歌を蒐集し本書を編纂せらる書中の歌は新作にして一々曲譜を附し何人にても本書を繙けば自在に吟謠し得ると歌詞の字體大なること右傍に譜點を附すること等便利なる特色ありて練習者は勿論斯道鼓吹者の缺くべからざる珍書なり

松原岩五郎君著　（三版）

女學生の栞

此書立言の根據は專ら婦人をして獨立自營の氣象を養はしむるに基き、文章は平易流暢を旨とし、丁寧親切より利害のある處を辨識して聰明なる婦人の智識に訴ふ書中諷諭諧謔の筆を弄して、時弊を刺し、或は毒筆を以て單刀直入婦人の弱點をえぐる處あり、世間未婚の婦女子は勿論、花嫁、主婦、母親いづれも新日本の淑女たらん人は一讀して著者が萬斛の涙の如何なる點に向つて濺げるかを知りたまふべし。

▼洋裝大判　正價卅五錢　郵稅六錢

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

大（幾付の五）

農學博士稻垣乙丙君閲
工藤齋君著

新編 家庭の科學

抑も婦人の本務たる日常家事に於ける百般の事項は悉く科學の理に支配せられざるはなし然るに本邦婦人は概してその智識に乏しきが爲め往々妄説を信じ鑑別を過り識らず知らずの間に不經濟、不衞生の動作をなすことあるは痛歎に堪へざる所なり著者工藤齋君は高等女學校に教鞭を執るの傍ら理科と家事科とに連絡を付し兩者共通の資料を採て本邦の主婦たる人にその智識を授け以て婦人の本務を完全圓滿に盡さしめんことを欲したるもの即ち本書なり

全一冊洋裝菊判
美本紙數四百四十二頁
正價金八十五錢
郵税十錢

成女學校校長 宮田脩君序
日本女學校教頭 豐岡茂夫君著

女氣質と修養

感觸に捉はれ、欲の奴隷となるは女性なり、情火燃えて、盲目なるも女性なり、意馬朧く、躓き易きも女性なり、女性の修養は、高く聖き絶對の靈光に觸れしむる、と同時に、其の天職に關する日常の智能に富ましめざるべからず、本書の說く所は、理想と與に現實あり、靈輝き肉躍る、女は自ら省み、男も讀みて、他山の石とせよ。

全一冊洋裝
菊半截美本
紙數三百頁
正價廿五錢
郵税四錢

販賣用電話 本局二六二〇番

東京 博文館 本町

振替貯金口座 東京二四〇番

女(後付の六)

第十七卷 第十六號

文藝倶樂部

菊判紙數三百二十頁
口繪石版寫眞版澤山
正價廿五錢 郵税二錢五厘

十二月一日發行



本誌は本號を以て本年を送り希望に充てる新春を迎ふるに當り、其の外觀をなして益美に内容をなして趣味と實益とに充實せしめん事に留意して卷頭に泉鏡花子作長篇『爪彈き』を載す、其の題名に艶なるに、子獨得の麗筆を揮ふ蓋辛亥文壇の棹尾の偉觀たるを疑はず。次に閨秀作家中の白眉たる正岡秋子女史の作『闇い世』を掲ぐ世は女史の作を讀まんものと足爪立てゝ待つなるべし。第三には駿河大宮に隱栖し、徐かに詩趣を養ひつゝある佐野天聲子作『歸農』を收む。是れ野の聲か、果た天の聲か。第四には非凡の詩才を懐きつゝ遂に夭折せる青木秀峰子の遺著『濱猫』を載す。讀者は此の薄倖なる作家の最後の作に聽かざるべからず。倘逐號好評を博しつゝある新講談には斯界の大立者一立齋文車師を煩して『お袖新之助片山騒動』を口演せしむ。師が快辯は字々響あるの感あらむ。演藝界其他各欄活氣例號に倍せむ。祈愛讀!!!

東京 博文館 本町

女(後付の七)

●第六卷第拾六號 十二月一日發行●

少女世界

菊判百二十八頁
口繪石版其他豐富
正價十錢・・郵税一錢

●鐘が鳴る……竹久夢二
●第廿四回筆蹟……
●古今集選者の歌……文學博士 佐々木信綱

●野菊物語（二）……巖谷小波

口繪

●暮れ行く歳（表紙）……山村耕花
●インコ……（三色版）……
●赤いリボン（石版畫）……竹久夢二
●槇の尾紅葉●柏原少年少女會●氣比神宮の大鳥居●大阪、京都の少女會●福井少女會●女子大學の運動會……（寫眞版）

●講話旅行記……沼田笠峯
●少女小說 同窓生……大井冷光
●歷史口碑 光照前……木村小舟
●ふるい歌……武田櫻桃
●笑ひ聲……黒田湖山
●山茶花散る日……松井ゆり子
●運動會の記……記者

●人形の奇遇……押川春浪

●華やかな讀書會……目白の人
●電話の少女……竹貫直人
●岡山孤兒院……河岡潮風

少女會館

▲學藝室 ▲顧問室 ▲娛樂室 ▲談話室

東京本町 博文館
（振替東京二百四十番）


美髪の御料には
柳清香油
けい志香油
が最も愛用されます
フロラー香水
二十銭 一圓廿銭 一圓八十銭
美術小間物
化粧品
東京日本橋通二
柳屋本店
電話本局二〇二一


佛國メルマン
會社釀造
アルコール分少く滋養豊富なる葡萄酒
マルタン赤白葡萄酒
食卓用として
又薬用として
到る處の家庭に
愛用せられ
つゝあり
MEDOC SUPERIEUR
Merman & Co
BORDEAUX
R YAMADA-YA
甲州マルタン葡萄酒
横濱
東京
山田屋
賣捌は全國
和洋酒薬店
にあり

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界 第拾壹卷第十六號 （毎月印）
明治四十四年十一月廿三日印刷納本
第三種郵便物認可

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑧⑧
明治44年11月（第11巻第15号）、12月（第11巻第16号）

2010年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3911-8